

---

# 双龍の絆

日野望美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

双龍の絆

### 【Nコード】

N9227M

### 【作者名】

日野望美

### 【あらすじ】

異世界オルトにおける奮闘の結果、伊丹京子は自分自身の孫として無事に転生できたはずが、いつの間にはやらプロポーズされて、気がつけば不老不死の皇后陛下になっていた。幾ら不老不死同士とは言え、夫との肉体上の年齢差は三十歳。どうなる？これから……どっちが年上か年下かもわかり難い、奇妙奇天烈な夫婦のラブライフ？かもしれない。

「やるっきゃない！」の続編ですが、単体でもお楽しみ頂けるよう

に頑張ります！

某私鉄沿線の駅前の商店街で伊丹杏はベビーカーの中から、見慣れた気配を感じて目を見張った。

「京子さん、見つけましたよ。本当に御自分の家族の所に転生したんですね。貴女のたつての希望を無理に受け入れた事が祟って、オルトが破滅しそうです。ロザリアちゃんの名も何だか弱まりましたし、もうすぐ生まれるお嬢さんは、愛らしいですが銀の龍の完璧な器は勤まらないでしょう。幸い、あの子と今の京子さんの肉体的な条件は上手くかみ合いますから、双方の魂を入れ替えようという事に決めتانです。従って下さいますよね？」

以前から、彼は弁舌爽やかで、多少強引で、気がつくとも自分も色々厄介ごとの手伝いをしたが、いかなる問題も現実的な方法を見出し解決して行く手腕は大した物で、尊敬し、信頼もしている。

だが……やはり強引だ。自分はそれなりに条件も詰めて、用意周到に事を運んだはずで「オルトが破滅しそう」は幾らなんでも、大げさだ。新たに皇帝となり、強い精神力を持った番を必要としている彼の事情は、十分承知しているが……

伊丹杏は、飛行機事故で死亡した祖母にあたる伊丹京子の転生した姿だ。

伊丹京子の肉体は確かに墜落機と共に完全消滅したが、魂が「オルト」という異世界に招かれ、女神の申し子であるロザリアという絶世の美少女に転生する予定であった。が、京子は地球に残した家族に対する愛着が強烈で、『オルトのロザリアの魂』としてその肉

体に安住出来なかった。わずかに気配の残っていた本来の魂のかけら、あるいは女神の力の種とでも言うべき存在を取り込んで丹念に育て上げ、『地球人としての京子』とは分離可能な魂を作り上げる事に成功したのだ。

オルトと言う世界は、女神と金の龍・銀の龍が関わりあつて出来たらしい。

らしい、と言うのは、幾度も銀の龍の力が暴発して、古い記録も人々の記憶もろくに残っていないからなのだ。女神自身ですら、記憶の一部を喪失している。

オルトで最古にして最大の国家である帝国の開祖は金の龍と銀の龍を同時に宿らせたが、彼以降の皇帝は、双龍を宿らせる力が無かった。金か銀、いずれか片方の龍を宿らせるのが精一杯だった。肉体に宿る事のできなかつたもう片方の龍は、安定しないし、世界に災厄を招く存在ともなりかねなかつた。

京子は銀の龍の力の暴発を防ぐ事に大いに力を貸し、その後、不老不死の皇帝の后となる女の子がロザリアの腹に出来たのを見届け、自身の息子の長女として再び地球に転生した。

当初、女神は京子の魂がロザリアと完全に同化しない事を問題視していたが、京子の功績の大きさに免じて地球への転生を認めただった。

「じゃあ、私、オルトに行つて、皇后陛下になる事決定？」

何も知らない人間がベビーカーの中の杏を見ても、赤ん坊が虚空に向かつて何事か音声を発しているとした見えないだろうが、実は

そこに金の龍を宿し不老不死となつたらしい？皇帝のヴィジョンが明確に見えている。

どうしても会いたかった夫は、京子がオルトにいる間に、癌で亡くなっていた。三人の子供達は全員結婚して、幸せに暮らしている。再び、杏シロとしての人生を充実させるのも悪くないとは思ったが、離れてみるとオルトも京子にとって特別で懐かしい場所なのだ実感する。

アメリカ人研究者・マークが転生した現在の皇帝は、京子にとって共にオルトのために力を尽くした仲間だ。  
そのマークが、あの厄介な銀の龍を宿し制御しうる魂を必要としている。

ロザリアの産む娘は、銀の龍の器である事を示す髪と目の色をしているらしい。そして、その娘はもうずっと以前から、不老不死の皇帝の真の「つがい」と定められてきた。

「さあ、来て下さい。大丈夫ですよ。息子さんの御家族はひよつとすると、杏ちゃんの性格が変わった事に気が付くかもしれないが、まさか魂の入れ代わりとは思わないでしょう。では、京子さん、これから貴女は、あのロザリアちゃんとクラウドス君の娘として、僕の妻として、オルトで生きて行く事になります。さあ、行きましょう」

求めに応じる事、すなわち、気の遠くなるような長い時間をマークの魂と共に過ごす、という事でも有る。

それを拒む力は今の京子にはないし、拒むつもりも無かった。だが、一言やはり言っておきたい。

「銀の龍の器として、必要とされている事は理解したわ。でも、こ

こちらには拒む権利も有るのよ」「

「言葉が足らなかつたかな。心から信頼し、尊敬できる番しがいなら互いに深く愛し合える、そうは思いませんか？僕にはあなたが必要です。だから、どうか、一緒にオルトに来て下さい」

生真面目なプロポーズだこと。今度は「らぶらぶの逆ハー」なんかじゃ無さそうね。銀の龍の焼餅焼きの性格がどう作用するのかしら……

そんな事をチラツと思つたが、そこで意識は途切れた。かくして、伊丹杏の魂、いや転生した京子の魂は再び第二の故郷とも言つべきオルトに向かつたのであつた。

1 (後書き)

ともかく、頭の五話分はガンガン頑張って書きます。その後は、ちよっとペースが落ちるかもしれませんが、頑張って、でも、自分も楽しんで、完結まで持って行きたいです。

## 2 (前書き)

「やるっきゃない！」未読の方も楽しんでいただけるように心がけてますが、

上手く行っているでしょうか？

オルトにおける最古にして最大の国、アムダリア帝国の首都オルテス、その街の中でも一際大きく格式を誇るのがレオンハート公爵の本邸だ。

今年に入って、現当主・ジョシユアに息子のアンガスが生まれ大きな喜びに包まれたが、今度はアンガスの姉で「女神の申し子」であるロザリアが産気づいている。ロザリアの胎内の娘はオルトの神である銀の龍の器となり、生まれながらの不老不死であり、同じく不老不死である新皇帝の真の番<sup>つがい</sup>にして皇后となる事が定まっている。

「女神様と金の龍様・銀の龍様の祝福を受けられる姫君とは、どのような方なのでしょうね」

「なんでも、お顔立ちは母君のロザリア様に似ておいでで、更に大きな魔力をお持ちなのだそうですよ」

「貴き神々からの祝福を受けておいでの方ですから、お産は順調に進むと思っただのですが……」

「何か、私達凡俗には判らない複雑な御事情が有るのでしょうか？」

「先ほどからクラウス様が産室にお入りになり、ロザリア様のお手を取って、熱心に祈っておられるとか……」

クラウスはロザリアの夫で、新しい皇帝の懐刀とも言われる寵臣である。レオンハート家の譜代の家臣の家柄出身だが、現在はロザリアと同じく不老不死で聖なる剣の主となった。女神の特別の加護を受け、金の龍を宿す新皇帝に大いに信頼され、妻のロザリアとは深く愛し合っている。

「先ほどから、産気づいたかと思うと、動きがピタリと止んでしま

います。ロザリアが不老不死とは伺っておりますが、本当に大丈夫なのですか？子供は無事に生まれましようか？」

クラウスはロザリアの手を握り締め、女神に呼びかけた。

「これは、魂が定まっておらぬゆえじゃ」

女神の答はクラウスの予想通りだった。やはり、銀の龍の器にふさわしい強い魂の招請は難航しているのだろうか？

新皇帝自らが異世界・地球まで出向き、転生した強い魂……妻とかつては同一の魂であり、自分の素質を見出して育て上げた自分たち夫婦にとって親よりも親の如き存在……その強い魂をこの妻の胎内の子に宿す、そんな事が上手く行くのであるだろうか？年上の親友であり、庇護者であり、今は主である新皇帝の手腕の確かさは良く承知している。だが、その主とて失敗が皆無と言っわけではない……

「あなた」

ロザリアはか細い声でクラウスに呼びかける。

僅か十二歳の妻を懐妊させたのは、女神や金の龍を宿す主から『オルトを救う秘儀』と言われての事ではあったが、これで子が無事に生まれなければ、余りにむごい。

「ロザリア、私は何の役にも立たないようだ。済まない」

クラウスは肩をガツクリ落とし、妻の手を更に強く握り締め、涙を零さんばかりの落ち込みようだ。

「大丈夫です、あなた。私は……信じてますから」

「そうじゃ、クラウス、もっと妻を子を主を信じよ」

女神の言葉に、クラウスは心弱い己を恥じた。

「おお、力が満ちてきたぞ」

女神のその言葉と共に、ロザリアは滞りなく女兒を出産した。

「（クラウド君、京子さんを説き伏せたよ。ロザリアちゃんの容態はどう？）」

明るく強い主の波動。『金の龍の全き器』である主は、こうして遠く離れた場所から『心話』で語り合う時も強い力を与えてくれるようだった。

『心話』とはオルトにおいて力有る魂の持ち主同士でのみ可能な意思疎通の手段で、互いがどれほど離れていようとも互いの思いを確実に伝える事が出来る。

「（たった今無事に娘が生まれました）」

「（よかった、今からそちらに向かうよ）」

極めて力の強い主は、瞬間移動が可能だ。かつては頻度も距離ももっと制限が有った様だが、帝位につく事が本決まりになってますます力が強まり、異世界との往来まで可能になったのだ。

クラウドも妻のロザリアもオルトの中の、今まで行った事の有る場所同士ならば瞬間移動も可能だが、主のように目指す相手の波動めがけて移動するなどと言う事は出来ない。

クラウドは客間に入り、主を待った。さすがに、お産が終わったばかりの産室に入れるのは抵抗が有る。

「いやあ、待たせたね。僕もちよつとはらはらしたよ」

主は挨拶もそこそこに、今回の『銀の龍の器にふさわしい魂』の招請についての顛末を語り始めた。

「杏ちゃんは、と言うか杏ちゃんの肉体はロザリアちゃんに、ソックリだ。伊丹さんの家族は可愛い杏ちゃんを皆で大切にしている。」

君達の娘さんの魂は、間違いなく幸せになれるだろう」

「ユーグは、どうですか？」

ユーグは銀の龍の器としての役割を十分に果たせず、魔力を暴走させ多くの犠牲者を出し、自らの命を縮めた先の帝国皇太子だ。主の腹違いの弟でありながら、長らく敵対関係に有った。クラウスとロザリアが帝国を脱出し、当時隣国キタイの摂政であった主のもとに身を寄せるきっかけを作った人物でも有る。

「ちゃんと杏ちゃんじゅんちゃんが居る伊丹家の、すぐ近所きんじよの家の息子として生まれ変わったよ。髪も眼も黒いが、顔は元のユーグそのものだ」

「それは、ようございましたね」

「ああ。行きがかり上対立したが、紛れも無い僕の弟だからな、ほつとしたよ」

ユーグの血塗られた悲惨な運命は、銀の龍の強すぎる魔力を無理に背負い込まされたために生じた。今度の銀の龍の器は十分に強い魂を宿す事になるわけだが、それでも父親であるクラウスは心配だった。

「殿下、あなたが帝位につかれて真の番つがいとする娘の名です、我々よりも殿下に付けていただくべきなのではないかと思いました」

クラウスは主に、生まれた娘の名づけを依頼した。主の強い魔力にあやか事が出来、番つがいとしてより強い絆を持てるのではないかと考えたのだ。

皇后となるものが定まれば、主は正式に帝位につく事が決まっている。そうなれば、クラウスも主を『殿下』ではなく『陛下』と呼ぶ事になる。

ロザリアの生んだ娘はフェリシアと名づけられた。クラウドが名付け親となった主あるじにその名前の意味を尋ねると、古い地球の言葉で『幸運』を意味するのだと答えた。

「銀の龍は、相当厄介な荷物を背負い込んで来たみたいだよ」

フェリシアを大切そうに抱きかかえている主の表情は、非常に気遣わしげだ。

生まれてまだ二日目だが、名付け親であり夫となる主は既にフェリシアと細やかな意思疎通が出来るらしい。通常の『心話』ではなく、龍を宿す者同士の絆の力によるのだと言う。主がフェリシアから伝えられたという内容は、確かに相当深刻なものだった。

幾代もの不完全な銀の龍の器の怨念・挫折感・孤独感・嫉妬・羨望、そう言った強烈な負の感情が銀の龍本体にも深刻な影響を与えているのだと言う。フェリシアが銀の龍の器になる事を受け入れた途端、それらの大量の負の感情に巻き込まれ、本来の自我が破壊されかねない勢いだったと言うのだ。

「僕に毎日に触れ、こうして意思を通わせて欲しいと訴えた。そうしないと自我を正常に保てないそうだ」

更に、主はその凄まじい過去の器たちの負の感情の処理を、手助けするようにも求められたと言う。

「真っ黒で大量の凄まじい負の感情の集合体に『地球人としての京子』の一番強いプラスの感情を注ぎ込んで玉の形にして封じるらし

い。そして、その玉を聖剣『シャボンヌ』がこれまで沈んでいた霊泉の底に沈めて欲しいらしい」

その封じ込めた玉が出来たら「霊泉の底に沈める役目は父上にお願ひしたい」それで、その件がクラウドが娘にしてやる最初の親らしい事になるのかもしれない。

「その真っ黒けな負の感情の塊の処理が終わったら、クラウド君ともロザリアちゃんとも『心話』で意思疎通が出来るようになるよ」  
だ」

どうやら主の話によれば、その『負の感情の塊』はよほど害の大きなもので、処理しない状態で『心話』を交わすと産後のロザリアの健康は大きく損なわれるし、健康なクラウドでも心身ともに不調になるといふ。

「特に女神様の力はむき出しの穢れに弱いんだそうだ。女神様の力を頂いているロザリアちゃんも、そして君も、穢れとは程遠い魂の波長の持ち主だからね。特に用心が必要だったらしい」  
「なるほど、並みの魂ではそうした適切な処理は出来ませんね」

自分と、自分に協力できる者の力を知り、目の前の難問の解決にどのように応用できるか冷静に考え、対処する……やはり、年功を経て経験を積んだ魂ならではの、と改めてクラウドは感心した。そして自分自身にとっても実の親以上に親のような存在が、娘の姿を取って戻ってきてくれた事を心から感謝した。

その話をクラウドが聞かされてから十日ばかりして、いつものようにふらりとフェリシアの部屋に現れた主に漆黒の大人の握りこぶしほども有る玉を渡された。

「これを君の生まれ故郷に有る霊泉に沈めてきてくれ。くれぐれも別の場所で落としたりしないでくれよ」

クラウドが手に取って見ても、この中にそれほど禍々しい物が込められているとは全くわからない。落とすとどうかするらしいので、細心の注意を払って、言われた通り故郷のピネ村に有る霊泉に瞬間移動で出向き、その一番深い辺りに放り込んだ。

一瞬、凄まじく霊泉の水面が泡立った。次に泉全体がどす黒く変わり、クラウドはあわてた。が一瞬のことで、濃い紫・紺色・鉄錆色・茶色・灰色など様々な色に変化してあわ立ち、ほんの僅かの間に、また、元の澄み切った色合いを取り戻した。

「（殿下、玉を沈めた途端、実に奇妙な具合に水の色が変化しましたがまた、元に戻りました）」

「（それでも、今日明日二日間は水に触れない方が良さそうだ。周辺の村に触れは出してあるね?）」

「（はい。昨日から霊泉の水を儀式に使うから五日間は使用禁止であると、近隣の三つの村には知らせてあります）」

「（うゝん、それでは不十分かも知れんな、旅人とか子供とか、その知らせを理解していない者・知らない者が触れないとも限らない）」

「（あ、今、野うさぎが……）」

次の瞬間、野うさぎが水を飲みに行ったと思しい場所で爆発音がして、肉片がバラバラに飛び散っていた

「（野うさぎが、まるで『爆殺』されたかのように、一瞬でバラバラになってしまいました）」

「（人間なら大変だったじゃないか。早く霊泉一帯に封印を掛けたまえ。誰もその場所に立ち入る事が無いように。女神様にもよくよ

く申し上げて、重ねて霊域全体に封印をかけていただけ」

クラウドは即座に、主の言葉通りに自分で封印をかけ、女神にも事の次第を説明し、封印を願い出た。

バラバラの野うさぎはクラウドに、かつて目撃した『爆殺』魔法の暴走現場の悲劇を思い出させた。あれは先の皇太子で不完全な銀の龍の器であったユーグが、自らの魔力を制御しきれなくなり、多数の人を悲惨な死に追いやった大惨事であったが……あの、小さな黒い玉に霊泉を変色させ水を危険物に変えてしまうほどの魔力が籠っていたとは、実に驚いた。

「（凄まじいのう。銀の龍の穢れは……まあ、明後日あたりには納まるだろうが）」

女神によれば、明後日を過ぎたら、恐らく水に触れても大丈夫だろうが、触れる前に、神域の若木の枝を投げ入れて、爆発しないことを確かめてからにするように、との事であった。

「（霊泉の強い清めの力を持ってしても、これほどの穢れを浄化するのにはなかなか厄介じゃ。だが、穢れだけではなく、強い清めの力も共に水に加えられた故、この短期間で水が元に戻るのだがな）」

『地球人としての京子の想い』とはよほどに強い清めの力を持つものらしいが、一体どのような感情で有ったのだろうかとクラウドは思った。

「（うわあっ、これは何だい？）」

フェリシアの将来の夫で、もうすぐ皇帝となる事が決まっているこの男の魂は、元来地球のアメリカ合衆国で生まれ育ったマーク・ゴールドと言う人物の物であった。

M I Tと通称されるかの大学で建築の研究をしていたらしいが、自分の出身大学で長らく教えていた経済学者・サミュエルソンを尊敬し、三分の二以上中身を記憶していたと言うサミュエルソンの著書『経済学』に従って、様々な改革を行った。

マークは帝国の隣国であるキタイ王国で、摂政として手腕を振るった。合理的で近代的な租税の徴収方法を定着させ『国民』とか『基本的人権』とか『公共の福祉』と言う概念を根付かせ、五年では有ったがオルトで初の義務教育を実施した。その結果キタイの国民は大半が文字を読み書き出来るし、四則演算もごく当たり前出来るようになった。このことで国民自身が考え、自らの人生を決める事が可能になってきた。近代化を受け入れる基礎が出来たと言える。マークの施策のおかげで、小国であったキタイは、急速にオルト一治安が良く豊かな国に変貌を遂げた。

それまでは当たり前のように奴隷階級が存在し、貿易や商業も物々交換や略奪行為と大差無いレベルであったが、近代的な商法をはじめとする法体系もかなり根付かせる事に成功している。それまで『週』の概念が存在しなかったオルトに『七日ごとに休み』と言う習慣を定着させたのもマークであった。

それだけではない。キタイではかつて『麗しの摂政殿下』と呼ば

れた大変なモテ男であった。

かつてキタイの首都ブルサの花街で一番の売れっ妓で後に妓楼の主となった女と「いい仲」になり、息子・パウルが生まれた。その女は出産後一年もしない内に亡くなった。パウルはエスコバル公爵の位を継ぐ事が決まっている。更に母方の従姉であるキタイ国王の一人娘であった王女と結婚してファティマ姫が生まれた。王女も出産後程なく亡くなっている。現国王に取ってはファティマ姫が唯一の孫なので、次代のキタイ女王となるのは間違い無い。

その他に世間に知られていない庶子が二十人も、キタイの様々な場所に居る。

ともかくもそんなやり手のなかなかたいした三十男だが、フェリシアをずっと大切そうに抱いている。

「（今までの銀の籠の器だった人間の負の感情の集合体だと思うの。真っ黒けでベトベトして気持ち悪いの。これをどうにかしないと、銀の籠の器なんてやってられない）」

この肉体に宿ってからずっと、この不気味で不快な気配に悩まされているフェリシアは、困り果てていた。

「（この汚れた部分だけ、分離できないかい？マシンの分解掃除みたいな具合にはいかないもんかな）」

「（あ、それは……できそう。やってみます）」

かくして、夫となる男の提案でうまく解決方法が見つかり、不快な物とそれを分解できる強烈な感情を黒い玉の形に封じ込め、父であるクラウスに霊泉に沈めて貰う事が出来た。

数日たって、いよいよ皇帝の即位式前日となった。

「（どうにか霊泉の水も元に戻ったみたいだよ。ねえ、あの一緒に封じ込めた『地球人の京子としての感情』って、どんなものだったの?）」

「（癌で亡くなった夫を思う気持ちと子供を思う気持ち。大切に生きて来たけれど、今ではもう必要も無いから）」

「（今度こそ『オルトのフェリシア』としてやって行けそう?）」

以前は地球に帰りたい気持ちが強すぎたが、今回はそんな強い望郷の念も無い。夫は亡くなったし、子供らは大人になって、それぞれ家庭を持った。地球での役割は済んでいるのだ……そう彼女は思った。

「（それしか、もう道は無いのでしょうか?ならば、やれる所までやるだけね。本当に自分が不老不死なのか私は疑っているのだけれど、あなたはどうか?信じてる?銀河系にすら寿命が有るらしいのに）」

「（オルトの神様なんて、アバウトなんだろうよ。まあ、通常の人類よりは相当長生きするんだろうな）」

「（ねえ、それはそうと、私はあなたをどう呼べばよいかしら?マークさん?陛下?あなた?旦那様?いつその事ダーリンなんていうのもアリ?）」

「（公式の場所だと陛下になってしまっけど、それ以外は……ダーリンがいいな……時々旦那様も……。君の事はもう、京子さんとは呼べないし、ハニーって言うのも良いけど、気分的には奥様って言うのがしっくり来る。小さな奥様……うん。何か可愛い感じがして、良い」

こうして互いの呼び方は決まった。

皇帝の即位式の間、当初フェリシアは母であるロザリアに抱かれて式場に居るだけの予定だった。だが、それでは金の龍と銀の龍が納得しなかった。

「（いかん！マーク、フェリシアを抱いて玉座に着け）」

「（双龍が揃って皇帝の即位式は開祖以来なのだ。我が器のフェリシアを皆に披露せよ）」

聖剣の盟主でマークの愛剣でもある『ジルニトラ』は多くの聖剣を集め、即位式の間中、音を響かせていた。当然ながら後の剣『ヴィーヴル』も出現し、フェリシアを祝福した。

開祖皇帝以来だとされる女神と双龍に祝福された皇帝は、幼い皇后と共に人々の歓呼の声に迎えられた。

最初の予定ではフェリシアは、自分で立って歩き人の言葉を発するようになるまでは、レオンハート公爵の邸で両親であるロザリアやクラウスと暮らすはずだった。だが、金の龍と銀の龍が煩かった。

「龍たちが、フェリシアちゃんと夜は一緒に寝ろって煩いんだ。まあ、僕もその方が実は精神的に色々と楽なんだ。でもまあ、クラウス君達は嫌だろ？ 仮にも親なんだし」

「でも、フェリシアは最初から『銀の龍の器』としての役目を持って生まれてきた子ですから、仕方が無いですかね。双龍様たちが煩いのなら、陛下もお困りでしょうし」

「今の後宮は完全な空き家状態だから、どこでも使いやすそうな場所にロザリアちゃんと一緒に移り住んでくれない？」

「それぞれの御殿にはそれぞれ由緒や謂れがありましようし、かつてお暮らしたった先代様のお妃方は、余り良い感情は持たれないでしょうし」

「じゃさ、『皇后宮』に住んでよ。僕の生みの母が居た場所でも有るようだし、どの道フェリシアちゃんのための場所になるんだから……ああ、水周りとか、暖房とか、一部大急ぎで手を入れさせるけど……」

周りで話を聞いているらしい女官や侍従、近衛兵が居るので、新皇帝は急に『心話』に切り替えた。

「（どうせなら、使い勝手の良いバスルームを付けたいし、日当たりがいまひとつな場所や、風通りの悪い場所も手を入れたい。出来るまで、一月かそこら掛かると思うんだ。その間、僕、レオンハート公爵家のフェリシアちゃんの部屋で一緒に寝るよ）」

「（そ、それは、警備上も緊急事態などが発生した場合も、不味くないですか？）」

「（なに、ワープを使ってこっそり夜中に寝に行くんだよ。朝はすぐ宮殿内部の僕の寝室に戻るし、龍たちも居るんだから、緊急事態でも、どうにかなるだろう）」

「（はあ……）」

「（クラウド君だって、ロザリアちゃんと別居状態だと、すぐに悲鳴上げるじゃないか）」

それは、確かにその通りなので、突っ込まれるとクラウドも弱い。  
「（僕は金の龍と銀の龍の器で、二人一緒に居るとそれだけで安定するし、力も強まるんだよ。それってオルトのためにも良い事だと思わないか？）」

「（ですがフェリシアはまだ、オムツをあてている赤子です）」

「（でも、中の魂は十分に大人なんだよ、ちゃんと意思の疎通も出来るし、並みの夫婦より互いを理解してる）」

「（陛下は二十人の女性との間に、お子を設けられたのではないですか？その中からその、後宮にお迎えになる方とか、おいでにならないのですか？）」

「（前から言ってるように、後宮はカラにしておく。二十人はそれぞれ、僕以外の、まあまあ出来の良い男と縁が出来て、結婚できるはずだ。必要に応じて持参金を用意したり、結婚のしたくを援助したりする予定だ）」

「（では、その……閨と申しますか、夜伽と申しますか……）」

「（おや、クラウド君までそんな事を言い出すと思わなかった。君だって女神様の力を借りて、乗り切ったんだろ？その、時々未来のロザリアちゃんに会ったりして）」

「（な、なぜそれを！）」

「（フェリシアちゃんの魂が、どう言う魂か忘れてないか？）」

「（はあ……ですが、陛下はそれでよろしいので？）」

「（よろしいから、そう、言ってるんだよ。今夜から早速一緒に寝

るからね。部屋の支度、しておいてくれ。食事はこつちで済ませるし、大げさな事はしないでくれよ。邸の連中には親戚が来るとか、友達を泊めるとか、適当に言い繕えないか？」

クラウドがロザリアに「陛下が夜にフェリシアと眠るためにおいでになる」と言う話をする、全然驚かなかったので、逆にクラウドが驚いた。

「だって、フェリシアの力はとても強いのですよ。未来の姿で夢の中で陛下にお会いするぐらい、簡単に出来ません。もうすでに、陛下はその姿を御存知なのじゃないかしら？きつと大変な美人なのじゃないかと思うわ」

「ロザリアはそのフェリシアの未来の姿は、見たことが無いのかい？」

「ええ。考えてみれば、私も未来の姿をお見せしたのは、夫であるあなたにだけでしたでしょ？」

「ああ、そうなのか」

「ええ、そうですね。夫婦二人だけの秘密なんですから」

「夫婦二人だけの秘密ねえ……」

きつと随分と艶めかしい夢なのだろうな……何しろ……とクラウドが思わず考え始めてしまうのを、ロザリアは笑いながら、制した。

「あなたがお考えになった事は、陛下にもフェリシアにもそのまますっかりわかってしまいます。恥ずかしいでしょ？どうかおやめになつて」

「全くだな。陛下がおいでになつたら、私達は私達で、久しぶりに……」

「その方が、ずっとましだと思います。何だか恥ずかしいですけどね」

「心話を使えるもの同士で、互いの心情がわかりすぎるのも、具合悪い物だな」

「双龍の器でいらっしやるお二人のほうか、私達よりずっと力が強いのですから、恐らくあちら様は私達の思念をブロックも出来るのに、私たちは出来ないのですよね」

「そうそう、以前、よく使った『心話』しんわを遮断する腕輪だけどね、もっと性能が高いものを陛下が作りになって、ロザリアと私に下さるらしい」

「ふふっ、陛下もお困りなんですよ、きっと」

ロザリアは、こんな事も言った。

陛下とフェリシアだけしか使えない龍の力による秘密の意思疎通の手段があるが、未来や過去といった異なる時間を行き来するのは主に女神の力のはずだから、『心話』をブロックできた方が恐らく陛下も照れくさい思いをなさらずにフェリシアに愛の言葉を囁けるのだろうと……

クラウドはつい考えてしまう。陛下はフェリシアに何をお話しになるのだろうと……

新皇帝とまだ赤ん坊のフェリシアの共寝ともねは、フェリシアの両親が勝手に想像したほど艶めかしいものでは無かった。

「（どうも、この、銀の籠と言う神と言うか、この奇妙なエネルギー体は私の気分にも馴染みにくいよね。不快と言うか、本当に困ってしまう。特に病的で幼稚な嫉妬の感情が絶え間なく膨れ続けるのは、疲れるわ。理屈で考えたっておかしな事でも、何でも、すぐに焼餅を焼くのね、本当に馬鹿みたいよ。こんな愚劣な神って、なんの役に立つのかしら）」

「（歴代の銀の籠の器が自滅しているのは、嫉妬と言う感情が引き金になっているようだって事は、薄々知っていたけれど、そんなに一日中焼餅を焼いている状態になるのかい？）」

「（たとえば、そうね、朝、ダーリンと廊下で遭遇した女官が『まあ、素敵な方！一度だけでも抱いていただけたら女として本望だわ』ってな事を考えていたじゃない）」

確かに、今朝、そんな事を考えている女官に新皇帝は出くわした。見ればなかなかの艶っぽい美人だったので、つい、ウインクして見せたが、それだけだ。まあ、一種の社交辞令と言うところだ。

「（ダーリンは何にも言わなかったけれど、ウインクして見せたでしょう？そうしたら、あの女官、しばらく腰が砕けたようになって立てなかったじゃない）」

「（奥様は、そこまで全部感じちゃうし見えちゃうのか）」

「（そうなの。それで、女官に向かって魔力を発動して花瓶でも置物でも投げつけて、半殺しの目に合わせそうになるし、会議中のダーリンのところに嫌がらせの言葉を吹き込んだ使い魔を何百匹も送

り込みそうになるし、困ったの)」

「（でも、怪我した女官はいないし、会議は普通に進行したよ。どうやって、その、困った衝動と暴走しそうな魔力を止めたの？）」

「（真つ黒な部分を分解して、霊泉に沈めたでしょう？今度は焼餅な部分を外せなかったから、他の部分を外して、と言うかほぼ、銀の龍の器になる前の形に戻って、お母様の中に逃げ込んだの）」

「（ロザリアちゃんの中に？）」

「（そう。凄く綺麗で気持ちの良い、私とすんなりなじむ波動で、お休みできたの）」

「（その間、このフェリシアの肉体はどうなったの？）」

「（熟睡してた。ダーリンが来てくれるまで、ずっとそうやって待っていたの。赤ん坊だから、誰も変には思わなかったけれど、段々この手は使いにくくなるわね。いきなり熟睡しちゃうんだから）」

「どうやら、ロザリアはフェリシアの魂に入り込まれたことに気がついていないらしい。」

「（それでね、困った事がまた出来たの）」

赤ん坊なのにフェリシアの表情は、酷く悩ましげで、夫に抱きしめられながら切なげに身悶えしている。

「（お母様の中に入り込んで、ハリカ様やイゼル様の事を色々知ってしまったから、酷い焼餅を焼いているの）」

ハリカは身分は低かったが、いわば初恋の人で公爵の位を継ぐパウルの生母だ。イゼルはキタイの王女で幼馴染の従姉だった。こちららはフェアイマ姫の生母だ。ハリカもイゼルも、新皇帝にとって特別に大切な女性だが、二人とも故人だ。普通なら、死者に対して『酷い焼餅』は焼かないだろう。

「（あのお二人との大事な思い出、色々と有るのでしょう？魔力が暴走すると、大切な思い出の品物や、下手をすると、お子様達に何

か嫌がらせをしようとするみたいなの。ああ、困った」

それが本当なら、イヤ、本当なのだろう。実に厄介だ。京子であった部分はその理不尽な行動を止めようとして居るようだが、どうすれば理性的な判断力や自制心を強め、暴走を止められるのだろうか？

「（僕が出来そうな対策は、無いかな？）」

「（大切な物は、うちのお母様にもお父様にも内緒にして、隠せるものは隠して欲しいの。そうすれば、たとえ魔力が暴走しても、無事だわ）」

「（子供達はどうしよう？）」

「（どうか、聖剣や聖剣の主との絆を強い深いものにして、魔力の暴走に備えて……あああつつ）」

「（フェリシア！どうした！）」

「（力が足りないの。『爆殺』のスイッチを入れたくないから！）」

「（スイッチだけ、どこか放り出せないのか？霊泉に沈めた穢れみたいに）」

「（あ！そうね、スイッチさえ入らなければ、魔法は発動できないものね）」

「（聖剣の力が役に立つなら、後の剣である『ヴィーヴル』の助けは借りれないのか？）」

「（そうします……っとう『爆殺』のスイッチだけ、切り離して『ヴィーヴル』に渡したいから……）」

フェリシアは苦しげに身悶えを続けている。マークは額の汗を拭いてやり額にキスした。

「（ああ、お願い、肌と肌を直接触れさせて、抱きしめて、そしてキスして、お願い、お願いします）」

「どうやら、金・銀二つの龍の力を馴染ませるのに、必要な事らしいと見て取ったマークは、悩まなかった。

マークは夜着の前をはだけ、オムツ以外すっぽんぽんの状態にしたフェリシアをぴったり包み込むようにして、抱いた。それから、おもむろに、大人の女性と愛し合うときに交わすような深い口づけをして、舌を突っ込み唾液をフェリシアの口内に流し込むと、フェリシアは思い切り喉を鳴らしてその唾液を飲んだ。

「あ、ありがとう。おかげ様でどうにかできると思う」

フェリシアが孤独な苦闘を繰り返しているのはわかるのだが、具体的な支援の方法は判らない。だが、膚に触れ、時折唾液を与えると力が戻るのには確かだった。マークは作戦の成功を願い、フェリシアを抱きしめている。

「あつ、うまく、巧く外せた」

守り刀として枕元に置かれていた『ヴィーヴル』が浮遊し始めた。いきなり銀色の小さな珠が飛び出すと『ヴィーヴル』と一緒になって窓を突き破り、外へ飛び出した。

「(はあ……終わった)」

フェリシアは安堵した表情になり、夫の腕の中で深い眠りについた。

「陛下、どうなさいました？ 大事御座いませんか」

クラウドとロザリアが窓の壊れる音を聞きつけて、心配そうにやって来た。窓が大きく突き破られ、皇帝が夜着の前をはだけ、フェ

リシアがオムツ以外裸なのが気にはなつたらしい。気にはなつたが、恐らくそれなりの何か重大な理由が存在するのだろうとは思つたよ。うだった。

「今フェリシアは一つ、大仕事を終えた所だ。『ヴィーヴル』の力を借りてね」

フェリシアを自らの胸の中にしっかり抱き込んだ皇帝の表情は、酷く優しいものだった。

## 7 (前書き)

働き者のマークです。

やはり、今度の皇帝陛下は破格の方でいらっしやる。それは、宮中のいや、首都オルテス中のいや、帝国中の人間が強く感じている。

新皇帝は各地の神殿でなされる祈りの内容を把握していたし、民が直訴状を送る事も大いに奨励していた。

身分・年齢の如何を問わず「内容が真実であると訴えた人間が信じている」と言う要件さえ満たせば、真剣に取り上げられたし、行政上の不備や不正に関しては、すぐに皇帝の直属の臣下が調べ上げ善処するので、庶民の間では評判が良かった。逆にすねに傷を持つ、後ろ暗い所のある領主は震え上がっていた。

それだけではない。人の心を読む事が出来、下情に通じた皇帝は、初めて会う人物の背負う問題・厄介事もすぐに理解し、場合によっては長年の懸案事項もたやすく解決してしまうのだった。

ただ、余りに思い切りが良く、過去のしがらみに囚われないので、軋轢を生ずる事も珍しくは無いが……

「さような事は、神に対して不敬でございますぞ！」

今まで威張り散らかしてきた宮殿内の神殿の大神官がいつもの調子で新皇帝に一喝した所、こう言い渡された。

「君の言う神って、何だ？金の龍なら僕の中に居る。銀の龍は僕の番であるフェリシアの中だ。女神様はその神殿はお気に召さないよ。うで、おいでにならない。少なくとも、君より僕の方がオルトの神の事は良く承知している。見当違いな空威張りは、百害あって一利無し。君もそろそろ生まれ故郷に戻って、のんびりしたまえ。今ま

で君が出入り商人との間でして来た事、神殿図書館の資料の取り扱いでやってきた事、全て僕にはわかっているが、不問に付してやるう。君も色々家族の事で、物入りだったようだからな」

結局、皇帝の主張通り宮殿内の神殿は廃止され、その場所は士官学校と官僚養成機関に充てられる事になった。大神官は「過去の罪は不問に付すが、今後不正行為を働けば厳罰に処す」と言い渡され、故郷に戻った。護送した役人達の噂では「もとの大神官殿は神罰を恐れて、震えっぱなしだった」と言つ。

また、後宮廃止に反対するある大貴族に対して、皇帝はこう言い渡した。

「僕には既に二十二人の実子が居て、不老不死の番も居る。君の思惑には応えられない。君が勝手に僕の側室にしようと考えているあの娘さんは、相思相愛の立派な相手が居るじゃないか。大貴族の血筋ではないが見所がある。君、隠居して、彼を婿に迎えて家を継がせる事を真剣に考えたまえ。そうすれば、君の領国の経営は問題が多くて、領民からたびたび僕の所に直訴状が来ている事も不問に付す」

その大貴族は結局、一人娘の望む相手を正式に婿に迎え、自分は隠居した。婿は皇帝の覚えがめでたく、その妻となった一人娘も幸せそうで、二人の間にはすぐに跡取り息子が生まれた。

また別の後宮廃止反対論者の富裕な貴族には、こう言い渡したのだった。

「君が独占してきた後宮関連の特殊な利権は、帝国の経済の発達に取って有害だ。それに、君に愛人や側室を世話してもらつてもないよ。ああ、君の若い四度目の奥さん、恋人が出来たな。綺麗に離婚した方が互いの身の為だ。とがめだてするなよ？借金の形代わりかたに

無理やり結婚させたんだろう？元々君がいけないんだからな。最初の奥さんとの間に生まれた娘さんが、実に良い子じゃないか。あの子が惚れ込んでいる相手を婿に迎えて、君が隠居すれば万事丸く収まるぞ」

結局、その富裕な貴族は皇帝の言う通りに妻とは別れ、長女に婿を迎えて、隠居した。

また更に皇帝は、身をやつして出かけた下町で出くわした少年には、こう言った。

「君の父さんは、腕の良い職人だ。大酒を飲むのを止めれば、良い仕事も出来る。母さんの心配は、多分解決するよ。それと君、すぐ明日から、家の近所に出来たろう？小学校に行きなさい。ただで読み書きを教えるし、昼飯も食べさせてくれる。友達も誘ってくれ。これから君はうんと勉強して、この国を良くする手伝い出来る人になれよ」

それから十日と立たないうちに、左官である父の所に、新しい学校づくりの仕事が舞い込み、母が案じていた借金を巡るいざこざも、国から無利子で金を借りられる事がわかって、落ち着いた。そして少年は小学校に通い、今は将来に希望を持って勉強に励んでいる。

「帝国でも義務教育を大急ぎでスタートさせたから、正直言って金が掛かって大変だ。無駄はどんどん省かなきゃいけないし、教員も不足してる。いやあ、頭が痛い」

新皇帝は凄まじい速さで、旧態依然とした政治体制を変革し、民の暮らしを向上させているが、余りにもやるべき事が多く、年中無休で働いても追いつかない。とりあえずは「緊急事態をどうにかする」だけで、正直な話、手一杯であるらしい。

「使える人間はフル稼働で働かせているが、人手不足だ」

識字率が低い帝国領内では、近代的な概念を理解し、官僚としての仕事がこなせる人材を確保するのは難しい。

「だからと言って、貴族や外国人ばかりを登用しては、国民の共感  
は得にくいし、痛し痒しだよ」

有能な行政担当者で、本人が言うには「一応神様みたいなもの」  
である彼は、民の感情の在り処についても実に敏感だった。古い考  
えの連中との感情的な軋轢も巧妙に回避してきたが、これが厄介で  
大いにエネルギーを使う難問であるらしい。

「早く僕の理想と心情を理解できる世代が育って、自分達で真剣に  
考えて国の有り方を変えて欲しいな」

よく皇帝はその様な事を口走るが、その真の意味合いを正確に理  
解できるものは、まだごく僅かだった。

即位以来、大忙しの新皇帝が真の意味で寛げるのは、番のフェリ  
シアと眠る時だけらしい。

「それにしても」

幼い頃からからずっと宮廷内の御用を努めて来た女官長などは、  
不思議に思う。

「皇后陛下に接する時の皇帝陛下の御様子は」

まるで恋焦がれた姫君を腕に抱く青年のようなのだ。大切そうに  
抱きかかえ、愛撫し、時には赤ん坊相手に深い口づけをする。その

場面に遭遇した事が有って、本当に驚いたものだったが……

「幾ら、将来お美しい女性になられるとしても、まだ赤子のあの方が皇后陛下で構わないものなのだろうか？」

大体、キタイに居られた頃は名高い色好みでいらした方に、ご即位後は女の影がまるで見当たらない。自分が知らない、気がつかないというわけではなく、下々の噂などを聞くにつけても、本当に現在には深い仲の女が居ない様なのだ。人並み外れた美丈夫で、いわば男盛りの体がよく持つものだ、彼女は不思議でならない。

「僕にはフェリシアちゃんが居るから、十分なんだよ」

どうやら、それが皇帝陛下の掛け値なしの本音らしいのが、多くの人間の理解の範疇を超えていた。

## 8 (前書き)

幼いファティマ姫は皇帝となった父も、国王である祖父も、腹違いの兄も、みんな好きですが、やはり「お父様」が一番好きみたいです。

幼いファティマは、母の記憶が無い。生後一年もたたない内に、母のイゼル王女は亡くなってしまったからだ。現国王の御祖父様とは、毎朝一緒に朝食を頂く事になっているのだが、何時も寂しそうな顔をなさっている……と、ファティマは思う。

「イゼルが生きていたら、如何であつたらうな。銀の龍の器の事で辛い目に遭っていたやもしれんから、これで良かったのかもしれない。お前のお父様は、素晴らしい凄<sup>まじ</sup>い方だ。並の人ではない、真の神の器だ。皇帝となられても、細やかに気を使っては下さるだろうが、人の身であるお前には辛い事も有るかもしれない」

「お父様は、お昼に何時もおいで下さいませ。大抵はお食事を一緒に頂きますけれど、お忙しい時はお茶の時間になったり、夜寝る前に絵本を読みに来てくださったり。でも、必ず毎日会いに来て下さいます」

常人ならば到底無理な話だが、皇帝は帝国の首都オルテスから、毎日ワープしてキタイのこの宮殿までやって来るのだった。

「お忙しいだろうに、頭の下がる事だ。それだけファティマを大切に考えておいでなのだな」

「お父様はオルトで一番賢い方なのですか？ばあやたちが、よく、そう申しております」

「そうだ。神の真の器だからな。本当に良くいろいろな事を御存知だ。そして、人の気持ちが良いわかる素晴らしい方だ。聖剣『ジルニトラ』の主でもいらつしやるしな。聖剣と言えば……エスコバル公爵とは、たまには会つのかな？」

「クラウス団長が、いつもおいしいお菓子を持って、公爵を連れて来て下さいます」

「ファティマは公爵とは仲良しか？」

「はい。本当は、公爵はお兄様なのですよね？お母様が違う」

「そっだ」

「でも、お母様が違うから、お兄様とお呼びしてはいけないのですよね？」

「儀式の時や、お客人が居る時はまずいが、親しい人ばかりの時は構わないのではないか？」

「御祖父様がお許し下さったから、今度からそうします」

公爵を兄と呼ぶために、イゼルの父である自分の許しを貰えと入れ知恵したのは一体誰なのだろう？……キタイ国王・ファジルは、幾人かの心当たりを思い浮かべながら、物悲しい気持ちになった。やはり、ファティマは肉親の情に飢えているのだろう。そして、それはエスコバル公爵を継いだ少年にしても同様だろうと思った。

ポール、もうすぐ五歳になるパウロ・ド・エスコバルは聖剣『ジラント』の主で、ファティマにとっては腹違いの兄に当たる。

「姫様の母君・イゼル様は王位継承権第一位の尊い御身分であらせられました。あの卑しい女の腹から生まれた公爵になど、御遠慮あそばす必要は無いのですよ」

いつも優しいばあやが、エスコバル公爵の話となると意地の悪い声で話すのが、ファティマは嫌だった。

「公爵は『ジラント』の主様だし、クラウス団長の御弟子だし、私にはいつも優しいわ」

キタイ王国の騎士団長である聖剣『パンテラ・レオ』の主・クラウスは、大変な剣の使い手で、以前から皇帝の信任が厚く、パウロ

が生まれてすぐから妻のロザリアともども、守り役を務めて来た。皇帝が帝位についたからは帝国の行政官も兼務して酷く忙しいようだが「陛下はもっともっとお忙しいのです。私も弱音は吐けません」と言っている。クラウスも皇帝同様、妻と暮らすオルテスから、ワープしてこの宮殿に通っている。

騎士団のみんなに慕われる立派な人で、父君の次ぐくらいにハンサムな男性だと思うのに、ばあやはクラウス団長も嫌いらしい。欠点らしい欠点も見つけられないから、悪口も言わないが、決して褒めないのだ。

「ポール様のお母様には、妻ともどもとてもお世話になりました」などと言っていたのが原因なのだろうと、ファティマも見当がついたが、こんな不愉快な話を父君に相談して良いものか、ファティマは悩んでいた。

「ファティマ、遅くなった。ごめんよ」

父である皇帝がファティマの所にやってきたのは、もうすぐ就寝と言う時刻になってからだだった。忙しくてもまめな父は、昼に一度使い魔で連絡をくれた。

「悩みが有るのだね」

父のひざの上に乗せられて抱きしめられると、悲しい気持ちも暗い気持ちも、全部受け止めて貰えるような安心感と安らぎがある。

「そうだなあ。言いくいかも知れないけれど、ファティマが悲しい辛い気持ちになるような事は、どうか言わないで欲しいと、ばあやに頼んでみたらどうだろうか？あのはあやはファティマのお母様が大好きで、大切なのだらうけれど、ちょっと、やり方を間違えた

んだね。誰かを好きで大切なのは素敵な事だけど、代わりに誰かを憎んだり妬んだりして、自分自身の心を汚してはいけないな。ましてや、そんな心を汚すような言葉を人に聞かせては、絶対いけないでも、わかっただけでも難しい事もあるのだと思う……人間は弱いからね……ちよつと、お散歩に行くよ。ふだんは夜のお散歩はいけなけれど、今日は特別だ」

ファティマは父に抱き上げられて、庭に出た。美しい丸い月が出ていた。

「そうだなあ。このあたりだな」

「とても今夜は月が綺麗ですね」

「ああ、とても綺麗だ。あの夜もこんな具合な月が出ていてね……僕がここで月を見てみると、向こうからちよつと酔っ払ったイゼルがやって来た。そんなイゼルを見たのは初めてでね。びっくりしたよ」

「まあ、お酒に酔って、夜、お一人で？」

「ばあやが良く言う「淑やかで御立派な方」とはイメージが違ってきて、ファティマは驚いた。

「うん。ふらふらしていたからね、抱きかかえたら、イゼルは僕の顔を見て笑った。それから……お互い、素直な気持ちで、互いに相手をどう思っているか、あるいは、どう思ってきたか、伝え合う事ができた。イゼルと僕は幼馴染で、子供の頃から身近で良く知っている同士のはずなのに、色々と食い違ってしまったのだと判ったんだよ、その時。相手が本当は何を思っているのか、直接確かめせず、人の噂や思い込みを信じ込んだりして……」

「ばあやも、噂や勝手な思い込みで本当の事に気がつかないのでしようか？」

「そうだと思う。残念ながら、今のばあやと同じような間違いをする人は多い」

「でも、今のお父様は、間違ったりなさいませんよね。龍の力が有りだから……」

その言葉を聞いた瞬間、父が酷く辛そうな表情になったので、ファティマは驚いた。

「確かに今の僕は、龍の力が強くなったから、言葉にされなくてもかなりの部分は読み取れるけれどね、でも、すっかり全部間違い無く読み取れる訳ではない。神様だって間違いは有るし……」

「まあ！そんなのですか？神様に間違いなんて……」

「それが、結構有るんだよ。だからね、本当は心をこめた言葉のやり取りで、相手の思いを知るほうが良いに決まってるのだよ……良く知っている、判っていると思うている相手でも、言葉が足りないと伝えられない事、伝わらない事は沢山有る……それは、神様だって大して変わらないんだ」

心を込めた言葉のやり取りの大切さ……少なくともその事は、幼いファティマにも十分に伝わったのであった。

## 8 (後書き)

次は、フェリシアの話の予定です。

まだ、オムツをしている赤子が皇后陛下？

皆、その事実を知ると驚くが、双龍の意思と言われれば誰も表立っては反対できない。事実皇帝の即位式の時に赤子の皇后を抱きかかえた皇帝の頭上で、大きな金と銀の龍が嬉しげに絡み合っているのを多数の人間が目撃した。信仰深い神官の老人や、純朴な農民、働き者の商家のおかみなど、その目出度くもありがたい様を見て、今度の皇帝陛下と皇后陛下はまことに神に近い方々なのだと感動し、思わず手を合わせたものは数知れない。

皇帝陛下の中に金の龍が、そしてあの赤子の皇后陛下の中に銀の龍が、それぞれ宿っていると言うことは紛れも無い事実なのだ。少なくとも帝国の民の大半がそう信じている。信じてはいたが……皆、大いに戸惑った。

皇帝陛下は大変な美丈夫で御年三十歳の男盛り、赤子の皇后陛下以外、お妃がいない。皇后陛下が真実銀の龍の器でいらっしやるとしても、成人なさるまでかなりの年月が掛かるはず。ならばそれまでの間だけでも、側室なり側女そばめなりが必要なのでは有るまいか？ならばお引き受けしようではないか、と言う自薦他薦の問い合わせやら申し込みやらが、いまだに続いている。

帝国内の人間、あるいはかつて摂政を勤めた隣国キタイの人間相手なら、皇帝もあっさり断る事も出来るが、他の国々の王族や大貴族からの申し入れは、正直苦慮していた。

オルトの全ての国家は帝国の分家、あるいは元属領とされており、最も古く格の高い国家である帝国の皇室と姻戚関係が結べれば、自

己の権威付けともなると考える国は多いのだ。

「金の龍と銀の龍の神気を合わせ、うるさき者どもに少しばかり食らわせてやれば良かるう」

女神がその様に提案した。

全ての申し入れをした外国の使節とその女性本人ないしは身内をまとめて謁見室に呼び出して、このように皇帝は話を切り出した。

「いかに結構な条件であれ、素晴らしい女性であれ、どうしても、お受けしかねると幾度ご説明しても、皆々様にご得心頂けないので、当方としても困り果てているのです。すると、女神様と双龍様が皆様を説得をしてやる、と、まあ、このように仰るので、お集まりいただきました」

その後、耳を劈くような絶叫や、絹を裂くような悲鳴が聞こえた。様子を窺う事を禁じられた近衛兵や女官、官僚達は、その声だけを聞いて震え上がった。

思いの他短い時間で、皆が一斉に謁見室を飛び出した。

「わかりました、わかりましたから、お許し下さい」

「もう、決して、さような心得違いな事は申しません」

「どうかどうか、お許し下さい」

口々にその様に泣き叫び、慌てふためいていた。そして一刻も早くその場を離れたいと言う必死な様子で、どの使者もたちまちの内に帝国を離れた。それ以降、外国からの問い合わせはピタリと止ん

だ。

あれは、何だったのだろうか？

後日こわごわ、年若い侍従が皇帝に何事が起きたのか尋ねてみたら、皇帝はニヤツと笑って答えたらしい。

「神気をぶつけてやったのさ。僅かだから、別段実害も無いが……皆、それぞれひた隠しにして来た恥なり、罪なりが有ったのだ。それを帝国いやオルト中に知られる事となり、末代までの恥辱を蒙る、と脅してやったのさ」

それから、表情を改めると、こうも言ったらしい。

「まあ、俗物ばかりで、助かった。もしもあの中に真の穢れを知らぬ優れた乙女がいたら、話は厄介だったのだが、一人もその様な者は居なかったよ」

後宮の廃止を皇帝が決定した事と、独身の女官が結婚する際は、見苦しくない家が一軒購入出来るほどの纏まった祝い金を、皇帝の私有財産から出す事が決まった事がいまって、妙齢の独身の女官は宮廷内に殆ど誰もいなくなってしまうた。それを惜しむ兵士や役人を務める若い男達の声も、ちらほら聞こえてきた。

「あゝあ、独身の綺麗な女性とめぐり合える機会が、減っちゃったよ」

「ほんとになあ」

先帝のファーンは、新皇帝の即位後、一月かそこらで、ひっそりと息を引き取った後なので、様々なしがらみも無くなったのではあったが、生き残った先帝の妃達や仕える女官達は後宮の廃止を不安

がった。

こうした女性達に生きがいを提供し、健全な未婚の独身の男女の出会いの場所を作るために皇帝はこれまでに無い、斬新な方法を考え付いて、こんな依頼をした。

「長年先帝陛下にお仕えになり、様々な事情にも通じておいでの皆様の、いわば、人を見る目の確かさを見込んで、お願いです。前途有る若者と、よき妻足りうる心身ともに健やかな女性を自然な形で交流させるような催しを、月に幾度か開いていただきたいのです。出来ましたら、あまり肩が凝らず、贅沢では無いが十分に楽しい、そういったものが好ましいですな。そして、なるべくは若い彼ら彼女らの相談相手になってやって頂けませんか」

こうして、宮廷内に仕えている者の身内を中心に、心身ともに健康な結婚を望む女性を招待するピクニックや肩の凝らない茶会など、近衛師団のメンバーや独身の役人達と交流する催し物を企画させた。それが、後には学生のグループや若い店主、教師、といった連中も加わるようになり、かつての皇帝の寵妃の住処であった離宮は、健全な若い男女の交流の場に生まれ変わった。

若い頃は後宮で勢力争いにしのぎを削ったライバル同士が、若いカップルの幸せのために協力して心を砕くと言うような事も珍しくなくなり、後宮の高齢者対策も皇帝の目論見通り順調に運んでいる。

「週末は、お嬢さんたちと会えると思うと、仕事に張りが出る」  
「真面目に交際を申し込みたい人が居るんだが、うまく告白出来るかな」

「結婚を考えているなら、元の離宮の相談窓口で色々聞いてみるのも良いと思うよ」

元の離宮に設けられた相談窓口では、人生の先輩たちが親身に相談に乗ってくれ、場合によっては結婚資金の無利子の貸し出しや、法的な手続き、式場の手配、なども面倒を見てもらえるので、連日結婚を真面目に考える独身の男女やその身内でにぎわった。

「閉ざされた離宮だった頃より、うんと雰囲気明るくて、活発で良いですな」

適齢期の子供を持つ親世代は勿論、それ以外の人間から見ても、この変化は好ましいものとして受け止められていた。こうしたおかげで、その年の内に、多くの新しいカップルが誕生したのだった。

新皇帝が即位して、瞬く間に半年が過ぎた。

皇后宮の女官は全員が夫との仲が睦まじい出産経験の有る者ばかりになっている。授乳は生母のロザリアが中心になってやっている。乳母を選ぼうとしたが「お母様のお乳じゃないと銀の龍の穢れが清められない」との事で、フェリシアが嫌がった。銀の龍にとっても不都合な事であるらしかった。

そのため、今の所、ロザリアとクラウドの夫婦は皇后宮の一角に住んで、幼い皇后のために働いている。

10 (前書き)

皇帝と幼い皇后の関係は、女官たちも興味津々のようです。

「フェリシア」

呼びかける甘い声はこの国の皇帝マルク・ド・オルテスのものだ。地球人・マーク・ゴルドの魂を宿しており、個人的に親しい者の中にはマーク、あるいはマークさんと呼ぶ人間も居る。もっとも、彼が皇帝にまでなってしまうてからは、神である金の龍や女神以外、今でもその呼び方をするものは殆ど居ない。

かつてリユートを爪弾き恋の歌を歌わせたらこの人の右に出るものは居ないと言われただけ有って、単なる猫なで声などと言うものではなく、聞くものの気持ちや甘く切なくさせるような魅力に溢れた声だ。

傍でその声を聞いていた女官たちは、皆、娘盛りをとくに過ぎた年かさのものばかりではあったが、初めて恋をした頃の切なさをふと思い出してしまふのだった。

皇帝は蜂蜜の様な艶やかな金色の髪とやさしげな緑色の瞳の稀に見る美丈夫の上に、エスプリに満ちた話術と気さくな人柄で多くの女性を虜にして来た。かつてはお妃なり愛人なりの志望者が余りに多すぎて、さすがのやり手の皇帝も苦慮していたが、今は皇后・フェリシアだけが彼の愛情の対象と言っても良かった。

「フェリシア、お願いだ、怒らないでおくれ、約束を守るように努力はしたのだが、キタイにはキタイの事情があって、思いの他、手間取ってしまったのだよ」

皇帝にはキタイで摂政を務めていた時期に設けた子供達が居るが、全員母親が違う。第一子は公爵位を継いだ若君、第二子はキタイ王

女が生んだ次のキタイ女王となる姫君である。他に世に知られぬ庶子が二十名居るらしい。

「判っております。私の不機嫌は何時もの病気ですから、お気になさいますな」

皇帝のひざの上に乗っているやつとオムツが取れたばかりといった感じの幼い女の子が、切り口上で答えた。口調と言葉遣いといい、とても一歳かそこらの幼児とは思えない。

「昨夜が満月で、フェリシアと互いの気を馴染ませるのに打って付けだった事を忘れていたわけじゃないよ。今夜は十六夜で満月の夜には劣るが、他の月の時よりはマシだろう。来月は必ず、ね？」

「双龍の池の今年のスイレンの盛りは過ぎてしまいましたわ」

「ああ……そうだね……ごめんよ」

「来月はこの皇后宮の白百合が盛りのはずです。どうぞお忘れになりませんように」

それから、幼い皇后は皇帝の膝から降りようとしたが、皇帝は小さな彼女をしつかり抱きかかえてしまった。

「お放し下さい」

「だめ。どこに行くつもりなの？」

「一人になりたいのです」

「ご機嫌の悪いフェリシアを、一人には出来ない。ああ、君達、下がりなさい」

皇帝は人払いを命じた。

「おやめ下さい、陛下！」

「ハニー、そのよそよそしい呼び方、止めてよ」

衣擦れの音がして「いやっ」とか「ずるいっ」と言う悩ましげな声がある。

「ちょっと、あなた、ばれたら大変よ。悪い事は言わないから、早くあっちへ行きましょ」

戸口でこっそり様子を伺っていた新参者の女官見習いは、先輩に注意されて、詰め所に戻った。

女官の詰め所で、皆は色々な噂をしていた。

「陛下って、オルト中のめぼしい妓楼の女の人達から商売つ気抜きで来て頂きたいって言われてらして、大層おもてになったのでしょ？」

「妓楼以外の場所でも、あの方をお慕いする女の方は沢山居たわよ。私の母方の従姉妹がキタイの都ブルサの王宮の女官なんだけど、その人が言うには、あの方は廊下ですれ違っただけで抱いて頂きたいと思ってる女官がお分かりになって『君が秘密を守るなら、気晴らしに付き合っただけてもいいよ』って、仰るらしいわ」

「付き合っただけると、どうなの？ 凄いの？」

「どうも、素晴らしいらしいの。でも、秘密を守れなかった人は、二度とお相手させて頂けないのですって」

「庶子が二十人もいらっしやるって、凄いわね」

「金の龍様が『血脈を残せ』と仰ったから、健康で賢いのに男運の悪かった方を選んで、お子様を作られたらしいの。あの方は『子を作ろう』とお考えになると、百発百中なのですって。逆に作るおつもりがないと、全然出来ないそうよ。それも金の龍様のお力らしいわ」

「あんなにお小さいのに、皇后陛下ってお話しぶりが大人の方みたいね。あれは銀の龍様のお力？」

「そうなんですよ。本当に、あのお二人の関係って、不思議よね……それはそうと、この新入りちゃんが、お部屋の戸口で聞き耳立ててたの」

「ええつ、あなた、きついお叱りを蒙って、止めさせられるわよ。そういう人何人も居るから」

「でも、聞き耳立てたくもなるわよね。わかるわあ。あの悩ましい色っぽい『いやっ』とか『ずるい方』とか仰る声、女の私でも聞いているだけで、なんかこうムズムズする。あんなにお小さい方なのに」

「ねえ、具体的にはどうやって皇后陛下の御機嫌を直されるのかしら？」

「そりゃあ……」

「気を馴染ませるんでしょう？具体的にどうするのか知らないけれどね」

「皇帝陛下って、赤ちゃんでいらした皇后陛下にキスしていらしたわ。その……熱烈な大人のキスを。私見ちゃったもの。あれは気を馴染ませていらしたんじゃないかしら？」

「ああ、私も見た。まだ赤ちゃんの皇后陛下が、凄く色っぽい綺麗な表情になるので驚いたわ」

「じゃあ、今頃、お二人御寢所にお入りになって……」

「気を馴染ませていらっしやる、最中？」

「皇帝陛下の『フェリシアはどこもかしこも、綺麗で可愛い。食べたい』ってお言葉……」

「私もそれを思い出したの。今頃体中にキスなさってる……んじやない？」

「可愛いお手やおみ足を、口に含んでいらっしやるかも。指を舐めていらしたのを見たことがあるの……」

「はあ……」

女官たちは皆、午後のお茶を前にして、今まさに皇帝と皇后が居る寢所から薄桃色の雲が立ち上っているのではないかと言っ感じに囚われて、溜息を漏らしていた。

「だから、放って置いて下さいと……」  
「だめ」

「銀の龍の力が暴走したら困るから、義務や御役目でこのような事をなさるのでしょう？べ、別に私のことなんて、本当は厄介者だと感じてらっしゃるくせに」

「違う。義務でも役目でもない。僕はフェリシアを愛しているよ。厄介者なんてただの一度も思ったことがない」

皇帝は皇后を自分の腕の中に抱きしめた。そして、この小さな愛らしい体から発するえもいわれぬ芳香に半ば陶然となりながら、柔らかな白い肌の上に時折キスをしている。皇后の方は愛撫されキスが一つ落ちるたびに、幼児とは思えない悩ましげな表情を浮かべ、時折愛らしい声を上げ喘いでいた。

「酷い、ひどいわ。あなたが大切なのは、お子様達でしょう？私の事なんて、皇帝のお役目を果たされるのに必要な道具か何かだと思っただけなのでしょう？」

「僕は道具にはキスをしないし、こんな風に抱きしめたりしない。どうしてそう、自分を道具だと思っのかな」

「だって、あなたも私もオルトの神の不手際をどうにか誤魔化す為に、勝手に呼びつけられてしまったのが、そもその始まりでしょう？」

「それは、確かに最初のきっかけはそうだった。でも、僕はあのまま地球で死んでしまうより、今の方が良かったと思ってる。オルトが僕に与えてくれた物の中で、フェリシアとの出会いが一番素晴らしい物だって、心から思っているよ」

皇帝は深いキスをして幼い皇后の口内に唾液を送り込んだ。皇后は喉を鳴らしてそれを飲み干す。すると、どうやら激していた感情が、少し落ち着くようだった。

「その言葉を信じたいのに……信じきれないの。すぐ、いじけた気持ち、暗い気持ち湧き上がってきて、焼け付くほどの焼き餅で頭の中が滅茶苦茶になってしまうの。どうにかしたいのに、どうにも出来ない」

「銀の龍が『嫉妬』を引き金に負の感情を増大させる事は、僕も知っている。フェリシアが器になってくれる前にほんのしばらく、金銀二つの龍を宿らせた事があったが、何だか酷く疲労した。何時もなら考えない後ろ向きな事ばかり考えたが……ごめん……負の感情の渦の中でも、フェリシアは僕にするべき事を教えてくれたのだよね」

大人の精神を幼い肉体に宿らせる不便さは、皇帝であるマーク自身も経験した。それでも、金の龍は気持ちを明るく前向きにする神だが、フェリシアが宿す銀の龍は違う。「銀の龍は暗黒の中に身を潜め静寂を好み、隠された望みを成就せしめる」などとされるが、公に口には出来ぬ隠された願いとは、どういったものなのか……

「銀の龍は人に言えない願いなら、どんな恥知らずな願いでもかなえようと思います」

「じゃあ、一番その中でも恥知らずな願いを適えれば良いじゃないか。僕は寧ろ大歓迎だ。それが満たされれば、きつとフェリシアは、他の『隠された願い』の事を余り意識しないで済むようになる。どう?」

「ああつ、あなたが私の『隠された願い』を御存知なのが、恥ずかしい……」

互いに龍の器同士、言葉を交わさなくても相当深い意識の部分まで窺い知る事が出来るが、大きな魔力を行使すればブロックをかける事も可能だ。マークはフェリシア自身の勧めに従って、過去の女性との思い出や子供達に関する感情をフェリシアですら見えないようにブロックした。だが、フェリシアはマークに何一つ隠し事が無い。

「全てを僕にさらけ出す勇氣を持っている君は、本当に凄い人なのだと思っている。これほど確かな信頼の証を示されて、夫としては全力で応えないわけにはいかないだろう？それに、フェリシアの『一番恥知らずな願い』は僕が密かに願っている事でも有るのだよ。そりゃあ……人前で口に出出来る願いではないにしても、君が大人の肉体を得ていない今の状況が異常なのだ。本当は恥知らずでもなんでもない『妻として当然の願い』だよ」

「最近、私の両親が『幼女玉房指要』をあなたのお手元にお返ししたようね」

『幼女玉房指要』とは長年帝国の神殿に秘蔵されていた古文書で、龍を宿した皇帝と幼い「神慮により定まりし正妃」が閨であれこれ絡み合つて「気を巡らせている」様子を描く一連の絵巻物だ。マークは随分前にこの古文書をフェリシアの両親に貸したのだった。そして「将来僕も必要になるから、用が済んだら返してね」とも言つてあつたのだ。

「そうだよ。『フェリシアの様子を見てみると、思いの他早くこれが必要でいらつしやるかもしれないと思ひまして』だつてさ。ただ、あれは幼女ではあつても七歳ぐらいにはなっている女の子だからなあ。そのままの事が出来るとは思はないが……実行できる事だけでもしょうか？実はね、その小机の引き出しに入ってる。見るかい

「ええ、見せて」

夫が持ってきた小箱を開けると、中から絵巻物が出てきた。

「フェリシアの髪が銀色一色では無く黒を含むのは、やはり女神様の特別な加護の力を示すのだろう。この巻物に記されている『神気を孕む玉女』の一人である事は確かだ。その上フェリシアはオルト始まって以来の『銀の龍の麗しく完き器』なんだから……この絵巻みたいな事をして、早く僕と気を十分に巡らせるべきなのかもな」  
「綺麗だけど、やっぱり気恥ずかしいような場面ばかりね」

「でも、ほら『新鮮にして芳しき呼吸を受け止め、おのが口中の雫を与え、また受ける』なんて言うのは既にやっているだろ？次の段階は『衣を撥ね退け全てを露にし、細やかなる肌を意をこめて撫して愛でつつ、玉門に』と言う辺りから『津々たる泉を飲み干すべし』つてくだりだが……半分ぐらいは、既に実行済みだ」

「……」

「どうしたの？今更ながら、恥ずかしくなった？」

妻は夫の問いに無言で頷いただけだった。

「この細密で華麗で淫猥な画風は、強烈だよね。間違はなく大傑作だとは思うが、それこそ人前で見るとも口にするのも憚る。だが、これは元来が皇帝と幼い妃が閨で見るとも口にするための絵巻なんだ。こういう使い方は本来の使用目的にがちり適っているだろう？」

「ええ……」

「フェリシア、今から早速、その第二段階の後半まで実行してみない？」

幼い皇后は、全身を真っ赤にさせて、照れた。

「恥ずかしいと、こんなに赤くなっちゃうのか。可愛いなあ」

女性経験が豊富な皇帝でも、このように幼い相手は初めてであっ

た訳だが、フェリシアの魂は完全に成熟した段階に有り、前世の地球での記憶も有る所為か、思いの他奇異に感じなかった。『兆したる甘露』が幼い体に似合わず大人並みであったのも、影響しているかもしれない。

「早く、魂の成熟度に似合った体になれると良いね」

フェリシアは労わりに満ちた夫の腕の中で、心地よい眠りについた。

「本当は満月の夜に、月の光を浴びながら気を馴染ませると良かったのだよね。あるいは真つ白いスイレンの花の傍でも同様の効果がある、そう言う事かな？」

フェリシアが幸せな心持ちでぐっすり昼寝をしている間、夫である皇帝は執務室に戻り、暗くなるまで仕事をしていた。それからキタイの王宮に少し顔を出して、遅めの夕食を夫婦でとると、白いバラの花のアーチが出来た花園に出た。花は小振りだがすっかり咲きそろい、なかなか見事な景色だ。

「白い花が良いなら、これも悪くは無さそうだけどね。可憐で美しくて、小さくて、薫り高い。時々トゲが有る。フッフ、なんだか君みたいだ。なんて思ったら、一緒に眺めたくなくてね」

「私……そんなに刺々しいでしょうか……」

「棘しかないのは願い下げだけど、君みたいに美しい愛らしい花には少々の棘はつきものだ。ちょっとしたアクセントになって、魅力を引き立てているよ。それにしても……白い満開の花の前で気を馴染ませるとは、銀の龍もなかなか乙な事を言うものだな」

「きつと、その場所ごとの浄化の力が活性化している状態だからだと、思います」

「キタイのゾルル山に美しい白い鈴蘭が大量に咲く場所があるが、花に毒があるそうで、牛も羊も近づかない。ああいうのは、どうなっているんだろうな」

「地球でも、鈴蘭には強い毒が有りますよね。それでもフランスでは花嫁の花で、幸せを呼ぶ花とするようですけど……ゾルル山の場合は、何か訳が有りそうです。聖剣『チチエック』の眠っていた場所に近いのですから」

「君の聖剣『ヴィーヴル』と『チチエック』は縁が深いはずだから、何らかの因縁が有るだろうか？」

「今、ダーリンが私にその話をふとする気になったもの、何かの縁です。銀の龍がそう言ってます」

「じゃあ、今からでも早速に行ってみる？」

「ワープしてですか？」

「うん。僕らなら一緒に行けるだろうか？」

「女神様の加護の力添えが欲しいそうで、ダーリンの『ジルニトラ』には『パンテラ・レオ』が、私の『ヴィーヴル』には『チチエック』が、有った方が良さそうです」

「じゃあ、君の御両親も一緒に今から行くか」

「まあ、急な話ですね」

「いや、そんな気分になったのだが、それも機運とか因縁かな？」

「（そうだ。因縁だ。早くあの二人を呼べ）」

「まあ、金の龍も同じ事を言うのですね」

「フェリシアは金の龍の言葉が聞こえるんだね。でも、僕には銀の龍の言葉が聞こえないな」

ふと見ると、フェリシアが真っ赤になっている。

「どうしたの？」

「その、銀の龍が……」

「（銀色のが言うには、マークはもっとフェリシアの『口中の雫』を貰う必要があるそうだ）」

「ふ〜ん、なら、さっそく」

だが、マークの動きは止まった。

「陛下、お呼びですか？」

「女神様が機運の高まりがあるので、急ぎお二人のお手伝いをせよ」

と仰せになったのです」

クラウスとロザリアだ。さすがにマークでも、フェリシアの両親の前でディープなキスは出来ない。

「へえ、女神様が君達にそんな事を仰ったのか」

「四本の聖剣の力が必要な、何事かが有るそうですが、場所はどちらで？」

クラウスは具体的な話は何も聞いていないようだった。

「キタイのゾルル山の麓の、鈴蘭の谷だ」

「もしかして……私達夫婦がかつて『朝霧楼』の裏手で遭遇した黒鈴蘭の因縁話と関係が……」

ロザリアの言う因縁話とは、クラウスの先祖と、皇帝の正妃であったあるいは、その候補であった黒き宝玉の娘の悲恋だ。黒き宝玉の娘とは、女神の申し子であり、昼間見た『幼女玉房指要』に記された「神慮により定まりし正妃」は黒き宝玉の娘なのだ。女神は黒き宝玉の娘を幾度か世に出し、その娘達は幼い内から皇帝の正妃とされたが、いずれも不完全なひ弱な存在であったらしい。ロザリアは初めての『完全な黒き宝玉の娘』であり、しかも夫が皇帝ではない初めてのケースなのだ。

「実はさ、昼間フェリシアと二人で『幼女玉房指要』を見たんだ」

フェリシアは恥ずかしくて、真っ赤になってしまった。両親はそれを見て年齢不相応な早すぎる展開に驚いたが、フェリシアの精神年齢を考えれば、別に奇異でもないと思っ直した。

「陛下とフェリシアの気が馴染まれて、『幼女玉房指要』が描かれるに至った昔の因縁を浄化する機運が整ったのかも知れませんか」

クラウドは非常に真面目な顔つきで言った。

「そつだな。あの『幼女玉房指要』は以前もクラウド君には話したが、五百年ほど前の皇帝の過失で『幼き玉女』を閨房で死に至らした事件の反省を元に、同様の事件の再発を防ぐ目的で作られたものだからな。ならば……」

「今夜の浄化対象はかつての皇帝でしょうか？」

ロザリアは緊張しているようだ。手ごわい悪霊ならば確かに厄介だろう。

「五百年前ならゾルル山も帝国領内であつたはずだから、有り得る話だ」

マークは考え込んでしまった。以前の黒鈴蘭の生えていた辺りでこの夫婦が因縁を浄化した際に、一体何をどうしたか……恐らくは

……

「（マークとフェリシアが四本の聖剣の加護の元、互いの気を十分に通わせれば、おのずと浄化は出来る）」

「（おいおい、メイト、それってひよっとして）」

「（ひよっとするぞ）」

ロザリアとクラウド夫婦には、マークと金の龍のやり取りは聞かない。だが、フェリシアには聞こえており、そのフェリシアが真っ赤になっている。

「陛下とフェリシアの気が十分に通う事は……その、オルトにとっても大切な事なのですから……ちょっと照れるような事でも、必要なら、堂々となさってね」

事情を察したロザリアはフェリシアの肩に手を置いて、このように励ましたが、やはりフェリシアは恥ずかしいのだった。

「そろそろ、四人とも向かうが良いぞ」

女神の聲がした。いよいよ、その因縁の地へ向かう事になりそうだ。

女神に促され、四人そろって目的地にワープした。

ゾルル山そのものの高さはせいぜいが三千メートル程度だが、麓一帯はヨーロッパと気候や土壌の条件が似通っている。

「ここあたりの夕日は綺麗だけどねえ。こつ真つ暗じゃ適わんな」  
マークは思いのほか厄介な展開に、ついぼやきたくなった。

「十六夜の月が出ましたよ。どうにかなりそうですね」  
クラウスは冷静だ。

マークはフェリシアを抱き、二本の聖剣『ジルニトラ』と『ヴィーヴル』を腰に差していたが、二本が共鳴し始めた。

「二本を自由にしてやりましょうよ」

フェリシアの言うように二本を腰から外すと、揃って上空へ飛び上がり、明るく輝いて辺りを照らした。

「おつ、目的地はあちらだね」

鈴蘭の群生地がはつきり目に見えた。そこは不思議な場所で年中鈴蘭が生え、殆ど冬の積雪も無いが、牛や羊が迷い込むと命を落とす場所として、地元の間人は忌み嫌っている。

「（マークはフェリシアと共に鈴蘭の花の群れの中央に立つのだ。そしてフェリシアから『口中の雫』を貰え）」

金の龍もなかなかうるさい。年中監視している舅のようなものだ。

「（わかった、わかった、でもさ妻の両親の目の前で、べろちゅうは照れるよ）」

「（何を言うか、フェリシアと気を十分馴染ませるのはオルトを救うための秘儀だぞ）」

クラウドスは『パンテラ・レオ』をロザリアは『チチエック』を鞘から抜いて構える。

「私達が結界を張っておきますので、どうぞ陛下はフェリシアと心置きなく気を馴染ませられますように」

「フェリシアも、頑張ってね」

こつも正面切って声援されれば、頑張らざるをえないわけで……

「陛下、フェリシアは幼い姿形ではありますが、陛下の紛れも無い番つがいです。『オルトを救うための秘儀』にためられる必要はございません」

以前、マーク自身が『オルトを救うための秘儀』と金の龍に責められた事も有るし、同じ言葉でマークがクラウドスに発破をかけた事も有る。何とも照れくさい『秘儀』だが……

「そうは言っても、私達に見られたら嫌よねえ。ちゃんと背中を向けておきますから、余り気にしないでね」

確かにクラウドスとロザリアの張った結界の外には、何か穢れた淀んだ気配が立ち込めてきた。死霊どもが異様な気配に引き寄せられてきたのだろうか？強いものではないが気分が良いものでもない。

「だつてさ、フェリシア」

「はい」

「なんか、掛け声かけるのも変だよねえ」

「では、鈴蘭の香りに意識を向けましょう」

毒花とは思えない優しい香りに二人は意識を合わせ、深いキスをした。何時もはマークの唾液を飲むフェリシアだったが、今日は逆に自分の唾液を夫に与えた。すると……

銀色の髪で赤い目の殆ど裸の男が、腕に幼い黒い髪の女の子の体を抱かかえ、悲鳴を上げて錯乱している様子が二人の脳裏に浮かん

だ。

「（この男が幼い妃を死なせてしまった皇帝か）」

「（どうやらそのようです）」

次の瞬間、男の肉体から銀の龍の魔力が噴出し、周囲のありとあらゆるもの、なんと男の肉体そのものまでが粉々に引きちぎれ、破壊された。

「（なんだ、酷い光景だ。自分自身の肉体まで『爆殺』させてしまったのか）」

「（自らを滅ぶべきもの死すべきものと思いながら、魔法を暴走させてしまった結果でしょう）」

その、きのこ雲のような、様々な破壊されたものを吹き上げた黒っぽい雲は、やがて風でこの、ゾルル山に吹き寄せられ、山の斜面に雨と同化して降り注いだ。その雨の穢れが最も濃い場所に、どうやら後からこの鈴蘭が固まって咲いたようだった。

「（鈴蘭はなぜ生えたのだろうか）」

「（オルトの大地の自浄作用でしょうか）」

「（我々が言わばここに呼ばれたのは）」

「（鈴蘭だけでは清めきれない分を、私達に清めて欲しいのですよ）」

「（清めて欲しいがっているのは、銀の龍か？それとも皇帝の彷徨う魂か？）」

「（皇帝以外の多くの人が巻き込まれて犠牲になっています。それら全ての人々の願いのようですね。銀の龍自身も強い穢れを感じていますが）」

「（では、巻き込まれてしまった多くの犠牲者、そして魔力を暴走

させてしまった皇帝、亡くなった幼い妃、全ての彷徨える魂に平安が訪れるように願えば良いだろうか」

「(ええ、きっとそれで良いでしょう)」

「(二度とこのような理不尽な事件が起きないように)」

「(二度と銀の龍の魔力を暴走させないように)」

「(互いに手を取り、心を合わせて)」

「(誠心誠意、真心をこめて)」

「(オルトの天地に誓おう)」

皇帝は幼い皇后の体をしっかりと抱き上げた。二人が互いに幾度も幾度も口付けを繰り返すと、上空に光り輝く雲が沸き起こり、激しい雨が降り出した。

「(清めの雨だ!)」金の龍が舞った。

「(清めの雨だ!)」銀の龍も舞った。

「(おお、清めの雨じゃな)」女神も和した。

すると、急に雨は止んだ。

「おやおや、フェリシア、ずぶぬれになっちゃったな。急いで帰ったら一緒に風呂に入ろう」

「はい」

「陛下、それではこれで、引き上げればよろしいのでしょうか?」

「うん。どうもそのようだと思われるよ。じゃあ、君らも戻ったら一緒に仲良く風呂に入りなよ」

「無論その様に致します。どうぞフェリシアを宜しくお願いいたします」

クラウドはロザリアを抱きかかえるようにして、その場から消えた。空には雲ひとつ無く、ただ十六夜の月が美しく輝いている。

「鈴蘭の香りが強くなったね」

「この場所が清められたからでしょうか」

「多分そうだろう。じゃあ、僕らも戻ろう」

二人が戻ると、女官たちは仰天した。

「い、一体、どうなさいました？」

「まるで、嵐に打たれてしまわれたようで」

「説明はまた後で。本当に大雨に打たれたんだ。ゾルル山の麓でね。昔の皇帝と妃と大量の犠牲者の魂を安んじてきた。結構な仕事だったから、僕らはゆっくり風呂に入る。邪魔するなよ。あ、何か飲み物を用意しておいてね。体を温めるものが良いな。フェリシアちゃん風邪を引いたら大変だ」

「はい。早速」

また女官たちはあわてて、その場所を離れた。

宮殿の風呂はマークの指示と指導で、ほぼ地球の一流ホテルのバスルームのような構造になっている。それまでオルトに無かった蛇口やシャワーを普及させたのは、キタイで摂政を務めていた頃のマーク自身だ。

「このシャンプーとソープのフレグランス、どう？なんかフェリシアに良く似合うと思って作らせたんだけどさ」

「あらあ……D社の有名な香水にそっくり。何だかなつかしい」

「あの香水は『草原に咲く鈴蘭』をイメージして作ったんだろ？まさか鈴蘭がらみでこんな事になるなんて、思わなかったけれど」

「で、また、これ売りに出されるの？」

「うん。そのつもり」

「大ヒットしそうね」

数日後、女官たちが新しい香りに大騒ぎし、オルト中でマークの作らせた香りのシリーズ商品が大いに売れた。おかげでまた、皇帝の私的な資金の口座に大量の資金が流れ込んだ。小国の国家予算を軽く凌駕していた。

「せっかく大もつけしたから、何かまた、面白い事がしたいな」  
フェリシアは夫がどんな楽しい事を始めるのか、大いに期待している。

「金色の龍が銀色の宝玉を抱きしめているようだ」とか、「金銀二つの龍が絡み合っているようだ」とかその様子を垣間見た者が時折口にはするが、幼い皇后の「お昼寝」に皇帝が付き合つと、このごろは御寝所の有るあたりから本当に薄桃色の雲か霞のようなものがたなびき、空にまで広がっているのを幾人も女官が目撃している。また更に、その薄桃色の雲が見られる時に、自分の恋愛の成就を願つと適うらしいなどと言う噂も立って、首都オルテスの恋する乙女達は連日午後になると、空の色を気にしている。

「薄桃色の雲なんて、面白いね」

発生源の当の二人は、昼寝と言うか気を馴染ませるのに夢中な時間なので、その皆が見ているという薄桃色の雲は見た事が無いのだ。「夏向けのふんわりした冷たいお菓子に、そんな名前がつくと美味しそうですね」

「そうだなあ。オルトにはプリンぐらいしかひんやり系統のお菓子が無いからねえ」

フェリシアの母、ロザリアがオルトにカスタードプリンの味と製法を根付かせてから、まだ歴史は浅い。キタイでレアチーズケーキを売り出したが、まだ、帝国では一般的では無い。それまでオルトには「かぼちゃのプリン」のようなデザートよりは蒸し物に近いような物が有るには有ったが、軽食に近い物で、熱々か常温で食べていた。「冷菓」とか「冷たいデザート」と言う概念自体、存在しなかったのだ。

「ピンクのババロアに白いクリームが乗っている、なんてどうでし

「ようか？」

「ああ、良いなあ、それ食べたい！」

「ブランマンジェにピンクの透明なクラッシュシュゼリーを乗せる方が、それっぽいかしら？」

「おお、それも是非試してみたいね」

実は最近になって二人は気晴らしのために、小さなカフェを開くことに決めた。

「二人だけの楽しい秘密を持とうよ」

マークがフェリシアに提案して、フェリシアが承知すると、もう既に店の準備は八割が出来ていた。場所は宮殿のすぐ外側で、かつて遊び人の大貴族が愛人にやらせていた料理屋が売りに出されていたのを、手を入れて、地球のカフェのような形式の店に作り変えたのだ。キタイでマークが開いた調理師専門学校の第一期卒業生同士で結婚したカップルがいるので、この若い夫婦をスタッフに迎えた。

「エスコバル公爵家と縁続きで料理にも造詣の深い方が、身分を伏せて商売をなさる。店の経営が順調で支店も出せるようになったら、そちらを君達に任せる予定だ」と言う風に、キタイのエスコバル公爵家の家令ユスフから若い夫婦に伝えてある。

「一番の問題は店のメニューだよ。僕としては作り方を教えてくれたシナモンロールは、出したいな」

シナモンロールはマークにとって懐かしい味だったようだが、フェリシアがロザリアに作り方を伝えるまで、もう長い間食べていなかったのだった。だからロザリアから献上された時、マークは大い

に喜び感激した。

実を言えば何をやっても器用なこの皇帝は、今でこそ腕を振るう機会が無くなってしまうたが、多少の料理ならかなりうまくこなし、身分を隠して旅をする時など、滞在先の旅籠や料理屋で厨房の手伝いをして、違和感なく溶け込める程度の腕前は有るのだ。

「デザートセットとか、ランチセットとかモーニングセットとか、セット物、良いかもしれません」

「ランチセット以外は僕は馴染みが無いが、日本の喫茶店は色々工夫が細かそうで、見習うべき点は多そうだ」

「朝とか、お昼とか決まった時刻に毎日来てくれる常連さんが欲しい所です」

「そうだな。それは言えている。店の経営も安定化するね」

地球人としてのマークは実用日本語検定試験特A級で、日本語を母国語としない人間としては相当に日本にも詳しいが、「日本滞在中の食事の大半はどこかの大学の学生食堂と、学問を通じて交流が有る人の家の家庭料理」だったそうで、喫茶店に自腹を切って入った事はほとんど無いそうだ。その代わり、日本の家庭の味というかおふくろの味にはなかなか詳しい。

「おにぎりなんか、忙しい人間に向いてると思うな。ランチボックスの中身としてもなかなかのものが有ると思うし。キタイの南部で五年前から試験的に始めた米の栽培が非常に順調で、帝国でも麦より栽培が向いている場所には導入を勧めてみたいが、帝国の連中は米に馴染みがないだろう？米が一般家庭の食卓に上るきっかけ作りにもならないもんかな。キタイじゃ炊き込み御飯は新しい御馳走と言っ認識がされつつある様だ」

「じゃあ、カフェはアンテナショップと言う感じで、新作おにぎりを出して売れ行きやお客さんの反応を見る場所にしたらどうですか

「キタイの米は冷めても美味しいジャポニカ系なのですよね」

「うん。僕が日本の米が好きだからね」

「焼きおにぎりの発展形とも言えそうな、お米バーガーなんか、どうです？」

考え始めるとあれもこれもと、欲張りたくなるが「店のコンセプトはクリアな方が良い」と言うのがマークの方針で、事実それで様々の事業展開を成功させてもいる。その基本方針に沿ってメニユーに検討を加えた結果、お米バーガーを軽食の柱に据えテイクアウトもできるメニユーにする事と、デザートはプリン・ババロア・ゼリーに絞る事が決まった。

マークの好物のシナモンロールは、店のすぐ近所の腕の良いパン屋に製造法を教えて焼かせ、一定量毎日現金で買い取る事にした。パン屋は自分の店で既にシナモンロールを売り始めていて、売れ行きは非常に良いらしい。

「斬新な発想の新しい美味しさで、感動しました。製法を教えてくださいただけでも有り難いのに、現金払いで毎日買い上げて下さるなんて、願ったり適ったりです」

パン屋の主人はそう言っつて、この業務提携を大喜びで受け入れた。最近はまだ新しいレシピを教えてくれるなら、パンの値段を特別に安くしても良いとも言っているようだ。

キタイから引つ越してきた調理師の卵の夫婦も開店の支度に余念が無い。全ては順調のようだ。

「店の名前、どうする？」

「そうですね『金と銀』なんていかがでしょうか？」

「有名なワルツを思い出したよ。良いね。採用しよう」

オルトの人間ならきつと双龍ぐらいしか連想しないだろうが……  
ウィンナワルツの名曲『金と銀』、更にその曲にゆかりの深いオ  
ーストリア帝国の貴婦人の逸話を思い浮かべながら、マークは実に  
良い名前だと思ったのだった。

「ダーリンは元々はコーヒー派なんでしょう？」

マークはアメリカで生まれて育ったので、コーヒーの方が馴染んでいたようだ。

「うん。なんか紅茶つて余り飲まなかったな。日本で飲んでた麦茶の方が馴染みが有るぐらいだ」

茶の木は、オルトにも自生している。家々の垣根などにもなっていて、摘んだ葉っぱを緑茶に加工することは昔から行われてきた。ただ、抹茶は無かったし、茶葉を発酵させる手法は知られていなかった。なので紅茶も無かった。

オルトで毎日コーヒーを飲むのは、実際には難しい。

「自力で地球に行けるようになってからコーヒーの種を手に入れて栽培を始めたけれど、温度が適切な場所は夏に大風が吹くからなあ。やっと育てた千本の木を殆ど風で倒して駄目にしてしまったから、ちよつと諦めている。嗜好品の割りに栽培が難しくてね……穀物や他の食料の栽培の方が、今のオルトでは優先されるべきなんだろう」

確かに現在のオルトの状況では、穀物でも食料でも無い物の栽培に力を注げる状況ではないだろうが……

「今は、タンポポコーヒーでしのいでいる」

それでも本当は、インスタントでも良いから本物のコーヒーが欲しいだろう。タンポポよりもっとコーヒーに近い風味の植物でも見つかれば、問題は解決しそうだが……あるいは、タンポポコーヒーの品質を向上させる方が話が早いだろうか？と、フェリシアはあれ

これ悩んだ。非常に出来の良いタンポポコーヒーは本物のコーヒーと遜色無い美味しさだが、そのためには収穫から洗浄、乾燥・焙煎・刻みといった全工程に、細かい気配りとかかなり高度な技術が必要だ。マークが飲んでいるタンポポコーヒーをフェリシアも味見したが、焦げ臭い割りに野菜臭が有り、飲んで飲めない事もないが、コーヒーと似ているのは色だけと言う感じた。色々と製作の工程で改善点があると思われた。

「このタンポポコーヒーの作り方をチェックしてみてもよろしい？」  
「改善点を探ってみようか。フェリシアの言うようにタンポポコーヒーでももつと美味しくなれば、かなり用が足りるよね。デザート類との組み合わせも楽しめるようなレベルに仕上がると良いんだが……」

マークはキタイの農業学校でタンポポコーヒーを作らせているが、その日はフェリシアを肩に抱いてワープして、一緒に作業現場を確認した。質の良い材料をきちんと洗い、丁寧に乾燥させていると思われたが……

「私は、あの焙煎工程に鉄の鍋を使っているのが、一番の問題だと思っわ」

「確かに焙煎すると言うより、焦がしてる感じだな」

「土鍋に切り替えたら、良いのでは無いかしら？」

「確かに、日本茶でも焙烙ほいろくなんていう土鍋の仲間を使うねえ」

「あとは、焙煎後の細かにカットする工程でしょうか……もう少し細かい方が良くないかしら？余り細かいと苦くなりすぎていけないはずだから、色々まだ実験してみないと駄目ですけれど」

「フェリシアに見てもらって、良かったよ。当面の問題点が見えて来たな」

約一月後、大型の土鍋で焙煎させてより細かに刻んだタンポポ  
ーヒーを作業所のキッチンで試飲した。

「こんな風にドリップすると、本当に味はコーヒーそのものだなあ。  
いやあ、うまいじゃないか」

「香りはコーヒーそのままとは行かないですが、それでも麦茶より  
はコーヒーばいですよね」

「ローストの加減で野菜くささが飛んで、香ばしくなってる。上出  
来だ。インスタントよりもうまいよ」

随分風味が改善されて、美味しくなったタンポポコーヒーでアイ  
スコーヒーを作る事が出来るようになった。マークが「17世紀の  
フランスの物のまねをした」と言う硝石を使った装置を作ったので、  
少量の液体なら店頭ですぐに冷やせる手筈が整った。地下には氷室  
を作り、そこにレオンハート峰の頂上付近から氷を大量に持ち込ん  
で食品類の貯蔵も万全だ。

「宮殿の地下にアンモニア吸収型冷凍庫は作ったんだけどさ、アン  
モニア水溶液を加熱するのにボイラーが要るし、放熱量も大きいし  
コンパクトに出来ないんだよね」

電気冷蔵庫の存在しない世界は、色々と工夫が必要で大変だ。

紅茶や緑茶は既に出来ているが、まだまだ改善を加えて行く事  
なりそうだ。地球の高級品からすると、色々と残念な所が多い。そ  
れでも、いかにも無農薬で安全そうな味わいは悪くはなかった。

そんなカフェの開店を数日後に控えたある日、宮殿でもタンポポ  
コーヒーを淹れ、一緒にあられとナッツを出した。

「タンポポコーヒーはノンカフェインだよな」

「薬効成分も有りますね」

「お乳の出が良くなるらしいけど、僕には関係無いよな」

「えっと、胃や肝臓の機能が良くなるとか、発毛・育毛効果とか…  
…有ったと思います」

「消化器官は丈夫だし、禿は当分大丈夫だなあ。薬効を抜きにしても、美味けりゃ飲むがな。僕はブラックが好きだけど、フェリシアは？」

「お砂糖抜きのブラックですね。断然」

「ふふっ、見た目と凄いギャップが有る、大人の選択だねえ。でも、好みが一緒って何だか嬉しいな」

「コーヒーに、私はこのあられとナッツの組み合わせが好きです」

「これ、美味しいなあ。キタイ産の米でどの程度のあられが出来るか心配だったけれど、これなら十分売れそうだ。コーヒーとの相性がこんなに良いのも驚きだ」

「塩味と蜂蜜風味と魚醤の三種類ですよ。本当は醤油味が欲しい所ですが」

「醤油の香ばしい風味、良いよなあ」

「本格的な醤油作りって、すぐには難しそうですね」

カフェで出す予定のお米バーガーに、是非醤油系の味付けが欲しいが、当分は魚醤で乗り切る事になるようだ。

「醗酵の過程でデリケートな条件が多そうで、魚醤みたいに材料が良ければ割合とそれだけでどうにかなるものと違うよな。日本じゃ専門の職人さんが管理するだろう？さもなきゃ近代的な大工場で作るか、どちらかだものな」

魚醤はタイのナンプラーにせよベトナムのニョクナムにせよ、平

均気温が高い所で新鮮な魚と塩を同量程度あわせて醗酵させて作れば、案外単純に出来る。

「魚醬は美味いけれど、出来るまでが相当臭いよなあ」

「なかなかまだ、オルトでは受け入れられにくいでしょうかね」

「出来上がった魚醬のうまさは、皆素直に認めるがなあ……今、作ってもらっているトラブゾンの村の特産品として、大々的に売り出そうとは考えているよ。今は出来る量も知れてるから、ほぼ僕が全量買い切って、色々な所に分配して使わせている」

トラブゾンは聖剣『ヴィーヴル』『シャボンヌ』の二本が永らく眠っていた美しい海に面した、小さな漁村だ。新鮮な魚と塩だけは十分にあるが、他は多少の柑橘類程度しか特産品も無く、街からも遠い。

「お米バーガーやあられがヒットして、魚醬に対する認知度がアップすれば、トラブゾンももっと豊かになる」

「米を作ってもらっている農家の収入アップも期待できますね」

「うん。そうだ。『真の商人はさきも立ちわれも立つことを思うなり』って石田梅岩て人の言葉、真理を鋭く突いていて昔の日本人は凄いなと正直驚いたんだが、ああ言う下地があったから日本はすぐに近代的なビジネスに乗り出して行けたんだろう。ああ、これ言い出したのは僕じゃなくて、カリフォルニア大の先生だけだ。前向きに互恵的な関係を求めて行くのがやっぱり、ビジネスの有り方として正しいと思うよ」

「ふうん。日本人でも石田梅岩の事は知らない人が多いのに、そんな風に専門に研究なさる方がいらっしやるのが、やっぱりアメリカって国の凄い所ですね」

君らもどう？と勧められたタンポポコーヒーとあられ&ナッツの

組み合わせを周りの女官達も楽しんで、その癖になりそうな美味しさに驚いていたが、皇帝と皇后の会話にはさっぱりついて行けなかった。それでも二人が妙に楽しそうである気配は伝わっていて「やはりお二人は神がお定めになった番っがいでいらしゃるのだ」と、今更ながらに納得しているのだった。

その店は何でも美味しいと評判になっている。

さほど店構えは大きくない。だが、出て来る食べ物がどれも気が効いていて、美味くて、庶民的な価格だった。

「朝はその朝定食、昼は昼定食がよろしい。毎日違う料理が日替わりで出て、楽しめますぞ。食事でなければ『デザート』と言つのも、どれも美味くて中々の物です」

その言葉を発したのは、小柄でことなく品の有る老人だった。学者や画家や工房の主などが好んでかぶる布製の帽子をかぶっている。色は黒くて地球のベレー帽とほぼ同じような形だ。オルトにおいて黒は女神の色、あるいは女神の加護を願う色とされる。

「失礼ですが今召し上がっておいでの物は、上下の丸い米の生地に魚醤の香ばしい風味の肉と野菜の炒め物が挟まれているようですが……」

そう応じた中年男の口調はおっとりとしている。身なりはそこそこ豊かな農民か、ちよつとした田舎の地主が旅をしているといった感じだ。かなり大柄で姿勢が良い。キタイで騎士団長を努めるクラウス・ド・ピネ・聖域侯と競るのではないかと思われる背の高さだ。灰色の髪に灰色の目、そして灰色の短いあごひげが印象的だ。

「私は料理にはトンと不案内です。じゃが、この魚醤は近頃評判のキタイのトラブゾン産のようですよ。ほれ、その壁にそのような案内が出ておりますからな」

「なるほど！トラブゾン村の物ですか。では、私も同じものを頂戴

しましょう」

中年男も『日替わり米バーガーセット』を注文した。

「オルテスは初めてでいらっしやるのかな？」

老人は中年男に興味を覚えたらしい。確かに帝国にはあまり灰色の髪と目の人間は居ない。せいぜいこの店の主ぐらいしか見た記憶がない。

「はい。私はキタイのゾルル山の麓で百姓をやっております」

キタイと帝国の間の関門は常に開かれており、犯罪者でもない限り今は誰でも往来が自由だ。

「ゾルル山の麓と言えば、開祖皇帝と共に戦い後に野に下った伝説の女戦士エミーネの隠棲した土地がそのあたりでは有りませんか？」

「はあ。一応我が家はエミーネの末裔という言い伝えが有りますが、祖父も父も私も、別にただの凡人です」

「ですが、代々エミーネゆかりの聖剣を守ってこられたのでは？」

「はあ。ですが、十年前になりますか……真の使い手の方がおいでになって、先祖伝来の開かずの箱をお明けになり、剣をお持ちになりました」

「ひよっとしてその剣は……」

「花の剣とも言われる『チチエック』です」

「おう！ならばあなたは『チチエック』の使い手であるレオンハートのロザリア姫を御存知ですか？私はかの姫と夫君となられたクラウス君に、幼いころ学問を教えさせていただいたティボーと申すものです」

「私はゼキと申します。ゾルル山の麓のボル村の村長を努めさせていただきます。よろしくお願いいたします」

「あなたは皇帝陛下にも直接お目にかかれるお立場だと、クラウス

君から聞いた記憶がありますが、何か特別な御用件でもお有りなのですか？」

この義理堅そうな好人物の大男が、何か込み入った事情を抱えていそいだと言つのはテイボーにも判った。

「いやあ……微妙な話なのです。大恩有る皇帝陛下に関係の深い話ですが、いまや真の番である方が御一緒なわけで……ですから、まずはクラウド様とロザリア様に御相談しなくてはと思ひまして……」  
「ふうむ。それは、キタイに二十名居られると言つ陛下の知られざるお子に関わる事でしょうか」

「さ、さすが……御明察の通りです。私の妻の弟が結婚を決意したと言つ相手の女性には、さる高貴な方との間にひっそりと設けたお子が居りまして……その義弟の話を聞けば聞くほど、その高貴な方と言つのが陛下であられるように思われました。そのお子の髪は灰色ですが、瞳は美しい緑だそうですし」

緑の目は金の龍に関わりが深いとされる特別な色だ。

「そのお子は男児ですか、女児ですか？」

「男のお子で、七歳におなりですが、大変に賢いお子のようなのです。十歳になったら実の父上と対面すると言つお約束だと聞いております。その女性と義弟は共同で絨毯作りの工房をやっておりまして、商売は繁盛し、町家のものとしては悪くはない暮らし向きと言えましょうが……貴族の方々なら三歳ごろから学問や技芸を学ばれるわけで、このままではそのお子がお気の毒な事になるのではないかと私としては、気がかりなのです」

「では、それを召し上がったら、早速にレオンハート公爵のお邸に参りましょう。クラウド君は仕事でキタイでしょうが、ロザリア姫はおいではずだ」

「ありがとうございます。助かります」

大男のゼキは思い切り身を屈めて、礼をした。よほどホツとしたらしい。やがて、二人は連れ立って店を出て行った。二人とも勘定を受け取った、その眼鏡をかけた髪も目も灰色の男の正体を見抜けなかった。

カフェ『金と銀』の経営は順調だった。来年あたりは支店を出せそうな状況で、キタイから移り住んだ調理師夫婦もますます頑張っている。今日はその夫婦に休みをやって、代わりにマークとフェリシアで店の仕事をこなしていた。店に立つ時のマークは黒縁の眼鏡をかけ、髪も目も魔法で灰色に変えている。

「ゼキ村長は僕に気がつかなかったようだね。彼に会うときは髪が茶褐色か金色かのどちらかだからな。でも、魔法で髪の色も目の色も変える事が有ると知られているわけだから、ヒヤヒヤした。ティポーさんは店の常連だけど、皇帝として会った事は無いから大丈夫だろう」

フェリシアは髪も目も琥珀色に変えている。

「ねえ……フェリシア……」

マークは困惑していた。二十人の庶子をフェリシアに引き合わせるのには、二人の絆がもっと強固になってからにする予定であったのだ。

「あの……フェリシア……」

「私なら、大丈夫です。今、ダーリンの御気持ちがどこかの女性の方に向いているのでもないですし、二十人のお子様を生んだ方たち

は、皆、別の方との結婚をなさる事になるはずですから」

フェリシアの冷静な反応にマークは、ホッとした。

「先ほどのゼキさんのお話に出てきたお子さんは、聖剣の使い手か  
もしれませんね」

「そう、思う?」

「そんな気がします」

「ならば、絨毯工房をやってる親の所より、どこかの貴族に預ける  
べきなんだろうな」

「私の両親……とか……」

「そりゃあ、君の両親なら願ったりかなったりだ。もうすぐ、聖域  
侯としての独立した邸もできるし、時期としては悪くなさそうだが  
…… フェリシアは、やっぱり嫌だろう?」

「焼き餅は、ダーリンが今まで同様、私だけを可愛がって下さるな  
ら……他の女の方とベッドを共になさらないのなら……きっと大丈  
夫です」

「僕はもうフェリシア以外の誰かを、抱いたりしないよ」

まだまだ幼いフェリシアをマークは膝に乗せ、誰も居なくなった  
店内で、二人は深い口付けを交わした。それだけで十分に二人の想  
いは通い合う事が出来たのだった。

16 (後書き)

フェリシア五歳

マークは三十五歳

ロザリアは十七歳  
になっています。

「まあ、ようこそおいで下さいました」

年齢はまだ十代のロザリアは、ゼキの記憶に鮮やかに残る潑刺たる美少女ぶりに加えて、内から輝くような艶やかさと貴婦人らしい堂々たる気品を備え、ますます目が惹き付けられる美しさだった。夫であるクラウスの消息を尋ねると、いかにもうれしげな表情で説明してくれたが、その様子は細やかな夫婦の愛情関係がにじみ出ているようで、昔の二人を知るゼキには何とも好ましく感じられた。

ロザリアの夫君のクラウスが新たに創設された聖域侯に任じられる事が決まり、その聖域侯邸ができれば親元から完全に独立する。

レオンハート家の現当主ジョシユアはクラウスを早くから信頼し、一人娘のロザリアの夫として婿養子に迎え、レオンハート公爵家の相続人とする正式な遺言書なども作っていたのだが、ロザリアの結婚後、息子のアングスが生まれた事も有り、クラウスはクラウス個人の功績で新たな領地と爵位を賜る事となった。

まだ正式な話では無いが、アングスを皇帝の長女であるキタイの次期女王の夫としたい、と言った皇帝自身の言葉も有り、それが実現すればアングスは帝国とキタイに跨る広い領地の主になる可能性も大きい。

「色々込み入った境界問題や領地争いも有るから、全部を綺麗にしてからアングス君にはその身分にふさわしい待遇をする事になる。クラウス君とロザリアちゃんは女神様との特別な関係が有るから、女神の台座付近の土地の管理は任せた方が良いだろう。レオンハート家の領地は一時的には狭くなるだろうが、アングス君はキタイきつての大領主ともなるうし、まあ、発展的な解消と言うか、再構築

と言つ形になるだろうな」

帝国一の最も古く由緒有る大貴族の家から、帝国の柱石たる功臣の新たな家と、キタイも含めた大帝国の最も身分高い貴族の家に分かれるのだ、そう言う風にも皇帝はジョシユアに説明したようだ。

無論、ジョシユアに異論は無く、すべてを皇帝に一任する事とした。と言うのも、皇帝の唯一の妻であるフェリシアはジョシユアから見れば孫であり、生まれた息子のアンガスはジョシユアにとっては全く未知の聖剣『シャボンヌ』の主である事から、神に最も近い（とジョシユアは感じている）皇帝に任せるべきだと考えたからのようだ。

「ほう、姫様はそれほど長くゼキ殿のお宅に陛下やクラウス君と滞在なさっていたのですか」

ティボーは、ロザリアとクラウスが約半年もゼキの家に滞在した事が有ると知って、驚いた。

「ええ。陛下はすでに当時キタイの摂政としてお忙しいお立場でしたから、半年ずつとは行きませんでした。私ども夫婦はすっかりボルの村での暮らしを楽しんでました。平和な良い村で、皆さん親切に色々な事を教えて下さいました。ゼキさんの御一家には本当に良くして頂きました。特に、ゼキさんの奥様には一方ならぬお世話になりましたが……お元気で過ごしていますか？」

「妻も、そして子供らも元気ですが、ひとつ困ったと申しますか、私では思案の及ばぬ事が出て参りましたので、皇帝陛下の御信任も厚い聖域侯御夫妻にぜひ、ご相談をと思ひまして、あつかましくもお尋ねした次第です」

そこから、ゼキは何をどう、話したもののか、言葉に詰まってしまった。そこでテイボーが助け舟を出す。

「ゼキ殿の義理の弟に当たる方が、結婚を決意されたそうなのじやが、その義弟殿の御相手には、なにやら複雑な御事情があるようですよ……しかもそれが皇帝陛下とも何やら無縁ではなさそうです……そうでしたな？」

ロザリアは、二人が昼食をカフェ『金と銀』でとって来た事を軽く意識を探って知った。それから、フェリシアに、心話で語りかけた。

「（ゼキさんにも、先生にも陛下がフェリシアと店で仕事をなさっていたなんて知らせない方がよろしい？）」

「（せっかくの秘密だから、内緒にしておいて下さい）」

「（お二人の楽しい秘密なのですものね。でも、ゼキさんの御相談はどうしましょう？陛下は何かおっしゃって？）」

「（そのお子様は恐らく、聖剣の主になるべき方でしょう。ダーリンは『どこかの貴族に預けるべきなんだろうな』って仰ってました。七歳でしたっけした方の方です。お父様とお母様がお預かりして御養育なさったら？ダーリンは私に御遠慮なさいましたけど、君の両親なら願ったりかなったりだ』とも仰ったのです。ですから……私はお二人に御養育頂くのが一番良いと思います）」

「（まあ……別にお子をお預りするの私は構わないけれど、フェリシアは平気？）」

「（全く平気でも無いですが、お父様とお母様のお育てになる方には、私の困った魔力は発動しにくいでしょう。陛下が十歳になつてとお考えになつていたよりも早くこうした機縁が盛り上がるのは、そのお子様の力をオルトが必要としている……と言う事のような気が致します）」

「（陛下はそこにおいでになるの？）」

「（ええ。私はダーリンのお膝の上におります）」

「（まあ！では、そのお子は私たち夫婦でお預かりする……それで宜しいのね？）」

「（うん。ご面倒をおかけするね。クラウス君には今説明しておいた）」

それまでロザリアには全く気配も感じられなかったマークの思念が、鮮明に伝わった。気配を絶つのも、逆に強く印象付けるのも、ロザリアには無理だがマークとフェリシアの魔力なら可能だ。

「（騎士身分の者とゼキ村長の身内と、身の回りの世話をする信頼できる年かさの女性の三人程度で迎えにいかせるか）」  
子供はまだ、ほとんど魔力は備わっていないようでワープは出来ないらしい。

「……とまあ、このような次第でして、そのお子の行く末も気がかりですし、如何したものかと……」

ゼキが訥々と事情を語る間に、ロザリアはゼキの意識を探り、ボルに居るゼキの妻の意識も読んだ。マークやフェリシアのように面識も無い人間の意識を探る事までは出来ないが、そのゼキの妻の弟が結婚を決めた女性の人となりと子供の大まかな様子は探り当てたのだった。その上、フェリシアや皇帝自身と心話で大まかな手はずも相談してしまったのだ。見ようによつては、ゼキの苦勞をよそにコソコソと色々な事を決めてしまった事にもなるわけで……正直で誠実なゼキを半ばだましているようでもあり、ロザリアは聊か後ろめたく感じた。

折角、遠いボルの村から一大決心をして自分たち夫婦を尋ねてく

れたゼキの気持ちを傷つけないように、そして、その子供の出迎えと養育について、最大限の注意を払って「すべてを丸く治める」べく、ロザリアはゼキにゆったりと眠れる部屋と心づくしの料理を用意して、精一杯もてなす事にした。

一方で店を片付けたフェリシアとマークは、宮殿に戻り、寝室でまた「気を馴染ませて」いた。

「そうかあ。その子が君の両親の養い子になると、困った魔法も発動しないでお互い安全なんだな」

「そうなんです。やっぱり、その方は聖剣の主だと思いますから、力を目覚めさせるためにも私の両親のそばが宜しいでしょう」

フェリシアの予言や気運を読み取る力は、特別なもので、マークには無い特殊な力だ。

「僕はフェリシアの言う事を信じてるよ」

フェリシアにはその、夫の信頼が何よりの力になるのだった。

その日の午後も帝国の首都オルテスの上空には薄桃色の雲がたなびいていた。発生源の二人は、しどけない、と言っべきか、互いの着衣の前はすっかりはだけてしまい下着がどこに行ったのかも良くわからぬような姿で、互いの体を撫でさすりながら「気を馴染ませ」ていた。

「フェリシア……」

「ダーリン」

艶の有る甘やかな男の声に応じる声は、幼い。だが幼いなりに艶めいている。

「……ッああつ、フェリシアっ」

かつてオルト随一の色男とか艶福家とか言われていた三十過ぎの男が上げるにしましては、余りにも切迫して、真摯で、憚りの無い声だった。

不老不死をオルトの神に約束されたマークの肉体は、二十代半ばではば老化を停止している。この淫蕩な五歳児が自分に与える快美な刺激と愛らしさに、マークは時折我を忘れる。肉体が五歳児でも頭脳と精神が大人なら男の欲求を理解できるし、限り有る手段の中から、それなりの方法で十二分に快樂を紡ぎ出すのも可能なのだと思いを知らされる。

かつてフェリシアの両親にあたるクラウスとロザリアは、夢の中で未来に飛んで愛し合った事もあるようだったが、その機能は現実の「気の馴染ませ方」が濃密になると上手く働かないらしい。もつとも、マークは赤ん坊だった頃からフェリシアにぞっこんで、生まれた翌日には濃厚なキスを交わすような関係だった所為か、夢で未

来に飛ばうと言う気も起きなかった。

性的に興奮して顔を赤らめる零歳児、ディープキスを返す一歳児、よがり泣きする二歳児、男の官能の壺を知り尽くした三歳児、夫を時折翻弄する四歳児……生まれてこの方フェリシアは、地球でもオルトでも、およそ他には有り得ない存在で有り続け、その妖しい魅力はマークを捕らえて放さなかった。完全に「堕ちた」と自覚しても、相手がこの類まれな幼女となると、聊かも不快ではない。彼女と共に存在する事が許された幸運を彼にしては珍しい事に、オルトの天地と神々に感謝したい気分になるだけだった。

「つい最近気が付いたんだけど、君の魂と僕の魂って、地球に生じた年は一緒なんだよな」

「まあ、最近まで気が付いていらっしやらなかったの？」

そう応じるフェリシアは、どうやらずっと前から意識していたらしい。

「映画の話とかヒット曲の話なんか、妙に噛み合っなって思っていたけれど、改めて西暦に換算してみても納得した。見た目は今のところ不釣り合いな状態だけど、もし、地球で……互いの大学時代に大阪が京都で遭遇していたら、どうだったかな？」

「ああ、日本に度々いらしたのですものね」

「うん。留学生との集いみたいなものに参加したら、出くわしていたかもね」

「私は平凡な容姿でしたから、あなたの気は惹けなかったでしょう」  
「僕だって、オタクなポテトボーイだったよ」

「でも、当時の私なんて、日本語がペラペラで飛び級をしてMITに進学したような方には、物足らなかつたでしょうね。せいぜい大学生にしては料理が出来るほうだった程度の話ですから」

「色々な料理の知識が有るのは、その頃の経験のおかげ？でも料理好きなら専門職への道をなぜ選ばなかったの？」

「動機が不純でしたから。舌の肥えた男性の気を惹くためだったんですよ」

「へえ、その男性ってどんな人だったの？」

「大学に着任なさったばかりの先生。新進気鋭の研究者でいらつしやいました。お弁当の差し入れ作戦、うまく行きましてね、先生に結婚を申し込まれるまでになりましたよ」

「あれ？でも、在学中に結婚したのは電機メーカーの技術者の又従兄またいさんじゃないの？」

「先生が……車同士の追突事故で、亡くなられたんです。ヨレヨレボロボロの私の状態に半ば付け込んで結婚の約束を取り付けたのは、その又従兄ですけどね」

「又従兄さんが、それだけ焦るぐらい君は魅力的だったんじゃない？」

「たまたま、一度手料理を食べさせたら、その気になったみたいで私の料理が気に入ったみたいでしたよ……ってずるいわ。私の話ばかり」

類まれなる幼女は五歳の癖に、妙にそそる身悶えをした。

マークもフェリシアも互いの意識を探ろうとすれば、相当深い所まで探る事は可能なのだ。だが、互いに魔力が強烈なもの同士なだけに、僅かでも探られた気配があるとすぐにそれを悟ってしまう気まずさが有る。深層心理の知られたくない部分にブロックをかけても「ブロックをかけた」と互いにすぐにわかってしまう。実に気まずい。

フェリシアは、かつて伊丹京子であった頃の家族への愛着の念を、銀の龍の穢れを浄化するために神域の泉に封印して沈めた。だが、

過去の事実関係はすべて記憶している。そして、それをマークに一切隠し立てしていない。それに対してマークは、フェリシアが銀の龍の魔力の暴発対策として薦めたとは言え、過去の恋愛感情や子供たちに対する感情をブロックしてフェリシアに隠しているのだ。だから「ずるい」と言われてしまうのも無理は無い。

「ごめんよ、フェリシア……君の事が好き過ぎて、つい度を越えた詮索までしたくなってしまっ。許しておくれ」

確かに前世の異性関係まで詮索するのは行き過ぎていた。だが、夫の声に聊かも偽りが無いのを読み取った幼い妻は、夫を許した。

「許して差し上げますわ……でも、もうすぐ私の両親の所にやってくる予定のダーリンの息子さんと、その御生母となられた方の件は、きちんとお話下さいませ」

「フェリシアにとって、愉快な話でも無いから、いつ切り出そうか困っていたのだよ。聞いてくれるの？」

「ええ。差し支え御座いませんでしたら」

この賢い妻は自分に宿る銀の龍の魔力の暴発が「嫉妬」を引き金に起こる事を良く承知している。こうして愛し合った床の中で、夫である自分が妻を愛していると言う事が疑いようの無い状況で話す方が、確かに良いのかもしれない……マークはフェリシアの言葉を、そう受け止めた。

「では、聞いておくれ。総ては金の龍が『龍の血脈をオルトに広めよ』と僕を煩くせつついた事から始まるんだ」

19 (前書き)

夫の過去の詮索、  
と言っただけでもなさそうです。

「ハリカもイゼルも僕が最初の男ではなかった事、知ってるよね」

エスコバル侯爵を継いだマークの第一子パウル、聖剣『ジラント』の主で通称はポールと言うが、その母がハリカだ。パウルを生んで間もなく亡くなっている。ハリカは元娼婦でブルサの色町で一番の売れっ娘であった頃にマークと出会っている。後にアルビに今も残る『朝霧楼』の女主人となった。

そしてキタイ国王の唯一の孫で王位継承権第一位のファティマ姫の生母イゼル王女は、マークから見て母方の従姉にあたるが、金の龍が言う所の「つまらぬ男」と結婚して死に別れ寡婦となった。紆余曲折の後にファティマを身ごもり、マークの正式の妻となったが出産後ほどなく息を引き取っている。

「金の龍が言うには、最初に胎内に僕の精を受けた女性は長命で『食うに困らない』らしいんだ。だが、別の男と契りを交わした後では、そうした効果は望めないらしい」

十代の半ばごろハリカ目当てに色町に通っていたマークは「行きがかり上止む終えず」あるいは「依頼されて」娼婦の「水揚げ」をした事が幾度か有ったそうだが、それらの新米娼婦はたちまち皆、売れっ娘になり、上客が付いたと言う。彼女たちは今は全員、堅気の豊かな家庭の主婦の座に納まり、子にも恵まれているらしい。

「その内妓楼の女将に『殿下、どうかこれも人助けと思ってお願いいたします』なんて言われちゃうようになってね、聊か困惑したよ」  
マークが十代の頃からすでに「キタイの摂政殿下は色好みで、大した通人だ」と言われていたのは、こうした事情も有ったの事らしい。

「つまりその、ダーリンがバージンを卒業させた方は皆さん例外無く健康で、暮らし向きも豊かなのですね？」

「そうだ。金の龍の力なのだろうな。もったも、子供を生んでくれた人にはもっと色々配慮したかね」

そこでマークの言葉は途切れた。

「あれは……僕がキタイ中の主な米の産地での作柄をチエックして回っていた時の事だ。チユクロワと言う町は長閑な穀倉地帯の真ん中の小さな町、まあ、田舎町だが、他の田舎町とは聊か違うのは代々の秘伝を守り伝えた小さな絨毯工房が幾つか存在する事だ。君の両親が引き取る事になっている七歳の息子ユクセルの生母イペッキは、そうした絨毯工房を守る両親の間に生まれた一人娘だった」

そして、また、言葉は途切れた。

「そうだな。僕の言葉はすべてを君に伝える力を持たない。何か大切な事を伝えきれないかもしれないし、君が真実を知るのに何の助けにもならない感情的な言葉を吐くかもしれない。だから……僕の脳裏に残る情景を読み取っておくれ。そうすれば今の君の力なら当時のイペッキの心情に至るまで、知る事が出来るのではないか」

皇帝はしどけない姿のまま、その豪華な寝台の上に仰向けに横たわった。

「フェリシア、おいで。僕の体の上に乗って出来うる限り、肌と肌をぴったりと合わせてくれ」

若い皇后は夫の求めに応じて、そのギリシャ彫刻の傑作を思わせ

る男らしい胸の上にわが身を投げかけた。夫の大きな手が黒と銀に彩られた髪をなで、小さな背中を摩るのに合わせて、夫の意識に自らの意識を深く同調させた。すると……見た事のない街が見え、そこに髪と目を魔法で褐色に変えキタイの騎士団の最も位の低い新入りの団員の制服を着た夫と、小柄な年の頃は十代前半といった髪も目も褐色の痩せた少女が一枚の見覚えが有る小ぶりの絨毯を前に、どこかの家の入り口の前で話をしているのが見えた。

その絨毯はフェリシアが特に気に入って、自らの化粧台の所に敷いているものだ。金と銀の籠をモチーフにしたという抽象的な雲のような柄で幾重にも取り囲んだ中に、赤い二輪のバラと二枚の緑の葉が、それだけやけに立体的で精密な感じで織り出されている。

「この絨毯は元々はイゼル王女様の御婚礼の御祝いとして献上する為に、市長さんがウチに注文されたのです。ウチは両親だけの手仕事だし、変なもののは作れない。期日を指定されてもその日には出来そうもないけれど、それでも構わないかと最初から断っていたんですけどね。……イゼル王女様が思いの他、すぐに亡くなられてしまつて……すると、市長さんはもう絨毯はいらないから、最初に渡した手付け金を返すように急に言つて来たんです。手付金で極上の糸や染料を買いましたから、家にはお金はもう無いんです。市長さんだつて、そのあたりの事情は御存知なのに、御自分が借金取りに追われる立場になったら、そんな事も言つておれなくなつたんでしょうね」

何か感情が激して来たらしく、そのやせっぽちの娘は、手を振り回して、言った。

「この絨毯は最高級品です。材料は極上ですし、およそ可能な限りの秘術を尽くして、両親が心をこめて織り上げました。これをどな

たかが適正な値段で買って下されば、すべてうまく行くはずなんです。私が一つも嘘を言っていないのは騎士様もお分かりになりますよね？」

「ああ、イペツキちゃんの言う通り、大した出来栄えだと思つよ。

ただ、余りに豪華すぎるのと、文様が特殊すぎる所為で普通の金持ちの所には売れないだろうが」

「そ、そうなんですか？」

「うん。この文様は金の龍と銀の龍にゆかりの深い人間でなければ、使いこなせない、特別な魔力を帯びた文様だ。昔の古文書や家具に時折この文様が残されているけれど、それは皆、開祖皇帝の血筋の方々が使つた物らしいからな」

「普通の人間が使うとどうなるのですか？」

「寿命を縮めるか、病になるかするらしい」

「……じゃあ、売れないですね、これ。どうしよう……」

今にも泣き出しそうな少女の痩せた肩に、夫はそつと手を置いて、こう言った。

「これを使いこなせる人の心当たりが有るから、僕が買おう。金貨五十枚でどうだい？こちらでの値段はわからないが、ブルサの御用商人の店ならそのぐらいの値段で出すだろう」

「手付金が金貨三枚です。両親の手間賃も入れて、金貨十枚ぐらいのものだと思いますけど、それだって私たちには大金です」

「病気になるれた御両親の療養費も必要だろう」

「長年の心労が祟つて、高い薬を飲ませてももう長くないとお医者様に言われています」

「じゃあ、なおの事、これは君に。金は邪魔にならないだろう？」

「でも、私のような身分も無い小娘が持つにしては、不自然な大金です。それに……」

「それに？」

「市長さんの息子さんを博打に誘い込んだゴロツキ連中に見つかったら、取り上げられて、それでおしまいです」

「……確かに、それは一理あるな」  
「これが、夫の意識が強く、このイペッキと言う女性に結びついた一瞬だった。」

二人の運命が交わった経緯は、おおよそ知る事が出来た……だが

……

「どうしたの、フェリシア」

「……イペッキさんの御両親は？」

「心労が祟って、二人とも亡くなった」

「そうですね……ひたむきで正直な方ですね、イペッキさん……私  
まだ、これ以上の事を見る勇気が有りません」

思いの他の心労を強いた事になったらしく、フェリシアの幼い体  
は全身汗みずくだ。

「まずは、風呂にでも入ろうか。後の事は、また、必要な時に考え  
よう。ね？」

「……ユクセルさん以外に、更にお二人、お子様がまた出ておいで  
になるような気もするのです」

「そりゃあ、本当か。男か女か？」

「おそらく、お二人とも男で、ユクセルさんとも私の父のクラウス  
とも縁が深そうな方々です」

この時、マークの脳裏には、かつてロザリアとクラウスがエスコ  
バル公爵邸の図書室で読み解いた古文書の一節が思い浮かんだ。

「ティグレ、ゲパルト、レオパルト」

「何だかそんな名前の戦車が地球に有りましたね」

「おそらく『パンテラ・レオ』にゆかりの深い聖剣の名前だ」

「まあ……確かに、そうですね！」

思いもかけぬ事の成り行きに、マークもフェリシアも驚いていた。フェリシアの父クラウス愛用の『パンテラ・レオ』が、ゆかりの深い三本の聖剣と、その使い手の三人を呼び寄せているのかもしれない。かった。

フェリシアの裸を見るたび、マークはその愛らしさに打たれるのだ。胸や下腹をかたくなに隠したりせず、いかにも自分を信じきった無防備な愛らしさの中に、将来の類まれな美質を見てとれる。花も羞じらう乙女の年頃になるまでには、匂うばかりの美しさとなるだろう。

服の上から見た感じではひたすら小さくかぼそい印象すら受ける体だが、裸になって見ると細っそりとしてはいるものの痩せてひ弱げな感じは少しもなく、しなやかで瑞々しい命に溢れている。肩の肉付きはまだ薄いが将来のまるやかな美しさを思わせ、今はひたすら平らな胸に貴重な宝石を思わせる小さな乳首と、抜けるように白い滑らかな腹、丸い臍、総てが愛らしい。そしてすんなりと形の良いい太腿には女の子らしい柔らかな肉が付き始めている。

「ずいぶんと汗をかいていたけれど、苦しかった？」

魔力の大きなマークの思念の深い所まで読み取るのは、フェリシアの魔力をもつてしても大変だった筈だ。だがしかし、フェリシアは赤い瞳を大きく見開いてマークの顔を見つめ、やがてふんわりとした笑みをたたえ、気遣いは無用だとも言うように、かぶりを横に振った。何か白い花が蕾を膨らませ花開いた、そんな感じのする微笑だとマークは思う。

フェリシアが「なつかしい」と言った鈴蘭の香りのバスソープを手の中で十分に泡立ててから、やさしく体を洗ってゆく。体を洗う事にかこつけて、体中を愛撫していると言えなくも無かったが、マークには幼い体を淫猥に騷る意図は全く無い。ただただ、大切な宝

物である真の番を慈しみ、愛でるだけの事なのだが、知らず知らずフェリシアが艶めいた喘ぎ声を上げてしまっている事も有る。

今だってそうだ。愛らしい吐息を耳にしてしまうと、つい、マークは本来の目的からまた外れてしまう。形の良い桜色にけぶる耳朶を舌で舐めるなどと言う、大人向けの技巧をつい発揮してしまい、また、フェリシアも悩ましげな声で応じるのだから、冷静でなどいられないのだ。膝の上でぷりぷりした丸い尻を蠢かせる幼女の体を、つい、愛でてみたくもなる。今日は自分もフェリシアも特に乱れ具合が激しいかもしれない。

「さ、あんよを少し広げて」

マークは殊更に甘い声で囁いた。

「ダーリンたら……また、お嬬りになるの？」

フェリシアは首すじまで上気させて、濡れた髪をさわさわと揺らめかせる。

「嬬るだなんて人聞きの悪い。僕はただ、フェリシアが可愛くてならないだけだよ」

その言葉と同時にフェリシアの尻の下に存在していたマークのものは、強烈な勢いで自己主張し始めた。するとその熱さに触発されて、フェリシアが悩ましい嬌声を上げた。

「ダーリン……だって……」

膝をこすりあわせ腰をひねるが、マークの手がそこを割ろうとすると、弱々しいあらがいを見せるだけで、簡単に指の潜入を受け入れてしまう。

「良い子だ。ここもきれいにした方が気持ちが良いだろう?」

「あ……あまり恥ずかしい事は……なさらないで」

マークの指の蠢きにこらえかねてフェリシアは細い悲鳴をあげる。

「どんな恥ずかしい事だつて、すっかり見せ合ってしまったのが夫婦と言つものだろう? フェリシア」

それからマークは昂ぶる気持ちのままに、深々と口を重ねながら、指の方はしっかりと悪戯を続けさせた。従順に与えられた唾液を飲み下し、陶然とした表情を浮かべた様子は並みの幼児とはやはり違い、大人並みの、いや、並の大人では太刀打ちできないほどの艶かしさだ。

「でも……そんなにごらんになつては、イヤ……」

桜色に色づいた幼い体を嘗め回すような視線で見つめる夫の無遠慮さに、幼い妻は抗議する。すねた表情をうかべて顔を背ける様も実に愛らしく、マークは有頂天になる。

「フェリシアも良くわかつているだろう? 本当にイヤなら、ここはこんな風にはならないって」

「でも、恥ずかしいんですもの」

フェリシアは自分の手で顔を覆った。

「恥ずかしいけれど、気持ちは良いのだろう?」

その問いに妻はコクリとうなずく。

「なら、僕に任せておくれ」

マークの愛撫は繊細さと執拗さを増した。

「ダーリン、ああ、ダーリン」

「愛しているよ、フェリシア」

再び、深いキスを交わす。その間もマークの指は一向に休む事をしない。それどころかきつく閉じられた後ろの蕾にまで愛撫を施し、フェリシアを狼狽させる。

「なになさっているの……気が変に、変になる……ああん……」  
とぎれとぎれに啜り泣きを漏らし、内股に痙攣のさざ波が走る。  
呼吸が目に見えて荒くなる。

マークは更に口と指とによる愛撫を施した。

「あ、あ……もう……」  
背が弓なりに浮き、踏んばっていた足がピンとつま先を反り返らせた。いまわの进りがマークの膝を濡らした。

夕食の時刻を知らせに来た女官の前で、幼い皇后は不機嫌だった。

「もう、お付き合い致しかねますわ」

つん！とあごをそらせて、皇帝の視線を外すその様子は、女官から見ても実に愛らしかった。

「ごめん。確かに度が過ぎたかな。でも、君だって……」

「エッチ！」

「え？」

「ダーリンの、エッチ！」

女官には耳慣れない単語では会ったが、その意味合いは十分推測が付いた。

「そもそも、僕は凄くエッチな男なんだよ。これでも結構自制しているのに……わかっておくれよ」

皇帝は完全に女官の存在を無視して、皇后を抱き上げ、キスをはじめた。

「ずるいですね、ダーリンは……こんな風になさると、私、何も言えなくなってしまう」

「僕は、ただただ、フェリシアを愛しているだけだよ……確かに、ちよつとばかりずるいけれど」

このままでは、一晩かかっても埒が明かないと見て取った女官は、咳払いをして、声を張り上げた。

「お夕食の支度が整いました」

皇帝は恨めしそうな視線を女官に向けたが、諦めた様な声で言った。

「続きは、食事後でね」

「ダーリン！」

皇帝の厳命で皇后の好物ばかり並べたその日の夕食は、厨房の者達への気遣いも有ってか、いつも以上に楽しげで、皇后の食も大いに進んだ。最後のデザートまですべて無事に終了し、先ほどの女官もほっとしたが……

「たくさん食べて、早く大きくなっておくれ」

「ダーリン……」

皇后を抱き上げた皇帝は、小さな腹をいとしげに撫でてこう言う

た。

「ぱんぱんになっちゃったフェリシアのお腹って、実にエロティックでそそるものがあるよ」

「もう……ダーリンのエッチ！」

幼い皇后は小さなこぶしで皇帝の体を打ったが、皇帝は一向にひるまず、皇后をしつかり抱き上げたまま寢所に向かった。

その後は、幾度か皇后の細く高い泣き声が漏れて来たが、「覗き見た」と咎められるのが落ちなので、翌朝、お呼びがかかるまで、誰も寢所には近づかなかった。

## 21 (前書き)

意地になった不機嫌な夫の性暴力的な行為の描写が有ります。

女官たちの詰め所は、噂話に花が咲いていた。噂の種はもっぱら、風変わりな皇帝夫婦の日常に関わるものが多かったが、彼女たちの理解を超える珍奇な現象が多いのも事実だった。

「陛下の外でお作りになった若君方が一度に御三方も、聖域侯のお邸においでになったようね」

「御三方は何方も七歳で、お名前はユクセル様・サイト様・オルハン様とおっしゃるはずよ」

「凄いわね。どこで情報仕入れたの？」

「私の母が聖域侯のお邸で、侯爵御夫妻のお側にお仕えしてるの。近いうちに御目見えの儀式があつて、その時には御三方は揃つて子爵の位を賜るらしいわ」

いわば内緒の愛人の子供を纏めて三人も正妻の実家に預けると言うやり方に、皆驚いたものだが……

「公明正大・清廉潔白を絵に描いたような聖域侯・クラウド様と、お優しく清らかで賢明な奥方様の所でなら、御三方も肩身が狭い辛い思いをされる事も無いわよね、きつと」

調理師学校をはじめとして各種の学校を設立運営し、教育者としても名高いクラウドス・ロザリア夫妻なら子供らを委ねても安心だと、皇帝側と子供らの生母たちの双方から信頼されていたので有った。

「……と言う事は、皇后陛下はその事は御了解なさっている、と言う事なのよね？」

「なんでも、お三人の若君方はそれぞれが聖剣の主となられる方で、

その三本の剣が聖域侯が御愛用の『パンテラ・レオ』と縁が深い、相性が良いものなのですよって」

「じゃあ、なおの事、皇后陛下は御実家の事ですよ、御事情を良くお分りなのよね……だったらなぜ……」

女官たちは今朝の皇后の、酷く泣きはらした顔を思い浮かべていた。

「今朝も、あのお綺麗な御目が泣き腫らされた感じで、お声がずいぶんかすれていたわ」

「さつき行きあつた近衛にいる弟が言っていたけれど、昨夜は御寝所の辺りから長い間、皇后陛下の嘸り泣いて居られる様なお声や、時折叫ばれるようなお声が聞こえたらしいわ」

「十日ばかり前は、今朝より酷かったわよ。あの時は完全にお声が出なかつたから……」

「陛下が折檻なさった、って言う見方をする人もいるけれど、そうなのかしら？」

「あのお小さいお体に、陛下がそんなむごい事をなさるかしら？ それになぜ、折檻なさるの？理由は？」

「三人の若君方の御生母達の事で、何か陛下のお怒りを買ったからではないか、と言う見方をする人もいるわね」

「それにしても、皇后陛下を抱きしめられたまま、慌てふためいておられたような今朝の陛下の御様子が、説明が付かないと私は思っけれど……」

「そうよねえ。『フェリシア、おおフェリシア、ごめんよ』と幾度も仰せだったわ。陛下御自ら、皇后陛下に御朝食を食べさせてあげておられたわ。失礼ながら、私、親鳥が必死になつて雛にえさをやる様子を思い浮かべたもの。皇后陛下は御機嫌斜めな御様子ではあつたけれど……その、何というか、甘々い雰囲気だったわ」

すると、それまで話を黙って聞いていた料理番の老女が笑い出した。

「そんなの、原因ははっきりしてるじゃないですか」

「え？え？なに？」

「失礼ながら皆様方だって御亭主持ちでいらっしやるなら、新婚の頃は似たような事は御座いませんでしたか？」

「ああ！成程ね、アハハ、私酷い勘違いをしていたかも」

「ナ、ナニ？」

「だから……陛下が余りにも……」

「余りにも、皇后陛下を……度を越して……」

「可愛がりすぎてしまわれたのね」

「そう、お聞でね」

「やったあ……じゃあ、近衛にいる私の弟ったら」

「陛下がお知りになったら、お怒りになるわよ、きつと」

マークはフェリシアを抱きしめてベッドに居た。二人で軽い昼食を取った後は午睡の時間、と言う事になっているのだ。幼いフェリシアの体力を考慮しての日程だが、先ほどの女官たちが噂した様に『可愛がりすぎて』しまつて、かえつて体力を消耗させる事がこの所多かつた。

「僕は親鳥か。それにそもそも主夫婦おふごの閨の様子を伺うような近衛兵など、ろくなものではない」

マークは気を悪くし、かなり本気で怒っていた。女官達の様に魔法も使えず思念を垂れ流している場合、特に探る気は無くても、会話や考えている事がマークとフェリシアには丸わかりなのだ。

「昨夜は、悪かったね……」

「本当はそれほど悪いとも、考えていらっしやらないくせに……」  
もともと少しマークは不機嫌だった所為か、売り言葉に買い言葉  
と言う聊か大人気ない気分になってしまふ。

「……じゃあ、フェリシアが可愛いらしすぎるのがいけない。感じ  
やす過ぎて、こうして可愛がるとすぐに色っぽくて妖しい喘ぎ声を  
上げて、僕を煽る様に身悶えをするからいけない……」  
「それでも言えば  
良いの？ん？」

すっかり、前がはだけ剥き出しになってしまっている幼い体に明  
らかな意図を持つて夫は愛撫を施し始めた。

「意地悪……っああ」

「ほら、その声だよ。僕だって普通の五歳児にこんな事をしないさ。  
意地悪とか何とか言うくせに、乳首がもうこんなに立ってる」

夫の声は意地の悪い笑いを含んでいる。真つ平な胸を大きな手で  
包む様にしていたかと思うと、勢いをつけて乳首をピン！と弾いた。  
「ひいっ」

「クククツ…… 本当に、感じやすいな。僕の事をエッチって言うけ  
れど、お互い様さ。違うか？フェリシア」

「そ、それは……」

「違うって言うの？違わないだろう？なら、こうしたらどうなんだ  
い？」

マークは苛立った声を上げたかと思うと、フェリシアの足首をつ  
かみグイッと膝を腹のほうに曲げた。

「ひ、酷い！こんなの幼児虐待！」

「地球上の先進国なら、どこでも牢屋行きだろうが……生憎、ここ  
は地球じゃない。しかも僕は君の夫だ」

頭を振りたてて、幼い妻が喚き立てるのも構わず、意地になった  
夫は折り曲げさせた下肢を強引に左右にジワジワと開いて行き、つ  
いに完全にMの字に開ききった。

「すっかりぬれてるじゃないか。実に刺激的な眺めだ。幼児ポルノ

の愛好者なら泣いて喜びそうだな」

「いやっ！」

「いやだって言うくせに、この五歳児は反応が大人並みなんだからな。本当にイヤなら、ここは干からびてるもんだぞ。そんな事は知ってるだろうっ？」

「ゆ、許して、お願い、手を離して」

「フェリシアだって、エッチなんだって、自分で認めたら許してあげよう」

すると……フェリシアは声を放って泣いた。あまりもの激しさに、廊下に行く女官たちが思わずそば耳を立てたぐらいだ。その顔を見て夫は自分が泣き落としにかけられたと感じながらも、結局は手を離してしまった。

「ずるいな、フェリシアは」

幼い妻は、幼い者の特権だと言わんばかりの勢いで、夫の胸の中に体をすっきり丸め込むようにして押し付けた。そしてまだ、鼻をぐすんぐすんと言わせて、しゃくりあげながらも、小さな声で囁いた。

「ごめんなさい……」

ひとしきり事が過ぎてしまうと、一体自分は何をそれほど意地になつていたのだろうか、マークは自分であきれてしまった。性的な事柄は女の身、ましてや五歳の体であれば自分で認めがたい事も有るだろうに……

「ごめんよ、フェリシア、さっきは僕が余りにも大人気なかったな」  
「……良いの。だって、ダーリンのおっしゃった事は、本当なもの」

それから二人は、仲直りのキスをして、本当に穏やかな午睡の間を迎えたのだった。

本当に、いつ見ても愛らしくていらっしやる。皇帝陛下がそれこそ嘗める様にして、連日可愛がっておられるのも無理は無いのかも知れないとラウラは思った。それにしてもオルト随一の色男とか、色事師とか言われていた陛下が、今はこの、小さい皇后陛下一筋でいらっしやるのはどうやら本当のようで、一体全体どのようにして「骨抜き」になさったものか、実に不思議でたまらない。

漆黒の中に沈み込むような感じで、銀の色合いが溶け込んだ不可思議な色合いの美しいお髪からは、いつも心引かれる香りがほのかにする。それを、お好みにあわせて左右ふた筋の三つ編みに仕上げ、真っ白いリボンを結ばせて頂く。日によっては本物の花を結い上げた髪にお飾りする事もあるが……。極上の練り絹よりも最高級の白磁よりも白くきめ細やかな肌に、宝石のような赤い瞳と形の良い鼻花びらのような唇、確かに陛下が仰る「食べてしまいたいほど可愛い」と言う言葉がわかるような気がする。白粉はめったにお使いにならず、最高級品の紅を、ほんの僅かだけ唇にお乗せする。最後に鈴蘭の香りのコロンをほんの少しだけ、吹き付ける。

今日のドレスは白地に薄桃色のレースを飾った、華やかだけど愛らしいものだ。何をお召しになっても似合う方だが、皇帝陛下のお選びになったものをなるべくお召しになると決めておられる。このドレスもつい最近、皇帝陛下が、腕利きの職人に作らせたものだ。見る目の有るものが見れば、さりげない中に最高の技術が凝らされた逸品である事がわかるだろう。……もっとも陛下は「フェリシアに似合いそうだから作らせた」だけのようだが……

「仕上がりましてございます」

高貴な五歳児は、目の前の姿見で幾つかの箇所を確かめてから、にっこりした。

「いつもながら、良い仕事ぶりですね。ラウラ」

「ありがとうございます」

「ラウラが私の事を愛らしいと感じてくれたのは結構ですが……陛下がおいでの中で余り下世話な事を考えてはなりません。あなた達の考えている事は、陛下にも私にも丸わかりなのですから。そのような事は、せいぜい実家で妹と寛ぐ時の話のねた程度に留めて置きなさい。さすがに遠いハランに休暇で戻っている時なら、あなたが何を考え噂しようと、わざわざ探りにかける事も無いでしょうから」

「も、申し訳ございません」

この所、皇帝陛下が不機嫌でいらっしやるのは、自分達女官のせいだったのだろうか？とラウラは思った。

「あさってから、家族皆でハランに向かうのでしょ？今日にでも調理場で菓子を担当しているザカリアスの所で缶につめたクッキーを貰って行きなさい。今年里帰りをする人皆に渡しているものです。故郷への手土産にするもよし、家族で食べるもよし……最近は色々焼き菓子が出来ては来たようだけど、やはりまだ、この宮中のクッキーよりは味が落ちるらしいから、皆喜ぶでしょう」

あさってから、夏の休暇を頂いて、同じハラン出身で宮殿の経理を担当する役人の夫と息子を連れて、久しぶりの里帰りをする事になっている。自分の不在中は、入れ違いに休暇を終えて戻って来る別の女官がお役目を果たすのだ。

それにしても……ザカリアスという男は大柄で無愛想だから、話した事も無いが……自分のような女官と言っても軽い身分の者が行

って、果たしてそんなクツキーを渡してくれるだろうか？

「大丈夫ですよ、ラウラ。ザカリアスとはつつきは悪いですが、至って正直者で、ああ見えてなかなか親切です。それにザカリアスの亡き両親はハランの人間です。そうそう、お前の妹の嫁ぎ先とはごく近い親戚同士のはず」

「まあ、さようでございますか」

「妹の嫁ぎ先の事を話題にすれば、更にもう一缶、もらえるかもしれませんね。あ、すぐに陛下がおいでになります。そろそろお行きなさい」

ラウラが退出してすぐ、皇帝がやって来た。

「フェリシア……うん。似合うねそのドレス。僕は君に骨抜きにされてメロメロだけど……あの女官達は半分もわかつちやいないな……なのに、君と来たら……」

「ザカリアスが正直で親切なのは本当でしょうか？ サイトさんの伯父にあたる人だ……などと説明しない方が宜しいのでしょうか？」

「まあな。そのドレスのレースはザカリアスの妹でサイトの生母・サルマーの作品だと言う事も承知なのだろう？」

「ええ。作った方の真心とダーリンのお気持ちの深さの所為か、このドレスは心地よい波動が感じられます」

「丸々全部、わかちやつてるんだよな。やっぱり、僕は君に適わない気がする」

先ごろ子爵の位を賜ったサイトは、皇帝の二十人の庶子の一人だ。生母・サルマーはキタイ北部のハランの貧しい農家の娘だった。レース編みの秘術を父方の祖母から教えられていたが、マークと出会うまで、それを生かすすべもなく、飢え死に寸前だったのだ。当時はハランの領主の国の法を無視した勝手な徴税が原因で、サルマー

のような境遇の者は珍しくなかった。

今ハランは、暫定的に皇帝の直轄領となっており、まだ表向きには内密ではあるが、将来的にはサイトの所領となる事が決まっている。サルマーはハランで幼馴染の男と結婚し、今は豊かな農家の主婦として、そしてレース編みの名手として、それなりに充実した暮らしを送っているようだ。

「僕の意識を探らなくても、そこまでわかってしまうのか」

あの、イペツキの件以降、ああした事はただの一度も行っていない。しかもあれから一年も経っていないのだ。

「だって……私、ダーリンを愛してますから、お好みのものを見つけると、なぜお好きなのか、あれこれ考えますの。すると、自然見えてきたり、感じられたり、噂が耳に入ったり、してしまうのですわ」

「……二十人分、全部……参ったな、これは」

フェリシアの意識を探って、改めてマークはその情報の正確さに驚いた。しかも、フェリシアは、二十人の女達の周囲の人間関係と、自分の身の回りの人間がどのように絡み合っているのかも極めて正確に把握している。中には、マークが見落としていた情報もあった。

「焼餅を焼かない、お利口のフェリシアは、有る意味最強だな。僕は永遠に君に頭が上がらない気がする」

サルマーは家庭を持ってから様々なハーブを庭に育てている。その中には、地球のバナラそっくりの風味の物があった。

「私、自分が育てましたハーブの苗と、そのハーブの種を交換していただきましたの。そのハーブをこちらの花園で育てたおかげで、カフェで出すプリンの風味がぐんと良くなりましたのよ」

「何だ、直接会ってるのか」

「あちら様は、ごましゃくれた変な女の子が来た、ぐらいにお感じだったでしょうけど、親切に対応して下さいました。おいしいハーブティーを頂きましたし」

ぬけぬけと言つ五歳児の横顔を見て、皇帝は思わずため息をついた。

23 (前書き)

愛が深まる話、です。

皇帝はその夜も幼い皇后と「気を通わせて」いた。それぞれが金の籠・銀の籠の器であるせいか、何かの拍子に二つの籠が激しく絡み合っているヴィジョンが脳裏によぎる。かつて金の籠は「オルトを救う秘儀」について、何かと言うとうるさく干渉してきたものだが、近頃はえらく静かだ。何も言って来ない。

「龍たちは満足しているのかな？」

「そうなのではないかと、思いますけれど……ダーリンも私も互いの力が強まったようですし……」

「確かに、オルトの内ならどこへだって、簡単にワープできるし、僕たちお互い以外の人間の思念はすぐに読み取れてしまうしね。近頃は君の両親の思念ですら読めるようになってしまった。なんだか人外の化け物めいてると我ながら思うよ」

「ならば私も化け物の片割れですわね」

「ずいぶんと、愛らしくて魅力的な化け物だけどね」

二人はすでに入浴した甲斐も無いほど、汗にまみれている。

「僕は元来ペドフィルじゃあ無いはずだったんだが、今じゃ完全にいかれてる」

連日自分が幼い妻に対して行っている行為は、生まれた国でなら完全な性的犯罪行為である事が、時々心苦しく重荷に感じる。犯罪行為には縁もゆかりも無かった人間としては、当然の反応かも知れない。だが、日によっては、この幼女が正式の妻であり、地球では禁断の行為であった事が許されているという事実が、かえって気を高ぶらせる引き金になったりもする。人は、もはや自分が人といえるか怪しいが、いつまでたっても、生まれ育った国で出来上がった

思考や道德観念から開放されるのは無理なのだと、マークは思う。

「別に私以外の幼児をどうこうなさったり、しないじゃありませんか。むしろダーリンは年上のしつとりした方がお好きなのだと思いますわ。違いますかしら？」

「僕は両親に早くに死に別れて、父方の祖母の手ひとつで育てられたから、しつかりして強い、さほど若くない女性に親近感を持つ傾向が有るのは確かだ」

その、祖母、グランマが亡くなった以降、友人・知人は決して少ない方では無かったが、特別に強い愛着を持つ人間はもはや地球上には存在しないのだった。

「思春期に飛び級をして、自分とはかなり年齢の違う人間を同級生として大学で学んだ所為か、刺激を受けたり、知識を与えられたりする出会いは多かったが、共にいて心から寛げる相手とは出会えなかったよ」

「私は、ダーリンが寛ぐお役に立っておりますかしら？」

「もちろんさ。互いに掛け値なしの本音で付き合うのだから、僕らは互いに寛げないと共に暮らせない、そうだろう？その意味で、やっぱり君はすごい人なんだと思う。時々君には本気で腹が立つし、意地悪もしてしまうけれど、それは僕が君にだけは本音をさらけ出せるからなんだろうな」

「ダーリンのお気持ちや、欲求が分からない訳ではないんですよ。男盛りの健康なお体のダーリンに、ずいぶんと龍たちも酷い仕打ちをしようと思っっています。でも、この幼い体では、どうにもして差し上げられない事も有るんですもの……そんな事、本当は、十分にお分かりですわよね。ですから、時折、ひねくれてしまわれるのですよう？」

「それだけでもないよ。君は本当はよく分かっている、わざと僕に

我慢を強いる事があるじゃないか」

この見た目だけが幼い妻は、実地的確に夫である自分を分析して居ると思う。自分がいらだつていても不機嫌でも、その理由が実にたわいない幼稚なもので有ると見当がつくと、わざと見放して、我慢を強いるのは確かだ。

「あら、そんなつもりは毛頭ありませんわ。だって、私は女ですから。男の方の欲求が本当に理解できているかどうか、怪しいものです。経験則で推しはかっているだけの事ですよ」

「経験則ねえ……なんか、ずるくかわされたって気分だ」

フェリシアは、マークの体にぴったり寄り添うと、その愛らしい小さな手で夫の顔を撫で、それから唇にキスをした。こうされるとマークはもう、何も言えなくなってしまふのを百も承知の上での事だと思えない。ひとしきり互いの唾液をやり取りするようなキスの応酬が終わると、マークの気分が和らぐのは事実だ。

「やっぱり、君はずるい、フェリシア」

「なぜ？」

「僕ばかりが焼け付くように、君が欲しいと感じていて、僕はその情動に耐えているんだ」

「あら、それはダーリンの誤解です」

「どこが？」

「私だって、ダーリンが欲しいのです。でも、できる事が余りに限られてますもの……」

はしたないと、あきれてしまわれるかしら……と幼い妻は呟くと、その小さな手と口を使って思いもかけないほど大胆なまねをしてのけて、マークの感覚を翻弄した。

「……君が、本気で僕を欲しがっているって、納得できたよ……」

フェリシアは想いは有っても果たせずに居るだけなのだ。夫を納得させるために、相当体には無理をさせたようだった。まるで水を浴びたような汗みずくの状態になり、息は荒い。そして、しばらく話す事も出来ないと言った風情だ。そんな妻を壊れ物を扱うように大切そうに抱き上げて、夫は体を清めに浴室に向かった。

それから、しばらくしたある日の午後、女官の控え室は相変わらずにぎやかだった。

「ねえ、近頃、お二人の御様子が変わったわよね」

「そうね。皇帝陛下も皇后陛下も何もおっしやらないで、お体をぴつたりと寄せ合っておられる時間が長いような気がするわ」

「特に皇帝陛下の皇后陛下を見つめておられる眼差しの感じが、何と言つか情熱的と言つか、私なら眩暈がしてしまいそうな、激しい感じじゃない？」

「その皇后陛下の見返される時の御様子も、負けず劣らず情熱的な感じよ。何と言つか、本当に深く愛し合っておられるのねえ」

「お庭の花園の辺りで、遠くから偶然お見かけしたけれど、それはそれは情熱的に接吻を繰り返しておられたわ」

「お美しいお二人の事だから、さぞかし素敵だったでしょうね？」

「……ああっ、思い出すだけで、私、胸の奥がなんか、きゅうつうつととする感じ」

「きゅうつうつとね。分かったけれど、あんまり噂はしないほうが良いんじゃない？」

「なんで？」

「だって、私たちの馬鹿話、全部お二人には筒抜けらしいもの」

「もう慣れておいでで、道端の虫か何かか鳴いている程度にしか、思っておられないんじゃない？」

「それもそうか」

「そうよ」

女官たちが噂話で、盛り上がっていたころ、噂の二人はその花園で情熱的な接吻を繰り返していた。

## 24 (前書き)

本来は微妙な関係でも、当事者同士の人柄によっては、ずいぶん気分の良い付き合いになるかもしれません

「さあ来い！ オルハン、遠慮は無用だっ」  
「つとうーっ！ いやあーっ！ えいっ」

皇帝自身を除けば、おそらくオルト随一だと言う剣豪の帝国騎士団団長・聖域侯クラウスと、昨年叙爵されたばかりのギルネ子爵オルハンが朝から修練場で、熱心に鍛錬に励んでいる。特にオルハンのわずか八歳という年齢を思えば、十度の打ち込みの内二度は弾き、一度は相手に肉薄した腕前は見事だと言える。

興味深い事に、クラウスの聖剣『パンテラ・レオ』とオルハンの聖剣『レオパルト』が打ち合うと、不思議な獣の音がするのだった。他にチユクロワ子爵ユクセルの『ティグレ』とハラン子爵サイトの『ゲパルト』相手でも、不思議な音がするらしいが、腕前はオルハンが三人の子爵の中では一番優れている。

「すばらしい！」 「見事なものだ」

様子を見ていた連中から、賞賛の音が上がる。するとそこへ、女の子の声があった。

「父上、おはようございます」

今年六歳になった皇后フェリシアであった。馬にでも乗るようなズボンを穿き、気楽ななりをしている。

「先日、御依頼の有った三子爵の旗が出来ました。それぞれの聖剣にゆかりの深い猛獣の姿を縫い取りました。陛下にも御覧頂いて、御納得頂きましたの。どうぞ」

「おお、左様ですか」

親子でも律儀なクラウドスは臣下として敬語で接する。

「いやあ、勇猛な獣の姿が、見事ですな。オルハン、これはお前の分だ。どうだ？」

「はい。すばらしいです。ありがとうございます」

「皇后陛下、ありがとうございます」

クラウドスもきっちり頭を下げる。

「父上、このような場所まで、堅苦しくなさないで下さいませ。なんだか気詰まりでございます」

オルハンは昨年『御目見えの儀』で初めてフェリシアの姿を見て以来、久しぶりに接する幼い貴人に、どのように対すれば良いのか戸惑っていた。この方は幼いがいわば自分にとっては母に当たる方だ。やはり皇后陛下とお呼びすべきだろう……それにしても、愛らしい澆刺とした印象の方だ。侯爵夫人に良く似ていらっしやるが、もっと目の力が強くていらっしやる……それにしても、すさまじい神気だと、圧倒されていた。

「ならば、フェリシア、あなたの言わば息子にあたるこのオルハンに、一手御教授頂きたい」

「父上の仰せでしたら、そのように致しましょう」

「オルハン、一手、御相手せよ」

師匠で養い親の侯爵に言われれば、立ち合わないわけにもいかない。言わば愛人の子である自分が正妻とこんな形で対峙して良いものか、いささか戸惑ったが……

「オルハン、雑念は払いのけよ」

「このような時は剣の事だけお考えになるべきです」

二人にこのように言われて、オルハンは迷いを吹き払って剣を持つ。

オルハンは決死の覚悟で打ち込んだが、全てひらりとかわされた。そして、たった一打打ち込まれたものが、さほどの力とも思えないのに、足がよろけ倒れてしまった。

「オルハンさんは、なまじ神気が読めるので、逆に戸惑ってしまわれたようですね」

「いや、まったく、歯が立ちませんでした。恐れ入ります」

自分は天才的だとか、散々これまで褒められて来たが、ここまで歯が立たない相手は初めてだ。ひよっとして侯爵様より強くていらっしやるのか？……まさか……

「神気でも呼吸でも、変化に気をつけるのだ、オルハン。皇后陛下はわが娘としてオルトに降臨されたが、私にとっては実の親よりも親の如き存在でいらっしやる」

侯爵はオルハンに自分たち夫婦と異界の魂との関係、そして皇后との関係について教え、そして、「何事も、見た目だけ、うわべだけではわからないものだ」と話を結んだ。

「さて、我々の打ち合いを見よ、オルハン」

侯爵は幼い娘に対して、いささかも手加減せず対峙した。

「持久戦になれば、私が圧倒的に不利ではないですか……」

幼い皇后の声は笑いを含んでいる。

「陛下に叱られてしまいますからな、一発勝負と参りますぞ」

皇后はうなづいた、と思ったら絶妙なタイミングで早くも侯爵の間合いに入り込み、『ヴィーヴル』の切っ先はピタリと侯爵の喉もとに当てられていた。侯爵の構えた『パンテラ・レオ』は振りかぶって背後から刺す形になっていたが、明らかに皇后に遅れをとった形だ。

「参りました」

「お粗末でございました」

見ていた皆は余りの早業に、驚嘆した。

「皇后陛下は幼いお姿だが、大層な剣豪でいらっしやる」と言う以前からの噂が、目の前で証明された。

フェリシアはオルハンに「剣術に許さぬ所三つ在り」と言う地球の剣術での有名な言葉を引き合いに出して攻撃のチャンスについて語った。

「相手が動作を起こす瞬間、相手が自分の攻撃を受けた瞬間、相手の動きが停滞した瞬間、この三つは絶対に見逃してはいけなさとされます」

その言葉にオルハンは大いに頷いた。

「いつも私はこの方に、動作を起こす瞬間を読まれてしまうのだよ。そう言う侯爵は負けていながら、どこかうれしそうだった。」

「更に一眼二足三胆四力いちがんにそくさんたんしりきと言う言葉も有ります。剣の修行で何よりも大切なのは、相手の思考動作を見破る眼力であり洞察力です。その意味で、陛下も私も龍の力で自然人の思考が読めてしまいますから、最初から大いに得をしております。ちょっとインチキですよ。フェリシアもにこやかに微笑んでいる。

「インチキとは仰せですが、御自分の力を適切に使いこなされるのは、やはり大変な事だと感じます」

「オルハン、お前の言う事は実にもっともだ」

「ええ、本当に」

侯爵と皇后が揃って自分の言葉を即座に認めてくれて、オルハンはうれしかった。

翌朝、フェリシアはマークにこう言われた。

「何だか昨日は騎士団の修練場で、楽しい事を行ったみたいじゃないか」

「オルハンさんと、親しくお話しする機会を得ました。八歳にしてあの胆力と落ち着きぶり、そして何より正直でひたむきでいらつしやるのが素晴らしいですね」

「息子を褒めてくれてありがとう、と言うべきかな？フツ、自分こそトンでもない六歳児なんだからさ、年の事は言えないだろう？」  
「そうですね。良い中年でいらつしやるはずなのに、いつまでたっても若々しいダーリンも年なんて関係無いですものね」

「でも、君には早く大きくなって欲しいと願う反面、今みたいな愛らしい姿も実に貴重だなと惜しむ気持ちがあるよ。特にこうやって抱きしめてみると年々変化して行くのが実感できてね……そうだね、こうやって膝の上に乗せてキス出来る時期は、もうわずかかも知れないな」

食事の時と公務の時以外は、フェリシアの座る位置はマークの膝の上というのが、もうずっと当たり前になっている。今もこうして膝に乗せられて、髪を撫でられながら話をしているのだ。

「大人になった時に、立ったままでキスしやすい位の背の高さだと嬉しいんですけど」

「ああ、確かにそのぐらいが一番良いな」  
立ったままで、良い感じにフェリシアにキスが出来るようになるのも、案外もうすぐかもしれないと言う予感がマークの中で揺るぎないものとなった。

「でも、今、この瞬間の君を僕はしっかりと記憶していたい」  
どこか狂おしいような切ないような思いに囚われて、マークは幼い妻をしっかりと抱きしめた。



25 (前書き)

ブリッダーシーンから、ぷち駆け落ちな話です。

「ダーリン、最近、分かった事があるの」

この妻がこういう砕けた言い方をするのは、周りに誰も居ないごくプライベートな場面だけだ。六歳だが近頃はますます色っぽく煽情的で、以前のように余裕を持って肉体を鑑賞出来なくなって来た、と皇帝は思う。

「なんだいハニー」

彼女と触れ合って居ると、一番リラックスできる。それは間違いない事実なのだが、時に一番忍耐を強いられる、それも呻き声を上げたくなるほど凄まじい難行苦行を強いられるのも事実だ。

「ダーリンの体って、唇以外はどこもかしこも固くて、引き締まった感じがするのね」

「ハニー！」

これはひどい。マークが一晩中唇が腫れ上がるほどの幼い妻とキスを続けたとしても、湧き上がる欲望を鎮められるものではない事を十二分に承知して居るくせに、そんな風に言うのだ。

「ダーリン、っあっ、いやあん、ど、どうしたの？」

頭に来たマークは幼い体を撚りはじめる。感じる部分は幼女であっても基本的に成人女性と大差無いようだ。こんな時は幼児に不似合いな嬌声をあげ、睨り泣き、意識を飛ばすまで責め苛まないと気がすまない。

「ハニー、君、わかっていて言っているだろう。僕の体の中で一番固くなった部分にその、まるまっちいムチムチした可愛い尻を乗っけてるんだから」

「……っああん、そ、そんな、そんなつもりなかったの」

「そんなつもり、って、どんなつもりさ。最近、こっやって弄り倒されるのを悦んでいるだろうが、え？」

「よ、よろこんでるわっ！」

「チビの癖に破廉恥だなんて、けしからんぞ」

「んんんっ、な、何がいけないの！私は、あつ、あなたの妻で、あつ、あなたを愛してるもの、下さるつもりものは全部、く、下さる予定じゃないものでも全部、独り占めしたい、ぜんっぶほしいっ」

その言葉はマークの中の、どこか乾ききっていた部分を潤すと同時に、身体的な欲求をますます増大させた。

「僕をこれ以上煽るな、チビっ！大概にしないと突っ込むぞ！」

こんな乱暴な言葉をマークは貴賤を問わず、いまだかつていかなる女にも投げつけた事は無かった。

「そうだって、良いわっ、どうせ私たちは不死なのでしょ？龍達は何か言った？」

その言葉で、マークは冷静さを取り戻した。

「金の龍が珍しく昨日出てきた」

「なんて？」

「昔の馬鹿な皇帝と同じ事を僕がやった場合、フェリシアは死なないけれど、胎児の段階からやり直しだつてさ。これまでの六年半の我慢が、水の泡って事だ。そうなれば君の両親からの信頼も友情も大いに損なわれるだろう。それでも僕は死ねないし、皇帝で居なくちやいけないらしい」

「まあ……それは……大変ねえ」

「だから、突っ込むに突っ込めない、そう言うわけだ」  
「ダーリン、可愛そう」

「だろう？本当に大変だよ。だから、煽ってくれるな」

「今まで頑張ったダーリンに、御褒美」

マークの体の上でフェリシアは百八十度の方向転換をした。

「ほら、あの『幼女玉房指要』に有った通りにするだけですから…

…リラックスなさってね」

軽く、キスされた事は有るが…

マークはフェリシアが言わんとした問題の古文書の該当部分を思い返していた。

「玉茎を含む事あたわずと言えども、その先を舌にて撫で、更に強大とならば、舌にて玉眼を押さえ、先を幾度も締めゆるめ、片指にて種袋を揉み伸ばす。子種出でなば、直ちに止め、強く玉茎を握り、片指にて下腹より玉茎根元に、上下に搔かせしめ…」

「フェリシア、ああ、フェリシア」

マークはたまらなくなつて、目の前で蠢いている真っ白いまるやかな尻を愛撫した。小さな尻を揺らしながら、幼い妻はまるで飢えた子猫か何かのように、一心に舌と手を使って励んでいる。そして、一応の目的は果たせたようではあったのだが…

「リラックスなんて、無理だ」

「あ、ごめんなさい、うまく出来なくて」

「いや、テクニクは問題ないさ。ぜんぜん違うんだ。違うんだよ、フェリシア…僕は、どうやら自分で思っていたよりずっと、君を愛しているらしい」

マークはどうしても妻にキスをしたくなって、体の向きを元に戻

させた。

「あ、あの、うがいを……」

「いや、僕は気にしない」

キスをして、抱き合っていると、宮中の衛兵や夜勤の女官らの、それぞれの垂れ流しの無遠慮な意識が流れ込んでくる。風変わりな皇帝夫婦の夜の生活に対しての下世話な興味は、ひとつひとつはたわいも無い笑ってしまうような下らないものばかりだが……せつかくの気分が大いにそがれるのも事実だ。

結界を張る事も出来るが、それでは完全にはリラックスは出来ない。微妙な緊張が残るからだ。

「ねえ。このまま、どこかに行ってしまうおっ」

「どこへ？」

「誰にも見つからない所さ。田舎の禁足地の綺麗な滝が有る場所なんか、どう？涼しくて、良くないか？」

「朝には、戻るですよね」

「うん。君と駆け落ちしたいけれど、そうも行かないからね」

「お任せします」

「じゃあ、行くよ」

外は満月で、空は晴れていた。宮中でも夏の昼間は随分と暑いが、夫婦揃って裸同然のなりでワープして来たこの場所は、山間の清らかな小さい滝の前で涼しい。プール状に水が溜まっている場所があり、そこに二人で体を沈めると、これまでの火照りが綺麗に引いて行く。

「ここはどこなのです？」

「意識を一度上空に向けて御覧、ちょうど航空機で下界を見る感じ

のヴィジョンが見えて来る筈だ。地球と違って夜間の照明がろくすつぽ無いが、それでも山と川・海の感じからおおよその位置関係は読めるんじゃないか？」

マークの言うようにしてから、再び今の位置に意識を戻すとフェリシアにも現在地がわかった。

「ソリモス山の双龍のための禁足地ですね？」

「うん。由来は銀の龍の過去の暴発でさっぱりわからなくなっているが、古来からここは龍たちに奉げられた場所で、この金銀の滝の水は霊水とされている。年に一度の祭りのときだけ、神殿の許しを得たものが水を汲みに来るらしい。結構、この決まりは律儀に守られてるようだ。もっともこの場所自体、かなり人里から離れてるけどな」

「この霊水は、何に効くと言われてるんです？」

「不妊だな。あと婦人病全般。そうそう、男は精力増強だ」

「まあ。じゃあ、今の私達にはあまり用が無いじゃないですか」

「他には、そこに生ってる野性のスモモが旨いんだ。この前一人で来て、食って確かめた。まだ、結構有るはずだよ。それから、このキイチゴは特別に甘い。ほら……」

マークが妻の口に放り込んだキイチゴは、地球の有名な店のベリ系ソースのような味だった。

「まあ、おいしい！」

「まだ、沢山あるよ。もつと食べるかい？」

霊水を飲み、果物をかじり、また、二人で泉に浸りながら、時間を過ごしていると次第に夜が明けてくる。

「素敵……」

朝日に輝く山々の眺めは、雄大な自然のパノラマと言う感じだ。

「昔の人間が絶景の眺められるこの場所を、龍たちに奉げた意味合いも、なんとなくわかる気がするよ」

ふと、その時だった。下の方から息を切らして登ってくる人間の  
心配がした。禁足地には神官でも今の時期は来ないはずなのだが…  
…

## 26 (前書き)

世直しのシステムのご紹介です。

「あ、あなた方は一体、どなたで？」

そうたずねた褐色の髪と目をした純朴な雰囲気、の痩せ型の男には、どす黒い気配が頑固に絡み付いていた。

「双龍の器だ。気をなじませた後、楔をしていたのだ」

「(ダーリン、うまいこと仰るのね)」

フェリシアは笑ってしまう。

「(別に事実関係としては、間違ってもいないだろうが)」

確かに、ものは言い様なので有った。

「霊泉の水を一度も君は飲んでいないのだな。すべて君の妻に飲ませてやっている積もりのようだが、妻は一滴も飲んでないぞ。君の家の大木の根元に、君が仕事に出かけると撒いてしまう。そして、君たち夫婦の間に別の男を呼び込んでいる。酷い女だな。悪い事は言わん、君も泉の水を飲め。そして、仕事に出る振りをして大木の枝に登って家の様子を見ている。男が現れる」

「あ、あの……」

「間男に手を下すのではないぞ。正体を確かめたら妻にも内緒で、神殿の告解室で祈れ」

「さあ、手ですくって水を飲め」

男はマークが言うとおおり、泉の水を手ですくうと、その分を飲んだ。

「さっさと戻って、朝食を食ったら、大木に登れ」

その男は名をセリムといい、ソモリス山のふもとのテルカリで銀細工の工房を営んでいた。若い美しい妻は結婚して二年たつても一向に身籠る気配は無かった。男は霊験あらたかだという霊泉の水を汲みに行く事にした。だが、そもそも霊泉の水を汲みに行くように

持ちかけたのは、妻だった事に、今水を飲んで気がついたのだった。「君の妻は腹の底まで穢れきっている。いつも君に水を汲みに行かせている間に、間男を迎え入れる支度をしているのだ。信じたく無いだろうがな。さあ、行け」

セリムは、双龍の器の何であるかはオルトの庶民の常識として、一応は承知していたが、あのよう人間離れした力を溢れさせてすべてを見通したような不思議な力に満ちている存在であるとは知らなかった。何か圧倒的な力のせいで、一言も反論できなかつたし、その言葉はすべて正しいと認めさせられたのだった。あわてて山を降り、中腹に待たせていた馬を飛ばして、家に戻った。

「あーあ、とんだ乱入者だ。皆が騒ぐから、一度戻ろうか」

皇帝夫婦はまたひそかに宮殿に戻り、何事もなかつたかのように朝食を食べ、夫は執務に出かけ、妻は裏庭に回ってそこで懸命に草むしりをしている下働きの若い女に声をかけていた。

「今朝、陛下と御一緒にソモリス山で美しい夜明けの空を見たすぐ後に、あなたの元婚約者だったセリムに会いました。悪い人では無いですが、簡単に騙されやすい人ですね。不実な妻とはもうすぐ別れるでしょうが、ヴァンダ、あなた、あの人がまだ好きですか？やり直したい？」

「はい。お許し頂けるなら、テルカリで父の残した工房と一緒に営んで行きたいです」

「それは、共同経営者として、職人として必要だと言うだけ？」

ヴァンダという下働きは顔を真っ赤にして、伏せた。

「フフフツ、ちょっと意地の悪い質問だった？あなたが好きなら、結婚なさい。ちょっと頼りないけれど、あなたがしっかりすれば、工房も大丈夫。ちゃんと跡継ぎも授かるでしょうよ」

私としては、真面目に庭の手入れに励んでくれる人が減って、ちよっと困るのだけど……と言ってから、皇后は近いうちにテルカリで祝言をあげるだろうから、そのつもりで居るように、とヴァンダに言い渡した。

午後、皇帝はテルカリの神殿の告解室にワープした。従来、告解室で民の罪の告白を聞くのは神官の役目だったが、マークが即位して以降、双龍の器の形代かたしろとして丸い金銀の縁取りをした鏡を部屋の祭壇に安置させて、そこで告白させると言う形に切り替わった。そこでなされた告解はそのまま、皇帝への直訴でもあった。各地の神殿でさまざまな懺悔や告発が行われ、おかげで大いに帝国内の不正が除かれたのである。

セリムのような個人的な悩みは、少し処理が後回しになる傾向があったが、最近はフェリシアと共に力が増大したおかげで、解決への時間も大いに短くなっている。

セリムは言われたように神殿に出向いて来た。そして告解室で自分が今朝目撃した妻の不貞と、不貞の相手の男の事について告発した。すると、噂には聞いていたが、丸い鏡が一瞬光ったと思うと、そこに朝、泉で出会った圧倒的な力を持つ人物が豪華な衣装に身を包んで立っていた。

セリムは床に這い蹲り、真の神の器とされる皇帝と思しき人物を拝んだ。

「それでは僕が話しにくい。その椅子にかけなさい」

皇帝陛下は御自分を『僕』と言う学生めいた言い方でお呼びになると言う事は、かなり有名だった。

「君の元婚約者のヴァンダは、今、オルテスの宮殿の皇后宮で下働

きとして働いている。君は彼女をどう思う？」

本当に皇帝陛下は何もかもご存知なのだと、心底セリムは驚いた。「ヴァンダには、本当に申し訳ない事をしました」

皇帝の鋭い視線が自分に注がれている間、セリムは自分のすべてが見透かされ、知られてしまう恐ろしさを味わった。

「不実な妻に未練は無いな。間男は君の工房を乗っ取る気だが、近い内、自らの過失で命を落とす。妻にはきつちり、事実関係を君が承知している事を十分に伝えるべきだったが……君には出来そうも無いな」

妻が巧みな言葉で、自分を誑かして来たのは理性では承知していても、いざとなるとセリムは強い態度に出られない。大木の上から不倫の現場を確認した後も、何一つ妻に言えずに居るのだ。

「クククツ、堅物で聊か気の弱い君では、ああ言う女は扱いきれないか」

自分の男としての至らなさを指摘されて、セリムは見る影もないほどしょげてしまった。

「夫としては褒められたものではないが、君の銀細工職人としての腕は見事なものだな」

それから、しばらく沈黙が有った。セリムにはそれが、酷く長い時間に思われ、冷や汗が噴出してきた。

「明日から早速、オルテスに向かいたまえ。これが僕直筆の通行証、そして旅費だ。君は気弱で口下手だから、妻には置手紙を残す程度にしておけ。罷り間違っても丸め込まれるんじゃないぞ。そうだな、置手紙の中身は神殿で急にオルテスで皇帝のための仕事をするよう

に依頼を受けた、とでもして置く様に……そのぐらいは出来るな？」

半月後、セリムはヴァンダと共に再び故郷のテルカリに向かった。皇后は手元金から相当な金額を二人の結婚祝いとして下賜した。

「あの間男は落馬して死んだよ。元妻には不貞はばれているし、ヴァンダを陥れて君を誑し込んだ手口も割れているとだけ、言い渡した。テルカリを離れて、ブルサカオルテスで男を捕まえて巻き返す気だ。何とも遅しいな」

どうやら皇帝陛下は、元妻を処罰するつもりは無さそうだった。それを知ってセリムはホツとしたのだった。

「ヴァンダは苦勞しそうだな」

「それでも、構わないらしいですわ」

「あんな男には過ぎた妻だが、セリムはわかっていない」

「それでも、きっと何とかやって行けますよ。ヴァンダの想いは強いですから」

皇帝夫妻は人知れず、城壁の上から銀細工職人とその妻となる女を見送った。

その後、優れた銀細工の工房がテルカリに有ると言う評判は、マロクの予想よりかなり早く帝国全体に広まったのだった。

このごろの妻はほとんど危険物だ。いや、妻が危険物と言うのは当たっていない。自分が制御不能になるような強烈な化学反応をもたらす存在とでも言うほうが、事実に近いだろうか？

完全な幼児体型の癖に、不必要にセクシーで扇情的で、その危険性は日々増大している。

「僕のグランマは日課を区切った規則正しい生活を重んじる人で、毎週教会に通い、孫の僕を早くから日曜学校に通わせた。大人になって様々な宗教的背景の友人知人と接するようになって、色々な宗教の哲学を学んでもなお、『良心』と言うものを極めて重視する考えは、変わらないし、変える必要も無いと思ってる」

この幼児は見かけだけが幼児なので、時々思いもよらない事も言う。

「変わりたくなければ、変わる必要は無いけれど、臨機応変と言うか『郷に入っては郷に従え』って事は有ると思うの。神道には『天地をもちて書籍となし、日月をもちて、その証明とす』なんて言葉もあるけれど、『まっすぐな明るい気持ち』が何より一番大切だと私は考えてます。古臭い言葉で言うと『直くなほ明らけき心』だったかな。自分という存在だって、奇跡的にそこに存在しているのだから、自分の勝手な主観に基づいて自分を卑しんではならないって思うの。自分の体も自分の気持ちも自然の一部なんだから、狭い見で判断して、卑下したりしてはいけないと思う」

妻は七歳になった。と言う事は夫婦の縁を結んで七年目で、結構

な年数馴染んでもいる。そのせいか遠慮も無くなったようで、時折辛辣だ。

「ダーリンはまだ、地球人だった頃のガジガジの道德観念に囚われすぎよ。何かと言うと『僕はペドフィル（paedophile）じゃない』って仰るじゃない？別にもう、こだわらなくて良いじゃない。私は幼児の肉体しか今は持ち合わせていないけれど、本当は幼児って言えるのか怪しい存在だし、ダーリンが子供に性的な虐待をしたがる人じゃ無いのは、私が一番よく知っているし……、そもそもオルトにはペドフィルとか幼児性愛者と言う概念自体存在しないんだから」

「じゃあ、昔の馬鹿皇帝の罪は、何なんだ？」

「サイズが不適合なのに血迷って危険な行為に走った結果、相手が亡くなったって事じゃない？龍の魔法の暴走で大惨事になったのは、あの昔の皇帝自身の罪と言うよりは、銀の龍の罪だと思うわ」

「じゃあ、なにか、サイズがギリギリ適合なら、相手が幼い事は何の罪でもないのか？」

「地球だつて某預言者は六十歳近くになって、九歳児と性交渉を持ったみたいじゃない。あの預言者の幼な妻と同じ名前を私に付けたくなかったのは、ダーリンのペドフィルじゃないってこだわりと、実はリンクしてる？あの預言者様の件をどう解釈すべきかは、異教徒の私にはさっぱり分からない話だけど、私自身のことについて言えば、夫婦として認知されている同士で双方の合意が有って、サイズが適合すれば問題無しよ」

マークはきっぱり言い切る妻がうらやましかったが、腹も立った。

「まだサイズは、不適合じゃないか」

「それはそうだけど、ダーリンが『良心』なんて持ち出して無駄に悩むから……」

「どこが無駄だ！」

「じゃあ、了見が狭いって言えばよいかしら？」

「このお……」

腹が立ったので、皇帝は思わず幼い妻の体を組み敷いて押さえつけた。すると……

「ね、ダーリン見て」

なんと、フェリシアの生母ロザリアと容貌は似ているが、随分と雰囲気の違いが美女が眼下に現れた。

「フェリシアか！」

「ええ。私の母がこうした事が出来るようになったのが七歳からだったらしいの。もっと早くできるようになるかと思っていたのだけれど、結構手間取っちゃった」

「凄い胸だな。イヤ、こう言うのも好きだけだな。だが、こんなにでかいと肩こらないか？」

「もう少し、控えめなサイズが好き？多少の調節は出来るみたいよ」「そうかあ。そうだなあ、僕の手で思い切り驚づかみして、微妙に余る位で乳首が綺麗なピンクで、微妙に内側に向いてツンと上向きなら最高だな」

「さ、さすがあ……色々、注文が煩いのね」

「いや、無理ならいいさ」

「せっかく嬉し泣きさせて上げようと思ったのに」

「ちょっと、こいつ、何が嬉し泣きだ！馬鹿にするのも大概にしろ、どうせイリュージョンだから、実際は何ともならんのだろっか？」

「違う違う。一種のタイムワープなの、これは。可能な未来の選択肢を時間限定でここに持つてくるわけなの」

「へえ……じゃあ、バストサイズの違うフェリシアはそれぞれ別々

の未来に繋がるのか？」

「どうもそうみたい」

「肉体はどこかの未来のフェリシアで、意識の中身は僕が知ってるフェリシアなのか」

「そうよ」

「僕が撫でさすって育ててきた七歳児の体は、未来の僕の所に有るのか？」

「えーっと、ダーリンが居ない時間帯の独りで寛いでいるときの私みたいね」

「ああ、わかるな。僕は焼餅焼くからな。未来の僕にせよ過去の僕にせよ、今のこの僕以外の男に自分のフェリシアの裸を見せたり触らせたりするの、腹が立つんだ」

「ええ？そうなの？」

「そうだ。君の父上みたいに素直じゃないからな、僕は。手放しに喜べない。それに僕が未来に行くとしても……入れ違いに異次元の僕が、僕の大事な七歳の君の前に来るわけだろう？。それはもつとイヤだ」

「はあ……」

気の抜けた声と共に、元の七歳児の肉体が戻ってきた。

「ひよつとして、今までこの種のワープを発動できなかったのって、ダーリンの性格の所為？」

「わからんが、君の母上より君のほうがはるかに魔力が強いはずなのに、今までかかったと言うのはいつも一緒に居る僕の影響は有るのかも知れないな。今の君を誰にも触らせたくないって、独占欲が大きいから」

「ダーリンで、そんなに焼餅焼く人だった？」

「君の夫になってから、色々性格が変わったかもな。焼餅焼きで意

地悪になった。君のおかげだ」

「何、それ！」

「それぐらい、君のことが心配で、大事で、誰にも触らせたくないし、頭がおかしくなりそうなほど愛してるって事みたいだぞ。実にまあ、ストレスフルな毎日だ」

「このオルトでダーリンを差し置いて、誰が私に触れたり危険な目にあわせたりするって言うの？」

「普通に考えたら、何も無いはずだけどな……だが、何も無いって保証も無い」

七歳児はため息をついた。

「ホント、無駄にセクシーな七歳児だと思う。でも、今日の前に居る、このフェリシアがやっぱり僕の真の番つがいなんだと思ってる」

「じゃあ、当分、不便だけど、タイムワープはしなくて良いのね？」

「ああ。実に不便極まりないけどな」

そう言いながら、マークはフェリシアの髪を優しく撫でるのだった。

## 27 (後書き)

誤字一部訂正できました。教えていただけたら大変ありがたいです。

「このオルトでダーリンを差し置いて、誰が私に触れたり危険な目にあわせたりするって言うの？」

確かに、この妻の問いは、現状では正しい。だが、将来にわたって正しいかどうか、皇帝には分からない。

「ハニーも信じて無いだろうけれど、僕らが『不老不死』と言うのは眉唾物だよな。銀河系に寿命が有り、大宇宙にだってどうやら寿命が有るって僕らは地球の知識で知っているだけに、胡散臭い事の上ない」

今現在のオルトが成立するに当たって、外部からやってきた金と銀の龍の力が大きく作用しているらしいが、一体どこからやってきたのか、なぜやってきたのかまったく不明だ。

「外部から何かが出来て来て大きな作用を及ぼすって事は、このオルトの場合、有り得ない話では無い」

「攻撃されたとしても、迎撃ミサイルも宇宙船も用意できそうに無いわね」

「そうだよな。まあ、変なパワーは存在する訳だが。たとえば聖剣一体何のために存在するのか良くわからないが、オルトの中で人材発掘の役に立っているのは確かだ」

確かに、実際、聖剣の主は有能な人物ぞろいだとフェリシアも思う。

「全体で何本あるのかしらね？」

「長年キタイで研究した人によれば、十本か十二本か、総数すらあ

「やふやだ」

「現在、はつきり姿を現して、主が決まっている剣は九本ですよね」

分かっている事柄から整理して行くしか、真実にたどり着く道は無いだろう。

「まずは僕が使っている聖剣の盟主とされ皇帝の即位式には欠かせない『ジルニトラ』、君の父上の使う戦闘力は聖剣の中で最大とされる『パンテラ・レオ』、キタイ王宮に長らく封じられていて僕の長男ポールが使う『ジラント』と、君の叔父アングスの『シャボンヌ』、そしてユクセル・サイト・オルハンの三人が使う『ティグレ』

・  
『ゲパルト』・『レオパルト』この三本は互いの親和性が強い……  
以上の七本は全部男の剣だ」

「後は母上の『チチエック』と私の『ヴィーヴル』。ねえ、女の剣は二本だけ？」

「役目も所在も主の性別も謎だが、『サミア』と『バスイール』と言う二本が更に有るらしい。現状では男の剣が七本であるのに対して、女の剣が少なすぎる。だから『サミア』と『バスイール』は女の剣じゃなかるうかと、僕は思っただよ」

「予想される総数が十二本として、名前が分かっているのは『サミア』と『バスイール』も含めて十一本よね」

「総数が十本ないし十二本と言ったのは、今は亡くなったキタイの学者だが、彼は『ティグレ』『ゲパルト』『レオパルト』の三本と謎だらけの『サミア』と『バスイール』の名を知らない段階でその仮説を出したんだ」

ティグレ、ゲパルト、レオパルト、サミア、バスイール……この五つの名前は意図的に裁断されたと思しい古文書の断簡に記されていて、更に判読不能だが他にも明らかに何かが書かれていたと言

う。この古文書の断簡から聖剣の名前を見出したのは他ならぬフェリシアの両親だ。

「亡くなった老学者ジュマル先生の仮説は『男女の剣はバランスを取るため同数存在する』と言うもので、だから総数が十か十二なのではないかと推理したようだ」

「つまり、総数もさることながら、男女同数の可能性が高いってことが重要なポイント？」

「うん。僕はそう考える」

「だとすると、女の剣も最低で七本。総数が十四本以上ってことかな？」

「そう。その通りだと僕は思ってるよ」

その古文書はなぜ意図的に裁断されていたのだろうか？

「裁断のされ方が、地球のシュレッダーにかけた書類のような状態だったんだ。オルトであんな状態のものを見たのは後にも先にも、あの古文書だけが、君の両親が聖剣の力を借りて一部を読み取った後、僕もその箇所は目で確認した、だが、僕が確認したその翌日には、すべてが消えうせていたのだ」

「消えうせた？」

「ああ。嚴重に管理したはずなのに。僕の私室のダイヤル式の金庫の内部に収めたのだが、翌日もう一度確認しようと思って金庫を開けたら、何も残っていなかった」

オルトにダイヤル式の金庫を持ち込んだのはマークが初めてで、今でこそ帝国全域で売られる人気商品だが、当時はおそらくそんなものは、マークの住まいであったキタイのエスコバル公爵邸にしか存在しなかったはずだ。

「僕以外の誰かが、その金庫を開けたとはまず思えない。聖剣特有の気配が微かに残っていたが、古文書は失せていた、と言う事はだ……」

「聖剣と同様、機が熟していなかったので、消えた……と言う解釈はしても良さそうですね」

皇帝と皇后は一頻り語り合つと、いつものように身を寄せ合つて眠つた。が、しかし、夜明けに強烈な夢を見て二人とも目を覚ました。

「ん？君も見たか、あの夢を？」

「ええ、三本の剣が輪を作つて激しく回転した後、砕け散り、そこから未知の聖剣と思しきものが現れましたね」

「やはり、あれは三本の剣が消える、つまり三人の子爵が不老不死ではない事を示唆しているのだろうか？」

「禍々しい感じは受けませんでした」

「僕も、感じなかった。と言う事は、三人が通常の間人としての寿命を生きて後に、三本が消滅すると言う事かな？」

「後から現れた剣は、三本の剣の力を受け継いだ、と言うかむしろ、強化した剣なのでしょうね」

「だとすると……持ち主はよほど強い魂の持ち主だろうか」

「聖剣の総数は、十四本も無いって事でしょうか？」

「そうだな。あのように三本が一本に集約されるなら……むしろ数は減るのだろうか？」

三人の子爵が現在の所、不老不死ではないのは確かだが、夢が正しければ、将来も通常の間人の枠に留まると言う事を意味しそうだ。

「僕は、いずれ息子達の死を見送らねばならんのだろう……おそろく」

「……そうですね」

「君と僕が同時に見た夢なのだから、あれは強力な霊夢だな……覚悟はしていたが、やはり、辛いな」

夫の辛そうな顔を見て居る内にフェリシアの胸の内に自然に湧いて来る感情は、共に生きるものとしての共感で有り、やはり愛情と  
言うべき物のようだった。

28 (後書き)

アングスはロザリアの弟です。フェリシアの叔父にあたります。間違っていたので訂正しました。すみません。 間

禍々しい未来を暗示した訳でも無さそうだが、吉夢とは言えそも無い夢を夫婦で共に見てから、二人で居る時の感覚に変化が現れた。他の人間に悟られるようなものではないが、微妙は変化だ。

互いの力は相互に影響しあって、大きくなっているとは感じるが、それが何を意味するのか分からない。

「お父様、このごろ以前より若くおなりになったみたい」

「僕ももうすぐ三十八歳だよ。良い年のおじさんさ」

「でも、不老不死の皇后陛下と御暮らしになっている所為か、私が幼い頃のお父様よりお若い気がします」

「自分ではそんな意識は無かったんだが」

「ポール兄様のような大きなお子様がおいでの方のようには、まったく見えません。ああ、私のお父様にしてもお若すぎる感じかなあ……お祖父様がすっかりお年を召された感じがするので、余計にそう思うのかしら」

「伯父上が？」

キタイ国王ファジルは皇帝を赤子の頃から慈しんでくれた肉親であり、亡き妻・イゼルの父でファティマの祖父にあたる。午後は自室で寛いでいるだろうが……伯父の気配をマークはすぐに感じ取った。

「どうやら、伯父上は花園においでだな。ファティマ、一緒に行こう」

手を差し出すと、少女は嬉しそうにその手を握り返してきた。父が若くなったように感じるのは、神々しい内から射すような光の所

為だろうか？と思い、自分がこの人の娘で有る事が大変誇らしく幸せだとも感じていた。

「伯父上、御無沙汰しておりました」

ファジルは気に入りの花園の木陰のデッキチェアで、横になり、まどろんでいた。この地球式のデッキチェアはマークがかつて木陰で休憩するのを好む伯父のために作らせたものだった。寝心地のよさを気に入ってくれて、ずっと愛用してくれているらしい。確かにファティマの言うように、伯父はめつきり年を取った。

「お、おお、これは、陛下」

老いた伯父が立ち上がるうとするのを、マークは制した。

「お加減は如何でしょうか？」

「病と言うわけでもないようですが、近頃年の所為か、何をしてもすぐに疲労を覚えます。おお、そうだ、せっかく陛下にお出でいただいたのだから、伺っておきたい事がございましたな」

ファジル王は自分の後継者である孫娘のファティマの配偶者の件が、気がかりなようだった。

「ずっと以前に、一度お話しした事が有った様に思いますが……いささか年下ではありませんが、クラウス君の義理の弟で聖剣『シャボンヌ』の主であるアンガス君をと、考えておりました……」

「ああ、確かに、そのアンガスという人の名は聞き覚えがあります。が、もう、かれこれ七年かそれ以前の話ではございませんでしたか？それ以来、正式に何か申し入れが有ったと言う事も聞いておりませんでしたのでな」

「どうやらこちらの不手際で御心配をお掛け致しました様で……申し訳御座いません」

皇帝となつても育ての親には、それなりの礼儀を尽くすポールなのだ。

「あ、いやいや、陛下、とんでもない事です」

「ファティマ、お前はお祖父様にはその件でお話をした事は無かったのだな」

「ええ。その……結婚と言っても、何だか現実味が無くて……」

「……アングス君のことはどう思うのだ？」

「小さい割りに、しっかりした人だと思います。一緒にいると楽しいですし……」

「ファティマは十二歳で、アングス君は八歳だからな。確かに結婚を具体的に考えるには、早いが……」

「じゃが、皇后陛下は八歳でいらっしやるのでは？」

ファジル王は、かつてマークの妻であった亡き自分の娘・イゼルとの立場や事情の違いを察知はしていても、心情的に引つかかる。もし今イゼルが生きていれば、皇后という運命も有り得たのではないかと……

「あれは……並みの八歳では有りません。私の知るいかなる女より強く、賢い、特別な存在です。私の魔力を強め、時には私を本気で怒らせますが、一步も引きません」

「あなたが、女に向かって本気で怒る……考えられません……」

「私も、フェリシアと添うて初めて知る己の感情が、不思議でした。良く分かりませんが……私が以前の私と変わったとしたら、それはフェリシアの力でしょう」

「……ふうむ。不老不死の銀の龍の器は、並みの女とは大きく違うのでしょうか」

「さあ。ただ、あれの魂は強い。そして、あれは賢いです」

その言葉は、皇帝が皇后をかけがえの無い存在だと感じている事を伺わせた。

「うつむ。やはりその……」自分の娘では皇后は務まらなかったのか、とファジルは重ねて問おうとした。

「どうか、伯父上この話はこれで、切り上げてさせて下さい」

有無を言わせぬ、静かだが強い調子に、年老いた王は皇帝の答えを悟った。

「ファティマとアンガス君は幾度かこの王宮の庭先で午後の茶など一緒に楽しんだわけですが、まだ機が熟したわけでは無し、互いの気持ちを育てると言うことも、大切かなと思ひまして」

「アンガスという人は、帝国で親御と共に暮らしなのですか？」

「はい。クラウス君か、私が瞬間移動する時に、時折連れてきます」

「御自分で瞬間移動はできんか」

ファジル王は、アンガスの能力の程度が少し不満らしい。

「そうですね。不老不死ではないですし」

だが、その程度が人間であるファティマには相応だとも言える。不老不死の人間の力は、強すぎるからだ。

「お祖父様、私のような普通の人間は瞬間移動とかワープとか言う、あの、不思議な力は無いですし、付いて行く事も適わないのですから、御一緒に付いて行ける方はそれだけで十分すごいのですわ」

ファティマは祖父に向かって、取りなすような口を利いた。

「では、行くね、ファティマ」

父は立ち去る直前、いつも抱きしめてくれる。人なみ優れて賢く、何でも知っていて、容貌も優しく美しいこの人の娘で良かったと思うと同時に、自分の平凡さが何やら申し訳なくもなる瞬間でも有った。

幼い頃に記憶しているもつと普通の人間の体臭を強く感じられる

匂いとは違つ、澄んだ独特の仄かな芳香は、思えばフェリシアを皇后とした頃から感じ取れるようになった。父に何か特別な香でも焚き染めているのかとたずねたが、そのような物は使っていないらしい。風呂で使うバスソープなら、キタイ王宮でも同じものを使っているのだし……やはり、あれは父の、人ならざる神気を帯びた存在としての匂いなのだろう。

父の去つた後、夕闇にかすかに残る芳香は、慕わしい気持ちと同時に、寂しい気持ちをファティマに呼び起すのだった。

「ダーリン、どうなさいました？」

寝台で寄り添いながら、幼い妻は気遣わしげな表情を浮かべた

「キタイ王宮に行つて来たんだが……時の流れとは、残酷だな」

マークはファティマの寂しさを強く感じたものの、親子とは言え異なる時の流れを生きる事になった定めを、彼自身も如何ともしがたいのであつた。

「時の流れの中で分かれてしまう定めの方との間にでも、ダーリンが心からその方を大切になされば、きっと何がしかの大切な思いを共に抱く事は出来ますわ」

「ああ、そうだね。そうした思いを、君自身もかつては沢山抱えていたのだろう？」

「私は……そうした思いは、銀の龍の穢れの浄化に使い果たしてしまいましたけれど……金の龍は……そのような浄化は必要ありません。だから、ダーリンはそうした思いをずっとお持ちになつていて、良いのですわ、きつと」

「焼き餅は、焼かないの？」

「焼き餅と言うよりは、独占欲ですかしら。十二分に發揮させて頂

「いますわ」

妻の繊細な両手が自分の頬を包み、その赤い瞳がじっと自分を見つめた。マークは一瞬、身震いをし、そして改めて宣言したくてたまらない気分になった。

「ハニー、僕は君を誰よりも愛しているよ」と。

30 (前書き)

職務に励む皇帝夫婦のある日の様子です。

「何と云うか、お二人が一緒だと金と銀の光があたりを舞っている様な気がしない?」

「するする。本当に神様に近いお二人でいらっしやるんだなって、実感するわよね」

「お二人の足音って、私、聞いた事がない」

「そうねえ。御機嫌を悪くなさって、床を踏み鳴らされたり、ダンスでリズムを取られたりなさる時は聞こえるんだけどね、そう言えば普段の時は私も無いかな」

そんな女官たちの噂を聞くと、自分達夫婦は特異体質なのだと思帝は改めて実感する。

フェリシアは八歳になって夫と共に朝議に参加する事も増えた。生まれてこの方、教育らしい教育を受けた事は無いのだが、立って歩けるようになるたびに大人向けの書物を読みこなし、ペンを握れるようになるたびに完璧な書体で美しい文字を書いた。五歳で並みの騎士を打ち負かすほどの剣技を示し、いかなる気難しい荒馬も乗りこなすと言つ具合だった。

皇帝の厩には、皇帝と皇后以外絶対背中に乗せない大きくて美しい黒馬が居るが、ワープができる二人は実用上の価値よりも、むしろスポーツや気晴らしとして馬に乗るのであり、その馬は大抵は広い牧場で気ままに過ごしている。

「まあ、僕も似たり寄ったりだったけど……料理とか剣は僕よりすごいな」

皇帝の幼い時期を知るキタイから帝国に付いて来た老臣たちも、その言葉に賛同する。不老不死を赤ん坊の頃から約された神の器は、似たような成長課程を取るようだ。

朝議に参加する時は、夫婦揃って黒いすつきりした印象の、かつての大神官の式服のような衣装に身を包み、時間ぴったりに玉座に並んで座る。いきなりワープして来るので、誰もその着席の瞬間を見ていない事が多い。退出の瞬間も同様だ。朝議にはマークが即位して以来、貴族以外にも五人以上のメンバーの推薦を受けた学者や役人、企業家、教育者などもメンバーに加わっているが、初めて目撃したものは皆、腰を抜かすほど驚く。

「いやあ噂には伺ってましたが、本当にふつとおいでになって、ふつと消えるように行ってしまわれるのですね」

「それも驚きますが、皇后陛下の堂々となさった御説明、見事でしたな」

「おかげ様で、正しい課税には正しい地図が必要不可欠だとわかりました」

「間接税を導入する場合は、貧しい者への十分な配慮が必要だと言う事も納得できました」

「そもそも、間接税とか直接税とか言う概念も、両陛下から承るまで、我々は思いもつきませんでしたな」

「皇后陛下は、あれで八歳でいらっしやるのでしょうか？まさに人知を超えた存在でいらっしやる」

「人知を超えたと言えば、皇帝陛下の御年は三十八であられるのに、まずまずお若いですな。玉座のすぐ下の壇で記録を取っていた筆頭書記官など、陛下より一歳若いはずですが、若禿げの所為かうんと年かさに見えてしまつて気の毒です」

「あと、十年すると皇后陛下は輝くばかりにお美しくなられましよう。陛下は一向に年をお取りにならないから、その頃にはいかにもお似合いの御夫婦という感じになるのでしょうか。我らは老残の身をさらすばかりだが」

「百年、二百年とお若いままと伺ってますぞ。なかなかそれはそれ

で、大変であられるかもしれせんな」

「ふ・む。終わりが見えない人生と言うのも、大変でいらっしやるのでしょうか？」

「凡俗には手に負えない大変な状況でしょうが、お二人は賢明であられるから、何かしつかりしたお考えもあるでしょう」

「皆、勝手な事を申してますわね」

朝議の後、夫婦は花園で共に軽い昼食を取った。その後、これまでは軽く午睡を取っていたが、フェリシアの気もオルトに十分なじみ、以前ほど必要な事でもなくなってきた。

地方の神殿から上がってくる直訴は、効率的な官僚機構が定着し、地方領主の監督もしつかり出来るようになった事から、以前ほど深刻なケースがめじる押しと言う状況には無い。水利権の争いや、地方領主同士の領地の境界争いならまだしも、夫婦のいざこざ、個人的な相続問題、恋の悩みに至っては、脱力する程他愛無いものも多い。

「勝手だが、ひとごとだと思えば、あのようなものだろう。あと十年もすればフェリシアが輝くばかりに美しくなると言うのは、誰もがそう思うのだ。その時僕の老化が停止したままなら、確かにカッブルとしておかしくない感じになるだろうよ」

「やっぱり、今のままではおかしいかしら」

「まあ、そうだなあ、親子と思われても仕方有るまい」

「はあ……と幼い皇后は不満げな溜息を漏らした。

「これからどうする？行けたら行く程度のゆるい口約束をしている訪問予定の場所が三箇所所有の訳だが……全部無視したって、大した

ことではない。まあ、多少、作業なり、仕事なりのモチベーションが下がるだろうが」

「その三箇所って、大半野外でしたね。まあ、あちら様は期待なさってるから、顔見せぐらいしますか」

「一箇所当たり、さほど長い時間を割かなくても済みそうだぞ」

最初は山村の製茶のための新しく出来た作業所だ。地球で言うウーロン茶のような半発酵茶を作って売り出そうと言う事で、出来た。「うん、うまいじゃないか。もう少し茶葉の乾燥に工夫をしたら良いかもな」

「従来茶とは、違った場所で売り出してみるのも手ですよ。これは油物が多い食事に良く合いますから、こっそりしているこの地方の郷土料理の店で、実際に客に飲ませてみるのも手でしょう」

幾つかのアドバイスをして、山村の村落会議に皇帝のポケットマネーから多少の寄付もしておく。

次は防災のための砂防ダム建設現場だ。現場監督の不正は最近はめったに見落とされず、ちゃんと皇帝まで報告が来るので、労働者の表情は明るい。きつい労働だが、給料は弾んでるので、皆真面目に働いている。

「地域の人々、君達の故郷を守る、重要な仕事だ。頑張ってくれ」

「仕事帰りに、いつも皆さんが寄る店でビールを一人三杯まで、振舞わせて頂きます。また陣中見舞いに参りますから、どうぞ、頑張ってくださいね」

三番目は新しく出来た農業学校の野外実習の視察だ。

「地力を上げるために、マメ類をもっと計画的に栽培サイクルに取り入れたほうが良かるう」

「連作障害に関する主な研究書を、この学校の図書館にまとめて寄贈させて頂きました。ぜひ、講義などにも取り入れられるように、

お勧めします」

「君達のような若い力が、帝国の食糧事情を向上させるのにぜひとも必要だ」

「皆さん、お励み下さいね。きっと、努力は報われましょう」

まあ、そんなこんなで無難に視察をこなし、ワープしてまた、花園に戻ると、すでに夕暮れだった。

「時間も食うが、結構物入りだよな」

「でもまあ、まだまだ、ダーリンの御手元金は余裕があるでしょう？」

「うーん、それはそうだが、不測の事態に備えてもう少し資金をプールしたいところだ」

「何かまた、皆が大喜びして買うような品物を売りに出しますか」  
「そうだなあ。それが一番確実かな……」

バスソープのシリーズ以降、新しいヒット商品が出ていないので、何か必要だと二人は考えるのだった。

「フェリシア」

妻はむくれているのだ。先ほど重ねて尋ねられて、自分と並ぶと親子に見えると再び答えたのが、気に入らないらしい。だが事実だ。

「フェリシア！」

こう言う時は、背中越しに抱き込んで、耳を舐めながら感じやすい体を愛撫してやれば、恐らく機嫌は直る。だが、小さく震えて居るくせに頑なな背中を見てみると、どうもそう言う気にはなれない。何やら馬鹿馬鹿しくなって、くるりと背中を向けて、眠る事にした。

「馬鹿には付き合いきれん」

まどろみ始めた皇帝の背中に、痛みが走った。

「馬鹿！ばかばかばか！いじわるっ」

フェリシアが痙攣を起こして、夫の背中を小さな拳骨で十数回も連打したのだ。

「いい加減にしろ！」

怒った皇帝は体を起こすと、驚くほどのすばやさで幼い妻をつつ伏せに膝の上に乗せると、寝巻きを捲り上げ、下着を引きずりおろし、平手で尻を打ち始めた。子供であっても女の尻は結構な量感がある。

打擲うちげの音は夜中の寝室に高々と響いた。

最初は絶叫していた妻が、泣き声を上げ、やがて媚びるような声で言った。

「ごめんなさいっ、ごめんなさい……っ」

詫びる言葉を認めて尻を打つ手を止め、妻を抱き上げてやったのだったが……泣きはらした幼い美貌は、強烈な感情をマークに引き起こした。なぜ、自分の背中を連打するなどと言う暴挙に出たのか、問いただしてやるつもりだったのに、どうでも良くなったのだ。それにしても……この泣き顔の艶めかしさは、一体なんだろう？ふと気がつくと、自分の膝の上がかなり湿っている。何とそれはフェリスの秘めた部分から滴り出たものだった。この幼女は平手打ちから痛み以外の感覚を強く覚えたいらしい。それが、自分の推測したような理由なら……どうしてどうして幼い体に似合わず……

「僕はペドフィルなだけじゃなく、スパンカーにまでなりそうだな。どれもこれもフェリスシアの所為だ」

尻を打つ事に快感を覚える人種が居て、そういう人間はスパンキングマニアなどと言われるが、そうした行為の打ち手をスパンカー（spanker）と呼び、打たれる側はスパンキー（spankee）と言う。

「ごめんなさい」

「僕は、お仕置きのもりでぶつただけで、どうやら予想外の効果を発揮したらしい。おかげでマニアックな快感に目覚めてしまったじゃないか。元来僕はこれでもモラリストだったのにな。まあ、オルトで色々とも崩れたが、ククッ……フェリスシアにその拘りを完全に粉碎される事になりそうだな」

「ごめんなさい」

「それにしても、理知的で賢い一面を見せるかと思えば、こんな意味不明な癩癩を起こす。支離滅裂だぞ、フェリシアは。お仕置きすればしたで、これまた変な反応をして、困った奴だ」

「ごめんなさい」

「そんなに、親子に見られるのが嫌だったか。ん？」

「……嫌なの」

「どう見えたって、フェリシアが僕の妻で有る事に違いは無いじゃないか」

「それでも、ダーリンが……」

「僕に『親子に見える』と言われるのが、そんなに嫌だったのか」

昼間、二人でふらりと宮殿の外に出てカフェの様子を久しぶりに見に行った帰りに、露天商に呼び止められた。

「騎士団の旦那、可愛らしいお嬢様の御髪に、この花飾りはいかがでしょうか？」

外に出る時、皇帝は髪も目も魔法で灰色に変えて、騎士団の一番身分の低い平団員の制服を着ている事が多い。剣を下げていても違和感が無いし、武人めいた身のこなしもしつくり来るからだ。その格好で愛らしい少女を腕に抱き上げて歩いていると、結構目立つのだが、今まで皇帝だと見破られた事はめったに無かった。

「ほお？季節の本物の花を使っているのだな」

「ええ。素敵なお嬢様には本物の美しさと言うわけです」

「どれにする？」と夫に尋ねられて、フェリシアは白い小さなバラの飾りを選んだ。外に出歩く時のために魔法で色を変えた琥珀色の髪にも、本来の髪にも似合いそうだった。

「いやあ、お父様も大した色男だが、こちらのお嬢様は御成人なさ

る時には大した美人におなりでしょうな。親御さんとしては、今からさぞ気が揉めておいででしょう?」

「まあな」

フェリシアは見る見る内に膨れて、何か言いそうになったが……夫は強く視線で制止した。支払いを済ませて、夫が髪飾りを付けて、また抱き上げた。

「私はダーリンの妻です」

「良いじゃないか。誰が見たってフェリシアが可愛いと言う事だし、大人になったら大した美人になるのは間違い無いさ。先日、朝議の後でも怒っていたな。『親子にしか見えない』と言われて」

「嫌なのです」

「だが、確かに今の体の様子では、見るものがそう思うのは当然だ。いちいちむくれるのは止めなさい。それこそ子供っぽい。弁えの無い子供そのものという感じじゃあないか」

フェリシアは、十分に気持ちを知っているはずの自分までが『親子に見える』と言ったのが許せなかったのかもしれない、と皇帝は思い至った。凶暴な銀の龍の魔法を發揮もせず、可愛く拳骨程度で済ますことが出来るのは、やはり、フェリシアの魂が真の意味で強く成熟しているから、とも言える。

「銀の龍の魔法を暴走させなかったのは、さすがだが、やはり子供っぽい、弁えの足りない行動だったな。まあ、僕を本当の意味で対等な相手だと思っっている現われなのかもしれないが、寝込みを襲うのは卑怯だぞ?ん?」

「はい」

「よしよし。お利口な可愛い奥さんは、可愛がってやらなくちゃな」

近頃は随分と色々な方法で妻を『可愛がって』いる皇帝だったが、さすがに尻をたたいて可愛がると言う所までは意識がついて行かないのだった。

「僕はね、これでも地球では結構堅苦しい人間だったからね」

「そうだったのでしょうかね。……あきれてしまわれたのでしょうか？」

「……恥ずかしい……」

「恥ずかしがっている、フェリシアって、可愛いな。いかん、ますます、おかしいな方向に走りそうだ」

どうせ、人外の存在になってしまったのだし、頑ななこだわりは捨ててしまっても良いのかもしれない。

愛撫に応えて艶やかな反応を示す幼い妻の姿を楽しみながら、そのような事を意識の片隅で思う皇帝だった。

32 (前書き)

馬も気遣う、熱々ぶり?!

その馬は馬なりに、お乗せしているお二人が至尊の存在で有られると承知しているようだ、と馬丁は思った。

「アスワドがいつもより飼葉をしっかり食べ上機嫌だったので、両陛下が本日はお越しになるのだと分かりました。なぜこいつにはそれが分かるのか、私には不思議です」

普段は気難しく馬丁を蹴る事もしばしばなのに、機嫌が良いときは嘘の様に扱いやすい。おそらくこの馬は、自分を馬丁よりも上の存在だと思っっているのだろう。

「馬は勘が鋭いからな。二人乗り用の新しい鞍が届いたら、乗りに来ると言っておいたのを、もしかしたら覚えていたのかも知れないぞ」

五年前、暴風雨の大変な被害を蒙ったカルススの町は従来から質の良い馬具を作る職人が集まっていたが、皇帝の「格別の御配慮と御温情」で無事に復興し、従来知られていなかった皮製の旅行鞆や、軍隊や学校で採用されたランドセル、女性用のバッグの製造も軌道に乗り、以前にもまして町全体が繁盛している。これらの新製品の企画・製造方法は皇帝と皇后から教えられたものが元になった。

鞍も「もう少し軽快でそれで居て強度は確保できるように」様々な示唆を与えた結果、帝国全土で評判を取るような良質の製品が出来るようになった。二人乗り用の鞍は、オルトにはこれまで存在しなかった特注品だ。

この鞍は、当初皇帝が特別注文し購入する予定であったものを、

カルス町の復興に対する感謝の気持ちの表れとして「皇帝陛下に献上させて頂く」と言う事で、カルスの皮革製品製造組合の組合長自身が宮殿にまで持ってきたものだ。先ほど皇帝と皇后は謁見室で他の地方からの謁見希望者と共に組合長に直接会い、ねぎらった。

「ほう、そうか、アスワド、僕らが来るのが嬉しいのか？」

艶の良い真っ黒な毛並みのその馬は、皇帝に返事でもするように、一声いなないた。

「牧場で気ままに雌馬たちと過ごしていた方が、楽しくない？」

今度は頭を振って、ブルルツという音を立てた。皇后の問いを否定しているらしい。

皇帝はまず馬にまたがり、二人乗り用の鞍の前の席に皇后を乗せると、両足を軽く締めてやる。馬が走り出すとあとは脚の圧迫一つで、馬は皇帝の意思のままに忠実に動く。暴れ馬とされるアスワドが信じられないほど従順に命令に従う様子は、幾度見ても馬丁達には驚異的だった。

「皇帝陛下は鞭一つお当てにならず、あの馬を思い通りに乗りこなされるのだからすごいよな」

「最近、皇后陛下もお一人で乗りこなされるようになったらどう？それこそ本当に驚いた」

「両陛下のうちどちらかがおいでになる時、あの馬は機嫌が良いが、お二人揃われるときは特別上機嫌だな」

「我々には無い、獣の直感なんだろうな」

「両陛下以外にアスワドに乗れる方って、どなたかおいでになるのか？」

「聖域侯御夫妻は、お乗りになれるはずだ。大体この宮中の厩にアスワドをお納めになったのは、あのお二人だからな」

「ああ、思い出した。あの奥方様がまだお小さかった皇后陛下をお連れになつて、お二人でアスワドに乗られた事が有つたな。無論皇帝陛下のお許しが有つての事だつたが」

「アスワドは聖域侯の御領内の、女神様のための御神域にごく近い牧場で生まれ育つたはずだ。その牧場の馬たちは、霊泉から流れ出る水を飲んで育ち、駿馬ぞろいだと言うからな」

「俺も、ここで馬丁を努めていた祖父さんに聞いた事がある。その牧場の馬たちは、神気に敏感だそうだ。神に近い方々の御命令には非常に良く従うが、並みの人間に対しては不従順と言うか、扱いにくいと言うか、そんな馬ぞろいらしい」

「聖域侯御夫妻は、女神様の特別の御加護を得て不老長寿であられるらしいから、神気もお強いのだろう」

「つまり、神気の無い俺たちは下々のものとして、馬に軽く見られてるのか、なんか不愉快だな」

「不愉快だが利口だから、人の言葉を理解するよな。『そんな事では陛下の御用が足せないぞ』と言うとおとなしく従うんだ、あの、アスワドでも」

「俺もアスワドに『両陛下にむさ苦しい所をお見せできないから、ちゃんとブラシを当てさせる』って言うてやった事がある。そうしたら、えらくおとなしかつたな」

馬丁たちの噂話をよそに、皇帝と皇后はアスワドに乗って清らかな泉のほとりに出た。

「ここはこの宮殿の敷地内で、一番神気が高まっている場所だが、一休みするか」

「ええ、そうしましょう。いつ来ても宮殿の敷地内と言う事を忘れ

てしまいそんな静けさですよ。他の花園なんかには、昼休み中の騎士団の若い団員とその交際相手とか、多少は居るものですけど、ここは本当に誰も居ませんね」

「神気が強すぎて、ちよつと居心地が悪いのだろうよ」

「そう言うものですか？」

「ああ。若い男が付き合っている女を連れて花園で何をしてるか、フェリシアだって見当がつくだろう？」

「まあ、その、人には言いにくいような事もしているかもしれませんがね」

「そう言った、多少は後ろ暗い気分と、神気はなじみが悪いからな。神気が満ちている場所でも平気でこんな事が出来るのは、我々が、君の両親ぐらいのものさ」

夫の膝の上で『こんな事』をされていると、確かに恥ずかしいが、嬉しいのも事実。

「……っアあつ……わ、私たちは夫婦ですから……後ろ暗い事なんて……あつ、有りませんわ」

「後ろ暗くは全く無いがね、フェリシアのこんな顔、他人に見せる気は無いよ」

清らかな水の流れる音に混じって時折響く「ちゅっ」と言う音、ひそやかな衣擦れの音、甘えるような少女のすすり泣く声と艶を帯びた男の声。

黒い馬はひとしきり様子を伺っていたが、皇帝と皇后の邪魔にはならない場所まで身を引いて、静かに草を食んでいるのだった。

### 32 (後書き)

九月一日から、アルファポリスのファンタジー小説大賞が始まりました。

黄色いバナーを押しただいて、清き一票を頂けると、感謝感激です。宜しくお願い致します。

### 33 (前書き)

夫の寄せる信頼と、皆を悩ませる厄介な問題について

帝国の首都オルテスのレオンハート公爵邸の向かいに新しく出来た聖域侯・クラウスの邸は、高位の貴族の邸としては余り大きくは無いが、暖房や給排水、厨房の設備などが最新で使いやすく、間取りも合理的で住み心地は上々だ。

新しく出来た娘婿の邸を見に来たレオンハート公爵・ジョシユア、つまりクラウスにとっては元の主で妻の父親だが、そのジョシユアが心底うらやましそうに「叶う事なら我が邸と取り替えて欲しい」と言ったほどだ。

特に厨房の設備は最新で使い勝手がよく、食材もクラウスの妻・ロザリアが経営する会社のおかげで、常にオルト中から多彩な食材を取り寄せてある。クラウスとロザリアの娘である皇后フェリシアは、ワープで宮中からいきなりやってきて、カフェで出す新作のメニューを試作したり、気晴らしの菓子作りをしたりする事も珍しくない。宮中の大膳職では、しきたりやら格式やら何かと面倒だし、食材も設備も不十分なのだ。

そんな訳で、フェリシアが作る菓子を「ちょっと味見」したり、「アメリカでよく食べていたものを作りたくなつた」皇帝までが、この厨房に顔を見せる事も珍しくないのだ。

その日はオルトではまだ知られていない「抹茶ロールケーキ」を作る事を思いついたフェリシアが、製作に励んでいて、その様子を厨房の者達が熱心に見学していた。ここの厨房のスタッフは、皆、もともと皇帝マークがキタイにいた頃に作った調理師専門学校の卒業生で、その学校の教師から校長になつたロザリアとロザリア以上に「異界・地球の料理に精通している」皇后の技術やアイデアは、大変勉強になると認識されている。

「さて、出来ました。半分は皆の試食用に残しておきますね」

いつも、新しい菓子が出来ると皇后はどのように言い置いて、出来たものを持って、この邸内の両親なり宮中の夫なりの所に行くのだった。この日の抹茶の扱いは、抹茶を菓子に使うと言う発想自体存在しなかったオルトの調理人たちには驚きで、皇后が置いていったロールケーキの半分を皆で少しづつ試食したが、その風味とおいしさに皆感激していた。

さて、ロールケーキを盛り付け、それを手にフェリシアは最初、邸内のあずまやに居るはずの両親の所を目指した。無意識のうちにはフェリシアは両親の気配を読み、現在の位置をたちどころに認識できる。

「気に入っていただけかな」  
あずまやの背後の細道に入って、二人の様子をまずは覗き見る。結婚してかなりの月日がたつはずだが、両親はいつまでたっても「熱々」なので、邪魔をするのは気の毒な場合も有るのだ。娘としてはそのあたりも、いつも配慮している。

父のクラウスはどうやら、母ロザリアに膝枕をされて、何事か熱心に語り合っているようだった。  
「どうやらお邪魔ね。このケーキはダーリンにお持ちしましょう」と思ったフェリシアであったが、二人の様子に単なるラブラブ馬鹿ツプルのノリでは済まされない、深刻な気配を感じ取り、密かに様子伺った。

「お疲れになりました？」

母の声は、いつに無く気遣わしげだ。

「ああ……ファティマ姫の周辺の方たちがなあ……ポール様もお辛

い立場だ」

「私たちはポール様の守り役ですから、余り、そうした意味ではお役に立てませんね」

「そうなのだ。それで困っているのだよ。ポール様は王位に対する執着などお持ちではないし、現国王の御血筋はファティマ姫だけでいらっしやるのだ。王位継承権の順位は揺らぎようも無いのに、ポール様にあらぬ疑いをかけるものもいる」

近頃、キタイ王国のファジル王は目に見えて体が衰弱しているらしい。医師たちは特別の病名などは特に思い至らないようだが、地球の進んだ医療技術はこのオルトと言う世界とはまるで縁が無い話だから、無理も無い。せいぜいが脈を取り、触診とこれまでの経験に頼って病名を診断するだけなのだから。

王個人の健康問題を離れて、時期国王が誰かと言う話が様々な憶測と共に、色々取りざたされるようになるのは、国王の年齢とこのオルトという世界における人間の平均的な寿命を思えば、無理からぬ一面もある。

「アンガスは、お役に立てませんか？」

アンガスはジョシユアの長男で、ロザリアの弟だ。フェリシアは自分と同じ年に生まれた叔父を「アンガス殿」とか「アンガスさん」とか呼んでいる。聖剣『シャボンヌ』の主で非常に清らかな波動の持ち主だが、不老不死でもないし、ワープも使えない。生まれてすぐから、皇帝マークが、自分の長女であるキタイのファティマ姫の将来の夫と定めたが、当のアンガスとファティマ姫は、まだまだ将来の夫婦などと言う実感に乏しく、せいぜいがたまに茶でも飲む顔なじみとか、罪の無い遊び仲間という程度の感覚だ。

「聖剣の主だけあって、年齢よりしっかりしているが、やはりまだ、

八歳だ。お年が四歳も上のフェアティマ姫のお心を捕らえるのは、現状では難しい」

「同じ八歳でもフェリシアは、すっかり陛下のお心を捕らえたようですが、まあ、あの子は私たちよりも生まれついでの方が強いですから、不老不死でもないアンガスと比較するのも気の毒ですね」

「つい、比べてしまうが……それはアンガス君に余りに気の毒と言うものだよ」

気の毒と言いながらも、クラウド自身アンガスとフェリシアの能力の大きな違いについて、つい考えてしまう。

フェリシアは宮中の自室にワープした。そして、夫の好物のコーヒーと言っても代用のタンポポコーヒーだが、丁寧にドリップし、花園にいる夫を呼んだ。

「何々、抹茶ロールケーキ？良いねえ」

夫は機嫌が良い。どうしたものかフェリシアは悩んだが、自分が見聞きした状況を脳裏に思い浮かべた。すると、その波動はごく自然に夫の意識を刺激した。キタイ王宮には、毎日短時間であつても顔を出しているマークではあるが、権力闘争には超然としているクラウドまでが頭を悩ませている状況に、暗然としたようだ。ケーキどころではなくなってきた。

「すみません」

フェリシアの立場は微妙だ。夫の先妻の実家の跡目争いやら権力闘争やら、直接的に関わるべき立場には無い。だが、父が悩み、母が悩み、夫にとっては重大事ともなれば、無視も出来ない。

「クラウド君がそこまで悩むと言うのは、僕の認識よりポールの立

場は厳しいと言う事だな……」

フェリシアには継子にあたるポールについて、父親らしく悩む夫の姿は、フェリシアにとって決して不快なものではなかった。そして、夫の悩みが円満な形で早く解決して欲しいと、心から願うのだった。

「フェリシア、ありがとう」

夫の寄せた信頼の言葉が、何より妻としては嬉しいフェリシアなのであった。

### 34 (前書き)

秘められた想い、  
告げられない疑念について

寝室で、ふと、夫がリユートを爪弾いた。

リユートの名手として名高い夫だが、人に求められたわけでもなく自分の手遊びとして弾くという事は、フェリシアと共に暮らすようになってからは、めったに無い事であった。以前地球のクリスマス時期に、クリスマスソングを弾いてフェリシアに聞かせたぐらいの事だった。

後は一度だけ、アメリカの独立記念日に、ものに憑かれたように歌い弾いた事が有った。

「O say can you see, By the dawn  
's early light」と珍しく声を張り上げて国歌を熱  
唱し、更に「星条旗よ永遠なれ」を演奏し、「BORN IN T  
HE U.S.A.」をSent me off to a fo  
reign land to go and kill the  
yellow man（俺を外国へ送り込んだ、黄色人種を殺すた  
めに）と言うくだりまで入れて全曲しつかり歌った。ベトナムの無  
益な戦いに対する強烈な批判と、それでも生まれ育った国を思う気  
持ちがそこに揺れているようで、見ているだけで胸が痛かった。当  
然女官たちにはちんぷんかんぷんだったろう。だが、フェリシアに  
もその想いの一端しか、理解できていないと言う気がしたものだ。  
「偉大だけど愚劣で、自分勝手に傲岸不遜だけど魅力的な」と言う  
生まれた国に対する夫の複雑な思いは、フェリシアが知っているよ  
りも、実はずっと深く強いのかも知れなかった。

だが、今夜はまた、勝手が違うようだ。周りにはフェリシア以外  
誰も居ない。マークは人に聞かせるためではなく、自分の癒しのた

めに弾いているのだった。

最初のうちは、割合と明るいオルトの民謡とも言うべき曲、恋歌、それから古い神話を歌った曲が続き、どこか聞き覚えの有る切なくゆつたりとした曲になった。短調のどこか物悲しい、懐かしい曲……おそらくテレビでなじんだ曲だったはずだ。かつての京子の子供たちなら「トマトソースのコマーシャルの曲！」と言ったかもしれない。が……更にもっと悲しげな、感情を揺さぶるような曲に切り替わった時、そんなのんきな記憶に浸っても居られなくなった。

夫の口から、古めかしい英語の歌詞が漏れた。歌って聞かせると言うより、自分で曲に合わせて呟くと言う感じだ。だが、それがかえって秘められた感情の激しさを思わせる。元が日本人のフェリシアにはその本当の言葉の意味はわからない……だが、それは伊丹京子であった頃聞いた記憶が有った曲だった。

Flow my tears fall from your  
springs,  
Exiled for ever: let me mourn

確か、エリザベス一世の頃のヒット曲であったはずだ。タイトルは「Flow my tears」（流れよ我が涙）と言うのだ。それから一しきりその作曲家の曲が続いた。

「In darkness let me dwell」（暗闇に住まわせ給え）

「I shamed at mine unworthiness」（御身にふさわしからざるを恥ず）

「Can she excuse my wrongs?」（彼女は私を許せようか？）

ゆつたりと、だがどこまでもどこまでも悲しい。演奏する夫は悲しみの中に浸り切って、何かを癒したいのかもしれない。そんな風にも思われた。

ようやく、夫の手が止まった時、フェリシは泣きながら夫に抱きついた。

「どうなさったの？とても、とてもお辛い思いを抱えていらつしやるのですか？私には、私では御一緒に背負う事の出来ない、あるいは背負う事の許されないものなのですか？」

「フェリシア？ そうか、君はジョン・ダウランド（John Dowland）を知っているのか」

「作曲者だとしか……」

「でも、どんな意味合いの曲かわかってしまったようだね」

「タイトルぐらいしか存じません」

「……そうか。それがわかれば十分だよ……いやあ、参ったな」

「要らざる事を申し上げたみたいですね。ごめんなさい」

「なぜ、謝る？」

「御自分で一人、悲しい思いに浸って、物思いに耽りたいと言うお気持ちだったのではないですか？それを私が要らざる事を申し上げたばかりに……」

考えてみれば、フェリシアの両親と出会う以前のかなり長い時間、夫はこのオルトに転生した直後からほぼ一人で奇妙な宿命に耐え、多くの人間の運命を左右する重い責任をこなし、他者から理解されない孤独に耐えて来た。それがどれほどのものであったか、フェリシアは推測するしかないのだが、以前夫は自分だけが不老不死となつてしまった孤独と恐怖について「ブラックホールの中に放り込まれたような気分」だと語っていた。

夫には夫の秘めた思い、悲しみ、苦しみが有って当然なのだ。その中に踏み込ませて欲しいと言うのは、自分の身勝手と言うものであるのかも知れない。でも、その夫の苦しみ・悲しみを見過ごして良いとも思えず、フェリシアは困ってしまい、そして、この夫には、無神経だと思われるのも、鈍感だと思われるのも、冷たいと思われるのも全て嫌なのだ気がついてしまった。何か口にすればするほど、己の想いとはかけ離れてゆくようで困惑した。

夫はリユートを傍らに置くと、フェリシアを膝の上に抱いた。そして、何もいわずに髪を撫でた。その手が優しく、自然と涙があふれそうになる。

ふと見上げると、夫はフェリシアを見つめて、幸せそうに微笑んでいた。

「フェリシアが、真剣に一生懸命に僕の事で悩んでいる。それが嬉しいなんて、聞いたらあきれるか？」

「本当に嬉しいと、思ったださるの？」

「ああ。自分は今は一人ではない。かつては先の見えない長い長い時間を、一人で過ごすと思うと気が狂いそうな孤独感に苛まれたが、君と一緒になら、先の見えない長い時間の先に、何か希望が見えて来そうな気がしてる」

「それにしても『御身にふさわしからざるを恥ず』って、どなたにふさわしく無いと感じてらしたの？」

「それって、焼き餅？」

「ええ、たぶん」

「フツッ、素直だね。知りたいの？」

「……駄目なら、あきらめますわ」

「いい。ちゃんと教えるよ……僕なんかがこのオルトの神の器なんかで、良いのになって、オルトの多くの人間の運命を左右するようなポジションに長い長い時間居座って居て良いのになって……そして、今まで僕と付き合った全ての女性を、僕自身の手で幸せに出来たためしがないなって、ちよつと落ち込んだ。……まあ、さつさと僕以外の男とくつついた二十人は、そこそこ幸せなはずだが」

「ハリカ様とイゼル様の事ですか？」

「うん。ハリカを断固として妻にする事も出来なかったし、イゼルの想いを長い間知らずに居た。どちらも不幸にしくなかつたが、結局はどちらも幸せに出来なかつた」

マークはかつて娼婦であつたハリカを、周囲の大反対を押し切つてまで正妻にする事は出来なかつた。そのハリカが懐妊してから、マークはイゼルに積年の想いを打ち明けられ、金の籠にも責められ、恩人で養い親のファジル王の意向もあつて、イゼルを妻とした。ハリカの産後の肥立ちが思わしくなく、イゼルが懐妊中も出産後も情緒不安定であつたのは、いずれも自分の所為ではないのか？ だから二人とも相次いで亡くなつたのではないのか？ もつと賢明な方法が有つたのではないか？ あるいはひよつとして……そこから先の想いはブロックされ、マークはフェリシアに思念を読み取らせる事を拒絶した。

ブロックを感じ取つたフェリシアは、酷く傷ついた顔つきになつた。その悲しげな赤い瞳を見て、ブロックを解除するかどうかマークは迷つたが、やはり、今のフェリシアに知らせたくないと思ひ直した。

「いつかちゃんと、フェリシアに全て打ち明ける」

ひよつとして、フェリシアの誕生にあわせて、二人は障害になら

ない内に命を落とすように予め定められていたのではないか？オルトの神の勝手な都合に、ハリカもイゼルもマークも、そしてフェリシアも振り回されたのではなからうか？そんな疑念がマークの思念の奥深くに存在しているのだった。そんな自分の想いをフェリシアが知れば、やはり傷つくだろう。銀の龍の器を出現させるためなら、人の命を何とも思わないような無慈悲でご都合主義のやり方に、怒りを覚えるだろう。だからと言っておそらく、自分は金の龍の器で有る事を止められないし、フェリシアも今更銀の龍の器の役割を放り出せないのだ。

自分の推論が正しかつたとして、それを知ったフェリシアは余計に辛く悲しいだけだ。そうマークは思った。

「本当に、いつかきつと打ち明けるから、どうか泣かないでくれ」

夫の真摯な声の調子に、フェリシアは夫の想いの深さを読み取ったのだった。

35 (前書き)

口に出せない悩みと、色気の関係について

夫は自分の第一子で初恋の人ハリカの忘れ形見であるパウル・ド・エスコバル、通称ポールを、しばらく帝国領内に留める事にした。キタイ王家の相続問題に勝手に絡められて、不愉快だけでなく危険な目にも合わされる可能性が大きかったからだ。

無論名目上は「学問・武芸を修めるため」という事にはなっていないが、皇帝がまだ少年のエスコバル公爵を保護するために下した処置である事は、明らかだった。

滞在先はフェリシアの実家、聖域侯の邸である。もともと、聖域侯夫妻は今亡き先の皇太子ユーグの追求を逃れる為にキタイ領に亡命していた頃、アルビの街で生前のハリカに色々世話になった。その縁で体の弱ったハリカに代わり、守役もりやくとして赤子の頃からポールの実質的な養育に当たってきたのだ。一時的に職務で中断された事もあったが、フェリシアが生まれる五歳の頃までは実の親さながらに侯爵夫妻とポールは、寝食を共にする状態であったのだ。

夫妻の實の娘のフェリシアが生まれて正式に皇后となり、クラウス自身が帝国の侯爵と言う守役もりやくには重すぎる身分となつてからもクラウスは皇帝の信任を得て、連日ポールの元に通い、ずっと父親代わりの役目を果たしてきたと言つて良い。

既に邸にはポールの腹違いの弟に当たる三子爵も引き取られている事もあり、「僭越ながら実の親子にも等しい仲」だと感じているポールを手元に引き取る事に、クラウスにもそして妻のロザリアにもいささかの迷いも無かった。

「御兄弟仲むつまじく、心穏やかに勉学と武術の研鑽に励まれるように」律儀な聖域侯夫妻は、心を砕いていた。

ただ、そうなってみると聖域侯夫妻の實の娘で、ポールの言わば継母の立場にあるフェリシアには、色々気詰まりな事が増えた。具体的に何かを禁止されたり、強制されたわけではないのだが……

少なくとも以前のようには何の考えも無くワープして、勝手に実家のキッチンで気晴らしをする、などという我が儘は出来なくなった。両親も夫もそれを禁じたわけではないのだが、フェリシア自身の「新しいお菓子を作りましょう」などと言う弾んだ気持ちが無くなったのだった。

代わりに宮中の花園で、リユートを練習する事が増えた。身近に夫と言う名手が居るのだから、自分が全く演奏できないのは或る種間の抜けた、不体裁な事のように思われた。そして何より音楽に親しむ事が、フェリシアのどこかささくれ立った気分を宥めるのだった。

夫が教えてくれたのは『花咲く命がある限り』と言う曲であった。ルネサンス期のフランスの曲だそうだが、穏やかな優しい音色を、目の前に花開いている季節の花々の放つ波動に同調させるような気分で弾くと、心の底から癒される。特にこんな風に夕陽のさしている庭には、ことにふさわしい様な気がした。

弾き終わると、拍手がした。夫が一日の職務を終えて、戻ってきたのだった。

「短い間に、本当にうまくなった」

「また、何か一曲教えて下さい」

「今日のその緑のドレスからの連想で『グリーンスリーブス』は、どうかね」

夫はフェリシアからリユートを受け取り、その曲を弾いた。哀愁

漂う美しいメロディーは聞き覚えが有る。

「ああ、他の楽器での演奏なら幾度か聴いた事が有ります。日本で音楽の授業で習ったような……リコーダーで演奏すると言う授業内容だったかしら……」

「なら、なおの事すぐに弾けるようになるかな？夕食の後、一緒に弾いてみよう」

夫はどうやら息子のポールの事は、預けた聖域侯夫妻に委ねている様で、むしろ現キタイ国王の不測の事態に備えて、すぐにファティマ姫の即位が滞りなく行えるような準備をしているらしかった。そして、それに先立って、ファティマ姫と、フェリシアにとっては同い年の叔父にあたるアングスとの正式な婚姻を行うようだった。

「アングス君がフェリシアみたいなやり手なら、放っておいても大丈夫なんだが……無理な話だよな。まあ、一応聖剣の主ではあるわけだし、多少の手助けならするから、どうにかやって行けるだろう」  
フェリシアは見かけ上八歳とはいえ、年功を重ねた魂を宿している。だが、アングスは優れているとは言え、掛け値なしに八歳なのだ。そしてファティマは四歳もアングスより年上で、通常の間人である。大丈夫なのだろうか？

「ファティマは気性のまっすぐな心の清らかな子だ。清らかな波動を放つ聖剣『シャボンヌ』の主とは非常に相性が良いはずなんだ。それに、どう言う訳かキタイ王家の姫君たちは、自分より年下の夫と結婚すると健康で穏やかに、夫とも仲むつまじく暮らして来れたようなのだ。縁起担ぎと言えばそうだが、アングス君が妻となるファティマより年下なのは、むしろ結構な事だと考えているよ」

その夫の言葉に、要らざる事を口走らなくて本当に良かった、とフェリシアは思った。

二人で夕食をとった後は、『グリーンスリーブス』を夫に教えてもらう。

「その弦はこう、そうだ、そんな感じだ。弾いて御覧？」

「こう、押さえるのですね？」

「ああ……うん……悪くないね」

どうにかこうにか弾けるようになれば、後は自習して弾きこむ事が大切だ。

「そろそろ風呂にしようか」

その言葉でリユートのレッスンは切り上げられ、二人は揃って浴室に向かう。

「不思議だな。こうして体を見る限り、フェリシアは八歳の女の子だ。酷く可愛らしくは有るけどね」

夫に体を洗われながら観察されている。その事がフェリシアの感覚を煽る。

「早く、大人になりたい」

「心は十二分に大人だよ。『グリーンスリーブス』のような、艶めかしい曲が似合うのだから」

「艶めかしい曲なのですか？」

「ああ。何通りもの歌詞があるが、そのいずれもが恋の歌だ。夫が有る貴婦人と騎士の不倫の歌だとか言う説が有力らしいけれどね。

アン・ブリーンとヘンリー八世に関係が有るとも言うようだ。いずれにせよ恋人の不実を嘆き、自分の思いを訴えるような、そんな内容の歌詞が多い。中にはストーリーカーの男を歌ったのかと思うような

歌詞も有る」

そして、その内の一曲を浴槽に浸りながらフェリシアに聞かせた。

Alas, my love, you do me wrong  
To cast me off discourteously.

(ああ、恋しい人、あなたは何と残酷な人だ、あなたは非情にも私を捨てた)

緑と言う色がかつてのイングランドでは「恋人との情事」「若い女性の奔放さ」「娼婦」の象徴で有ったなどと聞かされて、フェリシアは不快になった。

「草の上で男に押し倒されるイメージなんだろう、たぶん」

「私、大人になっても不倫なんて致しません」

「ああ、ごめん。君が不倫をするなんて思わない。だけど……ここ一月余りの内に、君はとても色っぽくなった。時折、僕の方を甘く恨むような視線で見上げて、小さな溜息を漏らす瞬間の表情、あれは、一種犯罪的だ」

「そ、そんな事仰つても」

「自覚無しか。無いんだろつな。僕の周囲のごたごたが、君に有形無形色々な形で、負担を強いているのだろう？ 違うかい？」

「それは……」

「口にすべきではない事は、口にしない。それが出来るのは、やはり君が本当は既に大人だからだ」

夫は深い口付けをした。

「君の体が大人であれば、僕はためらわず青草に君を押し倒して、思いを遂げていただろう。でも、出来ない。僕らが龍の器として得手勝手な神に運命を握られてしまっているのが、酷く癢に障るのは、ああした瞬間だ」

もう一度、深いキスをした。

「君が欲しいよ、フェリシア。全部欲しい、本当は、すみからすみまで。龍たちは僕の忍耐力を過大に考えているようだ。もう、頭がおかしくなりそうになるんだ、時々」

その夜の二人は「今許される限りの全て」の手段で愛を交し合ったのだったが……

「やはり、君が大人になる日が待ち遠しい」

夫のしみじみとした言葉に、フェリシアも同じことを思うのだった。

36 (前書き)

なさぬ仲の年上の息子たちとの関係は？

褐色の髪・緑の目のその少年は、すれ違っただけでどこの誰かフェリシアにはすぐにわかった。

「何かボルのチーズを使った美味しい物は作れないかしら？」

母のロザリアから相談されて、無碍にも出来ずフェリシアは久しぶりに実家のキッチンに向かったのだが、その時庭で、その少年に擦れ違ったのだった。髪の色が違い波動の強さがかなり違うが、基本的な骨格と云うか顔つきも体つきも実に良く似ているのだ、夫に。

「この様な所で失礼致します。皇后陛下。僕はブルサより参りましたパウル・ド・エスコバルでございます」

「初めまして、今から、母と一緒にボルのチーズで少しばかり菓子類を作りますの。よろしければ、キッチンのほうにも後でお立ち寄りください」

「それは、素敵ですね！きつと美味そうな香りが立ち上るでしょうから、すぐにわかりますね」

「ええ。御自分の鼻を頼りにおいでいただくのが、一番確かですわ、きつと」

「はい、ぜひ伺わせていただきます」

初めて会話を交わしたのに、初めてのよような気がしない。不思議な感覚だった。

「お母様、すぐそこで、ポールさんにお会いしました」

「まあ！それで、お互い自己紹介？」

「ええ。でも、初めて会う方のような気がしませんでした。お菓子の出来上がりの香りを目安に、おいで下さるようですよ」

その日は二種類の物を作った。一つは濃厚なチーズと香辛料や季節の野菜の細切りを彩りよくあわせて焼いた軽食用のケーキ、もう一つは季節の柑橘類を軽い風味のチーズと一緒に焼きこんだデザート用のパイだった。

「お袋様、焼けましたか？」

「今日も、すばらしくおいしそうな匂いですね」

そこには先ほど擦れ違ったポールの他、三人の子爵も揃っていた。

「お袋様、ですか？」

「ええ、そう呼んでもらっているの。無論公式の場では、侯爵夫人なんて四角張った呼び方ですけどね。大きな息子が四人も出来た気分、私も嬉しいの」

「立場から言えば、私が継母と言う事にはなりますけどね……」

「でも、フェリシアはこの四人より年下だし……母上と言うのもねえ……」

ロザリアとフェリシアの母娘と、ポール、ユクセル、サイト、オルハンの四人の皇帝の息子たちは、和気藹々と午後のティータイムを共に過ごした。ポールは十三歳、他の三人は十歳と言う食べ盛りで、その食べっぷりは見ていて爽快なほどであった。

「こつした塩味のケーキと言うのも有るのですね。実に美味しい」

「こちらの爽やかな甘さのパイ、堪えられないな」

「うん、もう、何しろ美味しい。めっちゃうちゃ美味しい」

口は自然にほぐれ、フェリシアを堅苦しく「皇后陛下」と呼ぶのもどうかと言う話に自然となった。

「皇帝陛下、いや、父上はお名前をお呼びになるのですよね」

「お立場は我々の母に準じる方で有られるが、こんなに可愛い方を母上とか母君とか言いづらいな」

「じゃあ、フェリシア様、いや、ちっちゃな可愛い方だからフェリシアちゃま」

「あ、それ良いね」

「どうやら、フェリシアちゃま」と呼ばれる事に決まったようだ。

「御三人は、以前なら硬い調子で皇后陛下としか呼んで下さらなかったけれど、随分、変わりましたね」

フェリシアも夫の息子たちと親しくしたい気持ちは、以前から有ったのだった。

「ポールが来てくれるから、ユクセルもサイトもオルハンも、元気に活気付いた感じね」

ロザリアの言葉を裏付けるように、三人が発言する。

「以前からもっとお親しい感じでお呼びしたい気持ちは有ったのです。でも、ねえ……色んな人が居ますから」

「僕たちはやつぱりその、貴族に成り立てて、気後れがありましたけど、ポール兄上がそんな雰囲気を変えて下さいました」

「ポール兄上は、その、僕らを楽しい前向きな気分にして下さる名人です」

「どうやらポールと言う少年は、そんな所も夫に似ているようだった。」

宮中の自室に戻ると、夫は戻っていてリユートを爪弾いていた。

「僕も新作のケーキとパイ、食べる？」

「ええ。もって帰りました。コーヒーを淹れさせますね」

女官に命じて、すぐにコーヒーを用意させ、持ち帰ったケーキとパイを夫にも食べてもらう。

「ほお、うまいな。僕はこの塩味のが朝食に食いたい。それはそうと、僕の息子たちと仲良くなれたかな？」

「皆さん、私を『フェリシアちゃん』と呼んで下さるそうです」

「良いね」

「ダーリン？」

「何だい？」

「ダーリンが母に話して下さったのですか？」

「逆だよ、逆。君の父上が何だか浮かぬ顔をしてたからさ」

「父が、ですか？」

「フェリシアの足が遠のいて、君の母上が寂しがつているってさ。僕の息子たちが気詰まりの原因なら、どうにかしたいって話になっただよ」

「まあ、そうだったのでしたか。御心配をおかけしました」

「君にしたら、夫が結婚前に他所で作った自分より年上の息子たちだから、気詰まりでも当然だよ」

でも、あの両親が慈しんでいる少年たちなのだ。きっと、自分が変にこだわらなければ、もっと早く打ち解ける事が出来たのかもしれない。

「ポールさんのおかげかも知れません」

「ポールの？」

「ユクセルさんも、サイトさんも、オルハンさんも言っていましたけれど、私と親しくしたい気持ちがあっても、気後れしたし、気持ちを表す機会も無かった……と。ポールさんがそう言うこだわりと云うか、意識の壁を払って下さったようなのです」

「ポールが一番、僕に似てるだろう？髪の色は違うけどさ」

「ええ。すれ違っただけで、すぐにどなたか分かりました。なんでも、母をお袋様と呼んだのは、ポールさんが最初みたいでした」

「ロザリアちゃん、喜んでたか？」

「四人の息子のお袋様になれて、嬉しいようですよ」

「今の君ぐらいの年頃から、ポールの母親代わりをしてくれたんだものなあ。昔から、一生懸命だったよ」

皇帝はロザリアの小さな「お袋様」ぶりを思い返していた。

「あの小さな体で、赤ん坊のポールを抱っこして歌を歌ってやりたりしてたよ。絵本を読んでやったり、食事のマナーを仕込んで、何でも好き嫌いしないで食べられるようにしてくれた。貴族の子供としての基礎教養と云うかそうした部分を仕込んでくれたのも、ロザリアちゃんなんだものなあ……いやあ、頭が下がる」

「父が守役をお受けしたから、当然だと思っていたのではないでしようか？」

「それもあるけれど、本気でポールの母親代わりやって来ていたな。ポールも懐いていた。今でもそうなんだろうが……」

「私が生まれて、ポールさんのお袋様を取り上げてしまったのですね」

「……そんな風に思わないで欲しいな……そういう見方は成り立つかもしれないが、君の御両親は懸命に君もポールも慈しんだ……そう思うよ」

「でも、私、オムツの頃からダーリンの妻ですものね……ああ……私、あの方からお父様も取り上げてしまった事になるのですね」  
「だから、そう言う考え方は、止めなさいって」

夫がどう言っても、自分が生まれる事で幼いポールは育ての母とも、実の父とも、縁が遠くなったのだと思う。

その事に、自分が責任を感じる必要は無い……そう夫は言いたいのだろうけれど、本当にそうなのだろうか？

「無駄に過ぎ去った事ばかり、あれこれウジウジ考えるのはよそう。ね？これから、もっとあの子達と仲良くしてやってくれ。そうそう、ポールはリユートをなかなか達者に弾くんだよ。今度三人で合奏でもするか」

でも、それでは……他の子供たちとの手前はどうかなのだろうか？不公平では？

「フェリシア？ねえ、フェリシア、あんまり難しい顔をしないでおくれよ。君は無理にお母様にならなくて良いんだ。ね？可愛いフェリシアちゃまで良いんだよ」

夫の困ったような顔を見て、自分の考えはどこか根本的に間違っているのかもしれないと思うが、何をどうすれば良いのか、戸惑うフェリシアであった。

37 (前書き)

夫の言葉を信じたいフェリシア

「フェリシア、ねえ、フェリシア……またあ……考えても同じ事をグルグルと考えていたね？」

「え？ええ」

「君やロザリアちゃんは限定的では有るけれど、時間をワープ出来る。でも、僕にも、ましてや普通の人間には過去の時間を思い返す事は出来ても、やり直す事は出来ないんだ。これから、出来る事をしようよ。ね？」

「出来る事？」

「君が、好意を持てる、付き合って行けそうだって感じた人間なら、十分やって行けるよ一緒に」

夫の息子たちは好人物ぞろい、フェリシアが変にこだわらなければ、確かに上手くやって行けそうだ。

「……ええ」

「もう、自分が『道具』だの、なんだの考え込まないで欲しい。そんな事より、君には出来る事が沢山有るんだ。もっと、前向きに、明るくね」

昼食後、夫は珍しく執務に戻る事無く、フェリシアと共にいた。

白い花が沢山咲いている場所は、オルトと言うこの世界自身の自浄作用が強まっている所で、今二人が居る小さな白い雛菊がそこから中一面に咲いている小川のほとりも、そうした場所のひとつだった。

後ろ向きな、ウジウジした気分には陥りやすいのは、嫉妬で感情を爆発させやすいのと同様に、銀の龍の魔力のもたらすマイナス効果なのだ。フェリシア以前の銀の龍の器たちは、誰一人この暗い気分

から自分を解放出来なかった。そのぐらい、強烈な作用だが、フェリシアの場合恵まれていたのは、夫が金の龍の完璧な器であった事だ。

「君は、大事な事を忘れてる」

「え？」

「確かに僕たちは龍の器にされてしまったわけで、その意味ではオルトを救うための道具なのかもしれない。だが、道具とはいえ自分の力が一つの世界を救うと見込まれたって事でもあるんだ。違うかい？」

「そう言う見方も出来ますね」

「おやおや、困ったなあ」

夫は苦笑しながら、さほど困ったようには見えなかった。

「良いかい？一番大事な点はそこじゃない。僕は君にプロポーズしたんだ。商店街でベビーカーの中に居た君に向かってと言う、いささか変則的な形ではあったけれど、君は受けてくれた。それが僕らの原点だ。そうだろうか？」

夫に抱きしめられると、問いに対する答えは肯定しか無いような気がしてくるのはなぜだろうか？陽気で前向きな金の龍の波動の所為……でも無さそうだ。

「テニスの混合ダブルスでグランドスラム達成より難しいかもしれない難事業のパートナーとして、僕は君が必要だった。そう、確かに最初は君の力が必要だったんだが……今は違う……今は男として、夫として君が必要だ。君はオルトにとって必要不可欠な存在なのだろうが、それ以前に僕自身にとっての唯一絶対の存在になったのだよ」

地球出身者としての仲間意識を煽る言葉だが、最後の方は素直に信じてしまって良いものか？たとえ良くはなくても、信じてしまいたい自分が語る、そう言う自覚は間違いなくフェリシアの中には、有った。

「何、抵抗してるの？こういう時は、押し倒したほうが話は早いが、そうするとズルいって、言われそうだな。確かにずるいか、クツ」  
「え？」

気がつくと、本当に青草と雛菊の上に押し倒されている。

「君の匂い、凄くそそるんだぞ。この頃は特にそうだ。この辺とか……」

「私はそそられると言うか、単純にダーリンの匂いが好きですけど……っあっ……」

夫は鼻をフェリシアの脇の下に突っ込んで暫く、動かない。

「フフフツ、心臓がドキドキしてるな」

「もう……汗ばんできてしまって、恥ずかしいでは無いですか……」

「こうしてると、僕らも哺乳動物の番って感じだな。発情期が近い

……ん？気に入らない？」

「少なくとも私の方はまだ、だいぶ間がありますよ。最低でも三年かそこらは、お待ち頂かないと」

「そういうこと、ぬけぬけと言うのが、八歳児じゃない所だよな」

「だって、インチキな八歳ですもの。あの時、商店街で誘われてもお断りしていたら、今頃はおいしいみたらし団子とねぎ焼きにありついてましたよ。小学生もおやつに良く買ってましたから」

「みたらし団子は知ってるよ。ねぎ焼きは知らないな」

「牛の筋肉とこんにやくの煮込みと青葱がどっさりのお好み焼きみたいなものです……ああ、食べたい！」  
「こいつ！意識を完全に食べ物に向けたな」

夫はクスクス笑い出した。

「だってえ……オルトにこんにやく、無いでしょう？　そもそも醤油も無いし……」

「身悶えするほど、うまいの？」

「私のソウルフードですから」

「soul foodはアフリカ系アメリカ人の伝統料理だろう。」

そういう場合は『故郷の味』とか言うほうが適切じゃないか？」

「住み慣れた場所ですけど、親がしょっちゅう転勤で引越したから、あそこの商店街は故郷かしら？　でもあの、ねぎ焼きはものすごく食べたいです」

「ああ、わかったわかった、用語についてうるさく言い過ぎた」

「まあ、それってダーリンの癖ですよ。別に、嫌いじゃないですけど、そういう所も」

「嫌いじゃないの？　好きでもないよね？」

「時々うるさいけれど、でも結局は嫌いじゃないかな」

「僕は、君が好きだよ。愛してる」

夫に深々とキスをされた。

「ず、ずるい」

「ん？　なんで」

「ねぎ焼きの事が、かすんでしまいました」

「だって、本当に愛してるんだ」

「……畳み掛けですか。はい。了解です」

夫は爆笑した。

「何だよ、それ、了解ですって」

「え？だから、あなたがダブルスを組む相手として、私が一番やりやすいと言う事です。それは。でも、異性に対する感情とは、異質の感情と信頼かも知れませんか」

「だから……最初はそれに近いものがあつたけれど、今は違う。愛してる」

「まあ、共同作業を行うチームメイトとしての信頼だって、確かに愛です」

「もう、それだけじゃない。違うって……ああ、言葉が一つ足らなかつたか」

「いえ、十分です」

「いや、足りない。一番大事な言葉だ……僕は君を誰よりも愛してる。君こそが僕の最愛の人だ」

夫の言う通りだったらしい。その言葉で、自分の中のどこか突っ張った部分が完全にほぐれたようだった。

「私、やっぱり、焼き餅焼きみたいです」

「知ってる。でも、君を誰よりも愛してるよ」

ああ、その『誰よりも』と言う言葉に、自分はとてとても弱いのだと、わかってしまった。

その想いを見透かしたかのように夫の行為は、だんだん大胆になつてくる。

「誰か来ます……っねえっ……」

「僕だけの愛する妻のこんな姿を、他の奴に見られるようなへまは

しない」

フェリシアは夫の言葉を、すっかり全部丸ごと信じてしまいたい  
と、強く願った。

今夜も夫はリユートを爪弾いている。地球で言う所のナイトガウンのような形状の物を一枚引つ掛けただけで、後は何にも、そう、本当に何にも着ていない。しどけないというか……恥ずかしげも無いと言うか……最近ではすっかり慣れたが……

本人が言うには、一番リラックスできる格好らしいが、フェリシアが目のやり場に困る事も珍しくない。どう考えても、そうしたフェリシアの反応を楽しんでいるとしか思えない事が多いが、口にすると、余計に面倒な気がするので、大抵フェリシアは視線をそらし黙っている。

波打つ黄金の髪と、もの思わしげな視線……明るい華やきのなかにそこはかかない陰影が感じられる。古雅な趣があつて、恥ずかしげも無いなりに、気品すら漂っている。確かに夫は、オルトでただ一人の皇帝でいわば現人神とも言つべき立場だが……何と云うのか、今夜の夫は伝説の中の偉大な大王とか、皇帝と言つ雰囲気だ。

「ええつと……いと高貴で偉大なる……」その後、どこかの国王の名前が入ったはず。フェリシアはこの曲をギターで演奏したCDをかつて持っていた。思い出せそうで、思い出せないのはちょっとばかり癪だ。

「ガリアルド、ガリアード、どっちだったかな」

雅やかで魅力的な響きの曲を聞きながら、フェリシアはしかめっ面になっていた。

「ガイヤルド・ガリアルド、英語でガリアード、どれでもOK。お

や、難しい顔をしちゃって」

「その曲が入ったギターのCDをよく聞いた記憶が有るんです。でも、曲名は全然思い出せません。とっても長い曲名だったと思うんですけど……」

「デンマーク王のガリアード、ああたぶん『いと高貴で偉大なるデンマーク王クリスチャン四世のガリアード』って言う長たらしい呼び方で知ってるのかな？」

「そうそう、そうです。でも、クリスチャン四世って、どんな王様か知りませんし、ガリアードが何かも知りませんけど」

「よしよし、先生がちゃんと教えてあげるから、額にしわを寄せるのは止しなさい」

夫は長い指で額のしわを撫でると、そこにキスをした。それから、膝の上にフェリシアを乗せて語りはじめた。

「十六世紀後半から十七世紀にかけての人だ。十一歳で即位して、その治世は約六十年にも及ぶが評価が分かれる。名君だという人もいるがね。確かに芸術や文化の擁護者では有った。さっきの曲はジョン・ダウランドが、自分を召抱えてくれたクリスチャン四世に奉げたものだから。色々興味深い人だよ」

建設事業では様々な影響を後世に与えた王様らしい。多くの街や建物を作らせたそうさ。

「日本人には北ヨーロッパの歴史は余りなじみがないです。評価が分かれるって、色々まずい事もあったって事ですね？」

「片眼を失いながらもスウェーデンとの戦いを指揮するなんて勇ましい人だったが、結局は制海権を奪われて、最終的には芳しくない成績だな。領土もかなり減らした。何でも子供が全部で二十六人居たらしい。母親が違う子供らの仲は悪かったし、妻は不倫を働くし、

自分も年若い愛人を作るし、彼の家庭生活はゴタゴタ続きだ」

夫の上に行く二十六人！それはすごい。凄いがゴタゴタと言うのは……

「まあ、それは、確かにまずいです」

「だよねえ。僕なんか身軽にすつきりさせて良かったと思うんだけど」と言う夫の言葉は、うなづける。

「語学に堪能で、明るく華やかな人柄で、勇気と責任感が有り多くの人をひきつけたが、短気で感情的だったと言う。晩年は政治も家庭も行き詰って、失意のうちに亡くなったと言う所かな。まあ、あれだ、僕にとつての反面教師だな」

「いと高貴で偉大なる反面教師？」

「そう。人間としては魅力的でも有る。でも、統治者としては頂けない」

王様の方は、それで凡そわかったが、ガリアルドとかガリアードが何かまだ聞いていない。

「フランスで始まって、十五、六世紀にはヨーロッパ中の宮廷で踊られていた三拍子のダンスだ。男女ペアを組んで跳ねて踊る、なかなか運動量の多いものだ。エリザベス一世はお気に入りの臣下とガリアードを踊るのが大好きだったんだよ。実際にはゆったりとした二拍子のパヴァーヌと快活な三拍子のガリアードを組み合わせる一対のセットにして踊る場合が多かったみたいだね」

それから、エリザベス一世の寵臣第二代エセックス伯爵が詩を書いたとも、歌っていたとも言われる『彼女は私を許せようか？』と言う聞き覚えのある曲を、また、弾いてくれた。これもジョン・ダウランドが曲を付けたもので、形式としてはガリアードになるらし

い。

Can she excuse my wrongs with  
Virtue's cloak?  
Shall I call her good when she  
proves unkind?  
Are those clear fires which va-  
nish into smoke?  
Must I praise the leaves where  
no fruit I find?

後に、色々専横の振る舞いが有り、遠征での失敗も有って、女王はかつての寵臣を死刑にせざるを得なかった。この曲は二人とも亡くなってしまう後に、楽譜が出版されたそうだ。

「物凄く、意味深だろ？」

「うーん、英語苦手です。Can she excuse 自体、彼女が許すのか、言い訳するのか……でも、女王が unkind なんですよね。不親切？薄情かな」

「そう。恋の炎も煙と消えうせちゃってね。女王としては許すんだけど、女としては言い訳なんだろう。多義語というか、ぼかしと言うか、相手が女王だからな。正面切って言いくいだろう。ましてや自分の失策、へまが原因なら……でも、嬉々として一緒に踊った仲の男である自分に対して、随分冷淡だって、言いたい気持ちは有ったはずだと思うよ」

「それにしても、ダーリンって理系の人なのに歴史も詳しいんですね。リユートの曲の事も良くご存知だし……」

「僕、中世オタクのグループで、活動してたからね。コスチュームも本格派でなかなかのもなんだよ」

「日本のアニメオタク、だけじゃなかったんですか？」

「うん。オタク心を刺激されれば何でも有りなんだ。僕はリユートを弾く宮廷楽士の役をやってた。まあ、縁があつて英国仕込の古楽器に詳しい先生と仲良くなった事から、どっぶり入り込んだんだけどね。ルネサンスの建築の研究をやつてもさ、中で暮らした人の事を知つてたほうが、理解が深まるし……まさか異世界に来て役に立つたりするとは思わなかつたけどね」

「今日のダーリンは何だか昔の『く大王』見たいな雰囲気だなつて、思つてたんですけど、考えてみたら、皇帝陛下なんですもの当たり前ですな」

「そんな、雰囲気出てた？日本のアニメで『ニコチン大王』ってキャラクターが居たな」

「プツ……」

いきなりで、フェリシアは噴き出した。顔に手足が生えたような体で、地球を「チタマ」火星を「ヒボシ」と呼び名古屋弁をしゃべる宇宙人。確かに彼も惑星の侵略を繰り返して九十九個の星を占領した、と言う設定だった。

「ダーリン、守備範囲広すぎです。私が言いたかつたのは、ダーリンが『いと高貴で偉大』な雰囲気だつたつて事です……うーん、王様より、リユートを抱えた大天使の方が似てるかも知れませんか」  
「フフフツ、何か照れるじゃないか」

金色の髪、緑の目、すばらしいリユートの音色。神様に近いのだから、大天使の方がお似合いだ……時には裁きの大天使と言う雰囲気だけ……フェリシアは、そんなとりとめも無い事を思っていた。

「じゃあ、サービス、サービス」

夫は更に、『エリザベス女王のガリアード』を演奏してくれたの

だ  
っ  
た。

39 (前書き)

もうすぐ始まる、と夫は期待してますが……

キタイ王家の後継者問題は十三歳になったファティマ姫と九歳のレオンハート公爵の長男アンガスを正式に結婚させ、ファティマ姫を正式に時期国王として内外に宣言した事で、一応の終息が図られた。

年老いた現国王ファジルは、事をうまく運んでくれた自分の甥で養い子でもあった皇帝の手を取り、涙ぐんで感謝した。

「陛下、感謝いたしますぞ。もう、これで思い残す事は有りません」  
「ファティマが無事に跡継ぎの子を生むまで、見届けて下さい」  
「さすがに、それは、かないますまい」

十三歳と九歳の夫婦が実態を伴うようになるまでは、まだ数年かかるだろう。ファジル国王は自分の寿命が残りわずかであると十分自覚しているようだった。

一方、エスコバル公爵であるファティマの異母兄ポールは、本人の希望も有って、まだ、聖域侯・クラウスの邸に滞在を続けている。だが新たにクラウスから引き継ぐ形で、キタイ王国騎士団長に就任した。かつて守役であったクラウスは、ポールにとって育ての親とも言うべき存在で、いまだにポールは非公式の私的な場面ではクラウスを「親父様おやさま」、夫人のロザリアを「お袋様おひやくさま」と呼ぶほどに、親しい。

「親父様とお袋様の神気が覆う邸で寝泊りする所為か、僕も少しワープができるようになりました」

どうやら、幾度も行った事のある場所同士でないと行き来は出来

ないようだが、帝国の首都オルテスの聖域侯邸からブルサの王宮にワープする程度なら、難しくないらしい。

その報告を受けた皇帝は、終息した後継者問題が、また息を吹き返したりすることの無いよう気を配る必要性を強く感じた。

聖剣の主で不死ではないにせよ、不老に近い状態にまでなりつつあるポールを「力の無いファティマ姫より国王にふさわしい」として担ぎたがる人種もキタイ王宮に巢食っているからだ。

「王室の後継者は何より血統を重んじて決め、政治の運営はより帝国との一体化を図る形で進めて行く事になる」とした宣言を、キタイの民衆は概ね受け入れているようだった。実際問題、帝国の行政機関は他国よりうんと効率的で、マークの即位後、ますます国民の生活は豊かになっている。その中に自分たちも組み込まれた方が今より豊かで安定した暮らしが手に入ると、キタイの民衆は見ているのだろう。

だが、古い貴族達は帝国に吸収合併されて、キタイ王国そのものが消滅するのは受け入れがたいようだ。

「私も、キタイが帝国の一部に戻ってもなんの差し支えも無いと感じますけど」

ファティマ姫のこうした考えは、老貴族たちを刺激し、内紛を誘発しかねないので、気長に世代交代を待つぐらいの考えでいるように、マークは言い渡した。確かに、キタイはかつて帝国の領土であつたのだが……

「概ね安定しているが、要注意って所だ」

そのように妻に説明すると、「キタイの貴族社会で世代交代が進んで、より一層帝国との交流が盛んになった状態になれば、住民投票でどうするか決めると言うのも良いかもしれませんが、ちょうど地球でEUの加盟問題でそんな手法を取ったりしてたじゃないですか」と言われた。

「なるほどね。今は無理だけど、二十年、三十年後なら十分に現実的なプランだな」

この妻は元が地球人なので、価値観や発想の基盤が近い所が有り、マークとしても相談もしやすいのだった。

「皇帝は将来的には英連邦の女王のような存在になるのかも知れませんがね」

それもマーク自身が考えた事と同じだった。他のものには出来ない相談、他のものにしてもわかってもらえない話、それが出来る相手がどれほど貴重か、マークは嫌と言うほど理解している。かつて転生したばかりの頃は、誰にも理解され無い辛さを常に抱えていた。だが、クラウドとロザリアに出会い、更にその娘としてかつての京子の魂が転生して妻となった事で、自分の精神的な負担は随分と軽くなった。不老不死などと言う一種呪われた境遇も、前向きに受け止められるようにもなった。

「さて、落ち着いたところで、風呂だね、風呂」

妻は自分を見て、時折顔を赤らめる。大抵は寝室で自分の肉体が露出過多の状態にあるときだが、それに伴って、入浴の時も以前は無心に洗われていたのに、近頃は心構えが違ってきたのか、雪の白

さの肌が淡いピンク色に色づいている。でも、自分一人で入るとも言わないから、不愉快だと思っている訳でもないのだろう。

「真っ赤になるフェリシア、可愛い」

耳元で囁いてやると、それこそ顔を真っ赤にするが、黙っている。何か言うと厄介な事になると警戒されているような気もするが、素直に身を預けているのだから嫌われてはいないと言う自信は有る。

「このごろ恥ずかしがりやが酷くなったのは、あのベッドの柱につけた印の所為かな？」

「それも有るかも知れません」

つい最近になって、マークは大きな天蓋付きのベッドの柱の一本に、ナイフで刻み目を四つ入れた。妻は目ざとくそれに気が付いて、一体何のために入れた印か尋ねたのだった。

「一番上は合衆国の女性の平均身長、二番目は日本女性の平均身長。下の二つは上の二つのそれぞれ九十五パーセントの高さを示している。この数字は目安程度だけ」

「……っもっ……ダーリンたら……」

顔を真っ赤にさせて、黙ってしまった。解説しなくても意味を悟られたと言う事だ。どうやら体脂肪のほうが正しい結果が出やすいらしいが、身長でも見当は付けられる。こういう反応は地球での知識が無いと有りえない。

「龍の器なんかになってしまうと、地球の常識は通用しないかな？ どう思うっ？」

「さあ……どうでしょうね……でも、目安ぐらいにはなりますか、

ね？」

「僕は目安にはなりそうだと思うんだけどね。まあ、そのぐらい待ち遠しいのさ」

こんなやり取りが有ってから、妻は「それ以降」の事を強く意識するようになったのかもしれない。

「ダーリンとの身長差が余りに大きいままだと、御一緒にダンスも踊りにくいじゃないですか」

「それでも僕は丁度二メートルと言う感じの君の父上より、随分低いよ。僕は小柄な女の子好きだし」

「体脂肪が十分あれば、早く来るってお医者さんに聞いた記憶が有ります。十七パーセント以上だったかと」

「じゃあ、お菓子をドンドン食べると、早くなるかな？」

「寸詰まりの子豚みたいになっても、知りませんよ。二十二パーセントを超えるとほぼ確実に来るみたいですね」

「ほう、二十二パーセントか。いや、良いかも知れないって、一度も僕、何が来るって言って無いけど」

「もう……わかり切った事を……」

妻の口からはっきり「初潮」と言う言葉は、最後まで出なかった。だが、既に妻は九歳だ。体脂肪が多めになれば、初潮の発来は思いの他早いかもしれない。

「フェリシアなら、ちょっとぐらいポツチャリでも、可愛いけどねえ」

真顔で言う夫に、妻は真っ赤になったまま、何も言い返さなかった。

40 (前書き)

夫の計画を聞いて、色々思う事

「ねえ、二十二パーセントって何？朝食を召し上がってらっしゃる時、皇帝陛下が皇后陛下に『どンドンお食べよ、何なら二十二パーセントだつてかまわないじゃないか』って仰ると、皇后陛下が真っ赤になられて『意地悪！』って仰ったの」

「あのお二人しかわからない、何か秘密の事なのかしら。でも以前パーセントって言うのは、異世界では百分の一のことを言うのだと伺った事があるわ」

「じゃあ、二十二パーセントは二割二分？でも、何が二割二分なのかしらね」

「なぜそれが意地悪なのかしら？」

「さあ、さっぱりわからないわね」

例によって、女官詰め所は噂話で姦しい。

夫が望む事を、フェリシアも望んでいないわけではない。夫婦と  
言う関係になつた以上は、それが自然で当たり前前事だからだ。自  
分の肉体が余りに幼い事が、齒がゆく情けないと感じた事はこれま  
で余りにも多かつた。

そつした精神の成熟度と肉体の不適合状態、大人の知能意識を持  
つたまま幼い体である事の辛さは、経験者であるものにしかり理解出  
来まい。夫はそつした辛い経験を共有できる唯一の男性なのだ。

フェリシアにとっての肉体上の母親で魂の子供とも言うべき存在  
のロザリアの場合、負の感情や孤独感が湧き上がらないように「京  
子」の魂本体が管理をした状態で成長したのであつた。保護も他者  
の管理も受けていない夫の魂やフェリシアとしての自分の魂とは事  
情が異なる。ロザリアの魂の波動の純粋な美しさは、女神の申し子

としての適性を意図的に高めた結果なのだ。だからこそ、地球人としての雑念や負の感情を多分に持ち合わせた夫とは、いまひとつ噛み合わず、女神の支えの力を純粹培養したようなクラウドと結ばれたのだ、とも言える。

地球人であった頃の夫は、本人の言葉を借りれば「辛うじて童貞ではない」程度の異性との付き合いしかして来なかったらしい。何よりも知的な好奇心に突き動かされて、熱心に研究者としての活動に励んでいたようだ。オタク的な様々な趣味も、もとを正せば深く正確な知識を追い求めたいという衝動から深みに嵌った様だ。

日本のアニメが好きだからって、完璧に日本語が操れるようになる人も珍しいし、ヨーロッパの近代以前の建築が好きだからって、あそこまで当時の人間の思考感情まで深く探ろうとする人も珍しいだろう。

「ダーリンって凝り性と言うか、調べて研究するのは、好きですね」

「うん。今の僕の最大の研究対象は、君だよフェリシア」

そう言う夫の視線はきわめて純粋な好奇心に突き動かされているようにも見えて、一体どう解釈しよう反応するべきなのかフェリシアには分からなかった。だが、愛情も無い存在に強い興味も好奇心も湧かないし、研究したいとも思わない……のではないかと思う。

フェリシアの一日の大半の意識は夫の事で占領されている。やはりそれは自分に取って、この夫がもはやかけがえの無い存在になっている所為だとも言えそうだ。

このごろ夫はフェリシアの体脂肪率にこだわっている。女の子は

体脂肪が十五パーセントを越える頃、初潮を迎えるが、安定した月経に適切なのは、体脂肪二十二パーセント程度の状態だと言う事が、夫の研究心を刺激したらしい。既に一番簡単な肌をつまみ皮下脂肪の厚さをはかり体脂肪率を推定する方法のために、ピンチ・キャリパーと言う道具まで作らせた。その計測結果をどのように全体の体脂肪の推定にあてるか、正しい計測ポイントや計測値をあてはめる数式がわからないので、地球で資料を探すらしい。

地球にワープするのは夫の力をもつてしても、気力・体力共に充実していないと難しいので、おいそれとは出来ないのだが、他の用事も合わせて足しに行く予定を立てたようだ。

「醸造とか発酵と言うような分野のネタを、もっと仕入れたいし、土壤改良の方法も探りたい」

やはり、オルトの食糧問題が、一番夫の中で大きな課題のようだ。

「私は、ご一緒できません？」

「金の籠に言われたのは、僕の場合オルトに僕の子供が出来、僕自身もはや地球の存在では無く、オルトの存在で有ると確定したからワープも出来るという事だった。それ以前は、無理にワープしたら宇宙の藻屑となって消滅するかもしれないと言われていたよ」

「では、私はお留守番なのですか？」

「うん。魂だけを移動させる事なら辛うじて出来たが、もう君は今の肉体で既に九年過ぎているからね……そうした荒っぽい方法は無理らしい」

はつきりとした言い方は避けたが、夫婦として実効の有る状態になつて有る程度の期間を過ぎすか、夫の子供を出産するかしないと、

どうやら地球へのワープは難しいようだ。

「普段、僕だけで政務をこなしてる間は君は留守番じゃないか。だけれど行き先が地球と聞くと、複雑かい？」

「ええ。お祖母様のお墓参りもなさいます？」

「うん。僕は祖母グランマのたった一人の孫なんでね」

その言葉を聴いて、自分ならどうするのか考えてしまった。夫は自分の考えを察知したようでは有ったが、問いたださなかった。

癌で亡くなった伊丹一郎、つまり「京子」の夫で有った人物の墓に、「オルトのフェリシア」となって久しい自分は参っても構わないのだろうか？それとももう、止めるべきなのだろうか。一郎と「京子」との間の三人の子供は全員結婚した。三人ともそこそこ平和に暮らしている状態に大きな変化が無ければ、盆・暮れと年二回の彼岸の墓参は欠かさないはずだ。そして、一郎の入っている墓に「伊丹京子」の名前と、本人が知らない戒名が刻まれている筈だ。遺骨の代わりに航空機の墜落現場から回収した焼け焦げた腕時計と結婚指輪が骨壺に収められているらしいが……

「いつか、私もお祖母様のお墓にお参りさせてくださいね」

「ああ、そうだね」

夫は……フェリシアの脳裏に浮かんだ事を察知しているはずなのに、踏み込まなかった。それが夫の優しさであり信頼の証でもある事は、フェリシアには良くわかつている。



夫の地球土産の醤油を使って、みたらし団子を作り、午後のお茶の時間に皆に振舞うと、夫の四人の息子たちも、両親も気に入ってくれたようだったが、いつも明るい雰囲気でいわばムードメーカーの役を果たすポールの暗い表情が、気にかかった。食欲も健啖家のポールとしては、かなり落ちているようだった。

「ポールさんは、何か深刻に悩んでおられますね」

「ええ。陛下には御相談したようだから、私からは何も言えないし……言うべきではないでしょうね」

ロザリアの気遣わしげな表情から、何事か深刻な事情がからんでいるとは感じたが、その件に関してロザリアはブロックをかけていた。

キッチンの片づけを終え、母と二人きりで茶を最後に飲んでから、宮中に戻るために庭に出た。

「ん？っ！」

誰かの強烈な感情が漏れ出し、フェリシアに一つのヴィジョンが見えた。一人はポールらしい。

「私の想いは御迷惑なだけ、厄介なだけ、わかっております。わかってますのに。恥知らずな私を許して」

「男としては嬉しい。だが、貴女は既に夫が有り、次期の女王だ。忘れなくてはいけない……」

「いや、いやです、忘れるなんていや！」

「だが、余りに危険だ。貴女の身の破滅ともなる。だが、それでもなお僕は……」

激しい接吻が男女の間で交わされ……そこで意識が途切れた

夫が有り、次期女王、身の破滅……これらの言葉から導き出せる人物は、一人しかいない。だが、先ほどの母・ロザリアの言葉が本当なら、ポールは既に皇帝である夫に相談をしたのだろうか？

夕食の時、夫は酷く疲れた様子だった。疲れたというより精神的に落ち込んでいる、と言う方が正しいかもしれない。フェリシアは何かを言うべき……とも思えず、自分自身で夫が地球から持ち帰った「本物のコーヒー」をうんと丁寧にドリップして、出した。

「ありがとう」

夫好みの薰り高いブラックコーヒーは、少し気持ちをほぐすのに役には立ったようだ。

「今朝は朝議が休みだったから、各地の神殿の告解室を回ったのだが、最後の三番目に会ったのは何とポールだった。フェリシアは、実家の庭でたまたま漏れ出したポールの意識を読んだのだな」

「ええ」

「なら、ここにおいで。さすがに僕も口で説明するのは、精神的な苦痛が大きい」

夫に促されるままに膝の上に身を預けると、夫の意識の内に有る光景が見えてくる。

そこは恐らくオルテスで一番古いとされる宮殿に近い神殿の告解室なのだろう。

ポールはどこかの邸の剣士とも見える地味な姿に身をやつし、告解室の床にひざまづいていた。

「ポール、どうしたのだ」

「僕はこのままでは恐ろしい罪を犯しそうなのです。皇帝陛下で父上である方に対して、怪しからぬ物思いを懺悔し、これからの身の処し方をお命じ頂くために、参りました」

「手を」

夫は差し出させた手を握り、ポールの意識を読んだ。

「ファティマは……いや、ファティマとお前はどのように激しい思いを互いに抱いていたのか。迂闊だったな。互いに強い好意を抱いていたのは知っていたが、あくまで兄と妹としての愛情なのだと思い込んでいた」

「僕は姫、いやファティマの意識はアンガス君に知られている可能性が高いと思います」

「そうだな、ふと手に触れたり、髪に触れるだけでもただの人間であるファティマの意識なら読めたらさうから」

「アンガス君の視線から、僕はそう感じます」

「……ふむ。今、アンガス君の意識を探った。お前とファティマの間の強い感情の存在は、既に十二分に意識されていて、大きな悩みの種になっている」

聖剣の主でもあるアンガスの意識は、似たり寄つたりのレベルのポールの力では読み取れなくても、夫の強い魔力ならばキーワードを手がかりに、相手に悟られる事無くかなりの部分が読み取れるのだ。

「お前の罪、とばかり言えない。寧ろファティマが最初に誘ったのだから……太古の昔ならいざ知らず、今の時代では異母であつても兄と妹の婚姻は有りえない。お前も理屈はわかっているのだよな」

だから、こうして告解室に居るのだろうから……だが、口付け一つでも、人に知られたら実に厄介だ」

夫は二人に最後の別れをさせた。

ブルサ王宮のかつての夫の摂政時代の居室には、ポールの母ハリカとファティマの母イゼルの肖像写真が並んで飾られているようだった。

そこにポールを連れて行き、ファティマの意識に強く呼びかけ、三人は亡くなった二人の生母たちの写真の前で話をした。

「ダーリン、ここから先は、私にお明かしにならなくても良いと思います。つまり、どう、結論付けられたのか、それだけをお教え頂ければ、もう、十分ですから」

「フェリシア」

「ダーリンが大層お辛い事と、私を信じて下さった事と、その二つは十二分に伝わるのですから」

「ああ、ありがとう、フェリシア……ポールの騎士団団長職を帝国内での病気療養を理由に解任し、ファティマにはアングス君の苦しき辛い胸の内を伝え、誠心誠意詫びる様に言い渡した」

夫は珍しく、涙をこぼした。少なくともそのような夫を見たのは初めてだった。

長男と長女は近親相姦の関係になりかねなかった……それを察知出来なかった自分を責め、そもそもそうした感情を子供たちに引き起こしたのは自分の責任なのでは無いかと責め、太古ならば公認しうる男女としての有り得る愛情の形を完全に抹殺して更に兄と妹を深く傷つけた事で責め……酷く、傷ついていた。

フェリシアは夫を抱きしめた。体が小さくて頭しか抱きしめられないのが、いかにも配偶者として番つかいとして力不足な感じがして、残

念では有ったが、それでも夫のまぶたにキスを落とす、涙を拭うぐらしいの事はしたかった。

「喜びを人に分かると喜びは二倍になり、苦しみを人に分かると苦しみは半分になるby ティートゲ ですわ」

「どこの誰か知らないけれど、うまい事言う人が居るねえ」

「凝り性のダーリンにデータを提供すると、ティートゲは楽聖ベーターベンの友達のドイツの詩人で、この言葉はカントに強く影響された『ウラーニア』と言う詩集に出てるんだそうですわよ」  
「フフツ」

かつて母親であった頃の記憶のなせる業なのか人間としての深い共感の所為なのか、泣き笑いをする夫がこれまでに無く愛しく大切だと、強く思うフェリシアなのであった。

## 42 (前書き)

せっかくの休みなのに……

「苦しみを人に分かつと苦しみは半分になる」と言うのは、どうやら本当らしい。妻が小さな体で自分を受け止め抱きしめようとしてくれた事で、これほどに気持ちが安らぐとは予想もしていなかった。

特別な二人だけの時間を過ごしたい。ふとそんな気分になり、妻に提案してみる。

「ねえ、久しぶりにソモリス山の禁足地に行かないか？」

妻は嬉しそうに微笑んだ。

「この所働き詰めでしたし、たまにはお休みなさらなくては。でも、今から出かけるのですか？」

「ああ。一緒にあの夜明けの景色が見たい。今日は<sup>レイバー・デー</sup>Labor Dayで休みだ。合衆国なら」

「勤労感謝の日みたいな祭日ですよね、アメリカの。夏休み最後の休日なんですか？」

「大体は、翌日から学校かな。バーベキューとか花火大会とかパレードが有る街も多いよ。それから、セールをやる店も多い」

「じゃあ、お昼かお夕食はバーベキュー？」

「僕はテリヤキ・チキンが食べただけだ。むしろ静かに過ごしたい」

自分が馴染んだテリヤキソースの味は妻に言わせると「アメリカ式で甘すぎ」「らしいが、作ってくれるテリヤキ・チキンは実に美味しいと思う」。

夏も終わりのはずだが、まだ結構暑い。エアコンなど存在しないこの世界では、植物で直射日光をさえぎり、家をもっと開放的にするぐらいしか、暑さ対策も存在しないので、夜も寝苦しかったりする。水風呂にでも入ると言う手もあるが、あの泉の清らかな水はきつともつと肌に心地良いはずだ。

考えてみれば去年も一昨年も、あの美味しいスモモとキイチゴを食べ損ねた。

近代的な税制の整備や国中を網羅した防災システムの構築のために、大層忙しくしていた所為だ。気持ちの余裕も足りなかったのだろう。その所為でファティマとポールの間の爆発的な感情の高まりを見逃してしまっ、などと言う失態を招いたわけだが……

「籠でも持つて行きましょうか？」

「何か作るの？」

「ダーリンのお好きなキイチゴとチーズのタルトでも。せっかく今は本物のコーヒーが飲めるんですし」

「タンポポコーヒーは十分美味いけれど、どうしてもカバーできないのはあの、コーヒー独自のアロマだな。めっちゃめっちゃあのキイチゴとチーズクリームが二層になっているタルト、食べたくなって来たよ」

寝室から裏庭に回って、フェリシアはいつもハーブや花を摘むのに使う籠を持った。それから首都であるオルテスで一番早く暗い内から店を開けるパン屋に寄って、気に入ったものを仕入れた。市場で仕入れなどを行う人々が既に仕事前に腹ごしらえをするために、かなりの人数買いに来ていた。

「このチーズとハムのサンドイッチ、美味そうだね」

「ハーブとベーコンを焼きこんだこれも、美味しそう」  
「じゃあ、両方とも買って、そろそろ行くところか」

ワープをすれば山頂の禁足地も一瞬で到着だ。

「まだ、夜は明けてないな。先にサンドイッチと果物で朝食と行くか」

夜明けの前後はさすがに、泉の水に入るのは冷たすぎる。

「このワープと言うのも良し悪しですよ。山を上る楽しみが無くて、いきなり目的地になっちゃいますから」

「何なら、今度身支度して、ふもとからキツチリ上る？」

「そうすると時間かかりますから……気楽に午後からフラリなんて感じで行くのは無理ですね。それに、オルトに登山の装備が有る訳じゃ無し、まあ、良いのでしょうか」

「そもそも、オルトの間には登山が楽しみみて感覚は無いよね。宗教的な意味合いの巡礼かな」

「巡礼ですか。その神聖な場所にいるのが私たちじゃ、何だか申し訳ないような」

「僕はオルトにおける『最大多数の最大幸福』の為に、日夜粉骨碎身努力しているとは思うけどなあ……」

「働き者なのは、確かですよ」

「でも、自分が信仰の対象って言うのは違和感が有りすぎる」

「ダーリンも神様扱いは、お嫌ですか」

「いやだ。僕は神様じゃないから。だから君にこんな事もしたいし」

「っ、麓から誰か、上ってこないでしょうか……」

「いざとなったら、結界を張るよ。ほら、まずは、食事食事！」

「もう、ダーリンが先にちょっかいをかけてらしたくせに」とむくれるフェリシアに甘く熟れたスモモを手渡すと、いっぺんにご機嫌

が直った。キイチゴも少し集めて、買ってきたサンドイッチやパンを食べながら摘む。

「おっ、始まったな」

「綺麗……」

山々の岩肌がまず、暗紫色から赤くなり、更にピンクから金色に変化する。

「レイバー・デイの花火の代わり、って思ったんだが、それより凄いや」

「日本の花火大会は大抵夏休み期間にやりますけど、あんな感じかしら？」

「花火自体は日本の有名な花火大会の方が、豪華だね。でも、その頃からフットボールのシーズンが始まるし、地域全体が賑やかな感じがするんだ」

「フットボールって、アメリカンフットボール？」

「そうそう……っ！」

「ええっ?!」

巨大な白い光の玉が二人の目前に現れ、急にはじけた。

「やがて、全てを見る者・全てを聞く者、現れん。オルトはアサドとラブアの番（つがい）を求める」

頭の中に直接響く不思議な声。

マークもフェリシアも女神の声に似た声であったと感じ、すぐさま女神に尋ねたが、女神は何も知らないと答えた。少なくとも、今

現在の自分の声ではないとも……

「巨大な光の中に、人影が見えたな」

「私には二人の赤ん坊のように見えましたが」

「僕も、そう見た。あれはやはり女神様の声に思われるな」

「御存じない、少なくとも今の女神様は……と言ふ事は……」

「過去なり、未来なりの女神様の示した予言、なのだろうか？」

「そうだと思います。『全てをみる者・全てを聞く者』とは……聖剣に関する事柄でしょうか？」

「サーミアは『全てを聞くもの』、バスイールは『全てを見るもの』と言ふ意味が有る筈だが……」

サーミアとバスイールは、かつてフェリシアの両親が謎の古文書の断簡から見出した名前だ。世の中に知られていない聖剣の名前ではないかと推測されてきたが、確かな事はわかっていない。

「アサドとラブアの番つがいですか？えええつとライオンの番でしょうか？」

「アサドが雄でラブアが雌だな……やはり、未知の聖剣なのだろうなあ……」

「父の『パンテラ・レオ』とはどういう関係になるのでしょうか？」

「さあなあ。ライオンつながりで、縁は深そうだが」

「お休み気分、吹っ飛んじやいましたね」

「全くだ」

証券取引所だつてレイバー・デイは休みなのになあ、とぼやくマクに、妻は「お好きなタルトを焼きますから、キイチゴを集めましょう」と言つて微笑むのだった。

### 43 (前書き)

普通の人類の枠を踏み外すのも、一人なら孤独でしょうが、二人一緒なら耐えられるかも……

謎の光の玉の出現で新たに分かった『アサド』と『ラブア』、そして相変わらず謎だらけの『サーミア』と『バスイール』について少しでも情報を集めるべく、皇帝はその日の午後はずっと、帝国中のめばしい聖剣の研究者や伝説・神話の学者の間を回ったが、これと言って収穫も無かった。謎が深まり、疲労感が募っただけと言っても良いぐらいだ。

「ダーリンのお休みがふいになっちゃって、可愛そう」と言って、午後のコーヒータイムの為に妻が作ってくれたタルトは実に美味かった。クリームチーズの部分は通常のニューヨーク・チーズケーキの作り方らしいが、それに重ねてあるキイチゴが艶々と宝石のように輝いて綺麗だ。

「このタルトは味も凄く好きなんだがこのキイチゴのキラキラした美しさが、見ているだけで嬉しくなるよ」

「オルトで手に入る材料で作ったグラサージュと言うか、艶出し用のシロップを使います。チーズの部分はニューヨーク風にしっかりと甘めです。気に入って頂けて良かった」

普通のほかのベリー類で作るより、ソモリス山のキイチゴで作るともっとおいしそうだと言う妻の予想は正しかった様で、いつもより更に美味しい。

「キイチゴがなっていたのが普通の場所じゃないですから、食べるとか特殊効果でも発動するかしら？」

「うーん、どうかな、むちゃくちゃ美味かった以外、まだ何もわからん」

夕食の時、タルトのおこぼれを試食した女官達が面白い事を言った。

「靈山のキイチゴの所為か、急に今までの自分の至らなさが気になりました」

「私は親に手紙の一つも書いていなかった事が気になりました」

「家に戻ったら家族にもっと優しい言葉をかけようと思います」

つまり、自分の言動で訂正すべきところを強く意識する効果があるらしい。

「ダーリンはそんな副作用、出ましたか？」

「特に感じないな。だが霊的な力が強まった気もする。まあ、気もするというだけだが」

「あの、光と二人の赤ん坊のヴィジョンの出現を読み解け、と言う事なのかしら。だって、今日どうしてもキイチゴのタルトを作って、ダーリンと御一緒に頂かないと『絶対にいけない』みたいな強迫観念めいた感覚が、ずっと有ったんですもの」

「フェリシア自身の副作用は？」

「よくわかりませんが、夕食の後、つかり損ねたあの靈水に私達二人で浸った方が良いつて気がします」

「ふーん……じゃあ、こいつを食ったら、もう一度行って見るか」

「危険な事は無いと、感じるのですけれど……」

「けれど？」

「これ以上は、また、二人きりのところで」

メインがテリヤキ・チキンの夕食は、なかなか美味かったが、妻の赤らめた顔に期待が膨らんで、正直言っただけ途中からは食べ物の味よりもこれから、泉で起こり得る何事かのほうに意識が向いてし

まう。

夕食後、寝室に引き取ったわけだが、浴室に行く感覚で良いのだろうか？

「タオルとバスローブの類をしつかり持って行けば、OKじゃないですか？」

「一度シャンプーとソープは使ったし、あそこで使うわけにも行かないし、こんなものか」

「ダーリンと御一緒に泉に漬かる事が、たぶん大事なんだと思います」

「危険は無いんだろうがあんまり、疲れる展開じゃないと嬉しいなあ」

今夜は新月で泉の水が、仄かに光を発しているのが良く分かる。

「以前来たときは満月だったから、気がつかなかったよ」

「とても神秘的な感じがしますね」

何と衣類を全て脱ぎ去った妻の体からも、仄かに光がさしているのだ。宮殿では一晩中部屋に小さい明かりをともしたまま眠っているので、新たな発見だった。

「フェリシアの体からも光が発している」

「ダーリンのお体からもですわ……」

妻は自分からそのしなやかな手を差し伸べたので、抱きしめてキスをした。

「深海の生き物が洞窟の中の生き物みたいで、変なんじゃ無いかと思っただけれど、真珠色と言うか、とても神秘的な淡い光だ。綺麗だな」

「呼吸につれて、色が変わるかななんて思いましたけど、どうも一定みたいですネ……新月でもお顔がはつきり見えて、得した気分です」

「確かに、得した気分だ」

更にもう一度、深いキスをする。小さな滝の水音と妻の心臓の音と自分の心臓の音、少し荒くなってきた互いの息遣い、それ以外何も聞こえない。

「僕らやっぱり、通常の人類のカテゴリーからはみ出した存在に變化しつつあるのかな？」

「SF小説のネタめいてますね」

「権威あるSFの賞であるヒューゴー賞は、例年レイバー・デイに授賞式だよ」

「じゃあ、私達の数奇な運命もヒューゴー賞もの、かしら？」

「僕は冒険よりロマンスの要素がしつかり欲しいな」

「私は、ロマンスだけで十分です」

「相手は僕だけだよ。良い？」

「私は大丈夫です。でもダーリンは？ダブルヒロインとか、私はイヤです」

「フフツツ、君が僕の『最後の女』なんだと思ってる」

「……それ、凄い殺し文句だって自覚なさってる？」

「おや、そうなのか？」

互いの体だけが仄かに光っている。不思議な眺めだと思う。

「ねえ、自分一人だけがこんな風に光っているとしたら、やっぱり

孤独で辛い感じがしたかもしれないね」

「そうかもしれませんが。通常の間人とは違う何かに変化してるって事実が、確かに一人では受け止めがたいかもしれません」

「ここに来ようと何となく思ったのは、何かエネルギーなりパワーなり補充しに来たって事かな？」

「あの、謎めいた予言と言うかメッセージを完全に読み解くのに、私達のパワーアップが必要だって事かも知れないって感じたんです」  
「ああ、なるほどな。かつて君の両親が『サーミア』と『バスイール』の名を探り当てる事が出来たのは、聖剣の力を行使できるようになったからだろう。物理的に存在しても、ある種のパワーが足りない」と謎に迫れないと言う事は十分に考えうる話だ」

霊水だとされるこのひんやりした水にも、自分達の特殊能力を増幅する作用が有るのだろうか？

「オルトには幾つもの聖地とか禁足地が有りますね。その場所ごとに何かエネルギーやパワーの性質が違うとか、でしょうか？」

「そうだなあ。じゃあ、これから少しずつ、暇を見てそう言うパワーポイントと思われる場所を巡ってみよう」

「何だか楽しみが増えました」

「そう？」

「だって、ダーリンとの秘密の共同作業ですもの」

「ああ、そう考えると確かに楽しみだ。でもね……僕はとりあえず、こんな共同作業のほうが良いな」

「……っあっ……」

「嫌かい？」

妻は返事の変わりに、自分から積極的にキスをしてきた。



44 (前書き)

ブッシュミーンズです

「こうして寝室は真っ暗にしてしまった方が、良いねえ」

ソモリス山の霊水を浴びた後、さすがに裸同然のなりで夜明けまでいると寒いので寝室に戻った。部屋の明かりをすっかり消してしまっても、互いの顔や体の様子ははっきり見て取れるのだ。

「ねえ、僕の小さい奥様、可愛い君の体を今夜はちよつとばかり念入りに研究したい気分なんだ。いいかい？」

「もう、幾度も研究なさってますのに」

「でもこんな風に、闇の中で優しく光る不思議な光景は初めてだから、とても新鮮だ。いいだろう？」

「……嫌って、申し上げて、結局ダーリンはなさりたいように、なさるのでしょう？」

「本当に、嫌なの？ん？」

夫の手が乳首の周辺で戯れだすと、妻の息遣いは甘いものに自然、変化する。

「僕達が共寝をするようになって、もう、九年たつんだねえ……ああ、本当に綺麗になつたな」

見た目は平らな胸だが、触れるとかすかに乳房の始まりかと思われる柔らかい弾力が感じられる。愛らしく頭をしつかりもたげている乳首に、夫は熱のこもったキスをした。妻の喉から濡れた呻き声が搾り出されると、夫は再び激しいキスをする。そして、唾液を送り込んでそれを妻に飲ませながら、抜かりの無い指は乳首から次第に下に移る。

「愛してるよ、フェリシア」

若い妻は甘い呻き声を上げながら、膝頭を完全に緩め、夫の指の侵入を許すのだった。夫は更に熱のこもったキスを繰り返し、秘められた部分を技巧を凝らして愛玩する。

「うんと小さな頃から、感じやすかったけれど……柔らかくて、たっぷり濡れて……実に素敵だよ、ねえ、ハニー……ここをすっかり僕のものに出来る日も、そんなに遠くは無さそうだ」

「はっ、恥ずかしい」

「とても素敵で感じやすいつて、褒めてるんだよ……フフツ……一度、いかせてあげようか？ん？」

妻は無言で頷くと、期待をこめた表情になり目を閉じる。夫の指の巧みな刺激に、しとどにほとばしりを吐きかけて腰を蠢かせ、悲鳴を上げて意識を飛ばした。

夫は若い妻の艶かしい痙攣を見守りながら、その愛らしくも淫らかな表情を楽しんだ。そしてまた、キスをして妻の意識を呼び戻した。

「クククツ、本当にいつちやったな。紛れも無いバージンなのに。実に天晴れな九歳児だよ。将来有望だね。僕にこんな風に弄られて、そんなに気持ちよかったかい？」

妻は無言で夫の首にしがみついた。

「ねえ、フェリシア、僕の事も可愛がってやってくれない？」

夫は火照ったままの妻の耳に囁くと、妻は更に体中を火照らせて、頷いた。

「体を起こして、君の可愛い手をここにおくれよ」

夫は上体を起こすと、妻の手を左右それぞれの場所に導いた。妻は大切そうに愛しげに夫の器官を愛撫していたが、夫の表情と反応を確認すると、更に大胆さを増し、無邪気に弄び始める。

「……っ全く、もう、驚いた。初めてなんて思えないぞ。ああ、キスしておくれ、良いかい？」  
「ええ」

喉に痰のからんだような小さな声で、妻は応じた。未熟では有ったが積極的に情熱的ですからある口技に、夫は強烈な喜びを感じた。そして、夫自身が驚く程の堪え性の無さで爆ぜたのだが、妻は陶然とした表情を浮かべて口内のものを飲下し、更に周囲にキスを繰り返した。するとたちまち、逞しさを取り戻したのであったが……

253

「フェリシア……全くもう、なんて子だ」  
「でも、私はあなたの妻ですもの。それに、頂いてしまった方がきつと気を巡らせるのには良いと思います」  
「はあ……」

夫は苦笑した。やはり、この妻は九歳児の姿をとってはいるが、ずっと大人なのだと思いついた。

再び体を清めるために、一緒に風呂を使った。浴槽につかりながら妻の体を膝に乗せていると、ごく自然にまた、互いにキスを交わす。

「フェリシア、君も体の条件が許せば、僕が欲しいの？」

妻は真っ赤になつたが、頷いた。見え透いた嘘を互いに言いようが無い関係ではあるが、このような答えにくい質問にすぐ肯定の答えをする女と言うのは、珍しいのではないかとマークは思った。

「正直なんだな、フェリシアは。良い子だ」

「もう、九年ですものね……待ち遠しいのです……私も」

「体脂肪の話をする、怒るから、そうでもないのかと思つていたよ」

「何だか、ダーリンのおっしやり様が意地悪かったり、いきなりでビックリしたりするからです」

「今夜みたいな流れだと、素直に言えるの？」

「どうもそのようですね」

その翌日、妻は夫に恥ずかしそうに打ち明けた。乳房がはつきりと膨らんで来たらしい。花園で二人きりの午後のコーヒータイムの際にそれを聞いた夫は、服の合わせ目を外して、思わず触つて確かめた。

「おお、本当だね。ソモリス山の効果か？」

「ええ。他の禁足地や聖地を、御一緒に回つた方が良いのかもしれない……なんて思います」

「ふうつむ」

「そして、それが、あの謎めいた予言の解説に繋がると思いませんか？」

「そうだなあ……何だかオルトの神々に、良いように振り回されているような気もするんだが……」

「確かに、そういう一面は有ると思います。でも、お互い、夜でも光る奇妙な体になつてしまったのですし、龍の器である事を受け入れて生きているのですし……今さらでは無いですか？」

「男に胸を触られたままで、そんなに落ち着いて話をするなんて、全く、何て子だろっね、クククッ」

「……だって……ダーリンが触れて下さるのは、異常事態でも危険でも無いんですもの……」

「おやおや、人を人畜無害な男のように言っなんて、ちょっとばかり気に入らないな」

夫はいきなりフェリシアの体を抱え込むと、寝室へワープした。

「ダーリン？」

「ここなら、ゆっくり教えて上げられるよ。僕はそんなに安全な男じゃないってね」

「……ああ……どうなさいますの？」

「じつするのさ」

マークはさっさと自分の服を脱いでしまい、驚くほどの早業でフェリシアの衣類もすっかり剥ぎ取ってしまって、ベッドに放り上げた。そして、妻の体を組み敷いた。

「さあ、どっ？」

「手際が良くていらっしやる」

「クッ、言う事が憎たらしいな。こんなに可愛いのに……好き勝手にしちゃうかもしれないよ？良いの？」

「良いのです。だって、私はダーリンの妻ですし、ダーリンを愛していますから」

「クククッ、負けた。僕も愛してる。フェリシア……うんと気持ち良くしてあげよう」

その後、夕食の時間になっても皇帝夫妻は現れなかったので、ちよっとした騒ぎになったので有った。

## 45 (前書き)

カフェの常連客である老学者の研究成果とは？

「いやあ、お二人ともお人が悪すぎますぞ。私は今日まで何も知らずに四年も通いつめていたのですからな」

「はあ、どうもすみません。ですが宮中なんぞ疲れるだけでしょし、我々の身分が何であれ先生がこの店を気に入って下さったのは事実のようですから、こちらでごく自然に寛いでいただいで、お話を伺えたらと思っております」

カフェ「金と銀」の常連客・ティボーはフェリシアの両親、さらにはフェリシアの祖父に当たるレオンハート公爵にとっても学問の師匠に当たる人物で、長年この帝国で最も権威有る大学の学長を勤めていたが、このカフェが出来た頃に退職した。

「街中の食べ物屋の御主人にしては、お人柄も筆跡なども随分と高雅な雰囲気ですらうしやると思っておったのです。御事情があつて身をやつしておいででの異国の王族でもいらつしやるかとは思つてましたが、自分の国の皇帝陛下で有られたとは。私の目も節穴ですな。髪と目の色をお変えになる事ぐらい、不老不死の方々にはたやすいという事は知っておりましたのに」

「先生がおいでの際はフェリシアを店に出しませんでしたから」

「ああ、ロザリア姫に実に良く似ておいでだ。お美しい。しかも母上より神気がお強いのですな……確かに、皇后陛下のお顔を拝見すれば、すぐに御二人の御身分も分かりましたでしょう」

「お詫びの印に、と申しては何ですが、ソモリス山のスモモのジャムを使ったパイとお勧めの紅茶です。フェリシア自ら実を集めジャムをつくり、パイを焼きました。どうぞお召し上がりください」

「靈山のものとおえばますますありがたいですな。頂戴いたします。

……うむ……いや実に」

小柄な老人はパイを一口頬張ると、何とも嬉しげな表情を浮かべていたが、やがてすばらしいスピードでかなり大ぶりの一切れを、全部平らげてしまった。

「あ、いやはや……どうも、とんだ失態を」

身分を伏せているとは言え、神の器たる貴人の前で無作法なまでのがつつき振りを披露してしまい、我に返った老人は恥じ入って顔を赤らめた。

「いえいえ、気に入って頂けたようで、作ったものにとってはそれが何よりうれしい事です」と言うと、フェリシアはにこやかな表情で、ティボールのカップに新しく淹れた茶を注いだ。

老人は恐縮した表情で一礼したが、やがてつるりと顔をなせて、表情を改めた。

「私のような年寄りに身分をお明かしになり、霊山の仙果を用いた取って置きのパイまで御馳走下さって、お話になりたい事柄とはいかなるもので御座いましょう？私の好き勝手にやっております暇つぶしが、ひよつとしてお役に立つのでしょうか？」

「先生、さすがでいらっしゃる。こうして面と向かって言葉を交わすのは、ほぼ初めてですが、考えて見ましたら我々は結構古い文通仲間でありましたよね。まあ、キタイにフェリシアの両親を迎え入れる以前の事ではありますが」

「さよう、そのような事もございましたな。もう、かれこれ十五、六年前の事になりますな。オルトにおける食料の増産について、真摯に御研究あそばしてましたな」

「今もそちらの方は続けておりますよ。もっともかなり若い人材が

育つてくれて、大きな力になっておりますが」

「ははあ、他の者に委ねられる事は委ね、御自身は余人の行い難い事に専念されようと言うお考えでしょうか？」

「まあ、それが理想ですが、国家の運営というのは実に様々な要素が絡みますから、すべてまだ任せきれないのが痛し痒しという所です」

「ははあ……なるほど……それで陛下が必要とされておられるのは、聖地に関する研究でしょうか？」

「お察しの通りです。ふと気晴らしにフェリシアと出向いたソモリス山の双龍のための禁足地で、奇妙な現象に遭遇いたしました」

マークは個人的な事情には立ち入らない範囲である不思議な光と二人の赤子と思われるヴィジョン、そしてその時初めて知った『アサド』と『ラブア』と言う未知の聖剣の名前と思しき言葉について伝えた。

「さよう、あの『サーミア』と『バスイール』の名前を聖域侯御夫妻が見出した折の状況からすると、より強い聖剣と出会ったためには強い神気をはらみ力を行使できる存在で有る事が必須条件なのだろうと思に至りました。かのジェマル殿は生前熱心に聖剣について研究なさいましたが、頂戴した最後の手紙には神気や力がないものは自ずと限界が有ると書いておられました。大学者であっても、ただの人間で有る限界からは逃れようがなかったと言う事ですね」

「ですが我々はジェマル先生の基礎的な御研究の恩恵を被っておりますよ」

「さようですか。いやあその御言葉、ジェマル殿がお聞きになったら、大いに喜ばれたでしょう」

「学問は、一足飛びに進化するものではないし、一見華々しく見える成果の陰に、気の遠くなるような地味で目立たない努力の積み重ねが存在するものです。少なくとも私はそうした事実を承知してお

りますよ、テイボー先生」

その皇帝の言葉に小柄な老人は、嬉しげな微笑を浮かべた。

「ならば、私の地味な努力の積み重ねも、お役にたちましようかな？」

「大いに有益ではないかと考えております」

「ならば……」

小柄な老人は「いわば余技としてはじめた」ものの「実はオルトの成り立ちと救済に大いに関わる」と確信するに至った聖地とそれぞれの場所の持つ力の違いについて、熱心に語り始めた。

「ええ、ここに私のまとめました地図が御座いましたら、更に話が進めやすいのですが……自宅の書斎の机に置いてきてしまった……」

「では、我ら二人で先生を御自宅の書斎にお運びしましょう」

「ワープとか瞬間移動とか言われる方法ですか？神気の無い私を御運びになるのは無理なのでは？」

「そのパイの特殊効果で、一定時間内なら、おそらく可能です」

驚き喜ぶ老人を抱えるようにして、三人一緒にその書斎にワープした。

「いやはや、取り散らかっております」

「学者の書斎に書物や資料が山積みなのは、当たり前的事了です。どうか御気になさらず、説明をお続けください」

「では、そうさせて頂きましょう」

老学者は少し緊張した時の癖で、また顔をつるりとなでてから、使い慣れた己の机に研究成果を書き込んだ地図を広げて説明を始め

た。

## 45 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

テイボーは自発的な研究の成果を熱心に説明した。

地図の上にはテイボーが聖地あるいはそれと同等の重要性を持つと思つた禁足地・遺跡・廃墟・洞窟などの所在地を書き込んで有る。

「古文書などを頼りに場所を割り出しましたこれらの場所を、こうして地図の上に書き込んで見ますと、オルテスを中心とした円と、女神の台座を中心にした円、二つの組に分ける事が出来ます。まあ、私は仮に円と申しましたが、それぞれ五箇所づつで、比較的形の整つた五芒星（ごぼうせい）の形とも見えますがな」

分布状況から見て確かにテイボーの仮説のように、二つのグループに分ける事が出来そうだった。

「もつと他にも見つかる可能性は、無いのでしょうか？」

「有るのかも知れませんが、神気も無く特別な力も無い人間としては、この程度が精一杯ですな」

「先生が特に双龍に縁が深いとお考えなのがソモリス山の他に、アナバルザの隠された温泉、カプスユの廃墟神殿ですか」

「ヤカジユクは金の龍だけ、ウルチュナル島は銀の龍だけなのですね」

二人に問われて、老人は答をまとめるためか、顔をまたつるりとこすつた。

「はあ。アナバルザの禁足地は今埋もれてしまつたか、隠されてしまつた温泉が有つたと思われませんが、常人にすぎない地元の神官では探し出せないようです。カプスユの廃墟神殿は大きな岩の封印

が御座いまして、そこから先は常人では入れないのです」

「そうした封印を解除したり、不明な物を探し出すのに神気なり力なり、聖剣なりが必要らしいと言う事ですな」

「さようでございます。面白いのはヤカジユクとウルチュナル島の性質ですな」

「なぜ片方の龍だけなのかしら……奇妙ですわね。双龍揃って訪れるとどうなるのでしょうかね？」

「ヤカジユクは金の龍しかその時代の皇帝が認識していなかった、銀の龍も時の皇帝の中にいたのが銀の龍だけだった、そうした時代の遺跡らしいです。それぞれの龍に呼びかけるためのものではあるまいかと思いますが……」

「たとえば女神の台座のように……ですか？」

フェリシアはあどけない表情でじつとテイボーを見つめる。

「はあ。仰るように、本来は台座が有ったのかもしれない。だが、今はそうした痕跡すら無いのですよ。ヤカジユクには『金の龍が降臨する場所である』と言った文句を掘り込んださして由緒も無さそうな石碑が残るだけ、ウルチュナル島に至っては海に枝を突き出すオレンジの大木が一本有るばかりです。共に地元の古い言い伝えだけが頼りのような感じですか」

皇帝も考え込んでしまう。

「ヤカジユクもウルチュナル島も、我々夫婦が揃って行くとどうなるか……」

「真の龍の器のお二人に危険は無いと考えてはおりますが、私も確証は御座いません」

この後も、午後いっぱい日が暮れるまで語り合ったが、謎は解けない。

「しかも、申し訳ないことに女神の台座とかかわりの深いと思われる五つの遺跡については、まだ、私の研究が進んでおりません」

インスユの洞窟・ウスパルタの清めの泉付近・エイルデイルの草原・クサントスの忘れられた神々の聖地・ソウコルク山の女神の申し子と支えの場所の五箇所については、一切不明だと言う老学者の言葉に、皇帝が提案した。

「私からもフェリシアからも話を通しますが、聖域侯夫妻の協力を仰ぎましょう」

「そうですね。それがよろしいですわ、先生」

「確かに、女神の申し子とその支えであられるのですから、適任ですな。ただ、お忙しいお身の上なのは百も承知ですから、私からはお願いしにくかったです」

「場合によっては、他の役目は別人に譲る事になりましょう。ですがこの役目はあの二人以外果たせないはずですから」

人事権を握る皇帝の言葉で、女神の台座関連の五箇所の調査は口ザリアとクラウスの担当にほぼ決まった。

「何なら、今、邸にいる母だけでも来て貰いましょう」

フェリシアが呼ぶと、次の瞬間には口ザリアが三人の目の前に現れた。

「御事情は、了解いたしました。陛下のご命令と有らば、私ども夫婦はそれを行うのみで御座います」

「いや、まあ、そう堅いことを言わなくて良いよ。クラウス君の今やってる騎士団関係の人事管理はかなりの部分振り分け可能だと思っただ。まあ、多少効率は悪くなっちゃうけど。色々忙しいのに、

「ごめんよ」

「私も夫も多少忙しいぐらいの方が、張り合いが御座います。それに、テイボー先生の御研究のお役に立てるのも嬉しい事ですわ。先生、また御食事にお招きいたしますから、ゆっくりお話を伺わせてください」

クラウスとロザリアは今月に二度ほどのペースで、テイボー夫妻を夕食に招いているらしい。

「先生も奥様も御出身が夫・クラウスの生まれた村の近くでいらっしやるので、うちの料理が気に入っていただけただけなようですよ」

「いやあ、出身地に関係無く、誰が頂いてもお邸の食事は結構なものですよ」

「先生、その点は僕も大賛成です。宮中の食事は実はいまひとつなので、クラウス君がうらやましいですよ」

皇帝は心底うらやましそうだった。

急遽、テイボー夫妻は聖域侯邸で夕食と言う事に話が決まり、皇帝とフェリシアは「いまひとつ」の夕食を食べるために宮殿に戻った。

「何と言っかな、非効率的だね。宮中の大膳職は」

「毎日晚餐会かと思うような量の食材を使うからでしょうかね。地球のホテルでやっているバイキングレストランのような形式にして、宮中で仕事をする人間が時間を余り気にせず食事できるようにしたら良いのに、なんて思います」

「キタイで一度そう言う提案をした事があるんだけど、『国王陛下と兵士や女官が同じものを食べるなんて』とか『大膳職の誇り』とか

言われて、一蹴された。帝国も事情は似たようなもんだらうなあ」「あまり根拠の無い『大膳職の誇り』、どうにかしたいですね。真面目なんです、頭が固いんですよ。まあ、毒を仕込むとかそういう事から皇帝を守るための最後の砦だったみたいなのがある、ああなっちゃったんだと思いますが、私達には、余り関係無い話ですからねえ」

通常の人間の能力しか持たなかったこれまでの皇族を毒から守る上で、大膳職の果たしてきた役割はそれなりに大きかったのだが、真の龍の器の二人には無用な事であった。

## 47 (前書き)

温泉のあとは、絡んでいます

「うーん、どうも気になるな。『アナバルザの隠された温泉』ってのがさ。これから気温が下がってくる季節じゃないか。冷たいソモリス山の霊水に漬かる訳にも行かなくなるし……」

「気になさってますね、先ほどから」

「だって、僕、温泉好きだし、それなのに最近は入れないし……」  
「アルビの想い出……ですか？」

アルビは皇帝マークの初恋の人で、最初の子ポールの母であったハリカが長らく住んでいた場所だ。フェリシアの両親は生前のハリカが女将を務めていた『朝霧楼』に長らく滞在し、世話になったと言っ因縁も有る。

「いや、君に言われるまでそんなに意識してなかった……むしろ、昔日本で入った露天風呂の事を思い出してた」

「イエローストーンみたいに入れないんじゃないですか？」

「ああ……あそこでも、一箇所入れる所も有るには有るんだ。Boiling Riverっていう場所だけどね、本当に見た目は川原って感じで、みんな水着着用で入るんだが、日本の露天風呂とは大違いだよ……ね、やっぱり様子を見に行こうよ」

「私は、ダーリンの仰るように致します」

妻がますますやる気を出すように、夫は軽くキスをして「ありがとう」と言った。

「それにしても、場所はここなんですよね」

昼間ティボーに見せられた地図の記憶を頼りに『アナバルザの隠

された温泉』を指してワープしたはずだが、目の前には黒々とした岩の断崖が続いているばかりだ。めばしい植物も無く、風の音以外何も聞こえない。

「目の前は岩の壁だけだけど」

「聖剣でも出してみます?」

「おお、そうだな」

マークとフェリシアはそれぞれ自分の剣を抜いて、ひときわ大きな岩の前で交差させた。すると……

「うわあ、何だ今の大きな音響は」

「何だか砂ぼこりが、立ってますね。どこか崩れたのでしょうか」

「お?あれは、入り口か」

「まあ、本当。御丁寧にちゃんと階段が出来てますね」

「何と言うか、ビザンチン風と言うか無駄に凝ったつくりだな」

「昔の神殿の一部でしょうか」

「まあ、降りて行ってみよう」

水音のする場所に降り立つと、そこにはローマの大浴場と言った風情の空間が広がっていた。明かりは無いはずだが壁が自然発光している。上を見ると、一部の天井が抜けて、星空が見える。

「いやあ、良い場所だ。これで湯と見えたものが実は人体を溶かす危険な溶液、なんて子供の頃見たSF映画みたいな落ちじゃ無けりゃ良いがな」

「もう一度、聖なる剣をかざしますか?」

「やってみてもよさそうだな」

再び二人は浴室と思しき場所で聖剣をかざし、交差させた。すると、新たに熱湯と水と思われる吹き出し口から、大量の湧出が始ま

った。熱湯は無色透明で軽い硫黄臭がする。

「ほとんど競泳用プールみたいなのがうまい具合に微妙な高低差を付けて三つに分かれてて、水多め・熱湯多め・両方が混じる一番大きな部分になってるんだな……うん。どうやら人体が溶けたりしなさそうだ」

夫は用意周到にも地球で仕入れたと言う水質検査のための試験紙を何種類か浸して、確認していた。

「あああ、そんなものを手に入れてらしたのですか？」

「ふと思いついて買っておいただ。地球の専門会社にサンプルを取って分析検査依頼をしても良いよね」

「フフフ、温泉の効能もはつきりするかしら」

凝り性の夫らしいとフェリシアは思った。

湯加減の一番やさそうな場所へ、二人とも服を全て脱いでつかる。湯の深さは西洋式のバスタブ程度だ。

「何と言うか、単純硫黄泉って感じだな。塩分は感じられない」

「肌に良さそうですね、どうかしら？」

「悪くは無いと思うよ。うん。フェリシアの肌はすべすべして、ここはムチムチプリプリ、実に良い具合だ」

「……っ、もう……意地悪なさって……酷いわ」

「別に、意地悪する気も無いし、何が酷いのさ、言って御覧？ん？」  
「だって……その指……っああっ」

「君の一番感じやすい所を、気持ち良くなるように刺激してあげているだけの事だよ」

一度深いキスを妻に与えて、夫は更にかさにかかったように妻の

体を愛撫する。

「体脂肪が大事だつて言う意味が、良く分かるな。ひたすら可愛らしかった子供子供した感じから、女らしい曲線を体が描くようになり始めて、この胸も、そしてここも、とても敏感になっている。素敵だよ」

きつと、月のものが始まる日も近いね、と囁きながら、夫は膨らんでいない胸を刺激し続ける。

「ここも目覚ましい成長をしそうな予感がする。フッフ、気持ち良いんだろっ？素直にそう言えば良いのに」

妻は顔を真っ赤にして、夫の愛撫を受け入れていたが、腰のあたりをもじもじと動かし始めた。

「クククツ、物足りなくなってきた？ねえ、どうして欲しいのか言つて御覧」

「あ、あの……き、キスして……」

「キスだけで良いの？」

「……意地悪……御存知なのに……」

妻は幼い顔にドキツとするほど艶めいた恨みがましい眼差しを夫に向けながら、大粒の涙をこぼし始める。

「おやおや、これじゃまるで僕がよほど性格の悪い男みたいじゃないか」

妻は憚るなくことなく、声を張り上げて泣く。

「フェリシア……ねえ、フェリシア……ああ、もう、わかったよ」

つんと頭をもたげている双方の乳首を舌で転がしながら、鼠蹊部

に繊細なタッチの刺激を与え始める。

すると泣き声のトーンが、明らかに変化する。

「ねえ、ここはこんなに尖がってるし、下の方はベトベトだよ。湯の中でもはつきりわかるほどだ。ここじゃ思い切り可愛がってあげられない。ベッドに戻る？」

妻は夫の胸に頭を押し付け、頷いた。

次の瞬間、もう既にいつもの寝室のベッドの上にいた。温泉の湯で濡れているのも構わず、体を絡めあつてディープキスをはじめ。今夜は部屋の明かりは煌々と明るいままだ。妻が消して欲しいと言つたとしても、マークは全く消す気が無かつた。

「体中、すみからすみまでキスしてあげる」

その言葉通り、丹念なキスが唇から首筋、乳首・腰・へそ・下腹と降りて行く。

夫の整った顔立ちは、甘さとどこか退廃的な雰囲気をもとっている。その目は軽く笑みを含んだような光を浮かべているかと思えば、厳しい射るようなものまで多彩に変化するのだ。今は、その貴公子然とした美貌が血走つた目の色を浮かべ、自分の体の一点を凝視しているのを感じて、フェリシアは「いや、いや」と頭を左右に振つた。自分でも、本当に嫌なのかどうなのか、もうわからない。

夫の太く通つた男らしい鼻が尖り切つた部分に押し当てられ、熱い舌が蠢き始めると、フェリシアは腰を激しく突き動かして、泣き声を高くした。

48 (前書き)

吉兆とは思えない謎の言葉に二人は……

ティボーに教えられた双龍に関わりの深い五箇所のうち、ヤカジユクは夫婦二人で訪ねると、双龍が絡み合って出現して、そこに生えていた胡桃に似た固い実を取って、食べるように伝えてきた。また、ウルチユナル島の方はオレンジの大木から実を取って食べるように、また双龍が伝えてきたのだった。

どうやらその成果が現れたようで「連日、聖地の木の実やオレンジを使ったものをお召し上がりになるせいか、皇后陛下は格段に大人びた雰囲気になられた」とか「もうすぐ月のものを迎えられないか」と女官たちに噂されるようになった。

アナバルザの温泉は、あれ以来、ほぼ毎晩夫婦二人で入っている。「ダーリンたら、いつも意地悪なさるから、落ち着いて温泉に漬かれませんか」

そんな風にフェリシアは、マークに言っすねるのだが、マークの方は一向に改める気は無いのだった。

「双龍たちが、近頃うるさいだろう？もっと気を通わせろって」

「それはそうなのですが……」

「二人の気が十分になじまないとカプスユ廃墟神殿の大岩の封印が解けない、そんな風に言っす無いか？」

「ああ、そのような夢を私も近頃は良く見ます」

「なあ、十分になじむって、どの程度なじむ事を言うのかな？フェリシアはどう考える？」

「今のままでは、恐らく不十分なのですよね」

実は一度、カプスユ廃墟神殿には夫婦で行って、その封印を確か

めた事があるのだが、全く手も足も出ない状態であった。封印の解き方のヒントすら頭に浮かばなかった。

「それは間違いない。現状では全く不十分なだろう。やはりここは……月の物が来るのを待つしかないか」

はつきり夫にそのように言われてしまうと、酷く恥ずかしい。

「何も恥ずかしくは無い。僕も、そして恐らくは龍たちも待ちかねている。フェリシアが赤ん坊のまま僕の妻になったのは、それだけじっくり僕やオルトと言うこの世界自体にすっかりフェリシアがなじむように、龍たちなりに慎重を期した結果なのかもしれないと思うよ」

二人きりで過ごすときは、体を繋げる事こそ避けているが、その他のもろもろの手法を行使する事には、全く夫は遠慮しなくなつて来ているのだ。

「だって『いやいや』って言う割りに、嫌がって無いし、寧ろ心待ちにしてくれていると、僕は勝手に思ってるんだけど、違うかな？」

自分でも、そうした欲求が以前より強まっているのをフェリシア自身感じている。だがそれを、夫のようにはつきり口に出す事は、まだ強いためらいが有る。

「違ってませんけれど、そうした事は、自分では言い出しにくいものです」

「そうかもしれないが、嫌じゃないのに『いやいや』って言うのはそろそろ、止めて欲しいな。まあ、嫌がってるのにちよっぴり無理やりつてのも、男の立場からすると刺激的では有るんだが」

そんな不穏な事を言って、夫は少し意地の悪い笑いを浮かべる。

「さあて、また、行こうよ温泉に」

「それは、構わないのですけれど……」

「僕が恥ずかしい事を仕掛けるのが、嫌かい？」

「たまには、その、ゆったりお湯につかりたいです。いつも最後は何が何だか分からないのですもの」

「今夜は久しぶりの満月だから、温泉にゆっくり漬かって過ごす？」

「そうしましょう」

すると、夫は本当におとなしくしてくれていたのだが、何とフェリシアの方が、心もとなく寂しい気分になってしまったのだ。た。

「あのう、ダーリン、ごめんなさい。やっぱり、お膝の上に乗せて  
いただいて宜しい？」

「クククツ、僕は宜しいよ。ただそうになると、大人しくしておれる  
自信は無いな。弄られていたずらされても構わないのなら、来なさい」

「はい。どうか私のことを、お好きになさって下さい」

フェリシアは自分から夫にキスをしてから、そっと膝の上に後ろ  
向きに跨った。

「もうすぐ、フェリシアも十歳だな」

「ええ」

「君の母上は十歳で月の物が始まった。その話をする君の父上に  
凄い目で睨まれたけどね」

「ならば、私もそうなるでしょうか？」

「胸が少し大きくなって来たね。聖地の果物やナッツのおかげかな  
？この温泉も何か作用を及ぼしているのだろうね。僕自身はワープ  
が前よりいっそう楽になった事ぐらいしか、違いは分からないんだ  
が」

「ダーリンは、全然お年をお取りにならない。むしろ少し若返っておられるような気がいたします」

「女官どもが二十代半ばに見える、などと言うのは多少大げさだろうけどな」

「そうでしょうか？私にもダーリンが二十五、六歳ぐらいに見えます。ああ……でも、お目の光だけは違うんですが……何と云うか、奥深いというか……そんな感じです」

「フェリシアをこうして見る目つきは、物欲しげな中年オヤジ、って事かな？」

「……それも、無いとは申しませんけれど……」

「おい、おい」

そう言いながら、夫は笑っている。そして抜かりなく大胆に乳首を弄り倒している。

「あ、ああっ……」

「ここの感覚も、丹念に育て上げたつもりなんだがね、気持ちの良いのだろうか？」

言葉がうまく出ないほど、快感は強く、フェリシアはすっかり意識を翻弄されてしまう。

「……ダーリン、びっくり……ずるい」

「なら、こいつを、フェリシアが可愛がる？僕としては実に嬉しいけれどね」

フェリシアはしばらくもじもじしていたが、体の向きを変えて、夫と向かい合わせに座ると、頬を真っ赤にさせて、すっかり熱く堅くなった夫の器官を両手で優しく持った。

「君の可愛い指が優しく絡んで、何だか凄く嬉しいよ」

フェリシアは夫のその言葉に後押しされて、片方の手を丹念にからませて心をこめてそそり立った物をしごきあげ、もう片方の手は根元の袋の皺をやわやわと刺激する。

「気持ちが籠ってるね、フェリシア、とても感じるよ」

夫が放出を遂げる瞬間の表情が酷く艶やかで美しい、とフェリシアは思った。

その後、二人は固く抱きしめあって、深いキスを交わした。

「愛しています、ダーリン」

「愛しているよ、フェリシア」

再び、キスを交わす二人の頭上に、突如ソモリス山で見たような巨大な白い光の玉が現れ、急にはじけた。

「今度は、何でしょうか？」

「あの二人の赤ん坊は、女の子のようだな」

「サミアアは見えず、バスイールは聞こえず……そう聞き取れませんでしたか？」

「うむ。僕も、そのように聞こえたよ」

どうも、それが吉兆とは思えない二人は、キスをするのも止めて、光の玉が消え去った夜空を見つめていた。

49 (前書き)

忘れられた神との遭遇、そして……

ウルチユナル島は穏やかな海にぽつんと浮かぶ、ほとんど岩礁のような小さな島で、並の人間なら船を乗り付けるのも苦勞する訳だが、ワープが出来る皇帝夫妻にとっては外界からの邪魔が入りにくい好都合な場所であった。どう言うわけか、見上げるようなオレンジの巨木がによっきり一本だけ生えていて、他には見るべき物は何も無い。

あの謎めいた不吉に感じられる『サミールは見え、バスイールは聞こえず』と言う言葉の意味は、はつきりしない。季節は巡り、また夏を迎えてフェリシアは十歳になっていた。

「テイボー先生の御加減が思わしく無いです」

「ああ、それは僕も聞いた。君の御両親が邸に引き取って、手厚く看護しているのだな」

「実家に立ち寄りました折にお話をしたのですが、まだ、女神の台座とかかわりの深いと思われる五つの遺跡の研究がさっぱり進んでいないと、残念がっておられます。お好きなオレンジを使ったデザートを少しでも召し上がっていただくと、多少は持ち直されるでしょうか？」

フェリシアの両親であるクラウスとロザリアは五箇所の遺跡を尋ねてみたようだったが、「どうやら私達の神気が不足しているみたいで、何も特に見つけられなかった」と言う事のようだった。テイボーを邸に引き取ってからは、その探索も中止してしまっている。

「ケーキは喉を通りにくいかな？ババロアとかゼリーなら、良いかもしれないね」

「ええ、そう思います。母がシトロンを使ったゼリーを差し上げた

ら気に入っていらしたようでした。先生は柑橘類は皆お好きなようですが、一番お好きなのはオレンジですし、どうせならこのウルチユナルの物が良いかなと思ったのです」

「先生のお体には、逆に強すぎる……と言う事は無いだろうか？先生の言葉を借りれば、このオレンジも『強い神気を帯びた仙果』だからな」

「ああ……その可能性は、考えませんでした」

「僕が金の籠に聞いた所では『仙果は食うべき者が食うべきだ』と言う言い方をしたから、気になったのだ」

「……どうしましょう」

「君の母上が食べて、先生を摩って差し上げれば良いのではないか？」

「ああ、それはそうかもしれませんね」

今、ティボーはしばしば背骨が激しく痛むらしい。母のロザリアがティボーと同じ年の夫人と共に主に介護に当たっている。ロザリアやクラウスが背骨を摩ると、一時的に激痛が治まるのだ。フェリシアも一度手伝ったのだがやはり、同様な効果が有った。

「不老不死の者が持つ力が、何か作用するみたいですね」

「何なんだろうな。放射線治療みたいなものかな？」

「痛みや苦しみは和らぐようですが、病気を根本的には治せないようです……」

「そろそろ地球から医者でも呼んでくれないものかねえ」

「確かに……私達には、医学的な知識が無いですものね」

翌日、フェリシアはオレンジを実家でコンポートやマーマレードや砂糖漬けに加工した。

「沢山は良く無いかもしれないけれど、少しなら効果も期待できるかも」と言うロザリアの意見で、絞った果汁を使ったゼリーを作り、

少しだけティボーに食べさせた。

「何と言うか、ふわふわと空を飛ぶような良い心持です」

ティボーはそのゼリーを食べて、そんな感想を述べた。

「皇后陛下、これは仮説なのですが女神の台座に関わる五箇所は、美しい楽の音と相性が宜しいかもしれません。昔目にした古文書に女神のお力は美しい音律と良くなじむと言った記述を見た記憶が有るのです。それに、忘れられた古の神々は、皆、美しい楽が好きであつたようです……両陛下は見事にリユートを演奏されるそうですな。これらの場所で演奏されると、何事か進展が見られるかもしれない、そのように思つたのです」

そこまで話すと、老学者は力が尽きたようで、寝息を立てて眠ってしまった。

夜、二人きりになってから夫にティボーから聞いた話をすると、夫は『クサントスの忘れられた神々の聖地』が以前から気になつていた、と言う話になつた。

「忘れられた神々とは、どんな存在なんだろうな？双龍は他所の世界からやって来たもので、もともとはオルトの神ではないのだから、それらの古い神々にとって不快な、あるいは憎むべき存在なのかもしれない。そんな気がするのだよ」

「では、そうした神々を宥め鎮めた方が良いのかもしれないね」「そうする事で、様々な目に見えない障害が、あるいは除かれるのかもしれないと言う気がするよ」

余り自分達は歓迎されないかもしれないという可能性も考えて、

夜よりもまだ明るいうちが良いと言う事で、昼食の後、午後の休憩を返上で現地を調べに行く事にした。夫もフェリシモ少し歩く事を覚悟で、身支度を整える。フェリシアは剣の鍛錬をする時のような歩きやすい、少年のような格好になって、夫と一緒にリュートを持ってクサントスの聖地にワープした。

広葉樹の林と小さな池、野の花が咲いている草原からなるその聖地は、人の手の加えられた痕跡が全く無い。

「小さな池に、蛙が鳴いているね。『蛙のガリヤード』でも弾いてみるか」

美しいがどこか悲痛で物悲しい、とフェリシアが言うと夫は頷いた。

「この曲に言葉を付けたのが『今こそは別れねば』と言う歌だ。これもそうだがジョン・ダウランドの作った曲は、悲劇的な雰囲気

が漂う物が多いな」

「もうちょっと明るく、いつその事こんなのは？」

ふと思いついて、日本ではおなじみの『かえるのうた』をフェリシアが爪弾くと、蛙が反応した。

「お？それ、日本で幾度か聞いた記憶が有るけれど、学校で教えるのかい？」

「学校でしたっけ……幼稚園、テレビの幼児向け番組そんなあたりだった気もしますが、日本人は大半この歌は知ってます。外国の曲が元になっているそうですが、詳しい事は何も知りません」

「元の歌がドイツの民謡と言う話は聞いたかな。その割りに、ドイツ人が歌っているのは聞いた事が無い。でも名曲だと思うよ」

早速合奏をはじめ。それから、輪唱も日本語でしてみる。

「何だか、反応が良くないか？周りの空気が動き始めているな」  
「ええ、池の底で何か光りました」

ザバツ！と大きな水音がして、気がつくくと岸辺の岩に大きな銀色の蛙が居た。心話の様な波動を使って、マークとフェリシアに意思を伝えて来る。今までこのような話は聞いたことも無かったので、二人は驚いた。

「（龍の器どもよ、我らの地に何用だ？）」

「（聖剣を求めている。オルトに住む命を可能な限り多く救済するには必要と考えたからだか）」

「（聖剣は、半ば人で半ば龍のお前達には試練と苦しみも与えるぞ。本当に望むのか？封印したままでも、千年かそこらは平穩に暮らせる。多くの命を救えば良いのか？救えぬものは無理に救わずともよかるう）」

「（救えぬものは救うべきではないと？そう言うあなたは、古き神か？）」

「（人の体に宿らねば生きられぬ龍でも神なら、神と言えよう）」

「（龍の力を宿すものを、嫌悪されるか？）」

「（龍は嫌いだが、人たるお前達の波動は悪くない。楽の音は心地良かった。また来い）」

「（では、また参ります）」

フェリシアは古き神靈に敬意を払って答えた。

「（頼むぞ。今度はもっと色々聞きたい。ん？銀の龍の力が満ち過ぎ、凝り始めておる。胎内の氣の流れを正してやろう）」

銀色の大蛙は、長い舌をフェリシアに向かって突き出した。危険だとも、避けるべきだとも感じなかったのはなぜだろうか？舌の先が腹に触れると、何かこり固まっていた物が溶け出すような滞って

いたものが巡り始める様な、そんな感覚が起こった。

何とその日の夜の中に、フェリシアに初めて月の物が訪れたのだ  
った。

50 (前書き)

双龍の言い訳と迷う夫。そして古き神々の祝福について。

「銀色のあの大きな蛙様には驚かされたよ。大した力を持っていると思う。龍が嫌いだと断言していたな。どんないきさつがあったのだろう？金の龍に聞いてみても『血迷って暴れた記憶はかすかにあるが、何も覚えていない』と言うだけで、さっぱり要領を得なかった」

「銀の龍も『オルトにたどり着いてすぐ、のた打ち回って暴れたが、苦しかったからそうしただけの事で何がどうであつたか、覚えていない』と言うのです」

「双龍が暴れて、かつてのオルトを大いに破壊したのかもしれない。そしてあの蛙様にとって大切な存在なり、場所なり、破壊しつくして、いまだに謝罪の表明も無い、そうした所か？」

「あの場所にいたとき、私の中の龍は、どこかに行ってしまったか隠れてしまった感じがしました。今も蛙様の事を思い出した途端、気配が感じられなくなりました」

「金の龍もそうだ。今もこの話題になった途端、どこかに隠れている」

「双龍は、あの蛙様の言う事が正しいと認めているのではないでしょうか？でも、私達の目の前でやり込められるのは嫌だとか、謝りたくないとか、何かあるのかもしれないね」

「僕は時々思うんだが、龍の器なんて止めて普通の人間になりたい。出来れば地球人の。そして、フェリシアと普通に暮して死んだ方が良い。不老不死だったはずの開祖皇帝は、どうにかその境遇から逃げ出したみたいだ。僕らも考えても良いかもな」

「そうですね……」

二人はベッドの上で身を寄せ合って、普通の地球人としての平穩

な生活、穏やかな老後、そんなものについてあれこれ思い浮かべていた。それが実現するとは思わないが、見果てぬ夢について二人で語り合い楽しんでいたのだった。

すると、急に部屋の天井に絡み合った小さな金と銀の龍が現れた。

- 「駄目だ！マーク、それは駄目だ」  
「そんな事をすれば、完全にオルトが壊れるぞ、フェリシア」  
「女神の力を引き出したのは、我らだ」  
「人々の気の力をオルトの天地に巡らせているのも、我らだ」  
「マークの魂にはフェリシアの魂が」  
「フェリシアの番にはマークが」  
「もつともふさわしいのだ」  
「もつとも望ましいのだ」  
「それは我ら双龍の器である事と不可分だ」  
「そうだ、不可分だ」

双龍は時に無神経で、自分勝手ではあるが、一度も嘘をついた事は無いのだった。それはマークもフェリシアも良く承知している。

- 「古き神となじむのは良い」  
「古き神と語るのも良い」  
「だが、二人は我らが器、不老不死の番だ、これはもはや動かせぬ」  
「なしうる限り、気をなじめせよ。来るべき時の為に」  
「オルトの為に最も良き時期に、最もふさわしい子を授かるために」  
「まだ先は長いが」  
「まだ時はかかるが、その日は訪れる」

どうやらそれが、龍たちなりの最大級の弁明であり自己主張でもあったようだった。

数日して、フェリシアの月の物は無事に終わった。だが、そこでマークは考え込んでしまったのだった。始まったその日のうちに、一応母親であるロザリアにはフェリシアから伝えたが、翌日母と娘と一緒にケーキを焼いてティータイムを楽しんだ以外に、特に仰々しい祝いなどもしなかった。後宮が存在した時代には何がしかの物々しい儀式が有ったらしいが、そんな事はフェリシアもマークも望んではいなかった。

「はて、どうしたものかな、フェリシア。待ってましたとばかり事に及ぶのも、僕としては抵抗がある。君のご両親はどうだったのかな？」

「母は『お二人のお気持ちで決めるべきことです』としか、言いませんでした」

「龍たちの言葉も気になるが、古き神の言葉、と言うのも知っておきたいじゃないか。特に今回のフェリシアの場合、あの、蛙様がフェリシアの体内の気の不均衡を正して下さったのがきっかけのようにも思われるからな」

古き神の言葉を聞いてから如何するか決めたい、そういうマークの考えにフェリシアも賛成して、二人は昼食後リユートを携えてクサントスの聖地に再びワープした。

「おや？聖地の内のようだが、この前の池から随分離れているようだ」

「それにしても、この白い花が沢山咲いている木はなんでしょうね？見た事のない種類のようにですが」

「とても良い香りだ。なんというか気持ちが穏やかにやさしくなるような、そんな香りだな」

「ええ。折角ですからこの木の根元で一曲弾きませんか？大きな木には不思議な力が有ると言いますし、何かを呼んでくれるかもしれないかもしれません」

「そうだな。『花咲く命がある限り』と一緒に弾こう。それなら出来るよね」

フェリシアは初めて夫に教えてもらった曲の、優しい穏やかな旋律を気持ちに合わせて心を込めて弾いた。この場所にいるであろう、古き神々に供えるような気持であった。

「（おう、龍のつがいだ）」

「（でも、人のつがいでもあるよ）」

「（まだ、契りを交わしていない）」

「（想いは通じているようなのにな）」

「（銀色のほうが幼すぎると、金色のが感じているみたいだ）」

「（もう、大事ないがな）」

「（うん、大事な。銀色のも望んでいるから）」

「（でも、子が授かるのは、ずいぶん先だ）」

「（でも、とても良い子だ）」

「（確かに良い子で、きれいな子だ）」

二人の目の前で、大きな金色の雄鹿と銀色の雌鹿がそんなやり取りを思念で交し合っている。心話とよく似ているが、微妙に波動が違ふようだ。

「（おう、気が付いた）」

「（本当だ、気が付いた）」

そして、驚くほどの素早さで、光り輝く不思議な鹿たちはその場を立ち去った。

「フェリシア、どうやら答は出たようだ」

「ええ。あの鹿たちもきつと古い神なのでしょうね」

「うん、そうだろうな。その……『銀色のも望んでいるから』と言  
うのは本当だろうか？」

「ええ、本当です」

「では、今夜、君を抱くよ。本当の意味での男女の契りをかわそう」  
「はい」

「で、これは、僕の誓いのキスだ。君だけが僕の番つがいで有り、誰より  
も君を愛するという。受けてくれる？」

「はい。喜んで」

二人は厳粛な気分になって、まるで初めての口づけを交わすよう  
に最初はおずおずと、だが途中からは互いの脳内を焼き切るかと思  
うほどの激しいキスを交わした。

「（幸せにおなり、龍のつがい。心を尽くし想いを尽くせば、お前  
たちを引き離すことは誰にも何物にもかなわないのだよ。互いをも  
つともつと、好きにおなり。そうすれば道は開けるよ）」

二人の脳内に飛び込んできた祝福の言葉は、恐らくはこの大木が  
発したものだろうと思われた。

## 51 (前書き)

ようやく二人は結ばれました。今回ほぼベッドシーンのみですので、苦手な方はスキップなさってください。ストーリー展開上の問題は無いと思います。

「確かに、あれは真実なのだろうな。僕は今でも誰よりもフェリシアを愛していると言えるけれど、あの『互いにもっともっと、好きにおなり』と言う言葉のまっすぐな強さに胸を打たれたよ」

「あの言葉を聴いて、私……もっともっとダーリンを好きになりたい、と思いました」

「どうすれば良いのか、僕は今、正直言つて戸惑っている。僕の欲望と僕の思いは不可分だと思つてはいるけれど、君を傷つけたくは無い。肉体的にも精神的にも、いかなる意味合いにおいても……」

正直な話、こうした事にかけて自分は慣れてはるはずだったのだが、相手が特別に大切な存在で、肉体的な年齢がまだ十歳などと言うのは初めてだ。そう考えると自分の経験など何の役にも立たない気がしてくる。ただ、一つ重要な教訓を過去の失敗によって得る事は出来たのではないか？マークはそんな事を思った。

その教訓とは……本当に大切に思う相手には、どれほど自分が大切に思つているか、十二分に言葉を尽くし態度に明確にあらわしておくべきだと言う事だ。恐らくは、やれるだけやってもやりすぎと言う事は無いのだろう。

妻の体の有様は、まだ余りに幼い。連日のようにマークが撫でさすって来たおかげか、すんなりと形が良い太股や腰の辺りの肉付きは昨年よりは随分と良くなつたが、やはりまだ子供のものだ。胸も殆ど膨らんではいないし、成熟した肉体の証とも言える肝心のその部分の陰りが一切認められず、痛々しいほどに滑らかで白い。

「ハーブ入りワインの力を借りようか？君は覚悟を決めているのは

良く分かったが、やはり余りに体に負担が大きいのではないかと心配なのだよ」

オルトで新婚の夫婦の初夜によく飲まれる軽い催淫作用が有り、傷の回復を早めるとされるハーブを入れたワインは、気休めではなかなりの効果が期待できる。

「どんな味なのでしょうか？」

「じゃあ、一種の縁起物だから、一緒に飲もう」

皇帝は皇后の身近に仕える年かさの女官に命じて、皇帝専用の酒蔵から秘蔵の一本を持ってこさせた。

直接に皇帝の『心話』で命令を受けた女官は夜中にもかかわらず跳ね起きて、すぐに言われた物を持って御寝所に向かった。このような極秘で重要な場合のみの特別な形の命令を受けたのは、古参のこの女官でも片手で数えるほどの回数しか無い。普段は開けっ放しの天蓋つきベッドのカーテンが閉じられ、艶めいた息遣いと皇后の啜り泣きが聞こえて、子供を生み男女の事も弁えている女官であったが、心臓が飛び出しそうな程に興奮する。ああ、いよいよ御二人は契りを交わされるのだと……。

「後は、僕がするからそこに置いてくれ。わかっているだろうが、明日の朝食はここに運んでもらおう。ただし呼ぶまで嚴重な人払いを頼むよ」

妻の体は幼い。だから注意深くしてもし過ぎと言う事は無い、と皇帝は考えた。

「さあ、お飲み。極上のワインをベースに使っているから、薬っぽくも無いだろう？」

「ああ、本当に、良い味ですね」

妻がすっかり一杯を飲み干すのを見届けてから、夫は妻を優しく抱き上げて、首筋から胸元にかけていくつものキスを落とした。妻の肌の温度が上がり呼吸が荒くなるにつれ、自分自身の心臓の鼓動もやけに大きく響くようになった。

「フェリシア、僕の心臓の鼓動がわかるかい？」

妻は何とも艶めいた笑みを、その幼い美貌に浮かべた。

「ええ。ドキドキなさっているのね」

「ああ。とても緊張してるみたいだ。幾度も君の手で可愛がって貰った馴染みのものではあるけれど、君に嫌われたらどうしようか」

「私がダーリンを嫌うなんて、そんな事、有り得ません。寧ろ、私のこの体で喜んでいただけると言うほうが心配です」

「それは心配無用だ」

夫は妻をベッドに横たえて、丹念な愛撫とツボを心得たキスで一度十分に追い上げて、その部分がワインの力も借りて放恣に花開き蜜を十二分に吐き出すのを確認してから、両足を抱えて一点に体重をかけた。そして妻の内部に新たな道を押し開くと、最奥で弾けた。それから暫くはそのまま、二人は抱き合っていた。

「痛むだろうか？フェリシア」

「ん……んっ……で、でも、嬉しいの」

けなげにも、フェリシアは痛いとは一言も言わないのだ。だが、滝のような汗と苦悶の表情からその痛みが並々ならぬものである事は容易に窺い知れる。顔を寄せて深いキスをする、いつもより舌の反応は鈍い。

「ああ……愛しています、ダーリン」

新たな血の匂いと汗の匂いの中で、その無欲で真摯な言葉は、強烈に感情を刺激した。

「フェリシアが好き過ぎて、おかしくなってしまうそうだ」

マークはフェリシアの首を抱え込むと思い切りディープなキスを始め、まだまだ堅くささやかな乳房を揉んだ。フェリシアは舌を吸い立てられている喉の奥で泣き、鮮血にまみれたまま繋がっている部分は新たな蜜を吐き始める。

「愛している、フェリシア、愛しているよ」

その言葉と共に、一度内部で果てた物は体積と硬度を取り戻す。マークが妻の表情を一心に見つめながら注意深くゆったりとした律動を開始すると、妻の顔には明らかにこれまでとは違ったニュアンスの表情が浮かんだ。

「んああっ……」

「少しは気持ち良いかな？」

さすがにそれを肯定するには、幼い妻の羞恥心は強すぎたようだ。「ちよっぴり腰を浮かせて、回す様な動きをしてごらん。ん？」

「は、恥ずかしい」

「恥ずかしくは無いさ。僕達はれっきとした夫婦なのだから……よしよし、上手じゃないか」

だが、夫が余裕有る態度を保てたのは、そこまでであった。

「全く、もう、何て子だ」

「……ああっ……全部、全部っ、ダーリンを全部ちようだいっ！」

「クッ……可愛い欲張りめっ……」

「……ヒイッ……」

「それっ、すっかり全部受け取れっ！」

嚴重な人払いが解除され、いかにも新床の新婚夫婦のためといっ

た風情の朝食が運ばれても、幼い皇后は自分で立って歩けない様子であった。そんな妻を抱きかかえ、あれこれ世話を焼く皇帝は実に幸せそうな表情を浮かべていた。

52 (前書き)

夫婦の愛情と神々の伝える未来の試練について

夫は「フェリシアにぴつたりだ」と言つて、英語圏ではかなり有名な十八世紀のスコットランドの詩人バーンズの *A Red, Red Rose* という詩に曲を付けた。そしてこの頃は一人でどこかに出かける前に、その曲をリユートで演奏して歌う事に行っているらしい。愛する人を赤いバラにたとえた熱烈な恋の歌だが、最後の方がこんな具合で特に気恥ずかしい。

A n d f a r e t h e e w e e l , m y o n l y L u  
v e  
A n d f a r e t h e e w e e l , a w h i l e !  
A n d I w i l l c o m e a g a i n , m y L u v e ,  
T h o ' i t w e r e t e n t h o u s a n d m i l e .  
さようなら、僕のたった一人の愛しい人、ほんのちよつとの間だ、  
さようなら！

僕は必ず戻ってくる、おお、僕の愛しい人よ、千里のかなたからでも戻ってくる。

いかにも夫らしい茶目つ気と、紛れも無い本物の愛情がフェリシアにはくすぐつたくも有り、非常に嬉しくも有った。原語の方は皆覚えにくかつたようなのだが、オルトの言葉に翻訳された方は、傍で聞いていた女官や侍従たちによつて一般にも伝わり、ほんの一ヶ月かそこらで首都オルテスのそこら中で歌われるようになったそうだ。特に、新婚家庭の夫が、新妻に一曲歌つてから勤めに出ると言うのが大流行らしい。

「けつ、ほんの目と鼻の先の勤め先に行くだけなのに『千里のかなた』とは恐れ入る」と揶揄する向きも有ったが、一般的には、片時も離れていたくない愛し合う恋人同士の心情を示した歌として、大

いに共感を呼んでいた。

「たとえ海と言う海が干上がろうとも、たとえ岩と言う岩が太陽に溶けようとも」

「僕の心は変わりはない、いつまでも」

「そつだ、僕の命がある限り、おお愛しい人！」

「ああ！本当に、この歌は皇帝陛下にはお似合いよね！お姿も麗しいし、お声もすばらしいし」

「リユートの演奏もお見事だし！」

「この歌をお聞きになる皇后陛下は、お顔を恥ずかしそうに赤らめられて」

「でも、とつてもお幸せそうに微笑まれて」

「本当に、赤い美しいバラの花のよう」

「何だか、素敵ねえ」

例によつて女官の詰め所は姦しい。

「ねえ、今頃お二人はどこかの御神域にお出かけかしら？」

「午後のお茶の時間までに皇帝陛下はお仕事を切り上げられて、皇后陛下とお二人でお出かけになるのは知っていたけれど、遠くまでいらつしやるの？」

「この所は何でも『クサントスの忘れられた神々の聖地』に出向かれる事が多いらしいわ。お二人もご存じなかった昔からの神様達にお会いになれるのですつて」

「クサントスつて、私の両親がその出身だけど、オルテスからは馬を飛ばしても三日ががかりの遠い町よ。そしてそこから聖地へは、普通の人間は入れないのよね。強烈な結界が張り巡らされているらしいの」

「触れた人が弾き飛ばされるとか、かしら？」

「いくら道順どおりに辿って行っても、そのたびに目的地と違う所に出てしまうのですって」

「へええ、奇妙な結界なのね」

「神気が強くて、結界の内側にいる昔からの神様達に気に入られた者だけが中に入れるそうよ。この話、クサントスでは有名なの」

「へええ、だから皇后陛下がおっしゃっていた銀色の大きな蛙とか、金と銀の鹿の番つがいとか、私達が全然聞いた事も無いわけなのね」

ちょうどその頃、噂の二人はリュートを持って、そのクサントスの聖地を訪ねていた。

今日は椿に似た赤い大きな花を咲かせた木の根元で、コンラーデイーと言うバツハと同時代の人が残したイ長調の、短いゆったりした曲を二人で合奏した。

「ここは来るたびに様子が違う場所に出るね。遭遇する神もその時々で違う。最初の蛙様、金銀の鹿、白い花の咲く大木、金銀のリスに、白と黒の鷹、さて、今日はどんな神様かな？」

「リスにも鷹にも言われましたね。子供はしばらく作るなど。時が満ちていないと」

「これから生まれる孫や妹のことで悩むよきつと、なんて言われた。孫は僕の孫で、妹はフェリシアの妹かな？」

「悩んでも悩まなくても結果は変わらない。悪くない結果だ、とも言われましたね……」

「結果は変わらないのに、悩みたくなるような事情が有る、そういう事か？」

「さあ……私には何とも」

「ひょっとして……」

マークは一つの嬉しくない可能性について、思い至つたのだった。そして、その思念はフェリシアに伝わり、夫の物思いは真実をついているのではないかと感じたのだった。

「（ひよつとするぞ、龍のつがいよ）」

「（これから生まれる孫やら妹やは、聖剣の主たちだ）」

「（色々大変だ）」

「（人と言つのは勝手な事を言うから、大変だ）」

「（備わつたものより、足りないものの事ばかり言い募る）」

「（オルトにとって必要な命なのに）」

「（寄つてたかつて無垢な魂を傷つける）」

「（守つてやらねばいけないぞ）」

ふと、上を見ると、赤い花の枝に小さな金と銀の蛇が絡まっていた。その二匹からこれらの言葉がフェリシアとマークの意識に流れ込んできたようだった。

「謎の聖剣『サミア』と『バスイール』に関わる孫であり、妹なのだろうか？」

マークは二匹を見上げて、話しかけた。

「（そうだ。まだ時間はかなり先だが）」

「（だがしかし、因果は定まった）」

「（お前達の子供はもっと先が良いぞ）」

「（良きつがいが生じてからで良いぞ）」

その言葉を残すと、大木の茂った葉の中に隠れてしまった。

「（見えなくても見えるようになる。聞こえなくても聞こえるようになる。背負う定めは重いが、皆で支えれば支えられる。助けられ

る。だから、いたずらに嘆くな」

赤い大きな花が、一輪、また一輪落ちた。この樹は白い花を咲かせていた大木と対だろうか？二人がそのように感じていると、また、こんな声がした。

「（そうだよ。色々お互いに違うが、良いつがいだ。お前達と似てるな）」

その夜、二人きりのベッドの上で、真っ先に話題になったのは聖地で遭遇した神々の言葉だった。

「やはり、アナバルザの隠された温泉で聞き取った『サミアアは見えぬ、バスイールは聞きえず』が動かせない未来なのだという事なのでしょうかな？」

「そうだなあ。リスも、鷹も今日出会った蛇も恐らく同じ事を言っている。僕の孫とフェリシアの妹に、そうした身体的な特徴が現れると言う事なんだろうな……」

「その子達を、私達が守らねばならないようですね」「支えなければいけないのだな」

赤い花を咲かせていた大木が「いたずらに嘆くな」と伝えてきたが、それはとりもなおさず、厳しい未来を予測して備えた方が良いと言う事かも知れないと、二人は共に感じていた。

### 53 (前書き)

妻の願いを聞き入れる夫。 R15の範囲だと思っ  
てますが……

「孫が出来るって、僕は御祖父ちゃんって事か。その子が生まれた後に、フェリシアとの間に子供を作った方が良い、そういう意味みたいだけど、頭がこんがらがるな。このオルトに転生してきて色々奇妙な目には遇ったけれど、これからも色々有りそうだ」

ベッドの中で二人きりで体を寄せ合うと、自然と口がほぐれる。

妻の子供供していた体が艶めいて、自分を時には情熱的に受け入れられるようになったから余計にそうなのか、それとは全く別次元の事なのか、マーク自身にも良く分からない。ただ言える事は、二人の絆はいつそう強くなったという事だけだ。

この所、帝国中の各地で穀物の収穫時期を迎えて、租税の負担と農村の生活改善に関する課題についての朝議や申請や不正に関する密告などが多くて、皇帝としてのマークは酷く忙しかった。フェリシアも可能な限りサポートに回ったので、クサントスの聖地に行く事はしばらく無くなっている。

「地球で魂が生じた時期は、ほぼ同じなのに、肉体の見かけ上の年齢差が三十歳なんて変ですよ。でも、これからは差が縮まって行く……そう思いませんか？」

「でも、その何と言うか地球の五十代で九歳の幼な妻と性的な関係を結んだ某預言者様と、どっこいどっこのペドフィルぶりだと、自分でつい思ってしまうよ。地球でこんな事を言つと、某過激派にやられるけどな」

「私は十歳で月のものも来たのですし、双方合意と言うか……あの光る鹿たちの言葉が無かったら、まだダーリンは抱いて下さるおつもりは無かったですでしょうし、その、御自分をペドフィルじみてるとお考えにならないで欲しいの」

「いや、ごめん。でも、こんなに可愛らしくて小さくて、無垢な様子の君と致すのは気が引ける」

すると妻は悲しそうな顔になった。

「何歳になれば、お気持ちの御負担にならずに済むでしょうか？十三歳？十五歳？十八歳……それとも……」

涙がこぼれそうなのに堪えているという風情だ。思いもかけず、妻の気持ちをかなりひどく傷つけてしまったようだった。

「フェリシア、ねえ、フェリシア……」

彼自身が生まれて来た妻の為に付けた名前を、呼んでみる。その後何を言うべきか、言うべきでないのか、本当にはわかりはしないのだが、少なくとも言う必要がある言葉だけは、はっきりと告げる。

「僕は、君を愛してる。誰よりも愛している。君の望む形と時には食い違う事も有るだろうが、それでも君を誰よりも一番大切に思っている事は確かなんだ。信じてくれるよね？」

「信じています。信じてたいのです。だから、お願いです、キスして下さい」

赤く輝く瞳が自分を見つめ、花びらを思わせる愛らしい唇から苦悩を滲ませた吐息が漏れる。その様子に自分の下半身がすっかり反応してしまう事に、マークは失笑を禁じえない。

「ね、キスだけで良いの？メインは省くの？」

もっと、真摯な口調がふさわしいのかもしれないが、つい、冗談めかした軽い口調で尋ねる。

妻は軽い口調の裏に隠れた戸惑いや罪悪感めいた思いに気がついたのか、それとも暗い口調では夫の気分が沈みこむと気遣ってか、明るい口調でこう言った。

「お願いできるなら、フルコースで」

「気が引けるなんて、口にしておいて実に勝手なものだな。体は正直に君を欲しがっているよ。気持ちの方も、もっと素直にならなくてはいけないね」

「私は体でも心でも、ダーリンが欲しいのです。欲張りですから」

その言葉を証明するかのように、小さな桜色の乳首は堅く尖りきっている。

「ぴんぴんにそそり立っているって感じだな。良いよ、やる気満々で」

「……あきれていらっしやる？」

「いや、しごき甲斐が有るよ。これから胸も僕が大きく育ててあげる。期待してなさい」

マークは胸にまわした両手でまだささやかな膨らみを包む様にして押さえながら、艶やかな髪の中に見え隠れする耳たぶを口に含んだ。妻は幼い見かけとは不つりあいな艶めいた声を漏らした。

「ああ……ダーリン……」

ちっちゃな唇が開き、夫の舌を積極的に受け入れる。小さな舌を弄びながら双方の小さな乳房の根っこを絞り上げるように掴み締めると、荒い息が漏れる。乳首を指先で転がすと、身悶える。そ

のたびにマークは自分のそそり立ったものを幼い妻の腰や下腹部に押し付けてやると、舌を吸い上げられながら甘い呻き声を漏らして、腰をつねらせ、一層自分の体を押し付けてくる。

つぶらな瞳がトロリとした重たげな光を浮かべ、まぶたが気だるげに閉じたり重たげにもたげられたりし始めた。手を股間に滑らせ、柔らかな秘められた肉の狭間をくつろげると、中は熱くたぎり、愛らしいしこりや襞は充血しきっていた。幼い頃から幾度も愛玩して来た小さな宝石を思わせる突起をゆるゆると指で刺激し、一層激しく身悶えさせてから、それを口に含み舌先で転がしてやると、フェリシアは体を弓なりにそらし、絶叫した。

マークは腰枕を宛がった。まだ数えるほどしか交わっていないその部分は幼い佇まいでは有ったが、マークのものを待っているのは明らかだった。

「そろそろ、行くよ、リラックスして」

「あ……あ、あっ……ダーリン」

最初は汗みずくになって、荒い呼吸をしていたが、やがて迎え入れた夫のものと妻の秘肉がなじみ始める。夫は注意深く妻の顔を見守りながら抜き差しを繰り返す。遅いものがうんと奥の方を抉り回し始めると、フェリシアは獣じみた声を漏らすのが止められなくなったようだ。

「良いのかい？こうされると気持ち良いのだろう？」

「ええ……ええ……ダーリン」

「最初の日は痛がって涙をこぼしていたのに、今はもう気持ちが良いって泣くんだな。フェリシアは本当に覚えが良い。淫らで可愛い、クククッ」

「ああん……は、恥ずかしい……わ、笑ってはいやあ……」

「よしよし、意地悪は止めてあげよう。ん？もっとこっつするどどっ  
？」

「あ、あん……何か、変、変なのお……」

「うんと、変になって良いんだ。いくときは、僕にちゃんと言いな  
さい」

マークは妻が喘ぎ泣く顔の愛らしさに、思わず深いキスをした。

「……ん、んっ！」

幼い裸身は汗に光りながら、下肢を突っ張らせ弓なりに反る。思  
わず止めとばかりに揉み込み、奥まで抉り立てると、なおも激しく  
反り返りながら、フェリシアはイクッ！と鋭く叫んだ。

「僕も一緒に行くよ」

夫は咽び泣く幼い美貌にキスの雨を降らせて、思い切り胎内に精  
を注ぎ込んだ。



54 (前書き)

皇后としての予定をこなす年末のある日

年の瀬を迎えて、オルテスもそれなりに毎日冷え込むようになって来た。食堂に朝食を食べに行くのも億劫で、熱いコーヒーとちよつとしたパンと果物程度を持ってこさせる事が多い。まあ、これはもともと、マークがフェリシアの腰が立たなくなるまで可愛がりすぎた日が数日続いたのが、習慣化して定着してしまったのだから、フェリシアとしては何やら気恥ずかしいのだ。

「こんな寒い日はベッドで一日中、フェリシアといちゃいちゃしていたい」

真顔でそんな事を言うくせに、夫は早起きで、さつさと自分で身支度をして仕事に出かける。相変わらずリユートで一曲弾いて行くが、以前のようにA Red、Red Rose一本やり、と言うわけではない。近頃はイギリスの作曲家エルガーが愛妻の為に作ったというSalut d'amour（愛の挨拶）を弾いて行く。

「愛する妻への感謝の念が感じられて、僕の今の気持ちにぴったり」  
そんな事を、華やかで美しい顔に柔らかい笑みを浮かべて言うのだ。相変わらず、人の気持ちを引き立てるのがうまいとフェリシアは感心する。

「ちょっと、そこ、感心するんじゃないくて、胸をキュンとさせて欲しいんだけどな」

笑いを含んだ軽い抗議とも受け取れる言葉を発すると、その後必ずと言って良いほど、噛みつくような深いキスをして、ガウン越し

に乳首を探り当て摘み上げる。フェリシアが感じすぎて上手く立ってられないようにするまでの所要時間は、ほんの一分かそこらで、腰砕けになり真っ赤に上気した表情を確認すると「じゃあ、午後だね」と出て行くのだ。

その確認する表情が、リユートを弾く時の貴公子然とした優雅で華やいだものとはまるで違う、獲物を狙う野生動物のような鋭い目つきに油断できない意地悪な雰囲気の笑みと言う具合なのだが……

「近頃の皇帝陛下は、ますます若々しく華やいでおられますね」

フェリシアが立って歩くようになってすぐから身近に仕えている女官だけに、キスから乳首摘みのタイミングに行くわさないうようにしてドレスの着付けの為に寝室に入って来るのだが、薄々事情を察しているのは明らかで、こんな瞬間フェリシアは恥ずかしくてならない。あえて、沈黙する。恥ずかしいというのも理由の一つではあるが、自分と夫だけの秘密に余人を介在させるのは、やはり嫌なのだ。

「本日は各国大使の奥様、お嬢様方と年末の御挨拶を兼ねた昼食会の御予定が入っておりますね」

マークとフェリシアは地球で一般的なビジネス手帳をオルトで作り、それを全ての宮中で働く者に持たせ、公的な予定の周知徹底と各人のスケジュール管理を行った。各作業部門ごとに朝礼を行い、情報の更新を徹底させている。可能な限り作業の重要度・期日・ボリュームを各人が意識し適切に管理できるように指導しているが、完全に使いこなせているものは、まだ多くは無い。それでも、この女官も今日の最重要事項と、自分のするべき作業の開始時刻と期限を意識している。有能なものほどその便利さを理解し、取り入れるのが早いようだ。

「食事は気づまりだけど、大学の先生のお話が伺えるのは楽しみだわ」

以前は「親睦」と称してだらだらと他人の悪口やゴシップのやり取りに過ぎないような無駄話の時間が長かったのだが、食事の後に「女性の意識を向上させるような」専門家の講話を皆で聞き、その後質疑応答と言うようにフェリシアが変えたのだ。

この日は公衆衛生に関する話で、地球で先進国の国民であった記憶を持つフェリシアには自明の事ばかりだが、まだまだ意識の低いオルトの貴族階級の女性に教育的な指導をしておくのは良い事だとフェリシアは考える。本当の事を言えば「先生のお話」よりも、その後の質疑応答でどの程度皆が理解できるか、あるいは理解できないかを確認するのが一番興味深いのだ。

「ん、まあ！皇后陛下、本日の御召し物はまた、すばらしいですね」

立食形式の食事が始まってしばらくして、派手好きな某国の伯爵夫人が感嘆の声を漏らした。確かに最高級のレースを惜しげも無く、これまた最高級のピンク色の絹地にあしらったドレスはフェリシアを「薄桃色の花の妖精みたい」に見せる。

「これはハランのレース組合とギルネの服地ギルドから頂いた物ですの。一昨年の水害は大変でしたから、皇帝陛下は被害地域の復興に大いにお力を尽くされました。私も及ばずながら、手工芸の工房の事業の建て直しに出来る事でお手伝いさせていただきました。地の皆さんの感謝を受けるべきは、皇帝陛下なのですけれど、陛下が『フェリシアにドレスを頼む』と仰せになって、これが出来上がった、とまあ、そうしたわけです」

すると情報通を自認するまた別の国の侯爵夫人がこんな事を言った。

「ああ、そのお話、わたくしも伺っておりますわ。皇后陛下はこれまで無い斬新なデザインをお示しになったり、新たな意匠を御指導あそばしたとか。うちの出入りのドレスメーカーがギルネの出身なんですけれど、専門の職人達が大いに感動したとかいう事ですわ」

「侯爵夫人が御召しのドレスを飾っている、その金糸の縁入りレースは、私の提案で生産が始まったものです」

フェリシアの言葉に、その場がざわめく。

「まあ！さようでございますの？」

「侯爵夫人のお召し物が素敵だと思っております」

「体型を上手くカバーできて、良い感じですよわねえ」

中には棘を含んだ言葉も飛び交う。文句無くフェリシアのドレスが最も美しく見事だが、着る人間を選ぶデザインで、確かに体型の崩れ始めた人間では着こなせない。そういうする内に最後のデザイナーが供され、自然に講話を聞く体制に皆、なっていく。

いよいよ講話が始まる。洗濯や掃除を衛生管理と言う観点で考えるという、オルトではまだなじみの無い考え方が彼女達にどの程度浸透して行くのかわからないが、「皇后陛下が仰るから」と言う馬鹿げた理由でも、「流行だから」と言う軽薄な理由でも、きつかけが何であれ広まってくれば良いと、フェリシアは割り切っている。

「あああ、それにしても、広告塔やら人寄せパンダやらの役目は疲れたわ」

全てが無事に終わってから、ぼやくフェリシアの言葉の意味を、恐らくはどの女官も理解はしていない。

「わかってくれるのは、ダーリンだけ」

それは恐らく間違いの無い事実だった。

## 55 (前書き)

新しい年を迎えて、過ぎて行くものところからの未来について。さ  
いごちよつとR15でしようか？

「年の初めは、やはり百官一同に会しまして、陛下の御言葉を承りませんと、しめしがつきません」

先帝の在世中から健在の老臣たちが主張するので、皇帝夫妻は年末から忙しかった。特にこうした古風な価値観の高齢者達は、皇帝が最近は意識的に政務の最前線から外しているので、老人達は余計に儀式にこだわるという具合なのだ。

「特に必然性も無い儀式ばかりだけどね。これが伝統芸能の保護にでも繋がるなら、いざ知らず、単なる訓話、その後大宴会だろ？面倒くさいな。いつその事完全な無礼講にして市民も参加できる形式にするかどうか？って言ったら、爺さんども、嫌がって激しく抵抗した」

開祖皇帝に自分の先祖がいかに忠実に仕え、いかに由緒正しい家柄であるか、それを確認できる新年の儀礼は家格を誇る老貴族達の間では、一年を通じてのメインイベントなのだ。

「でもまあ、みんな十年もしたら居なくなるんだろうな」

「宴会の方は私達、中座すればよろしいでは無いですか？」

「ああ、そうするか」

この所、二人の力が互いに強まっている所為か、初対面の人物であつてもパツと見ただけでその余命が読み取れてしまう事が珍しくない。老臣たちは恐らくほぼ確実に、十年以内に全員亡くなる事になりそうだ。

「気がかりなのはティボー先生だが……」

聖地や聖剣について長年調査研究を続けてきたティボーは、フェリシアの両親には恩師に当たり、皇帝にはかつての文通仲間にあたる老学者だ。現在はフェリシアの実家で手厚い介護を受けて、養生に励んでいるが、やはり余命はあと数年という感じだ。

「まだまだ、先生には教えて頂きたい事も残っております」

「せいぜいフェリシアも心がけて、先生のお話を伺っておいてくれ」

各地の産物を買入れ、宮中で働く人間全体のスケジュールを細かく管理し、新年最初の式典と大宴会を取り仕切るのは面倒と言えば面倒だが「半ば爺さんどもに親孝行でもするように」皇帝が細やかに気遣いを示し、皇后も抜かりなく各方面の管理運営に努めた結果、口うるさい老臣どもが感涙にむせぶほど、うまい具合にすべてが運んだ。

特に老人たちがそれぞれ「家名の誇り」と感じている家の創生期の逸話を、皇帝が皆にわかりやすく紹介したのが良かったらしい。

「神にも等しい知恵とオルト一の学識をお持ちの陛下のお話は、何と言つか古の英雄の事績を鮮やかに思い起こさせてくださって、実に感動しました」

若い貴族たちも興味深く話を聞いたようで「陳腐で難解な古文書に、そのような興味深い事が書かれているのですか」とか「老人の世迷言と思っておりますが、我が家の歴史にもそれなりの興味深い出来事が有ったのですね」とか言う感想が返ってきた。

「あとは、誰が食ってもうまいものとうまい酒を置いておくから、好きにやってくれ」と言う言葉を残して、皇帝夫妻は早めに自室に引き取った。

「クリスマスも無いから、何だか調子が狂うんだよね。今度から勝手に内輪でクリスマスも祝うかな。まあ、今の僕にとって宗教的なイベントとしての意義は無いんだが……クリスマスディナーぐらい食べたい」

「七面鳥ですか？」

「ターキーは十一月のサンクスギビング・デイ（Thanksgiving Day）の定番だよ。クリスマスには僕はハムが食べたかな。クリスマス・クッキーとアップルパイとキャセロールが欠かせない。ああ、食いたくなってきたなあ」

「パイとかキャセロールはどんな感じのものでしょうか？」

「こんな感じ」

フェリシアは夫が差し出す手を握り締め、夫の意識に自分の意識を合わせた。すると背中を少し丸めた銀縁メガネのいかにもグランマ（おばあちゃん）という風情の老婦人が、シナモンやクローブ、レーズンをりんごに合わせてコトコトと煮込んでいる。その傍らにはパイ生地が揚げられて……

「ああ、ダーリンのグランマは銀縁メガネをかけていらしたんですね。ブルーのセーターがよくお似合い」

「そうなんだよなあ。どう言うわけかいつもその色のセーターを着ている様子しか思い浮かばない。きっとほかの服も着ていたはずなのにな」

「さすがに夏のことを思い浮かべたら、違うでしょう？」

「ああ……でも、夏服もブルーデニムのブラウスだな。あの人、ブルーが好きだった。オーバル（楕円）のブルーのキャセロールで、よく暖かいものを作ってくれたっけ」

「じゃあ、ブルーのキャセロールやパイ皿を使いましょうか」

「うん。そうしてもらおうかな」

たまたまフェリシアが新年用に用意したドレスも、マークの祖母が好んだブルーだった。

「うん。ブルーも似合う。どんな色でも似あうけれど、今日はその色を着てくれたのが、何だか僕としては嬉しいよ」

夫は本当にうれしそうな表情を浮かべてから、フェリシアの手を取ってキスをした。それから額・両瞼・両頬・唇と羽毛のように軽やかなキスを繰り返してから、軽く耳たぶを噛んだ。

「今から抱くよ、フェリシア」

「お風呂は？」

「先に抱きたい。ダメ？」

「汗っぽくて、少し恥ずかしいけれど、ダーリンさえ宜しければ」「じゃあ、決まりね」

服を脱がせるにも色々なニュアンスが有ると言う事を、フェリシアは夫に教えられた。今日は丁寧で優しい雰囲気が漂う。そして一枚脱がすごとに、素直にうれしそうな表情を浮かべるのだ。

「フェリシアが僕を信頼して、身を委ねてくれる感じがすごくうれしいよ」

「そう言えば、ダーリン、私たち二人きりの新年のご挨拶をしませんね」

「Happy New year! 明けましておめでとう……今年もよろしく、僕の奥様」

「Happy New year! 明けましておめでとうございませう。今年もどうぞよろしく願いたします、私の旦那様」

「ああ、何か良いもんだね、こうやって二人っきりの挨拶をするの。これからは、毎年続けようね」

「ええ……あ……」

手先の器用な夫はいつの間にもやらフェリシアの最後の下着以外をすべて脱がせてしまっていた。

やはりさすがに恥ずかしくて、つい、胸を手で覆うようにすると、夫はすぐその手を外した。

「僕もすぐ裸になる。だから、隠さないで見せて」

すぐに言葉通り全裸になった夫がまだまだ小さい乳房を掴みながら「今年もつと大きく育てるからね」と囁くと、妻の白い体はたちまちの内に桜色に変化するのだった。

56 (前書き)

我がままな愛馬の嫁さがしと、新たな神域？

年が明けて瞬く間に春がやってきた。花々も芽を吹き、馬達には恋の季節が訪れる。宮中の厩で最も美しい馬と言えば文句なく、皇帝陛下の御乗馬であるアスワドだが、とんでもなくわがままな馬でもあって、頭にきた馬丁たちの中には「こんなやつさつさと去勢してやればよいのに」と言うものも少なくない。

事実、皇帝の馬車専用の六頭の白馬達はおとなしいが、三頭が去勢された所謂セン馬で、残り三頭は雌馬だ。アスワドも去勢してしまえば、馬車馬並みに扱いやすくなる、とまあ、そう言う発想なのだが、馬車馬たちは経験を積んだ馬たちで、まだ五歳のアスワドと同列には論じられない。

「アスワドが荒れて困っております」

そう厩の責任者が、万策尽きたという表情でマークに報告してきた。春から初夏にかけての繁殖期に、例年アスワドは受胎に適合した健康で状態の良い雌馬二十頭前後と牧場で過ごす。最初の年も二年目も、そのうちほぼ半数を妊娠させたが、今年は雌馬を近づけないし近づかないという。

「どうした、アスワド」

皇帝の姿を牧場の柵に認めると、黒馬は即座に駆けてきた。

「雌馬達が気に入らないのか」

馬は何か訴えるような声で嘶いた。

「僕にもっと気の利いた嫁を探して欲しいのか？ん？ハハハ、我がままな奴」

そう言われると、馬はしょげたような表情になって、すっかりお

となしくなる。

「お前ね、余りに暴れるから去勢してくれって皆が言うんだよ。ちよつとは自分の立場を考える。これを食べ、一緒にお前の生まれ故郷のそばの草原に行くか？ん？」

厩のものが気がつかないうちに、いつの間にか乗馬服姿で籠を持った皇后が皇帝の隣に立っている。そして皇帝と皇后がオレンジの実を剥いて差し出すと、アスワドは美味そうに食った。

「皇后と一緒に、アスワドを女神様の神域の草原に連れて行くよ。さすがにあそこに行けば、この我がまま馬も納得の行く嫁が見つかるだろう」

その皇帝の言葉と共に、皇帝夫妻と黒馬の姿は掻き消えた。

目前で目にしながら、馬丁達は信じられなかった。

「おい、今のが噂に聞くワープと言う現象なのか」

「そうらしいな」

「それにしても、馬の分際でアスワドの奴、御一緒させて頂いたのか。うらやましいな」

「嫁、と仰せだったな。アスワドの気に入る雌馬を探してやろうというお心積もりのようだ。けっ！馬の癖に果報な奴」

「俺なんか、嫁の当ても無いのにさ」

「ハハハっ、今度俺の女房の妹を紹介してやるよ。結構器量も良いぞ」

「お！そうか、期待してるよ」

皇帝夫妻は愛馬アスワドを、女神の台座に近い草原に連れてきた。ウルチユナル島の神気を帯びたオレンジを食べさせた効果で、一緒

にワープできたのだった。

「ワープ実験、成功だな」

実のところ、テイボーが古文書の山からその名を見出した『エイルデイルの草原』は女神の台座から余り離れていないらしいが、どこからがその聖域なのかはつきりしない。

フェリシアの実家である聖域侯の邸で病の床に臥せっているテイボーに、フェリシアが聞いた所では「春になると雄馬が、聖域内部でしばしば麗しい雌馬達に遭遇するらしいです」との事だった。女神の台座周辺の村では、その雌馬達の話は有名で、そうした雌馬が生んだ馬は非常な駿馬で有るらしい。

「陛下の御乗馬のアスワドの父親にあたる馬が、そうした神域の馬の血を引くはずですよ」とも教えてくれた。

「アスワドを自由に走らせて、その後を追ってみよう。そうすればその雌馬達に遭遇できるかもな」

「アスワドは遅しくて美しいから、その不思議な雌馬に気に入られて神域に招きよせられるかも知れませんね」

テイボーの生まれた村の言い伝えでは女神の馬とされる不思議な雌馬達は、気に入った雄馬を神域に招き入れその子を生む事が有ると言う。生まれた仔馬は若駒に育つと外界の草原に出て来るとされる。雌馬達と言うが、その頭数も互いの関係性も謎だ。

「女神様におたずねしても『久しく馬に乗らないからどうなのかさっぱりわからない』と言うお答えなものな」

「過去に銀の籠の魔法が暴走した所為で、女神様も色々記憶を失われているようですから、私たちが調べないとわからないのでしょね」

「おや？アスワド！何か見つけたか？」

「まつしぐらですね。よほど気になるものを見つけたのでしょうか」

「やはり、その雌馬だろうな」

「追いかけますか？」

「いや、恋路の邪魔になりかねんからな。意識だけ、アスワドの方に向けてみよう」

恐らく今帝国にいる馬の中で最も速いと言われる俊足でも、その目指すものに肉薄できないらしい。激しい疾走が、その馬の必死なまでのもの狂おしさを示している。

「おや、止まったようですね」

「ふむ。目指す相手が傍にいるかな？」

アスワドの視線が向いていると思われる方向に意識を向けてスキヤンする。すると、真珠色の光を湛えたアスワドより一回り小さな馬が一頭居る。

「雌馬のようだ。あとはアスワドが頑張れば良いって事で、我々も休憩するか」

「そうしますか、それにしても広い草原ですね」

「おやあ？これって、アルファアルファじゃないか？」

「紫の可愛い花ですね。ああ、日本語でムラサキウマゴヤシって言います。確か……へえ、こんな花ですか」

「うん。アルゼンチンで大量に生えてるところを見た事があるよ。僕、アルファアルファのスプラウトが好きなんだが、今まで見かけた事が無かったな」

「スプラウトって言う種を発芽させる、日本語で言うモヤシですね？」

「ああ、そうそう。日本語のモヤシも豆のスプラウトだ」

「真冬の野菜不足の時期に使えるように育てると、良いかもしれませんね」

「うん。健康効果も抜群だ。ああ、スプラウトのサラダが食べたくなってきた」

「味付けは、どうなさるんです?」

「オリーブオイルと塩・胡椒で十分だ。あ、胡椒がオルトじゃ手に入らないなあ……マヨネーズでも良いや」

遠目には緑一面と見えた草原も、そばで見れば色々な植物が生えている。小さな虫も居る。

「あ、てんとう虫!」

「でも、真つ赤に緑の丸い模様って、地球では見ないような」

「そうですね。でも飛び方はそっくりです」

二人は馬の事もすっかり忘れて、子供のように大草原での時間を楽しんでいた。

## 56 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしました。皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

57 (前書き)

夫の気がかりと妻の気がかり

季節は巡り、フェリシアは十一歳になった。

マークの娘や息子達の微妙な問題は表面化はしていなかったが、安泰とも言えない。特にキタイ王室の後継者であるファティマ姫とアングスの夫婦仲が気がかりだが、第三者が干渉も出来にくい。ファティマ姫は既に十五歳だ。アングスが四歳年下で有る事がやはり色々な側面で、都合の悪い方に働いてしまう。

「ダーリンが心配なさっている、いつでも相談に乗るおつもりだって言う事だけわかってもらえていたら、とりあえずはよろしいのじゃないかしら？まあ、確かに場合によっては不十分なのでしょうけれど……」

「何か、不自然ではなく話が出来る環境なら良いのだろうけどな。特にアングス君の方だが……しばらくは静観するしか無いのかな」

とにもかくにも、ファティマ姫とアングスは同じベッドで休む事を続けては居るらしい。マークはファティマ姫に結婚が決まっすぐに「お前から解消しようとしてはならない」と強く言っただけはおいただが、そろそろ夫婦の事に親が干渉するのもおかしい年齢に差し掛かってきた。

「体の距離は心の距離と言う側面も有るからな。特にファティマは並の人間だから、アングス君に思いを読み取ってもらった方が良いに決まっている。だが、繊細で優しい彼には辛いかなあ……」

夫であるアングスが十一歳と言うのが、また微妙なのだ。マーク自身は「遊び好きな女官どもに仕込まれた」所為で、その年には既に異性との性的な交渉を持っていたが、そのようなことを妻の父親

の立場でそそのかす訳にもいかない。まあ、そうした事があっても目をつぶるつもりなのだが、アングスは自分が聖剣の主で、舅である皇帝の特殊な能力の強さを理解しているだけに、そうした行動も取りにくいのだろう。それどころか、彼にはそうした性的な衝動自体まだほとんど感じられなかった。

ポールの事が有って以来、皇帝のキタイ王宮を訪問する頻度は十日に一度程度になっていた。

その日は珍しくアングスが思念を向けてきたのが感じられたので、マークは娘のファティマではなく、婿のアングスと二人きりで語り合った。この所アングスはめつきり背が伸びて、ファティマより背が高くなり、大人びた美貌の持ち主である事も手伝って、二人で並んでもちゃんと夫婦に見えるようになっては来たのだ。

「姫の体は大人ですが、僕はまだ子供で……」

「それにあれは、まだ、ポールに執着してるね。すまない」

「僕に対して、嫌悪感を持ってないようですが、さりとて好かれていると言う程でもありませんから、手をつなぐ以上の事をためらいます」

「どこかその、遊郭なり妓楼なりで予行演習をするかい？妻の父親が言うのもどうかとは思いますが、君が幼い内から言わば勝手に僕が結婚を決めて縛ってしまっただから……必要なら言ってくれ……君、体は大人になっってきただろう？」

つい最近、年若い婿が精通を経験した……そんな事がはつきりわかるのも、決まり悪いと言えば、悪い。遊郭あるいは妓楼に連れて行く事を提案したのも、婿が気の毒と言う事も有ったが、その方面が上手くいかないとキタイ王家の血統が途絶えると言う心配もしているからだ。

「以前陛下に頂いた、医学書は読んでおります。ファティマは月の物の時に腰が辛いようなので、さすってやると気持ちは良いみたいですね」

「ふーん……ならば、キスぐらいしたまえよ。ファティマもそれを境に気持ち綺麗に切り替わるかもしれない」

触れた夫の手を心地よいとファティマが感じているのなら、大いに希望は持てる。そんな風にマークは思った。それこそ、場合によってはアンガスがファティマを抱いたとしても、案外と上手く行くものかもしれない……その考えをアンガスは読み取り、決まり悪げに顔を伏せた。

「いや、それこそ、君が決めればよい事だと僕は思っているんだ」

「はい」

しばらく、どこか気詰まりな沈黙が有ったが、アンガスから一つの申し出があった。

「実は僕、リユートを覚えたいのです。ファティマと一緒にレッスンを受けたら、夫婦の話も弾むようになるのではないかと思いますが……いかがでしょうか？」

「おお、そうだな、その手が有ったか」

以来、マークは週に二度、若い夫婦の為にリユートを教えに行っている。

「ダーリン、最近、御顔の表情が明るいですわ。良かった」

「うん。アンガス君とファティマだが、案外と上手く行きそうだった」

マークは娘夫婦をけしかける事に決めたようで、ことに父親に対する想いが強いファティマはアングスを肉体的な意味でも受け入れようとする気持ち次第に兆して来たようだった。

「ただ……ちよつと気がかりな事がある」

「どのような？」

「アングス君が夢を見たようなのだ。ファティマには内緒で僕に心話でこつそり伝えてきたのだが……」

『不老不死のキタイの王女よ、全てを聞くものよ』と呼ばわる神秘的な声と共に、アングス自身と同じ青い瞳に淡いブルーの髪の毛の顔が思い浮かぶのだが、その目が見えていないように感じられてならないのだと言う。夢とは言え、整った美しい顔立ちだけに、余計に痛ましく感じられるらしい。

「やはり、それは……」

その話を聞いたフェリシアは、思わず息を飲んだ。

「うん『サミーアは見えず、バスイールは聞こえず』のうちの聖剣サミーアの主を、ファティマが生む事になるのだろうか」

「では、昨年クサントスで出会った神々が伝えたように……いまだ生じていない未来の私の妹が……聞こえないのでしょうかね」

「うむ……」

「私の両親に伝えるべきでしょうか……？」

「だが、伝えたとして……前もって何が出来るかな？」

「少なくとも、両親の覚悟だけは違ってくるかと思えます」

「……ならば、フェリシアから……伝えてくれ」

フェリシアは翌日、実家に出向き、母のロザリアに謎の聖剣『サミーア』と『バスイール』に関してこれまで知りえた事柄を全て伝えた。

「（見えなくても見えるようになる。聞こえなくても聞こえるようになる。背負う定めは重いが、皆で支えれば支えられる。助けられる。だから、いたずらに嘆くな）」と言うクサントスの赤い花を咲かせる大木の伝えてきた言葉も……

「ありがとう。よく話してくださったわね。大丈夫。うちには聖剣の主が既に六人も居るし、ティボー先生もいらっしやる。きっと良い方法が見つかるわ。生まれてくるその、フェリシアの妹が幸せになれるように、皆で支えるから、きっと大丈夫よ」

その優しい笑顔を見て、母は強いとフェリシアは感動したのだった。

## 57 (後書き)

誤字訂正しました。すみません!!

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしました。  
皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

58 (前書き)

夏休みです

黒馬のアスワドは皇帝夫妻と一緒にワーブしたあの日、夕暮れ近くになって二人の傍に戻って来た。その後幾度か草原に一昼夜置きっ放しにもして来たが、随分とアスワドは気持ちが悪落ち着いたようだった。

それから夏の間、幾度か皇帝夫妻はアスワドを連れてあの草原に通ったが、『エイルデルの草原』の境界線は結局はハッキリしなかった。それでも、まだ、マークもフェリシアも諦めては居ない。いずれは明らかになるだろうが……思いの外時間はかかるのかも知れない。

「アスワドの嫁がどうやら見つかったらしいのが、収穫だな」

アスワドとあの謎めいた雌馬の間に子が出来たのかどうかはつきりはしないが、可能性は強い。

あの雌馬と出会って以降、暴れる回数もぐんと減って、馬丁達が「去勢だ！」と怒鳴る事もまれになった。

はつきり場所がわかっている神域で、また訪ねて居なかった『ウスパルタの清めの泉』も訪れてみた。フェリシアが生まれてすぐに銀の龍の穢れを封印した黒い玉を沈めた霊泉こそが、その『清めの泉』なのだ。キタイ王家に婿入りしたアングスの聖剣『シャボンヌ』も何年かの間、ここに沈んでいたという因縁も有る。

ここはフェリシアの父である聖域侯クラウスの生まれ故郷ピネ村のすぐ近くであって、かつては祖父のレオンハート公爵の領地であ

ったが、現在は聖域侯領となっている。

フェリシアの両親は皇帝夫妻が夏の休暇をひっそり楽しむために、便宜を図った。ピネ村のクラウスの生まれた家で、のんびりした時間が過ごせるようにしたのだった。

クラウスの生まれた家は小さな地方領主の邸と言う感じの簡素な造りだが、なかなか居心地が良い。もう何年もの間、クラウスをいまだに「坊ちゃん」と呼ぶ爺やが妻の婆やとほぼ二人きりで守っている。ロザリアの事はちゃんと「奥方様」と呼ぶのに、クラウスの方は侯爵様になるうが子供が生まれようが、つい、そんな呼び方になるらしい。

小さな邸だがどの部屋も掃除が行き届き、オルトの最高峰で頂上は女神の住まいとされるレオンハート峰が見渡せる庭には、爺やが丹精をこめた季節の花々が見事に咲き誇る。

爺やも婆やもマークとフェリシアの身分を弁えていても、変に遠慮はしない。

マークの事は「皇帝陛下でいらっしやるが、お嬢様のお嬢様」と言う基本認識なのだ。

「何はともあれ、お嬢様がお嬢様と仲むつまじくお幸せでいらっしやるようお手伝いする」とも言っ居る。

「お若い御夫婦はお寝間で仲むつまじくお休みになれるのが、何より大切です」

「夏にはお二人で、午睡をお取りになって、お疲れを癒すのも大切ですよ」

そんな風に婆やは生真面目な口調で言うのだが、やはりフェリシアはそう言われると照れてしまう。寝具類を常に清潔にし、寝室を

丁寧に掃除し、風通りや照明の加減にまで細心の注意を払っている様子から、婆やの「本気」が伝わってきて、非常に好感が持てるのだが……

何事も「女神様の御加護をいただけるような真面目な暮らしぶり」を貫けばそれで良い、と割り切っている夫婦の基本的な姿勢は、ある種見事である。

食事も「季節ごとの旬の物」を「熱くあるべきものは熱く、冷やすべきものは冷やして」「手抜きはしないで」「作る事に徹している。シンプルだが健康的で滋味に富んだ食事はいつも皇帝夫妻を喜ばせた。

「女神様のお庭の花の蜜を集めた蜂蜜」だから、このあたりの蜂蜜は帝国一いやオルト一美味い、と爺やが自慢するだけの事は有る。なかなか大したおいしさだ。それをヨーグルトにかけたり、菓子作りに使ったり、色々活用するのだが、特にマークを喜ばせたのは、そば粉のパンケーキだった。

「坊ちゃんから、陛下がお好きだと伺ってますんで」と言っけてイータイムに出してくれたのだ。

「僕さあ、これを幾度か自分で焼いて、クラウス君とロザリアちゃんに食べさせたよ。いや、この焼き加減は実に絶妙だな。文句なくうまい。凄いね爺や」

夫とフェリシアの両親共通の思い出の味でもあるらしい。

「元々はね、僕のグランマが、気が向くと休日の朝食用に焼いてたんだ。僕にとつてのそば粉の料理といえば、まず最初がこのパンケーキだよ。日本に行って、そばがああいう形でヌードルになっているのは驚いたんだ。でも、あれはあれで美味しいね。僕は生粉打ちそばが好きだな。つなぎに布海苔を使ったへぎそばも美味かった」「へぎそばって、雪国の名物ですね」

「うん。大学生の時、結構色々旅行したからね。つるんとした感じが、独特で癖になるよ」

「あああ、食べたくなってきました」

「そば、打ってみるかい？」

「お醤油がもう無いですし……和風のだしを取る素材が……まあ、魚や野菜やキノコで工夫はできそうですが、そばのおつゆって感じになりたくそうです」

「フェリシアの力が十分強まったら、日本にも行くかね」

「ええ……おそば・お饅頭・ラーメン・冷麺・お好み焼き・みたらし団子・お寿司・お饅頭・お煎餅・落雁……」

「へええ、フェリシアは麺類が食べたいの？」

「ええ。何だかそうみたいです」

「パスタも好きだね、そう言えば。君の母上が皆に教えるまで、オルトにはパスタも無かったんだよね」

「夜は、冷たいハーブのパスタをお出ししますよ、お嬢様」

婆やはニコニコしている。

「そうそう、婆やの冷製パスタは絶品ですよ」

フェリシアがそう言うと、マークは相好を崩した。

「冷えた白ワインが付くと最高だね」

「裏の井戸で瓶ごと冷やしてます。この村自慢の白ですよ」

爺やが、すかさずそう応じた。マークはますます嬉しそうな顔になった。

「お嬢様、夕食が整いますまで陛下とお部屋でお休みになりませんか？心地良い風が出てきましたよ」

婆やの勧めに夫は応じることにしたようだ。

「今日は朝から午前中一杯、神域を探検してきたからね。少し休むか、ね。フェリシア」

爺やと婆やは皇帝夫妻が「仲睦まじくお休みになるべき」と結構

生真面目に考えている。

「……はい」

「仲睦まじく、休まなくっちゃね」

こんな小さな邸なのに、給湯設備だけは最新式だ。爺やはボイラーを正しく扱うために、わざわざ首都のオルテスで研修まで受けたらしい。

「風呂やシャワーがちゃんと使えて、清潔で気持ちの良い寝具、最高だよ。地球なら五つ星のリゾートホテルって所だな。爺やと婆やの人柄の良さもあるから、それ以上だが」

「気に入っていただけで、よかったです」

「あとは、爺やと婆やの期待に応えて仲睦まじく休まないとな」

ね、そうだろうか？と皇帝は熱っぽく囁きながら、妻の体を愛撫し始めた。

58 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしています。  
皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

## 59 (前書き)

気のなじみ方は？R15です。たぶん。NGワードは無いはずですが！

「期待に込めて仲むつまじく」昼寝をした後、夕食をとり、部屋に戻ると寝具はもう一度すっかり交換されていた。婆やの心配りは細かいのだが……やはり、あのシーツの状態を考えるとフェリシアは照れる。

「良いじゃないか。あんまり気にしすぎると、かえって心遣いを無にするようなもんだし。別に婆やが、シーツがどうだったって言う筈も無し」

「でも……」

「でも恥ずかしいの？ふうん……顔、真っ赤だね。可愛いな」

「……えっと、あの……」

「さっきは、ゆったり可愛がってあげただろう？あれでも辛かった？」

「辛くなんか……」

「じゃあ、気持ちは良かったんだ」

いつも夫のやり方は丁寧だが、休暇中は丁寧を通り越して執念深いと言いたくなるほど、フェリシアの体のすみからすみまで刺激する。至る所にキスして、愛撫して、舐めしゃぶるのだ。

「じゃあさ、こんなのはどうだい？」

震えている乳首をきつく吸い上げられながら、大きな器用な手で鳩尾、わき腹、わき腹から更に腰のくびれ、尻、内股と絶妙なタッチで愛撫を続けられると、頭の中が真っ白になる。フェリシア自身が聞いていて恥ずかしくなるような、媚びる様な甘える様な噁り泣きを上げる様になってしまう。

「おやおや、大変な事になってるぞ」

夫は憎らしいほど落ち着いた声で、少しばかり意地悪な口調になる。更に震え慄く鼠蹊部そけいぶに舌を這わせ、秘められた丘を手の平で包み込む様に揉み始める。そのくせわざとだろ、奥の中心には触れないのだ。時折、生え始めたばかりの柔らかい下萌えを、丁寧に梳きあげたりしてみせる。フェリシアが焦れて、身震いするのを楽しんでいるとしか思えない。

「匂いが濃くなってきたね。良い感じだよ。フェリシア」

わざとこんな風に名前を呼ぶなんて、人が悪すぎるとフェリシアが恨みがましく夫の顔を見つめてみると、夫はニヤリという感じに唇を歪めて見せた。そしてその形の良い唇はフェリシアの鼠蹊部そけいぶを、恐らくは意図的に通り越して、内股を彷徨っている。

「ひいっ……ひっっ……ひっ……」

期待をこめて上げた悲鳴がはぐらかされて、つい、悔しげな啜り泣きに変化してしまう。そこら中に溢れ出て吹きこぼれたものを、夫は殊更に音を立てて舐めあげる。更に舌は膝の裏からふくらはぎへ向かい、そして……

「そ、そんな所は……お、お口になさっては……」

「白くて実に美しい足だ。爪の一つ一つもまるで花びらのようで愛らしい」

脚全体を愛撫された事はあったが、こんな風に足の甲を舐められたのは初めてだ。オルトでは普通婦人は素足をさらして歩かない。

それだけにフェリシアの羞恥心は激しく煽られる。

「……は、恥ずかしい……御覧になっては……イヤ……」

「どうして？良いじゃ無いか」

「でも……」

「じゃあ、見る代わりにこうしてあげよう」

夫は舌なめずりすると言った感じで、足の五本の指を一本一本口に含む。

「ヒイイッ……」

フェリシアが狼狽して体を揺すっても、夫はかまわずに指の股まで舌を這わせるのだ。丹念に吸われ舐めあげられ、指と指の間を舌でくすぐられしゃぶられるうちに、いつしか指は抗う力を失い、夫に弄ばれるままとなった。

やがてヒクリヒクリと指を時折痙攣させ蠢かせながら、フェリシアは昂ぶり切った泣き声を上げた。

「フェリシアの、良い所をまた一つ見つけた」

夫は身をゆだね、脱力してしまった妻の体を愛撫しながら、上機嫌になった。そして再びフェリシアの上に体を重ねると、そり立つ物で蕩け切った割れ目を軽くこすり、上気した耳元に甘い声で囁いた。

「欲しかったら、ちゃんと正直に自分で言っただよ」

「いやあ……そんなあ……」

本当に夫は意地悪だ。分かり切っているのに、わざとそんな風に

言う。返事を待つ間も自分のそれでフェリシアの一番敏感な核の部分を擦り上げたり、滾る狭間に擦り付けたりして見せるのだ。そして更に真っ赤になって身悶えする妻を嬉しげに見下ろしつつ、頬や首筋にキスの雨を降り注ぐ。

「お、お願いっ……もっっ……」

何を言ったのか正直瞬間の記憶が飛んでしまって、わからない。夫のものを漸く迎え入れると、ひどく恥ずかしい声が口から切れ切れに漏れてしまう。思わずフェリシアが口を覆うと、夫はその手を掴んでシーツの上に押さえ込む。

「ちゃんと、声も聞かせて。感じているときの声、素敵なんだよ」「き、キスを……キスして下さい、お願い！」

それ以外、声を抑える方法が無い。恥じらいと慎みが音を立てて崩れる瞬間、喘ぎ泣く声に唇が重ねられ、熱い舌が激しく絡み合う。夫の律動は火を吹くように激しいものに切り替わり、秀でた額から汗が滴り落ちた。フェリシア自身の内部が夫の動きに呼応して、キリキリと締め上げる。痙攣が走った。

「んっ……んっ」

キスをされてもなお、呻き声が吹き零れ、フェリシアはグンと身をそらし、この上ない快感に体中が震える。その瞬間、夫はフェリシアを折れんばかりにきつく抱きしめ、激しく精を放ったのだ。

「ねえ、フェリシア……凄く感じてしまったよ……その、十代の頃  
の感覚に戻ったみたいだ」

ひりひりする感覚が残っているものの、フェリシアもその夫の言葉にためらい無く同意できた。もっとも、彼女は十代に成り立てではあるが、夫の言いたい事が分かった気がするのだ。

「ならば、絆は深まったでしょうか？もしかしたら……『カプスユの廃墟神殿』の大岩の封印が……」

「どうだろうか？双龍は『二人の気が十分になじまない』あの封印は解けないと言っていたが、この程度で足りるもんだらうか？」

「……え？そ、そうですか？」

「いや、今すぐどうこうって訳じゃないよ」

そうこうする内に、夫のものはまた、堅さと大きさを取り戻していた。

「あ、あのう……」

自分は夫を十分に満足させる事は出来ないのだと思うと、すまないと言う感情が湧いてきた。

「おやまあ、しつけの悪い愚息で、ゴメンよ。余りにフェリシアが魅力的だから、こうなっちゃうんだよ。冷たいシャワーでも浴びてくるぞ」

そう言っつて、夫は軽いキスをフェリシアの唇に落とし、ベッドを出た。すまないなどと思う必要は無い、そうした意味合いらしい。

しばらくしてシャワーを浴びた夫が戻ってきたが、フェリシアはベッドを出る時によるけ、上手く歩けない。

「では、浴室にお連れ致しましょう、奥様」

夫の声はこんな時も、陽気で明るい。

抱きかかえられながら、フェリシアは、自分がどうしようもなく夫を愛していると言う事を強く実感していた。



59 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

60 (前書き)

お休みは、そろそろ終わり。いちやっついてます

確かに『カプスユの廃墟神殿』の大岩の封印が気にはなるのだ。以前、フェリシアと一緒に訪れた時、灰色の大岩の表面に、二本の剣が交差したような形のまるで何かのインジケーターのようなものが、一瞬浮かんだのだ。地球の青色発光ダイオードを思わせる光だった。

「（二人の気が十分になじまないと、この封印は解けないぞ）」  
「（しつかり十分になじまなければ、無理だぞ）」

あの時、金の龍・銀の龍はどのように伝えて来たのだった。

「別に、カプスユの封印を解くために気をなじませているってつもりは無いのにな。気にはなる。龍達にとっては待ち遠しい事なんだろうね」

「あの、岩の上に一瞬浮かんだ青い二本の剣の形の印、気が十分になじむと、あんなにすぐには消えないと言う事でしょうか」

「うん……そんな所だろうが、休みの間はのんびりしたいな。あの廃墟神殿は、荒涼とした場所だったから、休暇を楽しむには向いて無いと思わないか？」

「ええ、封印が解けた後、何かあるのかも気がかりですし」

「どうせ聖剣がらみで何がしか有るよねえ……気が重いよ」

「せっかくこんな素敵な宿に泊まって居るんだから、休みの間はのんびりフェリシアを可愛がりたいよ」と言つと、フェリシアは真っ赤になるが、嫌がつては居ない。その休みももう、残りはずかだ。

「ああ、もう、皇帝なんてやりたくないな。面倒だ。フェリシアと

何処かに駆け落ちしてしまおうか」

「本気では、そうは思ってたっしやらないくせに」

「でも、面倒なのは本当だ」

「もう少し、お仕事の量は減らせませんか？」

「そうだなあ、仕事の割り振りをもう少し根本的に見直さないと…」

…って、考える事自体、面倒」

「私がつと、お役に立てれば宜しいのに」

「ほんとにそう思う？」

「ええ。本当に、そう思ってますよ」

「じゃあ、フェリシアを十分にチャージさせて、ね？」

「まあ、ダーリンたら」とあきれられるのは承知なのに、その真つ赤になる顔を見るのが一種の快感であるのは間違いない。更には自分の腕の中で身悶えさせて、快感の余りのたうち涙を零す所を見たいのだ。悪趣味と言われようが、何と言われようが、偽らざる正直な感情なのだ。雄としての本能かもしれない。

フェリシアは幼い見かけに関わらず、こつした自分の感情を恐らくはかなり正確に理解し、受け止め許そうとしている。そんな気がする。やはり成熟度の高い魂が宿っている所為だろう。

「ごめんよ。僕は欲張りなんだ多分」

「私は、ダーリンに欲しがって頂けて、幸せです」

「本当に、そう思ってくれる？」

「ええ」

赤い輝く瞳には幼い容貌には不似合いなほどの、深い情念が揺らめいている。マークが酷くフェリシアに惹かれるのは、こつした心理的な面での深みの所為かもしれない。

「それにしても、本当に綺麗になった。この腕の中でオムツをして

眠っていた頃を思うと、感無量だ」

「私、ずっとダーリンに抱っこして頂いて育ったのですね」

確かに、フェリシアを抱いていた時間は両親よりも誰よりも、マ  
ークが一番長い。

「フフフ、最近は意味合いが変わっちゃったなあ。……だが、こっ  
ちの方が本来の姿なんだろうがね」

「随分、長い間お待ちになったのですよね」

「その甲斐は有ったって、思ってる」

「でも、私……」

フェリシアは自分が夫を「充たせない」と感じているようだ。た  
「肉体的な事だけで充たされるわけじゃないんだ。フェリシアに無  
理ばかりついさせてしまう事が続いたけれど、それは、やっと君を  
男として愛する事が出来るようになった喜びの余り、ちょっとやり  
すぎてしまっただけで……僕が欲張りで馬鹿なだけで、まだまだ幼  
い体の君が悩むべき事じゃないんだ」

「そうでしょうか？」

「そうだよ。君の体が完全に成熟したら、今とはまた状況が大きく  
変化してるぞ」

「私が……ダーリンを欲しがりすぎて、ご迷惑をかけるでしょうか  
？」

「君が本気で欲しがってくれるなら、全てを充たしてあげたい。き  
っとそう思うだろうよ。って言うか、多少は今でも僕を欲しがって  
はくれているんだよね」

「ええ。気持ちだけは十分有るつもりなのですけれど……」

「体がついて行けないだけ？」

まだまだささやかな乳房を、ゆっくり掌で揉み上げはじめると、  
顔を真っ赤にして「ええ」とうなずいた。いつも話をしながら、フ  
ェリシアの衣類を脱がせてしまうせいかわ「ダーリン、ずるい」と後  
から涙目で抗議される事も普段は有るが「充たす、充たさない」と

言う事を気にしている所為だろう。休暇に入って、この小さな邸で抱く時には、一度も文句を言わない。

「妻の義務だとか、番の務め、<sup>つがい</sup>なんて思っ  
てないよね？」

そんな風に思われてはたまらない、とマークは思うのだ。

「私が……私本人がダーリンと愛し合いたいの  
です。義務だの、務めだのと言うのは、見方を変えたら成立するの  
かもしれませんが……それが愛情より重要だ  
なんて、悲しいです。嫌です」

「良かった。安心したよ。僕達はオルトの神々の都合で、奇妙な境遇に在る訳だけど、それでも僕は君と言う人を自分の意志で選  
び取ったと思っている。そして、君を妻にして本当に良かったと思っ  
ている」

真摯な言葉と、官能をかき立てる愛撫はマークの中では聊かも矛盾しない。

「ダーリンの手で、摩って頂くと、とても気持ちが良い……ああ……」

「うんと小さいときから、ここを摩ってあげると気持ちよさそうにしていたねえ。無意識のうちに、僕は赤ん坊の頃から君の性感帯を  
開発していた事になるのか？」

「いやあ……そんな、破廉恥な……」

「良いじゃ無いか。破廉恥だって。それに、僕は……赤ん坊の頃か  
らの君の体の変化を全部知っているのは、自分だけなんだって改め  
て自覚して、実に嬉しい」

「そう。それは、本当にそうですね」

マークが深いキスを与えると、フェリシアは積極的に応じた。小さな舌は熱く、マークの舌ときつく絡み合う。唾液のやり取りを一頻りすると、フェリシアの体温は少し上がったようだった。

「ねえ、ここは？」

芳しい汗の香りを楽しみながら、脇にマークが鼻を突っ込み舌を這わせると、フェリシアは体をうねらせた。

「何だか、もう一箇所フェリシアの良い所を見つけたみたいだ」

マークはフェリシアの反応を無邪気に喜ぶ一方で、大岩の封印の事を意識から切り離せない。休暇がすんだら……厄介事に対峙する覚悟は有る。だからせめて今は、妻との時間を存分に楽しみたい。

そんな夫の思いを知ってだろうか、幼い妻の反応はその夜、いつにもまして激しかった。

60 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

61 (前書き)

いよいよ問題の二本の聖剣が見つかったが……過去の記憶に戸惑う  
フェリシア

「ふむ。今度は印は消えないわけだが、この後、どうするのだろうか？」

「このインジケーターのような青い二本の剣が交差した形の中に、何か見えたような気もしますが」

「見えたか？」

「文字か数字のようなもの。私の知らない地球上の言語のような気がします」

「もしかしたら、こんな具合かな？」

マークはフェリシアがさっぱり読めない短い二つの文字の列を、指で足元の砂に書いて見せた。

「これ、たぶんこれだと思います」

「確かに、日本人はめったに勉強しない言語かな。明治以前は歴史的な関係がほぼ皆無だったから。最初が『サミア』次が『バスイール』……共に大いなる神の力を称えた言葉だ。『すべてを聞く者』と『全てを見る者』と言うねえ……」

「どうしますか、これから」

「君の両親を見習って、分からない時は互いの聖剣を掲げて交差させるか……ちょうどそのインジケーターと思しき物と同じ形も取れるから」

マークは自分の聖剣『ジルニトラ』を、そしてフェリシアは『ヴィーヴル』を鞘から抜き放ち、切っ先を高く掲げてから、岩の前で交差させた。すると……何か非常に大きく重いものが倒れ落ち込むような音がしたと思ったら、目の前の巨岩が後ろに空いていたらしい大穴に倒れこんで、すっぽり嵌っていた。

「これは……先に行け、そう言う事だな」

「そう言う事なのだと思います」

『ジルニトラ』と『ヴィーヴル』が揃って、共鳴音を上げ、振動し始めたのだ。倒れこんだ大岩を二人が踏んで先に進むと、岩盤を掘り抜いた祠のような浅い洞窟が有った。広さと奥行きは、小学校の教室程度と言ったところだろうか。一番奥に大きな平たい岩が有り、その上に淡く光るものが認められる。やはり……剣だ。

「これは……この凶案化された耳の絵が鞘についているのが『サミア』で、目の絵がついた鞘が『バスイール』でしょうか？」

「細い、華奢な感じだな。優美だが武器としての実用性は低そうだ」

二本の剣はあのインジケータの記号と同じ形に交差して平らな岩の上に安置されていた。

「でも、これからこの二本をどうすれば？あるいはここに置いたままが良いのでしょうか？」

「そうだよなあ。どうすれば良いのだろうか？」

聖なる剣、それもまだ生まれていないマークの孫とフェリシアの妹に深くかわり、不老長寿と一種の災厄をもたらすらしい正体不明の剣を、これからどうすれば良いのだろうか？二人が途方にくれて考え込んでいると、金の龍・銀の龍がこう伝えてきた。

「（早く二本を持って、霊泉へ行き、沈めろ）」

「（沈めた後、一時的にワープが出来ないが、しばらくしたら力は戻る）」

「おいおい、暫くって、どの程度なんだ？勝手に言われたって、困るじゃないか」

マークは人間世界のスケジュールに無頓着な双龍に慣れてはいる

が、長い空白は困る。夏休みからまだ間が無いので、休んでばかりと言う印象を人に与えるのもまずい。

「(番で身を寄せ合えば、一日たてば元通り、いや、元より強くなるぞ)」と金の龍が言えば、「(フェリシアと深く交われれば半日で元に戻るぞ)」と銀の龍が言う。

霊泉にワープして運ぶまでは、双龍も力を貸すらしい。

「ダーリン、どうやらこの二本の剣を持って、霊泉に行くしかなさそうですね」

確かにフェリシアの言う通りの状況だった。

霊泉の周辺の佇まいは以前と大して変わらない。強いて言うなら岸辺で咲いている野の花が季節ごとに変化する程度だろうか。今は桃色のまるで金平糖を思わせるような小さい愛らしい花が見渡す限り咲いている。

「(早く、二本とも沈める)」

「(なるべく深い所に沈める)」

「どこが深いかなんて、わからんよ」

マークが文句を言うと、「(ここだ)」「(ここにしろ)」と龍たちに場所を示されたので、そこから二本とも投げ入れた。水面はすぐに静まり返り、龍たちも気配を消した。

「ワープが出来ないらしいね」

「私の両親と『心話』は出来ないでしょうか?……大丈夫みたいですよ」

マークとフェリシアはすぐに、フェリシアの母であるロザリアに

『心話』で連絡を取った。宮中に出向いて、役人や女官の主だったものに皇帝夫妻の不在の事情を伝えてくれるらしい。更には夏休みに泊まった小さな邸の方にも話を通すようだった。

「さてと、ここからは、歩いて今夜の宿まで行くわけだが……そんなに遠くも無いな」

「ええ。爺やと婆やはきつとまた、歓迎してくれますね」

「様子を見てみる？」

二人の能力なら、爺やと婆やの現在の状況ぐらいは軽く透視できる。

「私は、見なくて良いです」

フェリシアはもしかして二人が本気で迷惑がっていたら、シヨックだ……と思ったのだ。

「……ちよつとあわててるけど、喜んでくれてるよ。気の毒だから、ゆっくり行こう」

「じゃあ、この霊泉のほとりでのんびりしてから、行きますか？」

「そうだね」

マークとフェリシアは草原の上に寝転がる。

「Pink-head knotweedだね。日本語ではどう呼ぶのか知らないけど。ソバに近い植物だね」

「ピンク色の金平糖を散らかしたみたい、って思たんですけど……可愛いですね」

「金平糖は日本で初めて見たな。京都の高級なものすごくおいしいのを食べさせてもらった。その後本家本元だつて言うポルトガルを旅した時に、首都のリスボンでは見なかつただけど、北の方でもっと素朴で気軽な雰囲気を見た。教会で結婚式の時に撒くんだつてさ。アメリカでも古い時代は金平糖を撒いたつて記録も有るみたいだ。手に入りにくいから米になつちやつたんだな」

「へええ、ライスシャワーってもとは金平糖撒きだったんですか」  
「らしいよ。へえ……確かに何だか、野原一杯に金平糖をばら撒いたみたいだね」

どんなに多くの人に祝福された花嫁でも、こんなにたくさん金平糖が散らかる筈も無いが……

「フェリシアならこの位沢山でも、不思議じゃないか。結婚式って僕らしてないけどね」

「だって、生まれてすぐから私はダーリンのお傍で暮らしてましたから」

「でも、なんだか見たいなあフェリシアのウェディングドレス姿……その内、一緒に地球に行けるようになったら、無宗教の式場か規則の緩い教会で、式を挙げたいな」

「え？そんなんですか？」

「うん。僕、考えたら花婿役って、やった事が無いんだ」

地球人であった頃マークは独身だったし、キタイのイゼル王女とは法律的な手続きをして内輪の披露の宴会はしたが、ハリカの事も有って拳式という気分になれなかった。

一方で地球では結婚し子供もいたフェリシアは、正直な話、それほどドレスに思い入れは無い。花嫁役はやったわけで……その時の記憶も有る。どう返事するべきか、わからない……夫の気持ちを傷つけたくないし……

「フェリシア？ねえ……」

思考を閉じてしまったせい、聖剣を霊泉まで運び出すために多くの力を費やして、神気が本来の状態にまだ戻らないせいか、それとも単にこの愛らしい花の傍が心地良いせいか、あるいはその全てなのか、理由はわからないが、フェリシアは体を丸めて、マークに

寄りそって小さな寝息を立てていた。

## 61 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

## 62 (前書き)

ワープして戻するのに必要な程度って？

「目が覚めたかい？」

フェリシアが気がつくのと、夏の休暇の間ずっと夫と共に眠っていたベッドの上に居た。

「あの、私、あれからずっと？」

「うん。力を使いすぎたのかもしれないね。おんぶしても、全然目を覚まさなかったよ」

夫の穏やかだが気遣わし気な視線から、フェリシアは自分が異常なまでに深く眠った事を悟った。ピンク色の金平糖のような花が咲き乱れる草原から、夫はフェリシアを背負って徒歩でこの宿に辿り着いたようだ。

369

「ごめんなさい。大変でしたでしょう？」

「いや、ちつとも。そりゃあ、赤ん坊の頃より多少重いけれど、まだまだ軽い。今しがた、食事の用意が整ったらしいよ。食べられる？」

「はい。大丈夫だと思います」

「じゃあ、行こうか」

夕食は簡素ではあるが相変わらず滋味に富んでいた。

「良くは存じませんが、陛下とお二人で大変なお仕事をなさったところで……豆のポタージュに川魚のムニエルとハムと新芋のサラダぐらしいか御座いませんですが、婆やがチーズケーキを焼きましたぞ」

「お嬢様が全く意識を失っておられるのかと思うほど深く眠ってお

られたので、どうしたのかと心配致しましたよ。でも、陛下からお休みになれば恐らく大丈夫と伺って、ほっとしていた所です」

夫が勧めて、爺やも婆やも一緒に食事し、その後少しワインを飲んだ。

「すると、あの霊泉に二本の剣が沈んでいるのですか？」

爺やは興味津々と言う顔つきだ。

「うん。僕が今まで出会った聖剣は自分の力で目指す場所に飛んで行くし、もつと太くて大振りで拵えも戦いに向いたガツシリしたものが普通なんだが……あの二本は華奢なつくりでね、色々と変わっている」

「華奢なつくりと言う事は、女の方がその聖剣の主様なので御座いますか？」

確かに婆やの言うような受け止め方が、普通だろう。

「うん。将来の僕の孫娘と、フェリシアの妹だ。いつ生まれるのかハッキリしないがね」

「お嬢様の妹様ですか？と言う事は、そのうち奥方様がお目出度なのですね？」

「奥方様は御存知なのですか？」

「私から母上には、お伝えしてあります」

「ならば私も婆やも、頑張って蜂蜜を仕込まなくては！あと、リキユールの仕込みも増やしませんと」

爺やは、今から大いにやる気のようにだ。その特製のリキユールはこの地域のワインに霊泉のほとりで摘み集めた薬草を漬け込んだもので、滋養強壮の効果が大きいのだそうだ。

「ですが、不老不死になられた方には余り関係は無いものでしょうか？」

爺やは、前から疑問で有ったらしい。

「いや、健康的に毎日を過ごすためには、十分に役に立つよ。死なないと言うのと、元気で澁刺としているのは大きな違いだからね。この邸の心のこもった美味しい食事で、僕もフェリシアも力を取り戻す事が出来る。味や材料もだけど、人の想いを讀めてしまうようになるよ、その中に込められた思いやりや心遣いそのものが、大変なご馳走であつたりするのだ。だからね、ここの食事は大変に美味しいよ」

こんな風に皇帝陛下に褒めていただけで、爺やも婆やも大いに喜んだ。

更に、皇帝が手ずから紅茶を淹れてみせると、爺やも婆やもその味の良さに驚いた。それから婆やが焼いたケーキを優雅な手つきで全員にサーブすると、爺やも婆やももつと驚いていた。

「実はね、内緒だけど僕とフェリシアは、皆に秘密でオルテスでちよつとした食べ物屋をやつてるんだ」とマークが打ち明け、時には掃除も皿洗いも、当たり前に分達でやると言つと、老夫婦は魂消たらしい。

「陛下がお淹れになる紅茶、大膳職や女官が持つてくるものより美味しいんですけれど、宮中では色々面倒で飲めないのです」

フェリシアが残念そうに言つと、老夫婦は美味さを味わった後だけに、それはご不便ですね、と同情した。

「それにしても、陛下の美味しいお茶とお給仕のおかげで、婆やのケーキがいつもより数倍美味く感じました」

「同じ茶葉で、こつも味が違うものですか。湯の温度一つで、凄いいいものですね」

婆やは、美味しい紅茶の淹れ方を熱心に覚えようとしていた。そし

て、幾つかのポイントを守って、婆や自身が淹れてみると、マークのものと同色の無い味になった。

「いやあ、ウチの自慢になりますな。皇帝陛下に御指導頂いた美味しい紅茶」

爺やも、嬉しそうだ。

和やかに盛り上がった食事を終えて、マークとフェリシアは寝室に戻った。

「ゆつくりと風呂に入ろうね」

マークは実際、フェリシアが内心思ったような事は何一つしなかった。

浴槽にゆつたりと浸かっていると、夫がクスツと笑った。

「いやあ、僕はね、フェリシアが思ったような事をしようかなとは思ったけど、今日はお疲れ気味のようだし、遠慮したよ」

「……御存知なのに……意地悪な事を、仰るのね……」

「遠慮しない方が、よかった？ん？」

ちらつとも思い浮かべた事は、気合を入れてブロックをかけない限り、全部夫に読まれてしまう。夫はこうした場合のポーカーフエイスの使い方が上手い。フェリシアに本音をさらけ出さないうちには全然違うことに意識を飛ばして見せたりする。そうした事がごく自然に出来るのだ。今だって、夫の意識の表層には昼間見た金平糖のような花の事が有って、その奥が読み取れなかった。

「フェリシアだって、やろうと思えば簡単に出来るんだよ」

一番関心の有る事に関連の有る別の事柄の映像を、鮮明に思い浮かべれば良いのだと教えてくれた。

「でも、フェリシアって一本気で馬鹿正直な所が有るから、難しい

かな」

だからって、僕がフェリシアに隠し事ばかりしてるとか思わないでね、などと言いながら、浴室から出るとフェリシアの体を拭き、さっさと抱きかかえてベッドに入った。幼い頃からフェリシアの世話をしているせいかな、夫はいつも手際が良すぎて、気がつく

と裸で抱きしめられているのだ。

「私、馬鹿正直ですか？」

「並の者に本音を読み取られるとは思わなければ、僕には上手く隠せないようだね」

「……恥ずかしい……」

本当に恥ずかしい。泣きたいほどみっともない反応を体が示し始めている。

「泣かないで、フェリシア……恥ずかしがったりしなくて良い」

夫は背中をさすり、まぶたにキスを落とした。

「ほら、僕の本音をゆっくり読み取ってごらん」

夫は強くフェリシアを胸に抱き締めた。すると……酷く刺激的な情景が見えた。

「ねえ、ダーリン……本当ですか？ダーリン」

「ああ。破廉恥で病気だろ？ん？ドン引きした？……クツ、何だ、そうでもないのか」

無言で、フェリシアは頷き、自分から夫にキスをした。

「ねえ、今夜はワープして戻るのに必要にして最低限ぐらいにしようか？」

「そんな微妙な加減なんて、分かるものですか？」

「フフフツ、分かるわけが無いよ。でも、ちよつと控えめでも十分じゃないかな？」

その夫の顔を見ていると、本当は夫はワープする力を取り戻すのに『必要にして最低限』な程度と言つのを承知しているのではないかと、フェリシアには思えてならなかった。

## 62 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

### 63 (前書き)

次世代の聖剣の出現の時期と性格について、二人は考えるが……

「いや、その、何と言おうか。ファティマの意識は……垂れ流しなのでね。嫌でもわかってしまって……ハハハ」

「そ、そうですね」

「いや、だが、色々気を使わせているようだね。すまない。いや、ありがとうと言うべきだな」

「もう少し、年を考えますと、後でも良かったはずなのですが……」

「いやいや、こうした事は『ものの弾み』と言う奴も大切だからね。本当に、感謝してるよ、アンガス君」

皇帝と久しぶりに顔を合わせた娘婿に当たるアンガスは、ひそひそ話し込んでいる。そこへ、別室からファティマ姫が戻って来た。

「お父様も、アンガス様も、何をひそひそお話なさってますの？」

「何、男同士の話と言う奴だ」

「そ、そうですね」

「ファティマは、もっと自分の夫がいかに素晴らしい人が正確にきちんとして認識出来ねば困ると、正直思っている」

「陛下……」

「君には色々のご苦労をおかけするが、どうかこれを支えてやってくれたまえ」

ファティマはむくれてしまった。

「どうせ私は、王家の血筋以外何のとりえも無い女で、聖剣の主であるお父様やアンガス様から御覧になって、出来の悪い娘で、妻なのでしょう」

「ファティマ！いい加減にしなさい」

めったに怒声など上げない父に、本気で怒鳴られた事がショックであったのか、ファティマはわっ、と声を上げて泣き出して、いきなりまた部屋を飛び出してしまった。

「す、すまない、アンガス君」

皇帝はガツクリ首をたれて、まだ十一歳の娘婿にわびた。

「陛下、陛下のお心遣いはありがたく承りました。今日の所は、どうか僕にお任せください。仮にもファティマの夫なのですから」

「いやいや、仮だなんてトンでもないよ。ファティマには勿体無い位の立派な婿殿だ」

「大丈夫ですよ。ファティマは素直で愛らしい人ですから」

「わかった。僕が顔を見せると、ますますこじれるな。では心苦しいが、アンガス君、よろしく頼む」

まだ十一歳のアンガスがすっかりリードしてファティマと男女の一線を越えた事自体は、文句なく目出度いとマークは感じていたが、まだまだカップルとしての安定感が不足している。

ファティマが何やら喚きすすり泣き、それをアンガスが宥めている。ファティマの泣き声が媚びたトーンの甘ったるいものに変化した。盗み聞きするつもりは無いが、同じ宮殿に居ると、嫌でも気配を感じてしまう。

年の割りに老成していて、世間一般の十五歳相当の精神構造の妻を言葉は悪いが「上手く手懐けている」ようだ。この分なら、アンガスに任せておけばよい。

「（では、失礼するよ。ファティマをよろしく）」

「（はい、お任せ下さい）」

キタイの宮殿内部の恐らく、奥まった花園に二人は居るのだ。マ

「イクは婿に『心話』で挨拶をした。いつも思うのだが、アングスの気配は邪気のかけらも無く、澄み切っている。本気で四歳上のファティマを「可愛い」と思ってくれているようだから、もう心配は無さそうだ。確かにまだ危なっかしげな夫婦ではあるが……」

「子供が生まれれば、夫婦仲は落ち着くだろうな」

「だが、それがあの聖剣『サミア』の主なら……既に予知しているアングスはともかく、ファティマはやはりショックを受けるだろう。」

「ダーリン、どうなさいました？」

昼食後、フェリシアは自分で丁寧にドリップしたコーヒーを夫に差し出しつつ、気遣わしげに声をかけて来た。

「うん。アングス君とファティマが男女の契りを交わしたようだ」

「まあ。ならば……『サミア』が出現するまで、余り時間が無いのでしょうか？」

「どうなんだろうなあ。『サミア』と『バスイール』は、あの大岩の陰の祠から、自力で飛び出さず、僕らが霊泉まで運んだよね。その事が一体何を意味するんだろうか、つい考えてしまっよ」

「飛べない程、穢れか何かが溜まっていた。あるいは元々が飛ばない、誰かの助けを借りるのが前提であるような性質だとか……常に誰かが守り庇護する、そうした女性があの子の二本の剣の主だから」

フェリシアの言う事も、尤もなのかもしれない。

「あるいは、全てを見たり、聞いたりする特殊能力に特化するために、他の機能を犠牲にしているとか言う事は無いかな？」

「それ、大当たりなのかもしれませんね、ダーリン」

「そう思う?」

「だって、他の剣は全て戦闘用の剣としての機能を十分に備えています。それがあの二本に限って無いというのは、もはや戦う必要の無い段階で出現する事になっている剣だからでは無いですか?その……皇帝の治世が長らく安定し、平和が続く時代にこそ必要な剣なのでは?」

「それならば実に結構だが……まだこれから出現するらしい『アサド』と『ラブア』は地球上のライオンの雄と雌を意味する名前だ。平和な時代の剣にしては、なかなか物騒な名前のような気もする」

フェリシアは暫く考えていたが、こんな事を言った。

「戦う相手が、オルトのものでは無いとか、今までに無くものすごく強いとか……」

「宇宙大怪獣が相手とか?」

マークは笑ったが、有り得ない事でも無いかもしれない。

「どうなんでしょうね?」

フェリシアの両親は、年から年中熱々だからいつ子供が出来てもおかしく無さそうなのに、母のロザリアは「まだまだ、泉から何も上がって来ないような気がするわ」と言い、父のクラウスも「泉の底はまだ当分の間静かなままではなかるうか?」などと言っただけだ。

「君の両親がそう感じるって事は、まだ剣の清めが終わらないと言う事だな。アングス君の『シャボンヌ』より、ずっと時間がかかるって事か」

確かに、まだ、キタイの状況は力有る聖剣の主が生み出されるには程遠いがな、とマークが溜息をつくくと、フェリシアはそのマークの頭をそっと抱きしめて、こんな風に言った。

「急いては事を仕損ずる、などと申しますよ。長期戦覚悟で、参りましよう。ね？」

確かにそれ以外、道は無さそうだった。

### 63 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

## 64 (前書き)

フェリシアにとって大切なのは、やはり

季節は移り変わって、夏の暑さは完全に去った。オルトの各地で穀物の収穫の時期を迎えると、連日大量の公務で押しつぶされそうなくらい、夫も大変だったが、今日ようやく、一段落ついたらしい。更に言うなら、夫にとって重大な懸案事項であったキタイのファティマ姫とアングスの夫婦仲も、どうやら上手く行きそうだ。

だからだろう。この所足が遠ざかっていた「アナバルザの温泉に久しぶりに行こう」、などとフェリシアを誘ったのは。二人で久しぶりに星空を眺めながら湯につかり、つい先ほど部屋に戻ったところだ。湯上りの肌はいつも以上になめらかで心地よい。

フェリシアはベッドの中で夫の腕の中にすっぽり収まって、何もいえない穏やかな気分になっていた。

「私達の子供って『アサド』か『ラブア』の主なんですか？」  
「順番から行くと、そうなるな。どちらかわからんが……」

「残り二本の聖剣の主の一方が私達の子供として、では、もう一本はこの誰が主でしょうか？」

「以前クサントスで赤い花の枝にいた小さな金と銀の蛇に言われた  
だろ？僕らが子供を作るのは（良きつがいが生じてからで良いぞ）  
と……」

「ああ、そうでしたね」

「何処かに、僕らの子供の番つがいと云うか、配偶者と云うか、そういう存在がまず先に生まれるって事だ」

「なら、そうした番が生まれたと云う波動なり気配なり、感じてからでないかと子を作ってはいけない……そう言う事でしょうか？」

「うん。そう考えてる。僕は。少なくともその方が子供が孤独にならなくて済むだろう。僕らの子供は不老不死なのだろうから、生む時期については非常に慎重であるべきだろうな」

夫の推論は納得できた。だが、自分達の子供の「番」<sup>つがい</sup>はどこの誰なのだろう？あるいはその「番」が生じた自分達を感じ取るような強大な力の持ち主なのだろうか？

「うん。『アサド』も『ラブア』も良く分かんが、聖剣の最終進化形見たいな強烈な存在だろうと思う。それを取り扱うんだから、肉体も精神も霊的な存在としてもよほど強い子供じゃないといけないだろう。さもないと子供本人も、恐らくはこのオルトと言う世界も壊れてしまう」

「だから幾度もクサントスの神々は私達が子供を作る時期について『よくなじんでから』とか、『よき番が生じてから』と念を押すのですね」

自分は夫を深く愛していると思う。正直言って、夫の子供が生またいが、その子供は恐らくは不老不死で、平凡な幸せからは最初から切り離されているような、厄介な運命を背負い込まれるらしい。しかもその子供を生むには……神々が認めるほど気が深くなじまないと、更には何処かに自分達の子供の番が生じないといけならしい。

確かに……一人では歩めない大変な運命でも、番が居れば耐えて行けるだろうか。

「ああ、だから……」

「やっぱり僕らの子供には強い優れた『よき番』が必要なんだ」

フェリシアの思考をそつと読み取っていたらしい夫がそう応じた。  
「私も……ダーリンの子供が欲しいのです。でも、色々難しい条件が有るのですね」

「気が十分になじんで、フェリシアが僕と一緒に地球にもワープ出来るように成る事が必要な条件だそうだ。金の龍ははつきりそう言っただよ」

「それが、神々も認める『十分になじんだ』状態の目安でしょうか？」

「そうだろうと、僕は考えるよ。まだ、確信は無いけれど、夫婦揃って地球へワープして、何かやる事でもあるんじゃないだろうか？」

「銀の龍は、自分達の知らない答を古い神々の中に見出せるかもしれない……そう教えてくれました。クサントスの神様達に聞いてみたいですよ」

「じゃあ、明日は幸い七日ぶりの休みだし、朝から一緒に出かけよう、クサントスへ」

「はい」

フェリシアは、夫の体にもつと自分の体を摺り寄せた。夫の体はずつと二十代の若々しい状態を保っているが、最近はそれだけではない。以前にも増して艶めいたオーラを放つようになったと思う。事実、今や宮中の女官は皆、夫の気配を感じると、それだけで色めき立つようになってる。

「フフフツ、甘えん坊の子猫みたいだ」

「ダーリンが私の番で、良かったなって、そう思うのです。愛します」

時々やるように、フェリシアは自分から夫にキスをした。夫のように深いキスを仕掛けるのは無理だが、自分がどのくらい夫を愛しているか、わかって欲しいと思う欲求は強い。

「上手になつたな、キス」

夫は本当はフェリシアが望んでいたような深いキスをくれた。とても嬉しい。思わず一心にそのキスに応じていると、今度は二つの乳首への愛撫が始まった。

「本当は、キスだけでは物足りないのだろうか？」

その言葉を耳たぶを軽く噛みながら囁かれれば、どうしたって答はYESしかありえないという状態になる。

「うんと強い子をフェリシアが産むためには、よほど深く僕らの気が馴染まないと。更に言うなら、フェリシアが僕と一緒に地球にワープ出来るようにならないといけないんだよ。多分」

至極落ち着いた声で話を続けるくせに、夫の器用でよく動く手は既にこの段階でフェリシアの体のあちこちに、刺激を加えている。

「一緒に、行きたい……あ、あの、でも、行き先より……一緒に言う事が大事なの」

「ああ、わかっているよ」

「本当に？」

「本当さ」

夫との行為にのめりこむ前に、自分にとってはオルトの運命より何より愛情こそが一番の問題なのだと確認したかった。その所為だろう。フェリシアは幾度も幾度も夫に「愛しています」と言い、夫も「愛している」と応じながら、いつにも増して沢山のキスをしたのは……

事が果ててからも、二人は汗みずくの身を寄せ合つて動かなかつた。

「さっきアナバルザでお湯に漬かっていた時、ダーリンが仰つた」

『宇宙大怪獣』と言う言葉を、つい思い出しちゃったんですけど……金の龍と銀の龍がオルトに辿り着いたとき、随分暴れたみたいですね」

「うん。まさに宇宙の大怪獣って感じだったんじゃないか？」

「やはり、龍たち自身、非常にまずかったと思っっているんじゃないかな」

「過去の汚点、って所みたいだな」

二人がその話題を口にするだけで、双龍は気配を潜めてしまいうぐらいだから、よほど苦手な話題なのだろう。

「あの『クサントスの忘れられた神々の聖地』で以前出会った蛙様は、龍が嫌いな理由をはっきりとは教えてくれませんでした……許しがたい事が色々有ったのでしょうかね」

フェリシアは明日クサントスに行ったら、出来れば最初に遭遇した銀の蛙様に会いたいと思った。

「なあ……あそこで出会った他の聖なる存在と言うか、古い神らしき存在は蛙様以外はみなペアというか一対だったよな」

「金銀の鹿、白い花と赤い花の咲く大木、金銀のリスに、白と黒の鷹、金銀の蛇……確かにそうですね」

「それと、なぜあの蛙様だけ、様付けで呼んじゃうのかな。僕も何となく付けて呼ぶけど」

「他の存在より、何と言うかパワーが大きい感じがした……からでしょうか？」

「僕ら自身も自覚していないけれど、特殊なパワーを察知する能力が有るのかもしれないな。『何となく大きい感じがした』と言うよりは、本当にあの蛙様だけ、特にパワーが大きいんじゃないか？」

やっぱり、あの蛙様に会って話を聞かなくてはいけない、フェリシアはそんな気がした。

## 64 (後書き)

あんまり説明くさい下書きになったので、やり直してました。遅くなりました。

65 (前書き)

銀色の蛙様が双龍を許せない理由とは？

『クサントスの忘れられた神々の聖地』にワープでたどりついた二人は、上手い具合に最初の蛙様と遭遇した池のほとりに出る事が出来た。だが、蛙様の姿は無い。季節は秋で、広葉樹は色づいている。赤や黄色の華やかな色合いと、澄み切った少し冷たい空気……吹く風も強くは無いが、少し肌寒い。

「蛙様にはお会いできないかもしれませんね。水が冷たすぎるかも……」

「でも、まあ、一曲弾こうか」

O my Love's like a red, red rose  
 That's newly sprung in June;  
 O my Love's like the melody  
 That's sweetly played in tune.

持ってきたリュートを取り出し、マークが曲をつけたA Red, Red Rose を二人で合奏する。歌はマークが一人で歌った。フェリシアはマークの歌声を聴くのがとても好きだが、蛙様はどうだろうか？

「僕一人が歌っても蛙様は出てこないよ。たぶん」

「でも、この歌はダーリンがお歌いになるのが似合っていると思います」

「じゃあ、曲を変えよう。『かえるのうた』で良いんじゃないか？前もそれで出てきて下さっただろう？」

以前と同様に二人で『かえるのうた』を弾き、歌った。すると……  
ザバツ！

大きな水音がした。気がつくとい前と同じ岸边の岩に銀色の蛙様が居た。

「（龍の器どもよ、今度は何用だ？もう、寒いぞ。今度は暖かい時期に来てくれ）」

「（申し訳御座いません。では、手短に一つ、龍がお嫌いだと仰る一番の理由を教えて下さいませんか？）」

「（銀の龍の器よ、随分とはつきり聞くのだな）」

「（申し訳ありません）」

「（よかろう。お前には特別に教えてやろう。二度とは言わんぞ）」

「（はい）」

「（龍どもが暴れた所為で、金色に輝く我が番を失ったのだ。他にも許せない事は色々有るが。では行くぞ。今度は春に來い）」

「（はい。そう致します）」

気がつくと、蛙様の姿はもう消えていた。

「成る程なあ。金色の蛙様が居なくなってしまったのか……」

「確かに、それは許せないでしょうね……」

「どうする？もう帰るかい？」

「一曲だけ何か弾きませんか？」

「スコットランドの民謡でロバート・バーンスが詞を作り直したものだ、日本人にもこの曲はなじみだろう？」

夫は艶の有る美しい声で一節歌った。

Should auld acquaintance be fo  
r got,

and never brought to mind?  
Should auld acquaintance be fo-  
r-got,  
and auld lang syne?

「あ、蛍の光!」

「ああ、そうか。何か全然元と違う詞になってたような記憶が有るよ」

そこでフェリシアが歌って見せると、「見事に内容が全然違うんだな」と夫は面白がった。

「これは大切な友達との過ぎ去った日々を想う歌だよ。アメリカじやあ大晦日に歌う事が多いんだよね。日本語の詞は学校の卒業式専用なんだな」

「言葉が古めかしいから、段々と歌われなくなっていましたけどね」  
「でも、フェリシアは一応曲は知っているから、合奏は出来るだろ?」

フェリシアは最初は間違えたが、二度三度弾くうちに、上手く合奏できるようになった。

「日本語の二番が良い感じじゃないか。一緒に歌おう」

止まるも行くも、限りとて、互いに思う、千萬の、心の端を、一言に、幸くと許り、歌うなり……

現代語の意味は「故郷に残る者も出て行く者も、今日で別れと言う事で、互いを思う何千、何万と言う心の端々をたった一言、『無事で』とばかりに歌うのである」と言う所だろうか? 夫はこうした古めかしい日本語も理解できるのだから、凄い人だとフェリシアは改めて思うのだった。

「今年はお別れだが、新しい年を迎えて春が巡ってきたら、また来ようね。幸さきくと許ほかり歌うなり、って所が何だか今の気分にぴったりだろっ?」

どうやらクサントスの神様達は、冬ごもりの支度で忙しいようだった。

「(春になったらおいでよ)」

「(そうだよ。春になったらおいで)」

見覚えの有る金銀の番のリスが、そう伝えてきた。どうやらドングリ集めの最中らしい。

マークとフェリシアはリス達にも別れを告げて、自分達の住む宮殿に戻った。既に日は完全に傾いており、かなり冷え込んで来た。

「そろそろ、暖炉に火が欲しいかな」

風呂に入る間に火を入れるよう命じておくと、部屋に戻った時には良い感じに火が入っていた。

「見ているだけで、暖かですね」

「夕食後、少し酒でも飲もうかな。フェリシアも少しぐらいならどう?」

夕食を終えた後、二人はワインを楽しんだ。

「クサントスの神様たちは、火なんて使わないようだったね。自然と共に在る形を守っているんだな」

「蛙様は、どこで冬ごもりなさるのでしょうね?」

「さあ……土の中かな?岩陰とか。冬は雪が降る場所のはずだから、体が凍るかもなあ」

「そう言えば、地球の蛙の場合、寒い時期は体自体を凍らせるって言うものもありますよね」

「ああ。大抵は小さい蛙みただけだな。凍っても解凍すれば元通り臓器も動くのだから、不思議だよなあ」

「何れにしても、蛙様の場合、またお話できるのは春になってからなんですね」

パチツ、つと薪がはぜる。人間はこうして火の暖かさを楽しめるのだから、恵まれているとフェリシアは思う。

「ダーリン……」

「なんだい？抱っこして欲しくなった？」

蛙様の事を考えていたのだが、そんな風に夫に明るい調子で尋ねられると、確かに抱っこして欲しいのかもしれないとフェリシアは思い至る。素直に身を委ねると、夫はフェリシアを自分の膝の上に座らせた。

「蛙様の金色の番の事を、考えていたのですけれど……こうしていると、自分は幸せなんだって思います」

「確かに、大切な存在、それも唯一無二の番を失うのは辛いな。その後も生きて行くのだとすれば尚更に……だが、本当に金の蛙様は亡くなったのだろうか？何処かに弾き飛ばされた、などと言う事は無いかな？」

「生きていると良いですね。でも、居るとしたら何処なんでしょう？」

「さあ……だが、永遠に失われたわけではないかもしれない。そんな気がするのさ」

夫の「気がする」と言うのは、理由の説明が出来ないだけで、有りえる現象なのだ。その事をフェリシアは共に暮らして年月を重ねた今は、理解し始めている。

「いつか、見つかると良いですね、金色の蛙様」

夫はやさしくフェリシアを見つめ、髪を撫でている。何とも心地が良い。

自分達が金色の蛙様を探し出して上げられると良いのに……フェリシアはそんな風に思った。

## 65 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

## 66 (前書き)

失われた神様を探すマークです。

まず最初に目に入ったのは、非常に清らかな美しい川のながれだ。そして余り高くない緑の針葉樹と広葉樹が混在する山、そこから景色は森の中へと急に切り替わった様だった。なんと……

金色の蛙が居る！そこに居る！

それにしても回りは霧雨だろうか？雨雲そのものが低く垂れ込めたような天気だ。

「（雨だ！雨だぞ、実に良い雨だ。番と再び巡り合う縁を運ぶ雨だ！）」

金色の蛙は雨を浴びて、狂喜しているようだった。

マークは、目が覚めた。あれは……やはり、金色の蛙様だろう。色鮮やかな夢だった。今、季節はオルトも地球も秋だ。だから、過去の映像かもしれないが……あの谷は実在する谷なのだろうか？木々の感じがクサントスでも北米大陸でもヨーロッパでも無い気がする。だが、あのように雨の多い温帯性の広葉樹と針葉樹が混在する林となると何処なのだろうか？針葉樹は人の手が入っているようにも見える。もしかして……日本か？

目が覚めたばかりらしいフェリシアと視線が合った。

「あれは、恐らく伊勢辺りだと思います。幾度か訪ねた記憶が有るのです」

フェリシアと体を繋ぐ事が珍しくなくなってから、同じ夢を見る事がある。今の夢も同じ場面をフェリシアは見たようだった。

「強烈なパワーと言うかオーラを感じる場所だった」

「あの美しい川は恐らく五十鈴川で、伊勢の神宮の神域の中を流れてます」

日本の神道は近代化社会に適合できた珍しいアミニズムだとマウクは理解しているが、伊勢神宮が神道にとって特別な場所である事は知識としては知っていた。

「伊勢神宮の中を流れる、御裳濯川みもすそがわとも呼ばれるという清流だね？」

「そう、そうです。その別名は日本人でも知らない人は結構居ますよ。ダーリン凄いい！」

「僕さ、飛行機が墜落しなかったら、夏休みに友人と訪問する予定だったんだ、伊勢を。友人がベタ褒めに褒めるからねえ、ぜひ一度どんな所か見てみたいって思ってたんだよ」

夢に出てきたのは、どうやら余り一般人が立ち入らない、神宮が管理する神宮林の中のような。

「人工的な針葉樹と広葉樹が上手い具合に融合して独特の雰囲気だったなあ。大昔から神域として人間が守ってきた特別な性格の場所だと言うのが、よく現れているよ」

「そう言うものですか」

「うん。亜寒帯に多い針葉樹と温帯に多い広葉樹が共存してるのが世界的に珍しい。しかもそのどちらもがあんなに美しいのだからねえ。スケールの大きな針葉樹だけの森や、広葉樹だけの森は日本以外の国で結構見るんだが」

あの、滴るような美しい緑の神宮林の何処かと思しき場所で、金色の蛙様は生きていらしい。二人揃って同じ夢を見たことから、その可能性は大変に高いと思われた。

その夢を見てから十日の間、毎晩マークは精力的にフェリシアを抱いて大いに「気を交わらせ」たのだった。

「だって、気になるだろ？地球が、日本が。ワープして確かめに行きたいんだよ。だからパワーを強めないよ」

「伊勢は行った事が無い場所ですよ。ワープは無理ですから、交通機関を使うのですか？」

「うん。大阪から特急だね」

マークは地球で使う資金を、幾つかのネットバンクにプールしてある。日本で使う資金は大手のネットバンクの口座からコンビニでおろす事になっている。

「アメリカほどクレジットカードは使えないから始めた方法」だが、結構便利だ。

「おみやげ」にはいつもの醤油とコーヒーの他、伊勢の名物を頼まれた。フェリシアが非常に緊張しているのがマークにも伝わってくる。もし、何か有って二度とマークに会えなくなったら……などと心配してしまうようなのだが……確かにその危険性は小さくないかもしれない。それでも確かめたい事が有るから、行くわけだが……

「（大丈夫だ、フェリシア。マークは戻る）」

「（マークは無事に戻るぞ。心配無用だ）」

双龍にそう、励まされてもフェリシアは心配なのだ。待っている間は気分的に辛いので、ハーブの畑の手入れを一心にすることにしたらしい。確かに手を動かしていると、無駄な事は考えずに済むだろう。

「フェリシア、大丈夫。きっと戻るから」

このまだ幼い妻が自分に向けてくれる想いの強さも、無事にオルトに戻る大きな力となるのは間違いない。

「はい。行ってらっしゃい、ダーリン」

マークはフェリシアと深いキスをしてから、髪を撫で、そして強く手を握り「行って来る」と言った。

ワープ……幾度経験しても、実に不可解で非合理的で奇怪な現象だが、習熟すると便利なのは間違いない。まず宇宙空間に自分の意識が放り出されて最初に目にするのは、オルトだ。地球よりかなり小さい。三分の一ほどのサイズでは無いかという気がする。そのオルトを見下ろすと、なぜかいつもトンボを切るような姿勢になってくるりと直ると、次の瞬間、地球に吸い込まれる感じなのだ。

「宇宙服も着て無いのに、大気圏で焼け焦げもしないし、呼吸も苦しいと言う意識が特に無いんだよね。某SFシリーズみたいに目的地にちゃんとワープ出来ちゃうんだ」

以前、そのようにフェリシアに説明したが、それでも従来は一瞬吐き気のような感覚を覚え、着地の瞬間は足元がふらつくものだったが、今回は吐き気もめまいも無縁だった。フェリシアのおかげかも知れない。

「ここは余り大きくは変わって無いな」

大阪府下のとある町の公立図書館の、裏通り側の二階のバルコニー部分に降り立ったのだ。夏の間ホームステイした経験が有る町の馴染みの図書館なので、周囲の土地勘は十分に有る。そこから飛び降りて、近所のコンビニで金を引き出し、目の前の駅から列車に乗って梅田で降り、デパートに寄る。人々の意識を探って違和感なく「外国人留学生」に見えるように身なりを整える。

更に地下鉄で伊勢方面への直通の特急が出る駅に行き、切符を手に入れて乗り込むだけ。実に簡単だ。時刻表どおりに正確に出発した特急は、目指す宇治山田駅へは昼前に到着した。軽く昼食を取り、

すぐにタクシーを拾い神宮林の管理事務所に向かう。

「お客さん、外国の方でしょうか？めっちゃめっちゃ日本語お上手やね。なんかテレビのアナウンサーみたいな綺麗な標準語で、びっくりするわ」

「日本は幾度も来てますし、妻が日本人なんです」

「はああ、なるほどね」

気のよさそうな初老の運転手は、また続けた。

「お伊勢さんのお参りはなさらんと、神宮林ですか？」

「僕は森林の動植物の生態に関して研究してるんですよ。大変美しい珍しい林ですから、興味が有るんです」

別に、嘘ではない。それは良いとして、金の蛙様の気配が果たして感じ取れるだろうか？それが一番の問題なわけだが……

「駄目なら、それこそ、春になってもう一度来てみよう。それでも駄目なら更にまた、夏に来るしか無い」

恐らくそれしか方法は無い、とマークは思うのだった。

## 66 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

## 67 (前書き)

見つけましたが、まだ課題が有ります

タクシーに乗って居る間に、マークは意識を上空に飛ばした。すると、県道や一般の集落も広大な神宮林、正確には伊勢神宮宮域林と言っらしいが、その林の内部に含まれているのだった。事務所にこだわるのは止めて、意識を飛ばして無防備な人々の意識を更に読んで情報を集めてみる。

「ごめんなさい。どうやら、僕の目的の為には剣峠ツルギノ峠の付近から行っ  
た方が良さそうです」

「アップダウンの結構激しい道ですよ。眺めはええけどね」

県道十二号沿いをどんどん走る。ふと、マークは奇妙な気配を感じて、車を止めてもらった。

「お客さん、剣峠は、もうちょっと先ですよ」

「いや、ここで結構です」

運転手は腑に落ちない顔をしたが、チップ分も含め余分に金を受け取り、車を市街地方面に引き返していった。

木立の向こうに奇妙な気配を帯びた雄鹿が居る。神気なのかどうなのかマークには断定出来なかったが、意識を向けて言葉を送り込んでみる。

「（金色に光る蛙を見たことは無いか？）」

「（何だ？おまえは？変な奴だな。異界の神か？鬼か？）」

「（一応、人だ。遠い異界から、金色の蛙の神を探しに来た。銀色の蛙の神が会いたがっているのだ）」

「（居るにはいるが、今は土の中だ。蛙だからな）」

「（どのあたりで潜って居そうか、見当はつかないか？）」

「（ここから、まっすぐ内宮に降りる斜面の、大きな切り株の脇だ。お前なら気配が読めるだろう）」

それから、子犬のような甲高い声で一声雄鹿が鳴くと、その会話していた存在の気配自体が全く感じられなくなった。そして雄鹿は、何処かに走り去った。全力疾走と言う感じだった。どうやら「何者か」に意識を乗っ取られていたようだ。邪悪な存在ではなかったと思う。ただ、今まで遭遇した事の無い波動を帯びていたので、面食らったのだ。

後は、雄鹿に一時憑依していた「何者か」の告げた通り、まっすぐ内宮方向に降りて行く事にする。勾配のきつい道無き道を歩くので、梅田のデパートでトレッキングシューズを購入して履き替えていたのだが、正解だった。

「（蛙様、金色の蛙様、クサントスで銀色の蛙様があなたを待っていますよ）」

「（オルトのものです。お迎えに参りました）」

幾度か意識を飛ばしてみるが、それらしい波動は感じられない。ともかく「大きな切り株」を指した。

「（オルト？オルトだと？クサントス？本当か？）」

ついに微弱な気配を突き止めた。マークはその気配に向かってワープした。

「っ痛っ！」

着地が失敗して、尻餅をついた。なんと、確かに大きな切り株の

真上だ。

「（金色の蛙様ですか？クサントスで銀色の蛙様があなたをずっと待っています）」

「（オルトか、懐かしい。だが、今は季節がまずい……困った）」  
弱った感じの気配が、切り株の根元の土から立ち上っている。

「（では、春にまた参りましようか？それとも夏？）」

「（お前、龍か？龍がなぜそのような事をする？）」

「（僕は金の龍の器になった人間です。妻が銀の蛙様のお世話になりました）」

「（半ば人か。お前の番は？）」

「（まだ、地球まで渡ってくる力がありません）」

「（お前と番と一緒に、五月から八月の間に迎えに来たら、わしも自分の番の所に戻れそうじゃが……今は無理じゃ……それに、お前、神宮を参拝したか？）」

「（いいえ）」

「（それはイカン！今度は番を連れて、参拝を済ませてから呼びかけよ。そうすればわしが五十鈴川の川原に行こう。それならばわしも、オルトへ連れ帰って貰えそうじゃ）」

くれぐれも片参りを避けて、十分に敬意を払って参拝しろと言う、金色の蛙様らしき意識は、波動が生き生きしてきた。相変わらず土の中に居るのではあったが……

「（では、今度の夏を楽しみにしているぞ。参拝するときに、番も夏には参拝させたいと申し上げて置けよ）」

マークはその意識に向かって、そのようにすると約束をすると、その場を離れた。

片参りを避けるとは、つまり内宮だけではいけないと言う意味だ。幾度かワープして外宮・内宮をちゃんと作法を守って参拝し終わる

頃には、日が暮れかけて来た。フェリシアに頼まれた名物の菓子を買い、必需品の醤油とコーヒーを確保したら、もうまっすぐワープするばかりだった。

「ただいま」

「まあ、ダーリン、お疲れですね。随分と大変でしたか？」

声一つで、自分の疲労度がわかるなんて、幼い顔に似合わずやはりなかなかやるじゃないかと、マークは嬉しくなった。

「でも、金色の蛙様が冬眠しているところには辿り着けたし、夏に迎えに行くって約束できたし、神宮におまいりも出来た。それに頼まれたものも買えたよ」

「まあ！嬉しい」

久しぶりにフェリシアは緑茶を淹れて、土産の伊勢名物を日本風に見えなくも無い皿に盛った。シャワーを浴びて服を替えたマークも一緒に食べる。

「ほおお、これがその名物なんだ。なかなか美味いじゃないか」

「柔らかい御餅をおいしいタップリのあんこで包んだこの味、癖になるんです」

フェリシアの話によれば、内宮の傍の店で、この菓子の出来立てが食べられるらしい。

「お時間が無くて、大変でしたね。でも、今度は直接ワープできますから、随分楽ですよね」

「金色の蛙様がね、『番を連れて、参拝を済ませて』から迎えに来いって。だから、フェリシアも地球にワープできるようにならないといけないね」

「行けると良いのですけれど……」

そのためには……と言い掛けて、フェリシアは真っ赤になった。

「そうそう。頑張るんだよ。目一杯」

「……はい」

「今回ね、いつもよりワープするのが楽しかったんだよ。きっとフェリシアと気をなじめせたおかげだね」

「やはり、本当にそう言うものなのですか？」

フェリシアは目を丸くして、尋ねた。

「本当に、そういうものなんだよ。だから、がんばろうねえ、フッフ」

今度はフェリシアの耳までが真っ赤になった。

夕食後、入浴もあつさりすませて、二人はワインを少し楽しんでいた。

「暖炉の前で、可愛い奥様とこうして水入らずで酒を楽しむ。いや

あ、実に良いよ」

「よ、良かった……」

「おやおや、表情が硬いな。本当に良かった？」

「え、ええ、それはもう……」

「なら、こうやって飲んでみる？」

いきなり夫に抱き上げられて、口移しにワインを飲まされた幼い妻は、最初は恥ずかしがっていたものの、二度三度と繰り返される内に艶めいた声をあげ、自分からも夫の口付けを乞うようになっ  
て行ったのだった。

## 67 (後書き)

黄色いバナナをポチッと押して、この作品に清き一票を投じて下さる  
あなたにラッキーなことが有りますように！

68 (前書き)

夫を元気づけたいのに上手く行かないと焦る妻と、夫の愛情。

「地球に二人でワープして金色の蛙様を連れて戻る事は、聖剣の力が発動する必要条件なんだろうな」

「聖剣の前に、女神様に関わる聖地である『インスユの洞窟』と『ソウコルク山の女神の申し子と支えの場所』の謎が何も解けていませんが」

「インスユはともかく、ソウコルク山は君の両親のための場所じゃないか？」

「母口ザリアが申し子、父クラウドが支えと言う解釈で宜しいのなら……そうなりますか」

「そもそも、女神様に伺っても『はて、何であったか』と仰るのだから、どうにもならん」

聖地に関する事柄は、フェリシアのワープする能力の向上を待たなければいけないようだった。

そうこうする内に、フェリシアがオルトに生まれて十一回目の年末になったが、実にもって気ぜわしい。

皇后などと言う身分は、様々な制約が有り、マークが即位してから随分と儀式は簡素化されたが、それでも結構な数の厄介ごとがあり、計画を立ててきちんとスケジュールをこなさないと、上手く事態が運ばないのだ。

もう慣れたと言えば慣れたが、社交の場所に着飾って出てゆくのは性分に合わない。ただひたすら面倒くさい。

「それでもねえ、フェリシアがドレスを、それも年始用の思いきり豪華なのを毎年新調するのは意味が有るんだ」

毎年、新年の礼装に用いる様々な材料や工芸品のコンテストや品評会を帝国の各地で行っている。行うようになったのはマークの即位後だが、それでもどの催しも、かれこれ十年近くは経っており、それぞれの土地の産地や地場産業や手工芸を活性化するのに役立っている。そして、こうした各地のイベントの優勝者をその年のフェリシアの晴れ着の制作に参加させているのだ。

「絹の布も、下着用と裏地とドレス本体、あるいはプリーツ加工するものではそれぞれ産地も工房も違う。さらに緞子や錦だろ、レース類、ボタン、革製品、ニット、貴金属加工に宝飾加工、刺繍、裁断、縫製……うーん、ざっと考えてもこの程度の各ギルドや生産者組合のみんなの張り合いにはなってるんだよ。オルトで一番の個人資産を持つ僕が、きちんと適正価格は支払ってるし、誰も困らないだから、頑張つて、今度の年始の儀式も華やかに着飾るんだよ」

個人的に僕も楽しみなんだ、と夫は言う。そんなものなのだろうか？

「そりゃあ、惚れた女に自分の選んだ服を着せるのは、男の楽しみみたいな部分もあるんだよ。頭先から足の先まで、フェリシアが身に着けるものは、すべて僕が選びたい。これって別に普通の欲求だと思う」

自分が「惚れた女」なのか、今一つ自信は無いが唯一の妻なのだ。夫の好みに合わせたいと思う。

これからは、毎年記念撮影もしないとね。などと夫が言っていたので、暖炉周りに写真立てが増えそうだ。

「昔作った白黒専用カメラじゃなくて、地球で手に入れたデジカメで撮っちゃうよ」という話だが、色々忙しくて夫が自分で現像のために暗室にこもる時間も取れないからだろう。

キタイで夫が摂政を務めていたころの部屋に、今は亡き夫のかつ

ての恋人とかつての妻の白黒写真が飾ってあるらしいが、そうした思い出とも関係しているのかもしれない……聞けば教えてくれそうだったが、フェリシアはあえて聞いていない。

ドレスは面倒くさいと感じるフェリシアだが、昨年末に夫が食べたがっていたクリスマスディナーを用意するのは、楽しみであった。メインは夫の好物の見事な骨付きのスマークハムで、昨年クリスマスに欠かせないと熱く語っていた「クリスマス・クッキーとアップルパイとキャセロール」もちゃんと用意した。オルトにおいては、クリスマスは祭日でもなんでもなく「もうすぐ年の瀬」の平日に過ぎない。

フェリシアは地球のモミとよく似た針葉樹をクリスマスツリーに見立てて飾り付けさせ、リボンをつけたクリスマス・クッキーも吊るした。アップルパイは、夫の祖母のレシピに近いと思われるレーズンも一緒にリンゴと煮た中身にした。そして、一番の自信作はキャセロールだ。折に触れ、話題になるたび夫の意識に注意深く触れ、アメリカでクリスマス休暇の時には必ず食べていたと言うその具だくさんのキャセロールの味や風味に、かなり肉薄したと思うのだ。

「いかがですか？」

懸命に作ったが、一口食べた時の夫の正直な感想が怖い。がつかりされたらどうしようかと思ってしまう。

「おお、これだよ、これ！グランマがまだ、元気だったところに気合を入れて作ってくれたのとそっくり。と言うか、それより美味しいな！おかわりをくれ」

夫は、最初の一口から大いに気に入ってくれたようで、苦労の甲斐も有った。

「グランマが年を取ってからは、ソースが既製品になっちゃったんだよ。まあそれでもおいしいが……でも、こんなおいしい手作りを

食べちゃつと、地球でやたらのものが食べなくなりそうだ」

メインコースを終えた後は、改めてスパークリングワインで乾杯する。地球のシャンパンに負けないほどの品質のものがここ数年、ようやく飲めるようになった。

「Merry Christmas!」

「Merry Christmas!」

「やっぱり、Merry Christmasって僕は言いたい。最近<sup>最近</sup>は他の宗教に遠慮して、Happy Holidays<sup>Happy Holidays</sup>って言い方がアメリカじゃ一般化しちゃってるが……まあ、僕の場合、別に信仰の問題じゃないんだけどね……」

「子供時代の大事な思い出と関係有る言葉だからでしょうか？」

「そうだな。Merry Christmas<sup>Merry Christmas</sup>って言いながら、健在<sup>健在</sup>だった両親と何か御馳走を食べたんだろうが、覚えているのは、焼いたマシュマロにナッツとメープルシロップをかけたものだけなんだよ」

そう言つて、夫の目は遠いものになった。夫はどうやらごく幼いうちに両親と死に別れてしまったようだが、育ての親である祖母<sup>グランマ</sup>は詳細を覚えてくれなかったようだ。従つて両親との思い出もほとんど何もない。

ひよつとして、自分の不用意な一言が夫の気持ちを暗いものにしたのではないかとフェリシアが案じはじめた頃、マークは意識を普通に戻した。

「ああ、ごめん。心配かけちゃったか」

「いえ、その……」

「さて、今度はパイだ。アップルパイ、食べような」

夫はパイの味も気に入ってくれたと思う。思うが……自分は夫にとって、ひよつとしたら一番つらい事を意識させてしまったのではないか？

「大丈夫だって。このパイのおかげで、立ち直れた気分だよ。だから気に病むのはやめてくれ、な？」

「はい」

「それに、正月が過ぎたら二人でやる事が色々あるぞ。しよげてる場合じゃない。」

夫はフェリシアの頭を撫でた。するとフェリシアのウジウジぐずぐずした気分は、どこかに消え失せた。

「僕はアスワドの子供が生まれる時期が近いと思うんだ。おそらくは年が明けてから四〜五十日目って所だろう。オルトの馬も種付けから十一箇月程度で出産だ。地球と大して変わらないようだよ」

確かにそうだ。夫に言われるまで、フェリシアはその事をすっかり忘れていたのだった。

68 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。  
皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

69 (前書き)

仔馬が生まれたようです。

「アスワドの子供って、無事に生まれたんでしょうか？　と言うか、そもそも存在しているのでしょうか？」

フェリシアの疑問は尤もだった。

「僕だって、確信なんて無いさ。だが、アスワドの様子を見ると子供が出来たのではないかなと思えたから、期待してるんだけどね」

年明けの諸行事は今年もつつがなく行われ、人々は新しい年も不老不死の偉大な皇帝陛下と愛らしい皇后陛下とともに迎えられることを喜んでいた。このところ毎年目に見える形で人々の生活レベルは向上し、帝国の隅々まで秩序ある平和が保たれている。

「当代の皇帝陛下は真の龍の器」で「稀代の賢帝」で「聖剣の主あるじの盟主」という事が諸外国にもあまねく知られ、通商・交易で得られる利益も大きいので、あえて戦を構えようと言う国もない。学問技術のレベルもオルトでは群を抜いて高いために、各国の王族や有力貴族は子弟を帝国の首都オルテスに留学させる事が盛んになっていた。

マークは「ちょっとばかり神力を干渉させて」そうした王族や貴族の若者たちが、帝国に良い感情を持ち、帝国の将来を担う若者と友情をはぐくめるように環境づくりにも気を配った。

「冗談抜きで、人口爆発に対する食糧増産の備えが必要だろうな」

「自然破壊を防ぎ、環境を保全するのも重要だ。実にバランスのとりに方が難しい」

「あまりに急激な物質文明の進歩は、おそらく好ましくない結果を及ぼすだろう」

これらの夫の考えはフェリシアには妥当なものだと思われた。

「秩序あるオルトの発展」が近頃の皇帝としてのマークのモットーで、最終目標であるという「最大多数の最大幸福」のためにはある程度の思想統制も必要という立場を取っている。だが、その思想統制のやり方はあまりにさりげなくて巧みなので、人々は自分が統制を受けていると言う意識も無い。

「マスメディアはまだまだ存在しないも同然で、プロパガンダの概念すら存在しない素朴な世界だからな。時々自分がとんでもない悪の独裁者のような気分にはなるが、最終目標が間違っているとは思わないし、僕は僕なりに公共の福祉のために誠心誠意力を尽くしている」

「ええ。乳幼児が以前のように病気で亡くなる事がうんと減ったのは、皆が認めています。健康政策と公衆衛生の知識が行きわたったおかげですね。貧しい人々に対する福祉政策も実効性の高いものになった筈ですし、義務教育も、上下水道や道路網の整備も、皆の暮らしを向上させる大きな力になっていると思います。ダーリンの御苦労は報われつつあると思いますわ」

フェリシアの言葉にどれほどマークが影響を受けるのかは不明だが、自分の政策の意図を理解出来る者が居るおかげで、マークが孤独感や疎外感をあまり感じないで済んでいるのは確かなようだ。

「僕の理解できている範囲についてはどうか考えて調整できるが、聖地や聖剣とその主たちの動向は、まるでそれこそ神頼みだ。不安定要素が大きすぎる」

それだけに常に帝国中に情報網を張り巡らし、不思議な現象が興ったら、たちどころに皇帝であるマークのもとに報告が入るようになっていく。ピネ村周辺で最近目撃されるようになった光る馬と黒い仔馬について、マークはアスワドの番っがいになった雌馬とその雌馬が生んだ子供で有ると見当をつけたのだらう。

「女神様の雌馬が子を産むときは、冬でも雪が降らないと言つ言い伝えがある。今年はピネ村周辺では雪が見られないそうだよ」

「ならば、本当に期待できますね」

「離乳は秋だな。迎えに行くのはその頃だろうが、まずは仔馬が本当に生まれたかどうか、明日にでも確認に行くぞ」

具体的にどのような手筈を取るか、相談をしながらも、マークはフェリシアをごく当たり前のように抱いて「気をなじめせ」た。月のものでもない限り、それが夫婦にとって当たり前の日課になっているのだ。

「今夜のところは、控えめにしておこう。明日は忙しいかもしれないからね」

そういう時の夫の予感は大抵正しい。最近フェリシアは、夫と愛し合う事でより深い快適な睡眠を得られるようになった。本当の意味で二人の気が馴染んできたのかもしれない。

翌朝、二人はそろって『エイルデイルの草原』に向かう。周囲の草原との正確な境界線はわからないので、どこからが本当の聖域なのかはつきりしないと、何ともアバウトな聖域だが、乳白色の不思議な雌馬が暮らすのは聖域の真つただ中だろうと考えられている。だが、これらの雌馬の生態は女神ですらはつきりしない事なので、マークやフェリシアも手探り状態なのだ。

アスワドの子供を産んだかもしれない雌馬と会うために、フェリシアはウルチュナルの神気が強いオレンジと、神域の花々の蜜を煮詰めて作った菓子を用意した。「神域の馬は神気を好む」という夫の助言で、フェリシアなりに考えて整えたいわば手土産だ。それらを手かごいっぱい詰めて、夫と共にワープした。

「アスワドはリユートは大人しく聞いているだけだけど、僕の指笛

は大好きみたいで、鳴らすといつも実にうれしそうにする。遠くにも大急ぎで駆けて来るし……だからアスワドの子供が生まれたのなら、思いつきり鳴らそうと思ったんだ」

冬のしんと冷たい空気の中、空に向かって夫が高い音で指笛を思い切り響かせると、どこかで馬の嘶きが聞こえた。

「まあ、近くに居るのかも知れませんがね！」

「じゃあ、一曲演奏するか」

夫が演奏したのは「アルプス一万尺」と言うか、そのもとになったアメリカ民謡の Yank e Doodle だった。

オルトの最高峰であるレオンハート峰は雪を頂き白く輝いている。空は抜けるように青い。陽気で明るい、どこかおどけた雰囲気。指笛の音は、聞いていると楽しい気分になってくる。

次第に馬蹄の響きは大きくなってきた。どうやら、一頭ではない。はつきり響く音と同時に、少し軽い音がする。

「あ、ダーリン！ あれではないでしょうか？」

遠目にもはつきり目立つ真珠のような不思議な艶の有る白い馬の姿が見えてきた。

「黒い仔馬も来ます！」

フェリシアの言葉に夫は頷きながら、もっと大きな音で Yank e Doodle を威勢よく吹き鳴らすのだった。

69 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。  
皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

「この子に名前を付けますか？」

「親父と同じ黒を意味する名前を付ける事も考えたけれど、初めて会った今日の良い天気を記念してサーフィと付けよう。どうやら、雄みみたいだな」

「何だかすつきりした感じの良い名前ですね。母親の方は何と呼びますか？」

「真珠色だから、真珠を意味するルウルウ、でどう？」

「ルウルウ！ 可愛い〜」

「気に入ったなら、決まりだね」

二人が名前の件で話し込んでいる間も、ルウルウは凄い勢いで持ってきてやったものを食べている。よほど気に入ったらしい。母親であるルウルウ自身がすっかり食べてしまつと、今度は授乳の時間と言っわけだ。

「おお、良い飲みっぷりだな。この分なら、しっかり育ちそうだ。地球だと競走馬なんかは、春先の生まれなら、夏には強制的に離乳なんだけど、こいつはもうちょっとのんびりさせてやりたいよね。自然に子別れするまで待とうと思う。それに、地球のような医療技術も無い事だから、恐らくはそうした方が丈夫な馬に育つだろう」

他の仔馬が居る放牧場周辺に頻繁に顔を出すようになったら、ほぼ離乳は完了らしい。

「子別れしたら、ルウルウも寂しくなりますね」

「夏にアスワドをつれてくると言う事も、考えた方が良いかもしれないな」

「それって、つまり……」

「次の子作り」

「あ……なるほど……」

フェリシアが顔を赤らめたのを見て、夫がからかう。

「僕らも、将来の子作りのために色々頑張らないとね。フフフッ」

「……ダーリン」

「でも、大真面目な話、僕らの子供を作って良い条件はどうやら色々複雑で、その中の一つに気を十二分になじませて、フェリシアが僕と一緒に地球までワープできるようにする、って言う項目があるのは確かなんだよ」

「そうじゃないと、金の蛙様を連れ戻せないみたいですよものね」

「他にも僕らが地球でする事が出て来る、あるいは既に決められている、そうは思わない？」

「たとえば番の発生つかいを助けるとか、未知の聖剣であると思われる『アサド』と『ラブア』の出現のための条件を整えるとかでしょうか？」

「僕も、その二つは考えた。他にも何か有りそうだな」

他に一体何が有るのだろうか？

夫の意識に何か重要なヒントが浮かんだような気がしたが、その意識はすぐにフェリシアを赤面させるような内容に切り替わる。

「おやまあ、僕の意識を覗いたね」

「……すみません」

「別に、構わないが、僕は……ん？　ちょっと期待した？」

違う、と言いかけた唇には夫の唇が重なり、熱い舌が押し入って来た。違わないような気もしてくる。自分は地球で果たすべき役目を……ダメだ……もうどうでも良い……ああ、もつと……。フェリシアの感覚をあおり、意識を更に混乱させる指の動きまで、加わる。これは、意識を覗くと言う夫の警告？　それとも覗いた事に対する

る軽い報復？

「違う、フェリシア、別に、警告でも報復でも無いって」

夫の声は、熱を帯びていた。そして、少しばかり苛立ってもいるようだった。母と子、二頭の馬はとうの昔に何処かに行ってしまった。

「ここでは風邪を引く。元の部屋に戻るよ」

フェリシアは夫にきつく抱きしめられたまま、部屋にワープして戻り、一緒にベッドに倒れこんだ。

「警告だの、報復だの、何ずれた事を思いついているんだか……ちよつとばかり、腹が立つ」

フェリシアが一言も言葉を発する事が出来ないでいる間に、夫は慣れた手つきでさつさと衣服を剥ぎ取る。それから、少々強引に愛撫を開始した。

「お……怒って、いらっしやるの？」

「たぶんね」

「う、ごめんなさい」

「こらあ……とりあえず、謝っておけば良いと思ってるだろうっ？ん？」

確かに、夫が不機嫌だと感じると、つい、謝ってしまうが……その、アバウトさ加減が夫には不快らしい。番なんだから、もっと正確に理解して欲しかった？

「そうそう、そんな所かな。つまりは気のなじませ方が甘いから、僕の思考と感情に関して、フェリシアがこんな頓珍漢な分析をするんだろっ」

報復とか、警告とか？ 夫には許せない？ 心外？

「うん。そう。心外だ。だから、今からちよつとばかり、お仕置きするから、覚悟して」

「お仕置き？ つまりは、何が一番お嫌だったの？」

「僕が覗き込まれたら反射的に思考を切り替えてしまうのは、一種の条件反射みたいなものなんだ。どうしても僕の考えが知りたければ、はつきり口にして質問してくれたら良いじゃないか。もう今のフェリシアに、教えられない事なんて無いと思うのに、コソコソと……しかも分析が大間違いとくれば、情けなくなってきたんだよ」

「私の……馬鹿さ加減が、情けないのですよね？」

「いや、根本的な問題はそこじゃないんだって」

今度こそ本当に、夫は苛立ちを覚えたようだった。

「僕がどれほど本気でフェリシアを愛しているか、本当の意味では伝わって居なかった。だから、すぐに報復だの警告だの、オカシイとしか言いようの無い言葉が頭に浮かんじやうんだと思うんだ」

大切にされているとは思っているが、フェリシア自身が「惚れた女」というカテゴリーに入るのか、ずっと疑問には思ってた。だって、初恋の人や最初の妻のように夫の自由意志で自分を選んだのかは、やはり疑問なのだ。銀の籠の器として上手く馴染めそう、耐久性が有りそう、そんな観点で地球から連れ出されたのではないかな？ 確かにプロポーズはしてくれたし、自分もオルトが懐かしかったから、つい応じたが、あの段階でそんな燃えるような愛情など無かった。夫を信頼し信用してはいたが、異性に対する愛情とは違う感情、そう、友情とか親愛の情とか、そんな類のものだ。決して弱い感情では無かったが、互いに異性として求めあったのでは無かつ

た筈だ。

「僕は最初から予感が有ったんだ。君なら誰よりも心から深く愛せるって。事実その通りになった。なのに、フェリシアはまだ信じてくれない。僕が今まで出会った全ての女、いや、すべての人間の中で一番愛している、そう言えば、多少はニュアンスが伝わるか？」

「まあ、それ、本当ですか？」

「本当なのに、本人がこう分かんず屋じゃあ、僕だってお仕置きの一つもしたくなる」

本当に？ 本当に、自分は「一番」愛されているのか？ そうだと嬉しいとは思って来たが、怖くて聞けなかった。今、自分は間違いない、この夫を誰よりも愛していると言つ自信は有るのだけれど……

「可愛いお馬鹿ちゃんを、やっぱり、再教育しなきゃいけないようだな」

「……教えて下さい。ダーリンが『一番』愛しているのは、私だつて」

両陛下がそろそろお戻りだと見当をつけて、当番の女官が夕食の支度が整った事を伝えるに来た時には、余りにも艶めかしい雰囲気、とても声をかけられる状態ではなかった。明らかに自分は「お邪魔だ」と判断した女官は、すばやく廊下へ出た。

「はあ、驚いた。心臓が止まるかと思った」

二人が激しく愛し合っていると思しき寝室からは、薄桃色の雲が立ち上り、金銀の光が揺らめき、得も言えない芳香が立ち上っている

るのだった。

70 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。  
皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

## 71 (前書き)

「本当に「愛しているって、どっつ言っ事なのか……真面目に考えれば考えるほど難しい問題です。」

「今まで一番愛されているとか二番目に愛されているとか、順位にこだわってはいけないうて、いつも自分に強く言い聞かせていたんです。でも、この焼餅焼きの銀の龍の性質を抜きにしても……自分がダーリンにとって一番愛される存在であって欲しいと願う気持ちが、とても強くなっていたんですね、私」

「誰よりも愛していると相手の事を思うようになったら、やはり、自分がその相手にとっての『一番』じゃないと気がすまない、納得できないって言うのが正直な話、当たり前なんじゃないの？ 少なくとも僕はそうだよ」

どうしても地球の家族に再び遭いたかったから、かつて伊丹京子であった魂は、前代未聞の離れ業を使って自らの孫に転生してのけたのだ。それほど強かった家族への愛情を、『オルトのフェリシア』として生きてゆく覚悟を決めるとすぐに、龍の穢れを浄化するために差し出した。マークはおそらくその潔さ、強さにとて惹かれたのだ。気がつく、『オルトのフェリシア』は、地球人であった頃、オルトに転生して以降、全てを通じて自分にとっての『一番』の存在になっていた。

「万難を排してようやく自分自身の孫と言う形で転生を遂げた君の魂を、地球まで迎えに行った時は、何より難しい事業、困難な仕事のパートナーを求めていたんだ。それは確かに事実だよ。でも、君は地球の家族に対する強い愛情を黒い玉に、銀の龍の穢れごと封印してしまっただじゃないか。あれは、僕にとって大変な衝撃だった。考えてみればあれ以降、君は共同作業のパートナー以上の、唯一絶対の存在に変化して行ったのだと思う」

フェリシアの心臓は鼓動を早めていた。

「ダーリン……」

マークの大きな手がそつと添えられた。

「ひどく心臓がどきどきしてるね。フェリシアは僕を愛してるかい？」

首をがくがくさせてフェリシアが頷くと、マークは桜色になった形の良い耳朶を甘噛みしてから囁いた。

「じゃあ、ちゃんと口に出して言って欲しい……ねえ」

熱を帯びた切なげな声が感情を揺さぶり、キスがフェリシアの顔中に降り注ぐ。腰から背筋にかけて撫でさする大きな手は、ひどく心地よい。まるで全身が溶けてしまいそうだ。

「愛してます、ダーリン」

夫の緑色の美しい瞳が、いつもとは違う趣の光を宿している。

「どのくらい？ どのくらい僕を愛している、フェリシア？」

「今までに出会った全てのいかなる存在よりも、愛しています」

「でも、これから出会う誰かを、僕より好きになっちゃってしまってもいいじゃない？」

「……そんな、そんな風に思ったこともありません」

「僕はフェリシア以上に好きになれる存在なんて、有り得ないと思ってる」

「……思っているだけ、かも知れないでは無いですか」

「おや、フェリシアも言うようになったな」

「だってイジワルを仰るから……沢山愛してますとか、いっぱい愛してますとか……言うべきでしたか？」

「そんな、中学生が高校生みたいな言い方じゃなくても、良いさ」

「ダーリンは、忘れていらっしやるようですが、私はまだ、十一歳なのです」

そう、肉体は確かに十一歳なのだ。

「僕はそんな十一歳相手に、大人げも無く言い寄っている四十過ぎの男ってわけだ」

「だって、私達の年齢差は三十歳ですから。龍たちの所為でしょうけれど、おかしな具合なんですから」

「でも、魂は、ほぼ同じ年だろ？ しかも肉体が不老不死なら、三十年の差も大したことじゃない」

夫は笑ってはいるが、何処かその笑いが苦いものに思われた。

「誰にも、未来の事なんて本当にはわかりはしないと思う。たまに僕もフェリシアも奇妙な予知夢のようなものは見るけれど、僕ら二人がどうなるのかなんてお告げは、無いものな」

「それでも、ずっと私はダーリンと一緒に居たい」

「さりげないけれど、真実味があって良いね、それ」

「私の愛はいかなる山よりも高く、いかなる海よりも深い、とでも言った方が良かったかなってチラツと思いましたが……何だか胡散臭く感じて」

「別にフェリシアが本気でそう言うてくれたら、それも良いのにな」

「……つまり、一番の鍵は本気かどうかって事ですか？」

「そうだな。フェリシアの体は言葉以上に正直だから、つい、毎日度が過ぎるかなと思うほど可愛がりたくなる」

「ああ……なるほど……」

「いい反応だな、クククツ、ほら、ここもすっかり準備完了だよ」

「……ダーリン……恥ずかしい」

再び、情熱的に愛し合っつてすっかり夕食の時間は過ぎてしまった。

「もう、今夜はここに軽いものを運ばせるだけで良いよな。僕はまだまだ、フェリシアが足りない」

「私では、ダーリンを満足させて差し上げられないのかも……胸だつて、まだ小さいですし……」

フェリシアは不安になってしまふ。自分の未熟な体では夫をやはり満足させられないのかも知れない。

「ああ、どうか、泣かないでくれフェリシア。困ったな。僕は君を愛してる。それなのに、言葉はすれ違ってしまふんだな。胸を育てるのも、男の楽しみなんだよ。確かに今は小さいが、それでも去年よりずっと育ったじゃないか。今年は更にもっとずっと大きく育てるよ、だから、泣かないで。ね？」

どうやら、本当に夫は困ってしまったようだった。運ばれてきた物もあれこれ世話を焼いてフェリシアに食べさせ、入浴の際も幼い頃に戻ったかのように、丁寧に面倒を見た。

「僕はフェリシアを赤ん坊のときからずっと、大切に大切にしてきた。その事は分かってくれているよね？」

「ええ。ずっと大事にして下さっているのは、分かっています。でも、色々と私が至らないばかりに、ダーリンに申し訳なくて。それでも、我慢強く耐えて下さったのですよね……ああ……早く、大人の体になりたいです」

「……違う、違うよフェリシア。確かに肉体的な欲求に耐えた期間には、有った。確かに短い期間では無かったよ。でも、そのこと自体君には何の責任も無い話だし、僕が足りないって言うのは、そんな事じゃない。全然違う」

「じゃあ、何でしょうか？」

「うーん、これでまた勘違いされたら、メゲるんだが……二人の絆を心身ともに強めたい、そんな所だ」

「あ、あの」

「いやあ、何もワープがどうの、龍の器としてどうの、って話じゃない。僕は、僕自身が、龍がどうのここのなんて事と関係無く、君と言う人を誰よりも愛している。そう伝えたい。そのあたりの意味合いは分かったかな？」

「……はい……分かったと思います……とても、とても嬉しい……」

マークはフェリシアの額に額を寄せ、心臓の鼓動を確かめた。そして、恐らくは自分の言わんとした意味合いが、どうにかやっと伝わった事を感じ取って、一安心したのであった。

## 71 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。もう終盤ですが、皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

## 72 (前書き)

夫と先妻が暮らしていた場所に、向かう事になってフェリシアは…  
…

細やかな気の通わせ方を続けてきたおかげだろうか、夫と自分との間の行き違い、食い違いがうんと減ったような気がフェリシアはしていた。心が寄り添うだけではなく、体も良く馴染むようになった、そんな風を感じる。互いに昼間は公務やら視察やら外交的なパーティーやら、気の抜けない忙しい時間を過ごしているが、こうして肌を合わせ抱きしめあう事で、心身ともに深くリラックスできるのだ。

「この分なら、一緒に地球に行ける日も近いかもしれないな」

「私、この所、『ヴィーヴル』と『チチエック』の夢を良く見るのです。二本の聖剣が何処かの海の上でホバリングするように、じつと浮かんでいる、そんな場面です」

夫はフェリシアの顔をひどく真剣な眼差しで覗き込んだ。

「そうか。フェリシアが生まれる直前の事だが、ブルサの王宮に程近いクシャダスの海の沖に、それまで姿を潜めていた『ヴィーヴル』が現れ、君の母上の下を離れた『チチエック』は『ヴィーヴル』と共に海上でホバリングするような状態で浮かんでいたのだ。僕が初めて双龍と『チチエック』・『ヴィーヴル』のパワーを借りて、やつとの事でフェリシアを迎えに地球までワープしたのは、そのすぐ後の事だ」

「今は、お一人で軽々と地球まで行ってらっしゃるようなのに、最初は色々大変だったのですね」

「ああ。でかい龍やら空中に浮かぶ剣やらを引き連れてでは、地球での行動も制限が大きすぎる。フェリシアを迎えに行った時も、境界を張って関係の無い人間に覗かれないように細心の注意を払って

いたが、冷や冷やしたよ。何しろ、地球上には色々な人間がいるから、霊力なり魔力なり強いものがいて、感付くかもしれない。たぶん大丈夫だったと思うけれど、あの時は君の魂を連れてオルトに戻らねばと、必死だったのだよ」

「必死のプロポーズでしたか。だから、私もすぐにお返事したのかなあ……」

「うん。君の母上はお産が上手くいかないし、父上はひどく気を揉むし、大変だった」

「両親に聞いた記憶が有りますが、ダーリンもご苦労なさいましたね」

「だが、その甲斐は有ったね」

夫の手はフェリシアを慈しむように、ゆっくり背中を摩り、髪をかき上げる。このオルトに転生した直後から、自分はずっとこの手に守られ慈しまれてきたのだとフェリシアは改めて思うのだった。

「本当に、綺麗になったな、フェリシア。これから更に君は美しくなるだろう。その全ての過程を身近で見ることが出来て、僕は果報者だ」

しばし二人は深い口付けを交わし、互いの気を交じらせて後、心地よいけだるさの中でまた、互いに抱きしめあっている。明日は公務の無い休日なので、こうした交わりもいつ果てるとも知れないのだ。ただ以前と違うのは、焼け付くような飢餓感に突き動かされる事は稀で、深い交わりのもたらす安心感を求めているような感じがすると言う所だろうか。

夫はまた、啄ばむ様な軽いキスを繰り返し、フェリシアもそれに応じながら、気持ち昂ぶって来る。夫のキスは熱っぽいくせに、さりげなくて、時折会話をはさみながら、甘い雰囲気を高めてゆく

のだ。

「そろそろ君もキタイの王宮に足を踏み入れても良いのではなからうか？ そんな気がする」

キタイの王宮は夫・マークの従姉で最初の妻でファティマ姫の母でもあるイゼルが生まれ、暮らしてきた場所だ。

「僕以前の金の龍の器はキタイの女王と結婚した皇帝の庶子だった」

その器となった人物は不老不死にはなれなかったし、聖剣の主にもならなかったが、それなりに優れた人物ではあった。そのおかげでキタイの王宮は、金の龍の気配が色濃く残っているのだという。

「最もその気配の濃い場所に、僕の部屋を設けて、使って来たのだつたが……今、こうして銀の龍の器である君と気を深く交じらせるようになってみると、あの王宮全体、いや、ブルサの街、ひいてはキタイ王国全体に銀の龍の気配が不足している、と言うかアンバランスなんだと言う事が良く分かる」

「アンバランスだと、どうなるのでしょうか？」

「定まるべきものが定まらない……たとえば、王室の後継者が生まれれないとか……宮殿のすぐ外を覆う銀の龍の呪いが籠っているらしい謎めいた貧民窟クシャダスの状況が好転しないとか……なんじゃないのかな」

「今は私の所に在る聖剣『ヴィーヴル』は、後の剣と呼ばれ、皇帝の真の配偶者が持つべき剣で、長らく姿を隠していたとは聞いていましたが、クシャダスの海の沖に現れたと言うのは、やはり因縁があるのですね」

「おそらく、ブルサが帝国領であった古い時代の銀の龍がらみの何事か、なのだろうなあ」

夫は難しい顔をして考え込んでしまった。夫の意識に浮かんだの

は、キタイ国王ファジルの力はすっかり衰えていて、どうやらもうすぐ亡くなる事が確実だという事のようだった。

「アンガス君の清めのパワーは相当なものだが、根本的な解決能力までは期待出来ないようだ。あのキタイ王宮と言う場所は恐らくは双龍にとつての一種のポワースポットで、謎の貧民窟クシャダスはかつては王宮の一部だったのだと僕は考えている」

フェリシアと同じ年に生まれた母ロザリアの弟で、フェリシアには叔父にあたるアンガスは、聖剣『シャボンヌ』の主だ。<sup>あつじ</sup>アンガスの清めの力で王宮が暗い波動に覆われずに済んでいるが、アンガスは根本的な原因である龍の力に介入する能力までは、持ち合わせていないらしい。

朝になって目覚めた時、フェリシアは変わらず夫の腕の中に居て、何処か機嫌の良い夫の顔がまず目に入った。

「おはよう。朝食を済ませたら、一緒にブルサに有るキタイ王宮に行こう。そして、双龍の力のバランスを正し、銀の龍の力を補って来よう。アンガス君には話を通した。僕のかつて使っていた部屋に一晚寝泊りしようと思うが、ファティマの周りはある母親時代から仕えている年寄りが色々うるさいから、まだ内密にしておこうと思う。恐らく、双龍の力のバランスが正された後なら、フェリシアも気持ちよくファティマと言葉を交わせるだろうからね」

正直な話、夫と先妻の生活していた場所など、敷居が高い。億劫だ。だが、夫が昨夜説明してくれたような事情なら、自分の力が必要とされているのだ。そう、フェリシアは思う事にした。

「そつだ。面倒をかけて悪いね、フェリシア。でも、きっと君自身にも何かプラスになる事が有る、僕はそう確信するよ」

夫の「確信」が外れたためしは無い。フェリシアは夫を信じてついでに行く事にした。

## 72 (後書き)

一部意味不明な箇所訂正しました。アングスの能力の解説ですが…  
すみません。更に最後の脱字、訂正しました。ごめんなさい

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。  
もう終盤ですが、皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

73 (前書き)

更に気を馴染ませた二人の前に、新たな謎が……

フェリシアはキタイ王宮内部の、夫・マークのかつての私室のベッドの中で、夫に抱きしめられていた。

「僕はここで三十年ばかり暮らしてきた訳だが、これまでこのベッドに女性を入れた事は一度も無い。無論男性も無いが」

そう言うと、夫はフェリシアの眼を見つめた。柔らかな口調で少し冗談めかした言い方をしたが、真剣だ。

「ええつと……その……」

夫の過去の女性関係など、そもそも聞いて良い事なのかどうか、フェリシアは迷っていた。

「ハリカは無論、この王宮に足を踏み入れた事すら無い。イゼルとは一度、イゼルがまだ別の男の妻だった頃に一度だけ目に付きにくい所に有る客用寝室で寝た事はあるが、後は全部僕がイゼルの部屋に行く形だった。そしてそのイゼルが使っていた部屋は今、アングス君とファティマのものになっている筈だ」

「ええ？イゼル様とそんな事が？」

「うん。落ち込んでいたんでね、一種の治療みたいなものだ」

今は亡きイゼル王女の最初の夫は、美貌ではあるが浮気性で凡庸な資質の貴族だったようだ。マークは既にハリカと「いい仲」であったし、自身が五歳年上と言う事も有って、イゼル王女はマークへの想いを打ち明けられないままに結婚したが、子も出来なかったし、幸せでもなかったらしい。最初の結婚相手が死亡し、マークとハリカの間ポールと言う子供が出来た事が一種の引き金となって、イゼル王女の方からマークへ想いを告白した。そして、マークはその想いを受け入れたので、ファティマが生まれた。とまあ、そのあたりの事情まではフェリシアも承知はしていたのだったが……

「治療ですか？」

「うん。一度だけの情事のつもりだったし、事実その後、何年も没交渉だった」

幼馴染で姉のように感じていたイゼルが浮気性の夫に悩まされ、自分自身の女としての魅力に自信を失っていたのを見かねての事らしい。その情事後、イゼルの当時の夫の浮気相手を務めた女官を全員、摂政であったマークは王宮から追い出したと言う。

「これで、聞きたい事には全部答えた事になるかい？」

「ごめんなさい」

「謝らなくても良いんだよ、君には知る権利が有る、フェリシア。それに君は僕の番で、この龍の気が強い場所<sup>つがい</sup>で気を交わらせる事のできる唯一の存在なのだ。僕は今の君と似たり寄つたりの年頃から遊び好きな女官連中に色々手ほどきされたりしたもんだが、不思議とこの場所に女性を連れ込もうと思つた事が無かつた。随分後になつて、この場所が金の龍の気配が濃く垂れ込めている特別な場所であると気がついたんだ」

「普通の女の方には龍の気配が強すぎて、危険なのでしょうが？」

「危険かどうかはつきりしないが、龍の気を持たぬ者にはふさわしくない様だ」

事前にこの王宮に居るマークの腹心の者達には密かに話を通して有つたようで、フェリシアが共に一晚を過ごした後の翌朝の朝食は、気の利いたものが部屋の方に運び込まれた。

「摂政時代、忙しくて書類の山の中で食事する時にはいつも用意してくれていた連中が、今も健在だったのはラッキーだったよ」

「その係の人たちは今はどうしているのですか？」

「主にアンガス君の身の回りの事を担当するようになってる」

朝食を終えたら、クシャダスに向かう事になっている。

かつて夫が少年時代に着ていた乗馬をする折の服を貰って、着替える、と言うよりは、夫に着せられた。腰には聖剣『ヴィーヴル』を差した。髪は夫が手際良く梳り後ろで緩やかに一つにまとめ、銀色の細いリボンを飾った。いつもフェリシアは思うのだが、夫は何をやっても器用な人だ。

「おやおや、まあ、なんて可愛いんだ」

夫は実に嬉しそうな顔をして、フェリシアを抱きしめた。

「ほら、見てごらん、実に凛々しくて愛らしい。クククツ、ちょっとばかり妙な気分になるねえ」

目の前の姿見の中で、少年の様な自分の姿と、無駄に艶めいたオラを振りまいているしどけない寝間着姿の夫が絡み合っている。

「え？どのような？」

「うん、その、美少年を愛でる人の気分が良く分かる気がする」

「まあ……」

あっけに取られているうちに、夫はさっさと着替えて自堕落な色めかしい雰囲気から、さわやかな好青年と言う雰囲気に切り替わっている。もうとうの昔に四十を超えた筈なのに、どう見ても二十代にしか見えない。

「今からベッドに押し倒していちゃあ、予定が狂うからじつと我慢して……出かけようかね。おいで」

言う事だけがどうにもさわやかでは無いが、そんな所も夫の魅力になっていると感じるのは、余りにも身贋と言つものだろうか。フェリシアは思う。

夫に抱きしめられてワープした先は、夢に出てきた海のようにだった。

「僕は、ずっと以前……そうだね、フェリシアが生まれる以前で、君の両親と親密になって間が無い頃だなあ。今のようなフェリシアの姿そのままの子が、僕の知らない聖剣を抜き放ってこのクシャダスの海に向かってかざすと、海面が揺れ動き光が発する……そんな場面を幾度か見たんだが……」

「では、試してみましよう」

夫が夢で見たという姿のままに聖剣『グイーヴル』を抜き放ち、海に向かってかざした。だが、海面には何の変化も無かった。

「やっぱり、駄目か。恐らく何か必要な条件を満たしていないと思われるのだが」

「……っあっ！」

「どうした！ フェリシア」

フェリシアの脳裏に龍の姿をあらわしたレリーフのようなものか思い浮かんだ。何処かの建物の奥深い場所のようだ。あるいは地下とか洞窟かもしれない。外気や外光が感じられず、暗く黴臭く湿気ている場所のようだ。

「ダーリン……」

夫は急いで汗ばむフェリシアの額に、額を押し当てた。二人の絆が深まってから、互いの額を寄せ合うと片方の脳裏に浮かんだヴィジョンがすっかりそのまま読み取れるようになっていた。

「これは、クシャダスの何処かなのかもしれない。そんな気がする……フェリシア、その場所に意識を集中してごらん。おそらくオルトの内なら初めての場所でもワープできるはずだ」

「出来るでしょうか？」

「出来るとも。今のフェリシアならきつと出来る。さあ、僕と一緒にその場所に連れて行ってくれ」

夫の声に励まされ、強く抱きしめられて、フェリシアは夫の言うように二人でその場所にワープできるのだと信じる事が出来た。「ダーリン、どうやら大丈夫みたいです」

次の瞬間、二人の姿は海辺から消えた。

### 73 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。もう終盤ですが、皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

## 74 (前書き)

龍たちの御都合主義に一人はあきれますが……

「ここは、やはりクシャダスの内ですか？」

ワープした先は黴臭い暗い石造りの部屋の中で、小さな明り取りの窓が開いていて、石の床に刻まれた龍のレリーフが確認できる。天井はさほど高くない。

「意識を高く放つ事は出来そうだから、放ってみよう」

自分の意識を真つ直ぐ高く上空に上げるようにすると、ちょうど航空写真で下界を見るようなヴィジョンが見られる。こうした能力は以前の龍の器にも潜在的には有ったのだろうが、このような形で活用したのは恐らくマークが初めてらしい。地球での知識経験が元になって、アイデアが沸き、能力を活性化したのだと言える。

「間違いなく、クシャダスの中だな。皆が『開かずの塔』と呼ぶ出入り口の見当たらない奇妙な塔の中らしい」

「ではワープしたからこそ、入る事が出来たのでしょうかね」

「そうだな。わざわざそうした建物を作った意図は何だろうか……やはり……」

「ワープ出来る者だけをこの場所に受け入れる、と言う事でしょうか？」

「この石の壁だが、キタイ王宮と同じ産地の石材のように見える。

先ほどまでいた部屋だってもっともらしい装飾パネルや壁紙を引っ剥がすと、この部屋と同じ色の石の壁が出てくるんだよ」

「こうしたレリーフが、隠されているって事は無いのでしょうか？」

「有るかも……いや……有るぞ。あのベッドの置かれている場所だ。絨毯で隠されてしまった床面にこれとそっくりのレリーフがある。

こいつは顔を右に向けているが、ベッドの下敷きになっているのは顔を左に向けているよ。僕が実際に見て確認したのは、たったの一

「回だけだけどな」

「そのレリーフが有ったから、金の龍の気配が濃く垂れこめていたのかもしれない」

「そうだな。そう考えると、明らかにペアのこの龍は銀の龍と言う事になるのかな」

「やはりそう見るのが自然ですよねえ」

「だが、こいつが宮中の龍と番の銀の龍を描いたレリーフだととしてこれをどうすれば良いんだろうか？」

「金の龍のレリーフの上にベッドを置いて寝ていたわけですから…」

「…ダーリンと一緒に上に乗ってみますか」

「足で踏んづけるのか？」

「銀の龍に聞いてみましょう」

フェリシアがレリーフを一体どうすれば良いのか尋ねると、銀の龍の答えはこうだった。

「（金色の印がある部屋で気を馴染ませてからなら、ここで抱きしめあって口づけければ大丈夫だ）」

「（大丈夫って？という事）」

「（長く澱んできた気が巡るようになり、穢れが去る）」

銀の龍のわかりにくい説明をつなぎ合わせて、フェリシアとマークがどうにか理解したのは、このクシャダスは膨大な量の銀の龍の魔力を封印した場所だと言う事だ。銀の龍は人間の隠された感情の力を増幅する作用が大きい、器のありとあらゆる負の感情が肥大化し、広がりはじめるとオルト中に災難を引き起こすため、かつての大神殿の有った場所に銀の龍の不都合な魔力をこの場所に封印したのだという。

「（じゃあ、何代もの銀の龍の器たちの暗い怨念とか情念とか負の

感情を、ここにため込んでいたって事？」

「（全部は無理だ。ブルサが帝国のものであった頃までだ）」

「（では、その後の銀の龍の器たちの負の感情は？）」

「（フェリシアはマークの助力を受けて、すでに封印して泉に沈めたではないか）」

「（ああ、あの黒い玉ね。でもあれで良かったの？）」

「（実に良い方法だ。もうすぐあれは完全に浄化される）」

「（完全に浄化されると、どうなるの？）」

「（わからん）」

「（わからん、ってどう言う事？思い出せないの？知らないの？）」

「（ともかく、わからんのだ。悪い事では無いだろうが、金色のも女神にもわからんはずだ）」

フェリシアはあきれてしまった。自分の魔力が元になって現在の状況に至ったのに、全く持っていない加減と言うか、無責任と言うか……確かに、龍達に責任など理解も出来ないのかもしれないが……

その様子を見ていた、マークは笑い出してしまった。

「いやはや、まただな。別に嘘でも無いようだが、余りに多いのだよ、このオルトの神様達の『わからん』が」

「（マークよ、本当に銀色のにも女神にもわからんのだ。今まで穢れを浄化できるほど強い器は居なかったのだ。見た事も聞いた事も無ければ、わからんのは当たり前だろう）」

金の龍が姿を現して、弁明する。

「いやもういいよ。後は僕らが出来る事をやるしかない、そうなんだろう？」

「（そうだ）」

「（それ以外の方法は無い）」

「と言うわけだ、フェリシア」

夫は手で、双龍に向かって「しっ、しっ」と言う感じで手をふって、追い払った。

追い払ってしまったなんて、仮にも神様相手に夫も随分と大胆だとフェリシアは半ばあきれ、半ば感心した。

「だって、僕らの魂はオルトの神の力で生まれたわけじゃないし、不老不死なんて奇妙な運命を押し付けられたのだし、オルトのために連日真面目に働いているのだし、どう考えたって龍達に遠慮しなくてはいけない理由なんて、無いよ」

確かに、龍たちは『抱きしめあつて口づけ』さえすれば多少の事がどうであつても、文句も無いだろうとフェリシアは思った。

「全くだ。龍たちは目的さえ果たせば、僕らがどう思うかなんて構わないのさ。さて、邪魔者は姿を消したから……『抱きしめあつて口づけ』なくっちゃ」

「なんだかんだ言つて、龍たちの要望に応えている事になりますけどね」

「確かにそうだけど……僕も細かい事は気にしない……フェリシアと抱きしめあつてキスできるんだから……ん？ フェリシアはどうなの？ 嫌じゃないのだろうか？」

「嫌じゃありません、もちろん。でも……なんだか癢です」

「全くだ。可愛いフェリシアを抱きしめてキスするのが、龍の目論見に沿っているなんて、少々腹立たしい。でも、僕も大して怒ってないけどな」

夫は、くすつと笑った。

「いい加減で御都合主義で、時々横暴な神様達だが、僕がフェリシアと一緒に生きて行ける運命をくれたのだから、一応感謝はしてる

よ。僕はフェリシアを愛しているからね」

「私も、全く同感です。私もダーリンを愛してますから」

御都合主義の龍たちの目論見に沿っての行動では有ったが、マークがフェリシアを、フェリシアがマークを想う気持ちには紛れも無い本物で、強いものだった。だから二人が抱きしめあいキスをする途端に龍のレリーフが光り始めた。そして、二人は気がつくくと、再び先程の海辺に居たのだった。

## 74 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。もう終盤ですが、皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

## 75 (前書き)

どうやら、二人そろって地球に行くめどが立ったようです。

「良くは分らんが、ここで仕切り直しなんじゃ無いのか？」

「では、もう一度、聖剣『ヴィーヴル』をかざしますか」

再び海岸に出た事ではあるし、先ほど試した事をやり直すと、確かに今度は海面が揺らいで光った。

「まつ！ 緑の光と赤い光ですね」

「それぞれ分かれて、飛んで行くという事は？」

「やっぱり、さっき見たレリーフに眼が入ったんじゃないでしょうか？」

先ほど出てきたばかりのクシャダスの開かずの塔の部屋に戻ると、予想通りの状態になっている。

「ほお、こっちはやはり、銀の龍だから赤い瞳が入って光ってる」

「じゃあ、ダーリンのもののお部屋の床は」

「この際、絨毯は切って引っぺがすか」

昨夜から朝まで寝ていた部屋のベッドの床下にもぐりこんで、絨毯を切って引き剥がすと、緑の眼を光らせた金の龍の姿のレリーフが出てきた。

「(で、ここからどうするんだよ)」

夫は金の龍とも付き合いが長いせいか、呼びかけもぞんざいだ。

「(もっとフェリシアと深く深く馴染めばよい。そうすれば二つの浮き彫りから込められた龍の気が飛び出して馴染んで、清められる)」

「深く深くって言うけどな、どのぐらいだ？」

「(わからん)」

「(はいはい、お前に聞くのは止めた)」

今度はフェリシアが銀の龍に尋ねた

「(どうすればよいの？ 深く気を馴染ませるって聞いたけれど)」

「(十分に馴染めば、ともかく、二つの浮き彫りから龍の気が飛び出して馴染む。べつにフェリシアはマークと気を交わらせるのは嫌ではなかるう？)」

「(ま、まあそうね)」

「(ならば、良いではないか。十分馴染めば、二人で地球にも行けるぞ)」

すると一度引っ込んでいた金の龍が出てきて言った。

「(二人で一緒に地球に行き、気を交わらせると、強い子が出るぞ)」

「(そうなの？)」

フェリシアは驚く。

「(おい、それは本当か？)」

マークもこれは初めて聞いたのだらう。驚いていた。

「(忘れていたのだが、思い出したのだ)」

「(そうだ、今、思い出したのだ)」

それだけ言い置くと、双龍は消えた。

「そうかあ。二人で地球に行けると、そういう事が有るのか。それにしても今まで忘れて居たのか龍たちは」

「記憶と言うかメモリーがブロックされて居るんでしょうね」

「うん。龍の記憶をブロックしたのが、本当の『神』とも言つべき存在なんだろうな」

「その本物の『神』的な存在は、私たちの力では遭遇できないのかも知れませんが」

「まあ、遭遇したからって幸せになる補償も無いし、寧ろ新たな悩みが出来るような気もするから、まあ、どうだって良いんだが……つい考える。まあ『神』から見れば僕らだって、一種の実験動物みたいな存在だろうな」

「何だか寂しい発想ですね。『神』はアリシア人のメンターみたいな存在かも知れませんよ」

「ああ、E・E・スミスの書いたスペースオペラ『レンズマン・シリズ』か」

古典的なSF大作に出てくる人類より遙かに高度な知的生命体がアリシア人で、その設定では人類の進化もアリシア人によって慎重に調整されていたという事になっている。アリシア人に法と正義の執行者としてふさわしい存在であると認められたものが「レンズマン」と言う設定だ。

「それで行くと、双龍なんかはヴェランシア人って所か」

「ああ、確かに全長十メートルを越す有翼のドラゴン、って姿ですよ、ヴェランシア人は……ダーリンも『レンズマン・シリーズ』が好きでした？」

「僕はE・Eスミス作品なら、人類が太陽系を超えたって設定を初めて使った『宇宙のスカイライク』なんかの方が好きだな。でも、確かに、僕ら自身の事を実験動物よりも選ばれたレンズマンに近い存在だって思う方が、精神衛生上、良さそうだ」

その夜も無論、気を交わらせたが、レリーフに大きな変化は見られなかった。

微妙に光り方が強くなったような気もするという程度でしかなかったのだ。帝国での様々な予定も有るし、二人ともそれなりに忙し

いのでマークとフェリシアはとりあえず、夜はこのレリーフの真上に置いたベッドで眠るだけは眠り、他は帝国内で今までどおりにして過ごす事に決めた。

そうした状態で、季節は巡り夏が来て、フェリシアは十二歳になった。キタイ王宮の龍のレリーフの真上に置いたベッドで寝る状態は、相変わらず続いている。思いのほか長期間その状態が続いたので、朝食は寝巻き姿のまま「手際良くまともなものが出てくる」「キタイ側で食べるようになってる」。

「連日こうして風呂も済ませて、寝巻き姿でワープしてくるわけだが、人には見せられない」

「確かにしまらないですよ」

「レリーフの光り方は、結構強くなってきたが、相当時間がかかっているよな」

「どうも、双龍の説明では時間的なものが特に分かりにくいですよ」

「この夏の間、二人で金色の蛙様を迎えに行けるかな？」

「間に合うと良いですけど……」

「どうも、レリーフの事ばかり気にするのが、良くないと言う気がする。だって、深く深く馴染まないといけないんだろう？ わざわざ反復して『深く深く』って金の龍が言うレベルには到達してないんだろな」

「銀の龍は『十分に』と言いましたっけ」

「そう、そんなんだよなあ。何だか僕の愛情が不十分みたいな気がするから、嫌だ、その言い方」

「あ、あの、私はそんな風に思っていないからね、ダーリン、わかって下さってますよね？」

「わかってるって。いつも変なのは龍たちのほうさ。全く……」

それから、あまり、レリーフの事を気にするのは止めようと互いが思ったのが逆に良かったのかして、その夜、急に結果が現れた。二人が愛し合つてぐっすり眠って居る間に、レリーフに大きな変化が有った。翌朝目覚めた二人は、びっくりした。

「なあ、レリーフの部分がすっぱり抜けたな」

「円形の凹みがあるだけですな」

「じゃあ、『開かずの塔』もそうなっているかな？」

「見てきましょう」

「まあ、先に飯だよ。食べるものはちゃんと食べなくちゃ」

ともかくも朝食を済ませて、幸いその日は週末の休日であったので、二人とも気軽な、ちよつと眼には非番の日の騎士団員のようななりで『開かずの塔』へワープした。

「やっぱり、こっちもレリーフが丸々抜けたな」

「と、言う事は、穢れは清められたんですか？」

「その割に変化が無いよな、汚れたクシャダスの景色も、風紀の悪さも」

二人が考え込んで居ると、双龍が姿を現してこう伝えて来た。

「（金の蛙を地球に迎えに行け）」

「（金の蛙をクサントスに連れて行け）」

マークが「いきなり今日は無理だ」と言うと、こう言ったのだ。た。

「（待ちくたびれて、金の蛙が死にそうだ）」

「（気落ちして、金の蛙が死にそうだ）」

マークが「わかった、わかった。明日早速二人で向かうよ」と言  
うと納得したのかして、双龍は姿を消した。

## 76 (前書き)

二人は無事一仕事終えましたが、キタイは世代交代となりそうです。

以前の約束通りなら、金色の蛙様は伊勢神宮の内宮から行ける五十鈴川の川原に出て来るはずなのだ。ただ、参拝を済ませてからでなくては、迎えに行つてはいけならしい。

二人は宇治山田駅からタクシーを拾つて外宮、内宮と回る事にした。フェリシアの魂がかつて伊丹京子として日本に存在していた頃は、幾度も内宮に行った経験があるが、外宮は行った事が無かつたのだ。

「片参りは厳禁だつて、言われたんだよ前に。だからちゃんと外宮からお参りして行こう」

「外宮は初めてですから、楽しみです」

「おやまあ、片参りばかりだったのか」

「ええ。結構そう言う日本人も多いと思います」

マークが以前地球で仕入れたジーンズにお揃いのTシャツと言う格好で、あからさまなペアルックなのがフェリシアはちよとばかり気恥ずかしい。フェリシアは「紫外線対策ねっ」て言われて、幅の広いつばのついた白い帽子を被っている。

「ほらあ、地球の夏の紫外線は最近ひどいんだから、ちゃんと日焼け止めも塗りなさい」

一番性能の高いタイプの日焼け止めローションを、マークは肌が剥き出しになった部分に塗りたくるのだが、地方都市とは言え、多少は人目もあるのでフェリシアは、またまた気恥ずかしい。

「僕ら、明らかにガイジン顔だから、あんまり日本語がわからない振りしようか」

「そのほうが鬱陶しい質問をされなくて良いでしょうかね」

タクシーに乗るとマークはわざと変なイントネーションの日本語で行き先を告げた。その後は二人でオルトの言葉で会話を続ける。

「ダーリン、運転手さんが一生懸命どこの言葉だろうかと考えてますけど、地球上のどこの言葉に近いんでしょうね、この言葉は」

「そうだなあ。中央アジアから東ヨーロッパにかけての幾つかの言葉に近いと思う。文の語順は基本的に日本語と同じ主語・目的語・述語だから」

「ああ、そうなんです。全然考えた事無かったですけど」

「まず、日本人でこの言葉がわかる人は居ないだろうな」

外宮に到着したら、まずきちんと作法を守って参拝した。タクシイはもう使わないで、後はワープで目的地に移動する事にした。内宮も無事に参拝を済ませると、帰り際に五十鈴川の川原に降りた。

「（蛙様、金の蛙様）」

「（お迎えに参りました。一緒に銀の蛙様の所へ参りましょう）」

ふっと気がつくくと、岩の上に金色の蛙の姿が有った。

「（忘れられたかと思っておった）」

「（申し訳ありません。番と共に此処まで渡って来られる様になるまで、思いのほか手間取りました）」

マークの言葉を受け止めると、金色の蛙はフェリシアを見た。

「（なるほど、銀の籠だ。随分と若いのだな。だが、魂は強い）」

「（強いですか。僕もそう感じております）」

「（金色のも強いが、均衡が取れているのが良いな。良い番だ……では、頼む）」

マークとフェリシアが金色の蛙の立つ岩を取り囲み、共にクサントスの銀の蛙様の居る池を強く念じた。

「（ああ、ついた、良かった、本当についた）」

金の蛙様は大きな喜びの声を上げた。すると、池から一斉に蛙の声が響き、中から銀の蛙様が出てきた。

「（おおお、戻った。良かった、本当に良かった）」  
銀の蛙様も大きな声を上げた。

蛙たちの喜びの声は、いつ尽きるとも分からなかった。しばらく様子を見ていたマークとフェリシアは、そつとその場を立ち去ろうとした。すると、金銀の蛙様が一度に呼びかけてきた。

「（困り事が有るのではないか？）」

「（知りたい事は何だ？）」

フェリシアの頭に真つ先に思い浮かんだのは、聖剣『サミア』と『バスイール』の主となる少女達の将来であった。大きなハンディーを背負った形で生まれて来る運命に有るらしいが、それぞれ幸せになれるのだろうか？

「（どちらも、自らを庇護し愛するものが常に寄り添う）」

「（世の常の幸せとは形が異なるだろうが、幸せになる）」

金銀の蛙様たちはそつ、請合った。

「（金の籠の器よ、お前の願いは適うがまだまだ時がかかる）」

「（金の籠の器よ、まだまだかかるが、いずれは適う）」

マークは、ほつと溜息をついたが、何も言葉を発しなかった。

「何か有れば、また来い」  
「分かる事ならば、全て伝えよう」

そして、金銀の蛙様は池に飛び込み姿を消した。

「どうやら、大仕事が一つ片付いたね」

「ええ、そのようですね。クサントスの神様の番は全て揃ったのでしょうか？」

「たぶんね……ねえ、伊勢で何も買わなかったな。名物も食べなかつたし」

「今日は、仕事第一でしたから」

「今から地球にワープし直す？ それともオルテスに戻る？」

「そう言えば、クシャダスはどうなったのでしょうか？ 龍たちに聞きたいですね」

「クサントスでは龍たちは嫌われ者だからな。では、オルテスに戻る」

慣れ親しんだ二人の寝室に戻ると、やはりほっとする。

「なあ、クシャダスの浄化はどうなったんだ？」

「マークは気がかりであった事を金の龍に訊ねた。」

「（ゆっくりと浄化されて行くだろう）」

「（変化を速めるにはどうすれば良いのだ？）」

「（気が馴染めばよい）」

「（それだけか？）」

「（新たな聖剣の主たちが生まれるまでは、それ以外何も出来ない）」

「（他に方法は本当に無いの？）」

「フェリシアも思わず銀の龍に訊ねていた。」

「（他に有るのかも知れないが、わからないのだ）」  
銀の龍はそんな調子だ。

「（そうだ、わからないのだ）」  
金の龍もそれに和す。

「（お前達は強い器だ。だから滅多な事では壊れない）」

「（お前達は優れた器だ。秘密を探り当て真相を知る事ができる）」  
そう言い置いて双龍は消えた。

「そろそろ僕らも、双龍頼みを抜け出せって事か？　だが、独自路線といつてもねえ」

「龍たちの知らない事を、蛙様たちは御存知でしょうか？」

「そうだな……ん？」

夫の表情が急に曇り、フェリシアは狼狽した。

「どうなさいました？」

「キタイの伯父上が、いよいよいけないようだ。フェリシア、急いで身支度をして行くよ」

マークに促されるままにフェリシアも大急ぎで身を清め、小間使いを呼んで、キタイ国王を訪問するのにふさわしい衣装と髪を整えた。その間に、軽くつまめるもので腹ごしらえもする。

「初お目見えだからねえ、うん。派手すぎず地味すぎず、気品があつて良いだろう。堅い事を言えば、皇帝と皇后が国王の見舞いと言うのは慣例に反するが、こっそりワープして内密に会いに行くだけだからな。それでも、僕にとっては……育ての親に初めて妻を紹介するのだから、とても大切な訪問なんだよ」

「はい」

それにしても、今日は何と気忙しい日だろう。ついフェリシアはそう思った。地球への往復の後、クサントスで蛙様達と語り、戻ってきたら、今度はキタイ……何かの予兆だろうか？

「確かに。何かが大きく動く前触れかもしれないな……」

肉親との別れを予感して揺れる感情も感じられたが、その先に見える物を夫は予感しているようにフェリシアには見えた。

## 76 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。もう終盤ですが、皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

77 (前書き)

国王の死と共に、厄介な問題が持ち上がりました

キタイ国王ファジルの顔に浮かんだ死相は濃いものだった。誰が見ても、余り時間が残されていない事が見て取れるほどに。

「伯父上、妻を連れてきました。僕と言う男の妻であると同時に、帝国の皇后であり銀の龍の器であるフェリシアです」

「初めてお目にかかります。フェリシアでございます」

「おお、何とお美しい。陛下、ありがとうございます。本来なら私がオルテスに伺うべき所を、わざわざ、申し訳ない」

「なに、フェリシアは僕同様、オルトの内ならどこでも瞬時に移動できますし、今日は古き神様の御用を果たしに、一緒に地球との間を往復しました。ここまで伺うのも造作無いのです」

「ですが……そのようにお忙しい中、わざわざおいで下さるとは……ありがたい」

「伯父上が、僕をお呼びになったように感じたのですよ」

「ああ、確かに、眠っている間に胸が苦しくなりまして……明るく強い陛下の気に触れたい……つい、そのように感じました。その想いが届いたのでしょうな」

「伯父上、どうか、昔のように僕を呼んで下さい」

「……マルク……いや、もう、立派な皇帝陛下だ。些かなりとも、偉大な皇帝陛下が世に出る手助けを出来たのが、自分の人生の一番の意義だと思っておりますよ」

ファジル王が静かに眠り始めたので、マークとフェリシアはワープして帝国の首都オルテスの宮殿内部の自室に戻った。

「明日ダーリンはお忙しいでしょうか？ 私が代わりに伯父上様のお傍についていたら、いけないでしょうか？」

「そうしてくれるかい、ありがとう、フェリシア。アンガス君とフアティマには話をしておこう」

それからしばらくの間、マークはアンガスと『心話』で色々話を詰めたようだった。

「ダーリンのお顔って伯父上様と似ていらっしやるんですね」

「金の龍の力の影響があると、顔立ちは似てくるようだよ。キタイの王族は金の龍の祝福を受けているとされてきたしね」

「確かに、伯父様からは僅かですけど金の龍の力を感じました」

「伯父上は御自分では魔力は発動できないが、他人の力を読む能力は十分にお有りだ。フェリシアを見て、僕が本当にふさわしい妻を迎えたのだと納得して頂けたらろう」

二人とも、あえて、ファジル王の娘であった亡きイゼル王女の話はしなかった。

夫が「納得」と言う言葉を使ったのは、これまでファジル王が感じてきたであろう割り切れない思いに配慮しての事だろうと、フェリシアにもわかったからだ。

翌日、フェリシアは朝食を済ますと早速ワープして、ファジル国王の見舞いに向かう。

アンガスとフアティマが、既に病室には詰めていた。マークが儀礼的な挨拶など抜きにして、フェリシアの事は身内の者・マークの代理として受け入れるように良く言っておいてくれたのだろう。フェリシアは気詰まりな感じを持たないで、部屋に居る事が出来た。

「国王陛下は、どうやらおみ足が腫れて、お辛いご様子ですね」  
アンガスが気遣わしげに眉をひそめる。

「では、お摩り致しますか？ 実家の両親がティボー先生のお体を、

毎日摩って差し上げてますが」

「皇后陛下に、そのような事をさせていただくのは、余りに恐れ多いです」

ファティマは慌てた口調で言った。

「いえ、本日は国王陛下の義理の娘分と言つこと何っているのです、どうぞご遠慮なさいませんように」

「ファティマ、御好意をお受けしよう。ね？」

アングスの言葉も有って、フェリシアはアングスと共に王の足を摩った。すると、たちまち腫れが引いて、病人の呼吸が穏やかなものに变化した。

「やはり、皇后陛下のお力は強い。僕だけではこんなにすぐに綺麗に腫れを引かせる事は出来ませんでした」

すると、ファティマの心の内に、負の波動が大きく巻き起こる。

どうせ、私なんてただの人間で、何のお役にも立ちはないのだから……どうせ……

その思念は、いわば垂れ流しなので、手に取るように感じ取るフェリシアもアングスも実に気まずい。

「（ファティマ姫のお気持ち、ひどく波立っていますね。どうか、余り刺激なさいませんように）」

「（はあ。困ったものです。皇后陛下の御好意は御好意として、受け止めようとしているのでしょうか）」

「（姫は御自分が不老不死でも聖剣の主でもない事を、何より気にしておいでです。ですから、その話は避けて、どうにか場が和むとよろしいのですけれど）」

「（そうですね。僕は未熟者で、姫が気に病んでいる事も、つい、忘れておりました）」

配偶者が何を気に病んで悩んでいるかと言う基本認識があやふや

なアンガスは、やはり頼りない。もつとしつかりしなさいと言いたい気持ちを、フェリシアはアンガスでは探れないような、うんと心の奥底に隠した。

「（姫が仲間はずれになったと、お感じにならないで済む様にすべきです）」

「（でもどうすれば……）」

アンガスは途方にくれている。

「姫、是非、御一緒に国王陛下のおみ足をお摩りしましょう。こうした事は摩る方のお気持ちが大事ですから。姫のお祖父様である国王陛下を心から大切に想っていらっしやるお気持ち、それが良い効果を呼ぶかと思えます」

フェリシアがファティマの眼をじっと見て、そう言うと、ファティマの内に強い畏怖の念が湧き、フェリシアの言葉を信じる気持ちも見て取れた。フェリシアが手を取り一緒に摩る様に促すと、ファティマは素直に従った。

「姫の真心は、きっとお祖父様に真つ直ぐ伝わりましょう」

王の呼吸は穏やかになり、微笑みが浮かんだ。

「イゼル、来てくれたのか、イゼル、ありがとう」

ギュツと強い力で、フェリシアの手を握りしめる。

病み衰え筋張ってしまった老いた王の手を、フェリシアはもう一方の手を添えて優しく握り返した。

「もうすぐそちらへ行くからね、イゼル」

王は目を開いたが、フェリシアがどうやらイゼルであると錯覚しているようだった。すると、そこへ、早めに公務を切り上げてきたマークが姿を現した。王はカツと目を見開いて、こう叫んだ。

「おお、マルク、頼むマルク、キタイを」

それが、金の龍に祝福された王の最期の言葉だった。

本来ならば、キタイの新女王となるファティマが喪主として全てを仕切るべきでは有ったのだが、キタイの老臣たちは皆心許ながら、結局は皇帝であるマークが養い子として一切を取り仕切った。葬儀には帝国はおろか、オルト中のすべての国々から「偉大なる皇帝陛下の御養父」の弔問のため多くの人々がやって来た。

「いやあ、実に盛大な御葬儀でした」

「亡くなられた国王陛下も定めしご満足でしょうな」

「新しい女王陛下は何とも幼いが、皇帝陛下がしっかり御後見あそばすから安心です」

「この際、キタイが帝国領であった頃の状態に戻っても悪くなさそうですな」

ファティマの心は穏やかではない。何かと言うとファティマよりも年の若い皇后フェリシアが比較の対象として挙げられるようになったからだ。こうした事態はマークも予想していなかったが、膨れ面を父親に見せるだけで、相変わらず幼稚な娘の態度は、マークを失望させた。

「私など、王家の血筋を伝えている以外、何の価値もないのです。いつそのことキタイも帝国に組み込んでいただいて、直接父がお治めになれば良いではないですか」

「そのような事、お前の思いつきで決まるものではない」

「でも、老臣たちばかりか身分の軽い者までが『帝国領になった方

がいつその事安心だ』などと噂しています」

マークはデリケートで厄介な問題をどう扱うべきか、大いに悩むのだった。

## 77 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。もう終盤ですが、皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

78 (前書き)

嘘も方便、な話です。

フェリシアは困惑していた。

そもそもがファジル国王がいまわの際にフェリシアの強く手を握り締めた、その事が、ファティマ姫の気持ちを大いに傷つけたのだ。キタイ王国唯一の王位後継者であるという自負心よりも、祖父にとって自分こそが特別な存在であるという自信を傷つけられたらしい。

更に困ったのは、キタイの一般の庶民の間にフェリシアに関する噂が広がって、何かと言うと新たに女王に即位したファティマの幼稚さ至らなさとの対比に使われてしまう事だった。ことに喪主の役目を新女王が果たせなかつた事、皇帝の補佐役を皇后であるフェリシアが務めた事がこんな噂の元になってしまったようだ。

「困りました、ダーリン」

「そうだなあ、だが、確かにファティマは幼稚だ。普通の娘ならばあれでも構わないのだが、自分が為政者であると言う自覚が足りない。僕が手助けしすぎてしまったのがいけないな。多少不手際でも、ファティマに喪主を務めさせるべきであつたかも知れない」

「キタイは独立した王国として、存在させるお考えなのですよね」

「うん。いずれ、帝国と合併と言う事が有るとしても、まだ時期尚早だろう。ファティマは王位を継承するものだと思つて育つてきた。あの子の周りの人間もそれを信じて今まで来たのだ。僕はファティマの生きている限り、やはり支えてやりたい。何とも頼りない女王だけだね」

「身辺に、ファティマ様の為政者としての自覚を育ててくれる人材は、居ないのですか？」

「イゼルの周りに仕えていた者を、そのまま受け継いだだけなのだ。僕ももつと色々考えておくべきだつたな。アングス君は有能な人物

だが、ファティマを再教育できるほどの力を持っていない。年下なものも不利な材料だ」

イゼルの周囲の人間はファティマを「愛らしい姫君」として育てる事しか頭に無く、有能な為政者を育成すると言っ発想自体が無かったようなのだ。

「ファティマが子を産めば、事情も変わって来ようが……」

「でも、宿命のお子である可能性は高いのでは？」

「ああ……そうだな。聖剣『サミア』か『バスイール』の主なら……」

いつ授かるかわからない子供が生まれるまで事態を放置するのも、良い方法とは思えない。フェリシアには龍の力が有るが、ファティマには何も無いのだ。

「ダーリン……考えてみたのですが……銀の龍の力を使っては……」

「フェリシア、まさか……」

「その、まさかです。でも使いようによっては、さしたる悪影響も無いかなと思つのですが」

フェリシアは銀の龍の魔法を使って、キタイと帝国の人間の記憶を少しだけ変容させようと提案した。

「作為的な記憶の変容か。先の銀の龍の器であった前皇太子ユーグはその魔法を乱発して、命を縮めた」

「存じております。ですから、作為を施すのは必要最小限に止めましょう」

ファジルが亡くなる直前に手を握ったのはファティマで、葬儀でマークを補佐したのもファティマと言う事にしようと言つものだった

た。

「聖剣の主達まで、魔法をかけようとは思いません。でも、幸いの方も、ダーリンが事情を御説明なされば、内密にしていって下さると思われませう」

「わかった。フェリシアの思うようにやってみよう」

フェリシアはマークに抱きしめられた状態で可能な限りの力で、銀の龍の魔法を放った。

「余り一度に無理に放つては、体を損なう。後は十分に僕と気を交わらせようね」

後は、夫の言うように「十分に気を交わらせた」。先の皇太子ユークには、互いに気を補い合い増幅できる番つがいが存在しなかったから、命を削るしかなかったのだ。その意味でもフェリシアもマークも、互いに番つがいが存在する恵まれた龍の器なのであった。

真夜中に一度、魔法を放つ事を続けて十日経つと、キタイの人々の噂の内容がこんな風に変化していた。

「亡くなられたファジル王は、新しい女王に大いに期待していた」  
「新しい女王はお若いのに立派に御葬儀の取り仕切りを補佐なさった」

フェリシアの名前は人々の話題に、余り上らなくなり、概ね目標は達成できた。

「ねえ、フェリシア、葬儀の諸々は半分以上フェリシアが頑張ってくれたんだよ。あんな風な言われ方で良いのかな？」

「私はダーリンさえ理解して下されば、どうだって良いのです。フェアティマ様のお心が安らいで、女王としてのお役目に目覚めて下されば何よりですね」

夫はひどくすまながってくれたが、あぶくのような無責任な噂などフェアシアにとっては大した意味は無い。自分と夫には長い時間がまだ残されているが、フェアティマはただの人間で、寿命が有るのだ。限り有る治世の期間が、少しでも円満に穏やかに有れば良いとフェアシアは思うのだった。

夫はフェアティマ新女王の臣下に余りにも有能な行政官が少ないのに痺れを切らし、自分が育て上げてきた若い官僚やその予備軍といった連中をメンバーに加えた。当然生じる反発と軋轢は、フェアシアの魔法で発生を防ぎ、官僚機構が十分力を発揮できるようにしたのであった。

「僕らのやって居る事は、とんでもない情報操作だよな。でも、罪悪感はない。フェアシアはどうなの？」

「嘘も方便、と言う事だと思っています」

「キタイの民は、間違いなく以前より落ち着いた暮らしが出来ているようだし、女王になったフェアティマの精神状態も落ち着いている。確かに、嘘も方便、だな」

再び、クリスマスのシーズンが巡って来るまで、マークもフェアシアもキタイの問題を抱えて大変だったが、年明けは落ち着いた気分を迎えられそうだ。

「気晴らしに、地球でクリスマス気分を味わってきますか」

「ああ、凄く魅力的なプランだねえ。教会のミサに参加してから、洒落たホテルでクリスマスディナーって言うのも悪くないと思わな

い？ 食事はやっぱり東京のホテルが良いかな……僕の手元に最新のガイドブック、あるよ。明日でも見るかい？」

夫は上機嫌で、あれこれプランを考え始めた様だった。

## 78 (後書き)

アルファポリスのファンタジー小説大賞にエントリーしております。もう終盤ですが、皆様の清き一票を、ぜひお願いいたします。

79 (前書き)

クリスマスの前に、少し骨休め

キタイ国王の葬儀の前後は眼の回るような忙しさであったし、その後も諸々あつて、夫婦だけで出かける事もできなかったのだが、それでもどうにか日程をやりくりして秋晴れの休日に、黒馬のアスワドと真珠色に光る不思議な雌馬ルウルウの間に生まれたと思われる、強い神気を帯びた真つ黒い雄の仔馬サーフィに会いに行った。

「銀の龍の魔法を放つてばかりだと、体に毒だ。既に痩せて来ているじゃないか。一日ぐらい休みなさい」

マークは強い口調でそう言った。フェリシアを休ませる為に、以前泊まったフェリシアの父であるクラウスの生家に一泊する事になった。

「痩せましたか？」

フェリシアは自覚していなかったのだが、マークが言うには、腰や下腹の肉が削げて肌がくすんでいるらしい。

「だめだよお、フェリシアの胸はもつと大きくしなきゃいけないし、腰やお尻のむっちりした肉が削げたら切ないじゃないか。肌がくすむと心配でたまらないよ」

確かにそうなのかもしれないが、この所言う事が無駄に艶めかしいと感じる。無駄と感じる事自体、自分に生き物としての力が不足している所為かもしれないが……

「ともかく、山のふもとで良い空気を吸って、穏やかな気分で美味しい物を食べてのんびりしないと」

久しぶりの草原は、もう空気が冷え込んでかなり風も冷たい。気配りの細やかな夫は抜かりなくフェリシアに万全の防寒対策をさせていたので、まるで寒くは無かったが……

夫が指笛を吹くとすぐに馬の嘶きが聞こえた。

既に昨年の内に離乳したサーフィだが、まだまだ子供と言う感じがする。冬の厳しい寒さを乗り切る必要もあるので、ピネ村の牧場にサーフィは預けてあるが半ば野生に近い伸び伸びとした暮らしぶりのようだ。

「蛙様の事も有ったし、その後キタイの件で大忙しで、この夏はアスワドを連れて来てやらなかったから、ルウルウのお腹には新しい子供は居ないみたいだ」

「いつその事、アスワドも生まれ故郷のここの牧場に戻しますか？」

「

「確かに、それも一つの手だな。僕は以前より格段にワープする能力が大きくなったから、気になれば会いに来れば良いのだし」

「宮中の厩では厄介者扱いされていますし、気に入った雌馬は居ないようですから」

「暖かくなったら、移すことにしよう。うん。」

その後は二人で手を繋いで昨年の夏に世話になったピネ村の小さな邸に向かった。

「まあまあ、お寒かったでしょう、こちらへどうぞ」

婆やはコートと帽子をあずかり、すぐに蜂蜜を加えたホットミルクを出してくれた。

「レーズン入りのパンケーキが、もうすぐ焼けますよ」

爺やはそう言いながら、暖炉に薪を追加する。体が温まった頃、パンケーキと紅茶が運ばれてきた。

「暖炉の火を眺めながら、暖かいものを食べたり飲んだりするのも実に良いもんだねえ」

「レーズン入りのパンケーキ、おいしいですね」

「このバター風味もたまらないなあ」

「紅茶に、ぴったりです」

その後「お風呂の準備も出来ております」「夕食のできるまでしばらくお休みになったらいかがですか？」などと言う爺やと婆やの言葉につられて、ゆっくり二人で風呂に入り、ベッドで休む事にする。

「今はおとなしく寝ようか」

そう言いながらも、夫の手はいろいろなところを摩ってはいるのだが、煽ろうとしているわけではないのだ。たぶん。触れられて心地よいとフェリシアが感じるような触れ方をしているから。やさしい羽毛が触れるようなキスを数回して、抱き寄せられた。不思議なぐらい気持ちが安らぐ。同じ相手に信じられないほど昂ぶる事も有るのに。自分はニユアンスを間違えずに感じ取っているのだろうか？

「ちゃんと理解していると思うよ」

「そんなに痩せてます？」

「何と言うか消耗した感じ。毎日僕はフェリシアの素肌に触れるから僅かな差異も、非常に気になるだけだね。やはり、銀の龍の魔法は厄介だなあ。歴代の器の中で恐らく最強のフェリシアでも、こんなに体に影響が出てしまっただから。本当に禁術とでも言うべき危険な術だな」

「銀の龍は、自分の術が人体に悪影響を及ぼす事に戸惑っているみたいですけど、対策は知らないようですよ」

「龍たちは、一体どんなところの生き物だったのかな？ オルトに漂着する以前が気になるが」

「龍たち自身に記憶が無いのですもの、探る手立てが無さそうですね」

穏やかにそんな話をしている内に、フェリシアはかなり深く夫の腕の中で眠っていたらしい。食事の準備が出来たと耳元で囁かれて

目覚めた時には、部屋は真っ暗だった。

夕食は派手さは無いが、どれも心のこもった滋味豊かな味で、食べるにほっとする。

鱒をハーブバター焼いたものに、ローストチキン、蕪のシチューにマツシユルームのソテー、ポテトサラダ、と言っかなかに盛りだくさんの献立だったが、例によって爺や婆やも一緒になって、四人で和やかに食事をしたおかげで、すっかりおいしくフェリシアも頂く事ができた。

食事の後は、片づけを当然のように手伝い、それが終わると皆でホットワインを片手に暖炉を囲んで穏やかに語り合った。

「地球というのは、そのように広い大きな世界なのですか」

「ええ。国の数だけでも百九十四かな、大変な数ですよ。オルトでは見たことも無いような厳しい寒さや暑さの場所もあります」

「人間も多いのでしょうか」

「六十八億人を超しているようです」

そんな話を老夫婦としている夫を見て、フェリシアはクリスマスはどのように過ごす事になるのだろうか、ぼんやりと考えていた。

80 (前書き)

時差の有るアメリカと日本を行き来するクリスマスです

「うわあ、素敵なチャペルですね。でも、十字架はどこですか？」

シンプルな円筒形の建物が、浅く掘り込んだ池の中に嵌っているように見える不思議な形のチャペルだ。外から鐘が確認できるが、十字架が見当たらない。天井の明り取りから差し込む光が無機質でモダンな印象の抽象的なオブジェをキラキラと美しく輝かせている。壁面が微妙なカーブでぐにゃと曲がり、それに沿って規則的に外光が入るような仕組みが作られている。そこは外の池に繋がっているようで、水に反射した揺らめく光が、中央のオブジェと上手く調和している。

「この教会は無宗派なんだ。だから特定の宗派を連想させるような十字架は無い」

夫の母校MITに紛れ込んだ二人は、キャンパスツアーの観光客のような振りをして大学のシンボルのグレート・ドームと内部の美しい図書館を覗いた。教会以外も色々見て歩いたが、レンガ・チタン・ガラス・コンクリートその他数種の素材がぐにゃぐにゃと曲げられて出来上がったような不思議な形で「異次元の迷宮」といった佇まいのレイ&マリア・ステイタ・センターを見たときは、本当にびっくりした。

「どこにトイレがあるのか迷っちゃいますね」

「初めてここに来ると確かに面食らうが、でも、各研究部門のスタッフがごく自然に交流しやすいように細やかに配慮されているんだよ」

レイ&マリアと言うのは巨額の寄付をしてこのビルを作るのに貢献したステイタさん御夫妻の名前だそう。フランク・ゲリーと言う有名な建築家が設計し、総工費は二億八千五百万ドルを費やしたとか。コンピュータ関連の最先端の研究をする人たちのためのオフィスらしい。

「さすがに内部の奥に入るのは、やめておくよ。昔の知り合いに出くわす確率が高すぎる」

そう言う夫の顔はひどく残念そうだった。かつての知人が見ても誰か分かりはしないとフェリシアは思ったが、夫自身が精神的に動揺するのかもしれないなかった。

外に出ると、やはり寒い。

「ボストンのあたりって、冷えますねえ」

「そう言うと思った。これから東京に行こう。僕が一番気に入っているホテルに部屋を取ったよ」

次の瞬間、二十三日夕方のボストンの対岸のケンブリッジ市のMITから、二十四日の朝の東京都内の日比谷公園にワープした。部屋を取ったホテルはすぐだ。

「ほら、トイレに行きたいんだらうが？」

「そ、そうですね……」

「ほら急げ」

「ダーリン！」

いくらなんでも、そういう言われ方は無いとは思ったが、夫は何とも思っていないようだ。本当の事を言っただけが悪いんだと言わんばかりのちよつと意地悪げな顔つきを見て、ついため息が出る。だか

らと言って、夫を嫌悪する気持ちが湧く訳でもない。そんなあけすけな話をするのは、自分だけだろうと言う確信が有る所為かもしれない。

全てが綺麗で快適なホテルのトイレから出ると、夫はフロントでのチェックインを済ませていた。

「パスポートの提示、なんて求められたらどうなるんですか？」

「ちゃんと有るよ。アメリカのパスポートとビザ。ただしフェリシアの年齢は二十歳ってことにした。何、ちょっと大人びた印象の写真を送ったのさ」

「ええ？」

「出入国の際のスタンプは空港までワープして、係官に暗示をかけた、本物を押ししてもらってある。航空会社の乗客名簿をあんまりしつこく調べられたりしたらボロが出るが、倫理的に問題な行為は働いてない」

「公文書偽造じゃないですか」

「まあね。でも、必要最低限しか法令違反は犯してないよ。僕の地球での預金口座は、然るべき貴金属商にオルト産の金やプラチナの地金を売った代金で開いたものだ。一番高く売れる時期に、一番高く買ってくれそうな業者をちゃんと選んでね」

それで有名なクレジットカード会社のブラックカードなんかも手にしたと言う事らしい。確かに、一度は亡くなっているマーク・ゴールドが生きていて、フェリシアと結婚した事にするためには、いろいろ「ネット上の情報を目立たないように弄る」必要も有ったようだ。

「私はじゃあ、アメリカ合衆国の国民であるミセス・フェリシア・ゴールドなんですね」

「うん。その方が僕が偽日本人をやるよりボロが出ないと思うんだ」  
「私の英語はお粗末ですけど」  
「英語がへたくそな一世の移民は珍しく無いから、大丈夫」

あつさりへたくそと言われたが、夫の見事な日本語と比べたら、確かにお粗末だ。ちよつとへこんだが、それでもミセス・ゴールドと言う響きは、何だかフェリシアには新鮮に感じられた。

「じゃあ、ミセス・ゴールド、朝食の後、ショッピング、クリスマスディナーって事でどう？」

「ショッピングも良いですけど、チャペルでミサは？ 地下鉄でちよつと行った先にグランマが通っておられたのと同じ宗派の教会もあります」

「行ってみようか。僕としては今年はM.I.Tのチャペルを二人で一緒に見ただけで十分な気もしたけれど」

「ショッピングはホテル内で十分です」

「じゃあ、チャペルから戻ったら必要な物だけここで買うか」

人目の多い場所でのワープは避けて地下鉄を利用して、ちよつと歩いた所にあるそのチャペルは、もつと大きなほかの宗派のものよりは随分小ぶりだったが、それでもイブのミサはいつもより飾り付けが華やいでいるようだった。

「何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです」

夫は入り口に掲げられた聖書の一節を、声を上げて読んだ。

「覆うけれど、消えはしない、そう言う事です」

「だが、しっかり覆われれば、めったに目にしなくて済む」

「そんな受けとめ方は、罪深いかもありませんが、同感です」

「僕らを断罪したり、罰したりするものは、僕ら自身しか居ない。」

僕はそう思っているよ」

「確かに、私たちは余りにも奇妙な存在になりすぎましたね」

「一人ならばその孤独にとても耐えられないだろうが、フェリシアが共に居れば僕は長い長い時間も過ごして行けそうな気がしている」

二人は自由参加のミサで、賛美歌を歌い、神の祝福についての講話を聞いた。

「グランマを思い出したよ」

「今回、お墓参りいたしませんでしたけれど、良かったのですか？」

「じゃあ、ディナーを食べてからでいいや。一緒に墓参りしてくれる？」

「はい、是非、御一緒に」

買い物をして、少し休んでからディナーを洒落たフレンチレストランで楽しんだ。

「今、日本時間二十四日の二十三時か。あちらは同じ日の朝の九時だな、じゃあ、行くか」

部屋にはホテル内の花屋に依頼しておいた白い花の花輪が届いていた。

「ほら、ここだよ」

アメリカ東部の晴れ上がった冬の空は美しいが、空気は刺すように冷たい。

「初めまして、フェリシアです」

フェリシアは夫の祖母に語りかけたが、英語じゃないと駄目なのかな、などと少し思った。

夫は言葉を英語に切り替えて、墓石の下に眠る祖母に今は自分が幸せである事、妻とは愛し合っている事を伝えていた。そして、真っ白い花輪を供えると一言こう言った。

┌  
M  
e  
r  
r  
y  
C  
h  
r  
i  
s  
t  
m  
a  
s  
!  
G  
r  
a  
n  
d  
m  
a  
└

## 81 (前書き)

不機嫌な夫が立ち直る秘策とは？

「ダーリン、そのう」

東京のホテルの部屋に戻って、二人はベッドに入った。夫の微妙に不機嫌な気分はずっと続いている。

フェリシアは言いかけた言葉を飲み込んだ。でもあからさまに意識を読み取られないようにブロックするのも感じが良くない。特殊な力を持つ者同士だからこそその微妙な気遣いが必要であったりする。

「ああ、確かに僕は苛立っていたかも知れない。自分がかつてはその構成メンバーであったはずの、最先端の技術や研究を行う専門家集団から、完全に無縁な存在に成り果ててしまったと自覚するのは、確かに辛かったんだ」

「では、こうして地球に来たのもストレスになりましたね」

「少なくとも、フェリシアと一緒に墓参りが出来たのは良かった。ストレスがあ。それはそうなのかもしれないが、あれこれ気になつて仕方が無いのも事実だ……それに、研究者としての旬の時期は、地球で活動していたならとっくの昔に過ぎていたはずだから、気に病むのも落ち着いて考えれば馬鹿げてる……」

やはりフェリシアが思った通り、出身大学を訪れた事が引き金になって、夫の中に苛立つ気分が湧き上がり、その気分を反映したのが軽い意地悪だったようだ。大した意地悪ではなかったが、夫にしては珍しい八つ当たりだ。自分がそうした夫のネガティブな感情を受け止められると、夫なりに感じての事だとは思うが、表現がひねくれている。まあ、そうしたねじれ加減もフェリシアは嫌いではないのだが……

「なまじつか不老不死で、ワープなんて出来ちゃうものですから、普通なら知りえないような様々な事柄の『その後』と言うか『後日談』と言うか、そんな事まで知る事になるのですものね」

「さすがに、僕の研究成果が全部陳腐化して無意味になった、ってわけじゃ無さそうで、それなりに今も役には立っているみたいなんだけど、何をするにもオルトのテクノロジーのレベルは地球の二、三百年分は遅れてるからなあ。緩やかでノンキな社会体制にも馴染んだし、おかしな神様の体質も好い加減慣れたはずなんだが……色々な意味で置いてきぼりを食った感じが、嫌だ」

「では、もう地球に来るのはおやめになるの？」

「そうもいかないだろう？ 僕らはいずれ子供を地球で作る事になるみたいだし」

何を言っても、しょうがないのかもしれない。知的好奇心の塊のような夫にとつて、学問や技術の最先端の集団から完全に切り離された今の状態は、やはり辛いのだろう。

「ねえ、ダーリン」

「ん？」

「ダーリンが地球で何かビジネスをなさって、MITやその他の大企業や研究機関と連携する、なんて事は無理でしょうか？ 更にはその成果を、オルトのためにも役立てるとか……」

「フェリシア！」

「え？」

「そうしよう。それがいいな、実に良い考えじゃないか」

「アメリカや日本のような国ではなく、もっと条件の緩いタックス・ヘイブンなんて言われるような国でなら、会社も設立しやすいでしょうが」

「どうやら、大いにやる気になったようだ。良かった、とフェリシ

アは思った。何より、見る見るうちに夫の表情が晴れやかになって、本当に良かった。

「フェリシア、ありがとう」

「良かった。確かに、研究者の立場に戻るのは無理でしょうが、でも、ダーリンはこの地球でも他人の心が読める状態なんですから、フル活用なさらないと」

「そうだな、変な詐欺に引っかかったり、不渡り手形を掴まされたりなんて、無いわけだよな」

「ええ」

夫はあれこれ考え始めた。おかげで随分立ち直ったようだ。

「タックス・ヘイブンで会社を設立すると、確かに多少は節税できそうなものだが、アメリカ合衆国民の場合、名義が僕なら、僕に属する全ての収入が海外で発生したものであっても課税対象なんだ。それにあんまりにも信用度の低い国で会社を作ると、やはり色眼鏡で見られるだろうな。少なくともまともな企業だとは思われない」

「じゃあ、アメリカの何処かの州で？」

「うん。日本人も多くて、フェリシアも便利だろうからハワイにしようか。日本的な文化の要素を企業活動にも取り入れやすいしね」

「私たちは、一応不老不死みたいですし、時間はたっぷりあります。あせらず慌てず、楽しみながらなさったらいいかがでしょうか？」

「フフフ、そうだねえ。慌てちゃ、いけないな。オルトの現実にも沿ったものじゃないと」

「あまり、オルトの天然資源を持ち出さない方法を考えた方が良さそうですね」

今までマークはオルトの鉱物資源を少し持ち出して地球での活動資金を作ったが、余りにその量が増えるとオルトのような小さな世

界では、思いのほか影響が大きくなるかもしれない。フェリシアはその点が心配だった。

「うん。当然、株でもやって金を増やすよ。人の思考が読めてしまっつてフェアじゃないよね。何と云うか年中インサイダー取引状態になっちゃうわけで」

「それは、そうなりますけれど、それをダーリンが良くおっしゃる『最大多数の最大幸福』の為に役立てられたら宜しいのですわ」

「ああ、そうだな」

夫は完全にウジウジした気分から解き放たれ、ようやく休暇を楽しむ気分になったようだ。

「ダーリン、せっかくですから、乾杯でもしますか？」

「フェリシアは未成年じゃないか」

「あら、ダーリンがミス・フェリシア・ゴールドは二十歳だって仰ったじゃないですか」

「うふふ、確かにねえ。じゃあ、ルームサービスでシャンパンでも頼もう」

金の龍・銀の龍を宿らせたものは酒が好きで強いと言う。それはマークもフェリシアも例外では無い。内線で注文すると、美しく演出されたワゴンで冷えたシャンパンがすぐに部屋に届く。グラスを掲げ、二人は乾杯をした。

「改めて、Merry Christmas！」

「新しい年が実り多いものになりますように。Merry Christmas！」

ホテルの窓から見える東京の夜景を飾るイルミネーションは、ク

リスマスらしい彩りで華やいでいた。

「もうすぐ日付が変わるね。でも、アメリカはまだ、二十四日だ。理屈は十分にわかつている筈なのに、何だか不思議な気がするな」

「普通は飛行機に何時間も乗らなくちゃいけないんですものね」

「フェリシアは、幾度もワープして疲れたんじゃないか？」

「ダーリンのパワーと互いに増幅しあっている感じで、大丈夫みたいです」

語り合いながら、たちまちシャンパンのボトルを空にして、二人はごく自然に体を寄り添わせた。

「おいで、フェリシア」

夫の膝の上にフェリシアは乗ると、しばらくは無言で互いにキスを交わした。

「僕の番は君つがいしか居ない。有り得ない。今日はそれを改めて思い知ったよ」

「私はいつもそう思っています。今日は互いの絆が深まった特別な日、と言う事になるかもしれないね」

「かもしれない……ではなく、特別な日、特別な夜にする。良いだろう？」

夫の体は既に熱を帯びていた。そしてその熱はフェリシアの官能に火をつけたのだった。

「クシャダスの状況だけど、少しづつ良くはなっているようだなあ」  
「子供達が小学校に通う比率が、昨年の倍になったとか、と言っても他所の半分らしいですが」

クリスマスを終えて戻ると、また更に忙しい毎日が待っていた。年末年始の儀式の準備は今やほぼ全てがフェリシアが主になって取り仕切っており、マークはクシャダスの浄化問題にかかりきりであった。

マークが長らく摂政を務めたキタイ王国はオルトでは義務教育を取り入れた歴史が最も長く、識字率も八割を超える。概ね帝国全体の就学率は七割前後であるのに対して、キタイ王国は九割五分を超える。だが、唯一ブルサの巨大な貧民窟クシャダス地域の就学率だけが現在でも五割に満たない。それでも、王宮と『開かずの塔』の龍のレリーフに込められた気を放つ以前の二倍にはなったのだ。

「かつての絶望的な状況を思えば、就学率五割でも大変な前進だ」  
「まだ、何か有るのかもしれませんね、クシャダスには」  
「僕もそう思うが、『サミア』も『バスイール』も泉から出現していないし、僕らの子供も居ない今、できる事は限られている。そうは思わないか？ 僕が摂政時代から目をかけて対策の責任者としてきたモーハンとファーガスの二人組みも、手を尽くしてはいるんだがな……」

モーハンとファーガスのコンビは俗に『クシャダスの種』などと呼ばれるクシャダス地区の出身者で、ストリートチルドレンと云うかそうした、親に棄てられてしまった子供であったのを、まだ十代

だったマークが邸に引き取り、教育を施して正式な王国の行政官に採用した者達だった。今では「皇帝陛下子飼いの切れ者」として、キタイは無論、この帝国全体でも一目置かれた存在となっているが、その彼らでもクシャダス住民の生活改善は難しかったのだ。

「今ではダーリンのお力で、クシャダスに根を張った主な犯罪組織は壊滅状態なのではないのですか？」

「連中は始末が悪い。こちらをつぶせば、あちらで商売を始めるといった具合です」

今ではどうやら、禁制の麻薬や毒物の工場や売春組織の本部は帝国の外に移ったらしい。

従来しつこく続いてきたオルト初の交番、まさに日本の交番をそのまま真似た設備で武装した役人が常駐している設備だが、その交番に対する嫌がらせや妨害工作がこの所、止んだらしい。他に生活改善プランの一環としてオルトでは最も早く公衆便所を設け、衛生的な水飲み場も複数個所作ってあったが、これまでは「お上の面子をかけて」日に三度清掃しても、そのたびにわざと汚物やゴミを撒き散らかされていた。

「安全で衛生的な暮らしが、犯罪組織の弱体化に有効だと考えての事だったんだが、キリの無いイタチごっこが続いてね、大変だった」  
それが、あの二つのレリーフの気を放って以降、事態が驚くほど好転してきているらしい。

「非合法的な経済活動を取り仕切っている連中を炙り出して、一網打尽とは行かないものでしょうか？」

「僕の手だけでは無理だったみたいだが、フェリシアの力も大きくなった今、今までに無い有効な対策が打てそうだ」

「穢れて罪深い」とされるクシャダスに生まれた者達は奇妙なほどに容姿が整った者が多い。龍の力を宿す者は例外無く容姿が整うとされるが、やはりクシャダスに龍の力が籠っている所為だろう。古くからクシャダスは娼婦や男娼向けの人材の宝庫としても知られている。外の世界で成功したクシャダス出身者はそうした「罪深い」業界で生きるものが大半であった。

クシャダス出身の娼婦が富豪や貴族・王族に身柄を買い取られて、落とし胤が生まれる事も珍しくない。

事情通の間ではいわば公然の秘密だが、マークの初恋の人でエスコバル公爵の位をついだポールを生母・ハリカの両親は、共にクシャダス出身者であった。またハリカ自身が引退していたとは言え、元娼婦であった。

こうした場合、子供は父親が高貴な身分であっても「非道德的」とか「破廉恥」とか「穢れている」とみなされて、貴族社会には受け入れられず、やはり『クシャダスの種』とみなされて肩身の狭い生き方を強いられるのが普通であった。そのため、嫡子としてポールを扱うマークのやり方を悪し様という連中は、今でも実はかなり多い。

「若いエスコバル公爵は最も高貴な『クシャダスの種』だ」などと言う陰口は、こうした事情によるものだ。

ハリカが亡くなって十七年かそこらはたつのに、いまだにこのような事を言われ続けるのは、ひどい話だとフェリシアは思う。フェリシアですら義憤を感じるのだ。夫はどのくらい不快で辛いだろう？

「おや、焼餅は焼かないの？」

フェリシアがハリカの事を考えても平静で理性的なので、夫は意外に思ったようだ。

「ええ。私が生まれる以前に亡くなってしまった方だから……と言  
うより、今のダーリンを作って下さった方の間違いなくお一人なの  
でしょうから、感謝しなくては、などと思うのです」

「フェリシア！ 君って、本当に大人だな。近頃は完全に龍の力を  
抑えきっているせいかな、君って言う人本来の姿が前面に出てきてい  
る気がする。僕は、その、君って言う人が好きでたまらない。多分、  
そう言う事なんだと思うよ」

夫の手の動き方が変化した。いつの頃からかフェリシアは夫が手  
の動きに込めるニュアンスの違いを、間違えずに読み取れるように  
なっただと思う。

「できる事は限られているから、気を馴染ませよう……なんて今は  
言いたくない。たとえ結果が同じような物であつたとしても、僕の中  
では大きく違う。愛してるんだ君を。君が欲しい、フェリシア」

夫の愛撫によって体が熱を帯びるのを感じながら、フェリシア自  
身も夫の体に自分から身を寄せて、こんな言葉を夫の耳元で囁いた。

「龍と言う生き物は寝ているとき以外は交尾ばかりしているそうだ  
……っていう文章を思い出しました。私は年中ダーリンに抱いて欲  
しい、欲しがって欲しい、愛して欲しいと思っっていますけれど……  
龍の所為で交尾ばかりしたがる体質になつたにしまつて……私に  
は私なりの想いが有ります。ダーリンを欲しいと想うのは、自分が  
龍の器だからではなく、私と言う人間自体がダーリンと本当に深い  
意味で一体になりたい、そう願う所為だ信じてますから」

「確かに……僕もフェリシアと交尾する事ばかり考えている気が  
する。やる事なす事全部を全部そっちに持って行きたがる自分に、  
時にはあきれろんだが、特殊体質の所為じゃないよ。今、君が欲し  
いて想う気持ちは。違ふと思つてる。僕自身が、君と深く一体化

したい、そんな願望を強く持っている所為だと思う。ハハハ、硬い言い回しだな、つまり、僕は君を心から愛していて、君と愛し合いたい。そう言う事なんだ」

夫の声は、明るかった。孤独ではない。自分には番つがいが居る。その事がどれだけ幸せな事か。夫も自分も龍の器でありながら、決して龍とは一体化しない人間としての自我を強く自覚している。その事が逆に龍たちが穏やかに過ごせる環境をもたらしても居るようだ…  
…そんな風にフェリシアは感じる。

「僕も、その感じ方は、正しいのではないかと思うよ。僕らは歴代の龍の器と違って、龍と言う存在自体を客観的に見つめようとするからね」

「ひねくれ者で曲者同士ですからね。考えようによっては、でも、それで良いのですよね」

「僕達が互いに愛し合ってさえ居ればね」

「私は、大丈夫ですよ。本当にダーリンを愛してますから」

「僕も本当に、フェリシアを愛してるよ」

じゃあ、証明して見せてください……そういつフェリシアの声は、自分でもおかしく感じるぐらい上ずっていて、呼吸が荒い。「ああ、もうイヤと言うほど証明してあげるから覚悟しなさい」と言う夫の声は、しわがれていて、体の温度は明らかにいつもより高い。

「明日が休みでよかった」

「明日一日中、寝床で過ごす覚悟は出来ているかい？ フェリシア」

どうやら自分は、予想以上に夫を煽ってしまったようだと思いいながら、それでも構わないと思っているフェリシアであった。

### 83 (前書き)

通常の人間のレベルを超えてしまったかもしれない二人の愛し合い  
方

「どう？ 僕としてはもうちょっと証明に励むのに、やぶさかではないよ」

どう言うわけか夫はこの言葉を、わざわざ日本語で言う。

一瞬否定しているように聞こえて、実はすっかり肯定しているいささかもって回った言い方だ。

「まんざらでもないと思っていらっしゃるの？」

夫はニヤリとした笑いを口元に浮かべて、すっかり汗みずくになつてしまったフェリシアの体を抱きすくめた。それから、いくつものキスを殊更音を立てて体中に落とす。それから左右の乳房をいささか荒っぽい感じで根元から強く握りこんで、乳首を強めに捺じりあげた。

「ねえ、悪くないだろう？ こういうのも」

正直言つて、少し痛い。だが、痛いだけではないのも確かだ。大きくて器用に動く手が伝える夫の高ぶり方が、まだまだ自分を欲しがって居る事を伝えて来るからだろうか、自分の中にまた、衝動が沸き起こってくるのを感じる。でも、それをいきなり正直には認めたくなくて、少し拗ねる。わざとらしい計算ではなくて、自然なものだ。

「育ち方が不足だと感じていらつしやるのでしょうか？ ダーリンの理想サイズにはまだまだ、到達できません」

「ナニ、僕がこうやって気を込めて願いを込めて育てるんだ。必ず

目標に到達するさ。この半年余りでこれまでに無いスピードで大きくなって来ているよ。ほら、こうやって寄せるとちゃんと谷間ができる」

後ろから抱え上げて、わざわざ鏡の前でフェリシアの両方の乳房に手を回し、ギュッと寄せて見せるのだ。

鏡の中に映る裸の体を絡ませた夫と自分の姿は、見慣れたはずなのに、見る度にその淫らさと放恣な有様は酷くなっている。いや、強化されていると言っべきなのかも知れない。

「実に、将来有望だ」

「現状には、まだまだ御不満ですわよね」

フェリシアはちょっと拗ねた。

「僕は現状でも十分満足だが、将来は更に素晴らしくなるだろうと言っているのだ。そうひねくれた事を言ってみせなくたって良いじゃないか。今楽しめる事を十二分に楽しもうと言っているだけだよ」

「一日中、寝床で過ごすおつもりですか？」

「今日しかそんな事はしばらく出来そうもないだろう？ 働き者の奥様」

確かにそれはその通りだが、素直に同意も出来かねる。

「年末年始の儀式の手配で面倒な部分は全部、手順良く準備も済んでいるじゃないか。ん？」

「でも、最後の仕上げが……」

「クシャダスの件はこれ以上急いでゴリゴリやっても、急には成果が上がらそうもない。長期戦だ。儀式の仕上げは僕自身がやっても、全然かまわないだろう？」

「それは……確かに……皇帝陛下の名のもとに行われる儀式ですもの……」

「だから明日一日ぐらい、更にフェリシアが休んでも大丈夫って事だ」

「……ダーリン」

「ねえ、今日一日細かい事は全部忘れて、付き合つてよ」

「もう。最初から、素直にそうおっしゃれば宜しいのに」

「ちょっとひねくれていても、僕が好きなんですよ？」

「ええ。でも、なんだか悔しいわ」

二人が気を交わらせ愛を交わしあうと、以前にもまして大量の薄桃色の雲が発生し、辺りは芳香で満ちている。

「この雲も香りも……国中に知らせているみたいで、恥ずかしくてイヤ」

「フッフ、今さら良いじゃないか。僕ら、神様みたいなもんなんだし」

「地球では、こんな事は起りませんでしたね。その方が落ち着けます」

「ああ、だから、地球の方がフェリシアは具合が良い感じだったのか」

「まあ、え？ そうだったのですか」

「うん、フェリシア本人はそう言う自覚は無いの？」

自覚など無かったので、夫にそんな事を言われて少しあわてた。

「何、あわてているの？ 僕はさんざん観察して楽しんだ後なのに、今更じゃないか」

フェリシアが真っ赤になったのを見て、夫は更に楽しそうに笑った。

「酷い、ひどいわ、ダーリン」

「僕に仕返ししたかったらしたらいいさ。フェリシアにひっかかれても、噛みつかれても、構わない」

ふとフェリシアの脳裏に、金銀の龍が体をきつく絡ませ合いながら、互いに互いを軽く噛み合い、更に昂ぶってもっと激しく体を絡ませるヴィジョンが浮かんだ。

「愛咬あいこう、Love Bite、噛む事が愛情表現となりうるのは、人間だって同様だ」

「どこを噛むのでしょうか？」

「唇を噛む事から始まって、相手の感度の良さそうな所ならどこだって構わないのさ……とは言っても、僕自身の一番感度の高い所に歯が当たると、怖いだろうな」

「試したいのですか？」

「いや、さすがに怖い。仕返しじゃないのなら、別の場所を優しく噛むだけで勘弁して欲しい」

「まあ、ダーリンが怖いなんて」

フェリシアは苦笑してしまった。

「笑ったな、覚えておいで」

夫はフェリシアを散々昂ぶらせてから、百合の花のような香りが最も強いその箇所を指で大きくくつろげた。

「実にきれいだ。幾度見ても見飽きない」

褒められても、その淫らな有様には、やはりまだ馴れる事が出来ない。燃え上がるような羞恥心が、秘めていた肉の疼きを呼び覚ます。夫は秘められた場所を明るい日の光が差し込むベッドの上で剥き出しにしてから、そこに口を押し付けると、全てを一気に銜え込んだ。柔らかな秘めた肉に軽く歯を当てながら、熱い舌で舐り回

す。粘着質の隠微な水音がフェリシアの耳に響く。

「う、むう……っ」

フェリシアは腰を震わせ、つま先を宙に舞わせた。夫は更に容赦なく、最も敏感な小さな肉芽を吸い込み舌で弄び続けた。そして更に軽く歯を当てながら、薄紫の菊にも似たもう一つの秘められた部分に指を埋め、ゆっくり抽送を開始した。

「あつ、そんな、イヤイヤヤ」

「凄じじゃないか、フェリシア」

夫は自らの目論見が上手く行った、と言ったニュアンスの満足そうな声で、そんな意地の悪い事を言う。幾度も絶叫し、汗を噴出し、全ての箍が緩んでしまったかのように体中の力が抜け、すすり泣くばかりになったフェリシアに、夫は更に追い討ちをかけるような事を言う。

「クククツ、僕の顔に色々引っかけてくれたな。さすがにこれは洗わないとなあ」

風呂でも散々だったが、それでもフェリシアは夫の一番感度の高い所に軽く歯を当てて、仕返した。だがそれが、夫に新たな喜びをもたらしてしまったので、結局仕返しにはならなかったのだが……

「宣言通り今日は一日、食事と風呂以外はズーツとベッドで愛し合っただな」

三食とも寝室に運び込ませて、寸暇を惜しんで抱き合っただの。夫も自分も並みの人間の情欲の強さを遥かに超えてしまったようで、

こうでもしないと、十分満たされたと言う感じには最早ならぬのかもしれない。

「見た目は可愛いお嬢ちゃんなのに、やっぱりフェリシアは強い龍の器だ」

そう言う夫こそ、とんでもない絶倫魔王だとフェリシアは思った。実際、明日は立って歩けないのは、確実だった。それでも、それを何処かで満足に思っている自分自身に、フェリシアは驚いていた。

翌朝、夫はさっさと自分だけ身支度し、久しぶりにリユートで A Red, Red Rose を弾いた。

「夕方、ドレスが届くから、僕も試着に立ち会おうよ」

「立って歩けるかしら」

「日が暮れるまで、たっぷりしっかり休んでね。そうすれば大丈夫さ。野暮用は僕が全部済ませておくよ」

確かに体が鉛のように重い。夫の介添えでどうにか朝食用のリゾットを食べ終わると、また深く眠った。

「ドレスが届いたから、起きて」

そう夫に言われて起きた時は、もう日は完全に暮れていた。フェリシアは体を清めてドレスを試着した。

「淡いお色は愛らしくて良くお似合いですでしたが、このドレスは大層大人びて、艶やかな雰囲気です」

「これで外国のお客様方も皇后陛下のお美しさに、びっくりなさる事、間違いないですね」

その場に詰めていた女官やドレス屋は、皆感嘆の声を上げた。

「フェリシアの瞳と同じ色を選んだんだが、赤いバラの妖精みたいにも見える。良く似合うな」

夫の満足げな視線と言葉が、やはり一番嬉しいと感じるフェリシアだった。

「きょうじ……きばりや……」

「……お父ちゃん、お父ちゃん？」

「おやじ……」

「……御臨終です」

ああ、お父ちゃん、ホンマにしんどかったやろう？ もっとはよ  
うに気いついてたら、違ったのやろうな……

一郎……京子の夫の伊丹一郎が亡くなった時の様子らしい。

三人の子供とそれぞれの配偶者が一郎の枕辺に集まっている。死  
因は肺ガンであったようだが、京子の魂が地球を離れてから以降の  
事で、細かな事情もその時の状態も、今のフェリシアとしての自分  
が何一つ知るはずが無いのに、この夢のリアルさはどうした事だろ  
うか？

なぜ一郎は「きばりや」などと亡くなった京子に向かって呼びか  
けたのか？ 一郎は京子の魂の状況について、何事か知っていたの  
だろうか？

なぜ、今になってこのような夢を見るのだろうか？

亡くなった一郎の魂は、どうなったのだろうか？

「なぜ……」

ホンマにしんどかったやろう？ と言う問いかけは紛れも無い自  
分のものだ。

「なぜ……」

「フェリシア、フェリシア、大丈夫かい？ フェリシア」

大きな手が労わる様に背中を撫でる。自分を抱きしめる慣れ親しんだ頼りがいの有る腕。額にまぶたに軽いキスが振って来た。涙を優しく拭われる。涙？ 自分は泣いていたのか……

ようやくフェリシアは眼を開けた。眼前には気遣わしげに見つめる夫の緑の瞳。

「ダーリン……夢を見ました……伊丹一郎の臨終の夢です。なぜなのか、全く心当たりも無いのですが」

「京子さんに呼びかけていたね。『きばりや』と。何事か、感じ取っていたようだな」

マークは、眉をひそめた。

フェリシアが京子であった頃の記憶を保持しているのは当然なのだが、一郎が亡くなった時点で京子の魂は既にオルトに居て、伊丹一郎の肺ガンについては知りうる状況に無かった。伊丹杏の肉体に転生したての頃は、一郎が亡くなっている事が辛うじてわかる程度だった。一郎の死因についてフェリシアが正確に知ったのは、マークと二人で日本にワープして以降の事だ。

「ねえ、フェリシア、女神様の系統の力も活性化した所為じゃないのか？ 時間を行き来できるだろう？」

確かにその能力の全貌は不明だが、或る程度異なる時間の中を行き来できる力はフェリシアにも有るらしい。

「でも、なぜ伊丹一郎の臨終の瞬間なのでしょう？」

「……京子さんとしては、残念であったのではないか？ あるいは自分が居れば、状況を変える事が出来たと思っただのではないか？ 長年連れ添い三人の子供を為した仲だ。当然、その絆は強いもので

あつたはずだ」

「でも、でも、今の私は……」

「僕の妻だというのだね。いや、勘違いしないでおくれ。確かにかつての僕なら一郎さんに焼餅を焼いたかもしれない。だが、今の僕はそうした段階は完全に乗り越えた。ほら、君がハリカのことに関して言ってくれたら、今の僕を作り上げてくれた一人だと。その言葉は君の心からのものだった。だから僕は本当に君に惚れ直した。そして絆が以前にも増して深まったと感じた。だからこそ、そんな夢も見ることが出来たのではないか？」

そのように問いかける夫の顔には、真摯な思いがあふれていた。今の自分にとって、やはり番つがいと呼べる唯一絶対の存在はこの人なのだという、強い感情が胸の底から湧いて来る。

「ダーリンと私の絆がもはや揺らがないと確信できたから……これまで意識の底に沈めてはいたものの気になっていた事を、今になって素直に気にすることが出来た……」

「恐らくそのような所ではないか？ 年明け早々、僕らの絆の新しい段階、あるいは進むべき方向性が見えてきたような気がする」

「一郎さんの魂が、今はどうなったのか、無性に気になったのです」  
「僕はハリカやイゼルの魂について気にした事は無かったな。オルトの何処かに転生したんだろうと言う程度でしかない。僕は結構薄情者だったのかもな。自覚していなかったが」

夫は何処か少し、傷ついたような表情を瞬間だけ浮かべた。  
「気にする必要性が無かった……だけの事ではないでしょうか？」

夫はフェリシアの顔を静かに見つめていた。そしてフェリシアの言葉を噛み締めて考える内に、自分なりに結論が出たらしい。フワツとした優しい笑みを口元に浮かべると、こう言った。

「考えられることは一つじゃないか？」

「どのようなことでしょうか？」

「一郎さんの魂が、これからの僕たちに、何らかの形で関わってくる可能性が有るって事じゃなからうか？」

「転生しているとしたら、地球ですよな」

「そうだな。君の夢越しに感じ取れた伊丹一郎と言う人の魂は、真面目で正直でひたむきな清らかな強い波動を持っていた。京子さんは確かに、良い夫を持っていたのだ。僕はそれをきちんと受け入れる事ができた。そして、彼に素直に感謝できるよ。しかも、彼は漠然とはあるが、自分の妻の魂が何事か大変な事態に置かれていると感じていたみたいだ。これは京子さんとの絆の力でもあるだろうが、伊丹一郎と言う人物の魂の潜在能力の高さを示しても居るのだからと思う」

ふつとフェリシアの脳裏に伊丹一郎が眠っているはずの墓の情景が浮かぶ。

「年明けの儀式が終わったなら、一度伊丹一郎さんの墓にお参りしてこよう」

「え？二人ですか？」

「ああ。僕の考えが正しければ、一郎さんの魂はこれからの僕たちにとって何事か重要な関わりが出来て来る」

「転生してしまっているのならば、墓に行っても会えないでしょう？」

「だが、過去の思念なり何なり、行って見なくちゃ掴めないものは有る筈だ」

その後は、「半ば爺さんどもに親孝行でもするよように」明日開かれる新年恒例の大宴会の話題になった。

「家名の誇りだけが唯一の存在理由に成り果てている老臣連中を手

懐ける」為に数年前からマークが始めた、古い大貴族達の家の創生期のエピソード紹介は、若い連中にも「帝国の歴史がわかりやすく理解できる」と評判だ。

「自ら臣下を楽しませるために世話を焼く皇帝に皇后なんて、僕ら以前には存在しなかつただろうよ」

「昔の宴会はただひたすら、ご馳走の皿数とお酒の量で格の高さを誇るだけだったようですね」

「古記録の料理って、やたら肉と果物が並ぶだけで考えただけで胸焼けしそうだ。みんなに紹介する新メニューは何にしたの？」

「パエリアです。まだまだ米に対する認識が貴族、特に高齢の貴族達には不十分であるように思います」

翌日の大宴会は大盛況だった。

マークの「講話」と言うか大貴族の家々の歴史を紹介する話も受けたし、赤いドレスを纏ったフェリシアの美しさは皆を陶然とさせ、老臣どもにとってなじみの薄い米の美味しさも十分にアピールできた。

「いやあ陛下、皇后陛下の美しさはまた一段と凄みを増されましたなあ。私などは、あのように魅力的な方の傍におりますと身が持ちませんぞ」

ただ家柄が高いのみで何の功績も無い好色な老貴族が酒のせいもあって、いささか下卑たニュアンスでそのような事を言った。いつもなら彼に対しては「さつさと隠居しろ」と内心悪態をつくだけのマークであったが、フェリシアの美しさが凄みを増したと言うのは確かにその通りだと、その点は素直に同意した。そして傍らに立てるのは自分以外有り得ない、とも思ったのだった。

## 85 (前書き)

かつての夫の転生が、現在の自分たちとどう関連してゆくのか？

「お線香はこれで良いかな」

「ええ、良いと思います」

いわば元妻の立場であるフェリシアよりも赤の他人であるマークの方が色々気にしているのは、ある種奇妙と言えば言えるかもしれない。阪神間を望む小高い山を造成して作った公園墓地の一角に伊丹一郎の墓は有った。暮れも正月も三人の子供らは、それぞれに気にかけてこの墓に来ていたようだ。

「伊丹京子」は飛空賢妙大姉、「伊丹一郎」は憧空賢良居士、とそれぞれ戒名が刻まれている。京子の戒名は一郎の意見が大きく取り入れられて、菩提寺の住職が付けたいらしい。また、一郎の戒名は京子の物と対になる事を意識して付けられたようだ。これは子供達、特に長男の意見らしい。仲むつまじい夫婦であった記憶を止めて置きたいと言う子供達の願望が込められている。

京子の方の骨壺には航空機の墜落現場から回収した焼け焦げた腕時計と結婚指輪が入っているようだ。生前の一郎がその事をひどく気に病んで、自分を責めている様子が脳裏に浮かぶ。この墓の前で幾度も「すまんなあ」と詫びる必要もないのに、詫びていたのだ。京子自身は魂が去った肉体が酷く破損しても何の苦痛も無かったわけだが、遺族にとっては受け入れがたく辛い事であったのだろう。

「そもそもが伊丹京子のために買った墓だったのですね」

事故で急死した京子がこの辺りの景色を好んでいた事がきっかけとなって、一郎はこの墓地を購入したようだ。

「妻の遺体を何も捜し出せなかった、その事で随分自分を責めていたようだな」

フェリシアとマークの絆が強くなってからは二人とも、こうした墓石などの残されたもの言わぬ物体から、その場所の過去の情景を瞬時に読み取れるようになっていた。癌を発症した伊丹一郎が幾度かここに来て、京子の名を呼びながら「すまんなあ」「痛かったやろ?」「熱かったやろ?」などと呟き、時には涙をこぼしている様子をまざまざと感じ取るのは、非常にフェリシアには辛かった。

なんも、悪いことなんかないねんで。飛行機が落ちたのはお父ちゃんのせいでは無いのやし。あのな、私は生まれ変わってから、元気にやってるわ。めっちゃ幸せなんやで。お父ちゃんはどうだい? もう、何処かに生まれかわったん? 優しい親御さんのいてるところに生まれ変わって、可愛がってもらって、また人生やり直してや……

「お父ちゃんも、きばりや」

ふと気がつくと、最後の言葉だけは口をついて音声を伴って、外界に吐き出されていた。明らかにフェリシアとしてではなく、京子としての言葉である。

その瞬間、周囲の空気が大きく揺らいだ。そして、出産に立ち合った若い夫が、涙を流して妻に感謝している場面が一瞬見えた。何処かで見覚えの有る顔のようにも思うが……だが……フェリシアがそう考え始めた瞬間にヴィジョンは掻き消えた。

「一郎さんは無事に良い家族の元に転生できたようだな」

「ええ。生まれてきた事を非常に喜ばれていたようですね」

「良かったな」

フェリシアの口から出にくい言葉を口にした夫の思いやりが、とても嬉しかった。

「ここではキスもしにくいから、行こうか」

少し冗談めかした言い方では有ったが、やはりもう一郎が転生したと分かってても、確かに「伊丹夫妻」の墓石の前では多少なりとも気詰まりで有るのも事実なのだ。今戻れば、ちょうどオルテスの宮殿のティータイムになる。

「戻って、先ほど買ったコーヒーを淹れましょう」

「ああ、それが良いな」

ここに来る前に花と線香・ろうそくを用意したのだが、ついでにマークの好きなラテンアメリカ産コーヒーとアフリカ産コーヒーのブレンドしたものをコーヒーショップで購入したのだ。フェリシアはそれを丁寧にドリップしようと思った。

阪神間の一月の気温と、このオルテスの気温を比べると、微妙にオルテスの方が暖かい。それでも外気で冷えた体には暖かい飲み物と暖炉の火は嬉しいものだ。

オルトで広く飲まれるようになった「タンポポコーヒー」ではなく、地球から本物のコーヒーを手に入れて来た時は、大抵フェリシア自身がマークの為にドリップする。女官が淹れると、芳香がどうも十分に引き出せないからだ。無論コーヒー好きのマークであるから、自分で淹れてもフェリシア同様上手く行く。だが、フェリシアは自分が夫の為に淹れる事にこだわっているのだ。

「うん、実に良い香りだ。ナッツたっぷりのこのケーキがぴったりじゃないか。このブレンドはコーヒーショップで立ち飲みするのも

結構好きなんだが、こうやって家でくつろいで飲むのは格別だな」

「ダーリンはフェアトレードに思い入れがあるんですか？」

マークはフェアトレード認証にかなりこだわっているようにフェリシアには思われた。

「本当にフェアに発展途上国の生産者の為になっているのかどうかって、批判も有るみたいだが、アイデア自体は悪くないと思うよ。

たとえ途中で不正に資金が多少流れているにしても、今までより現地の人たちも生活のレベルが上がったなら、悪くは無いと思う。まあ、このコーヒーは純粋に味が好きなんだけどね」

「確かに、中間の搾取や不正がなければ、よいアイデアですよな」

「そうだろうか？」

「ダーリンは市場を調査されて、新たなニーズを掘り起こされて、各地の貧しかった村や町を活性化されましたね」

「フェリシアにもいろいろ動いてもらったけどな。おかげで、僕は僕の理想に近い形で地球で言う所のフェアトレードに近い形で、貧しい地域の経済を活性化する事にかなり成功した。あくまで、かなり、だけどね。まあ、僕の掲げた理念を理解し、実現したいと考える若い行政官や、意欲的な生産者が育ってきている」

「ダーリンのモットーは『最大多数の最大幸福』ですね。そうそう、小学校の教育理念を『一人はみんなのために、みんなは一人のために』になさったのは、アレクサンドル・デュマの『三銃士』が大好きだから？」

「ああ、そう言えば、そういうシーンがあったなあ。いや、別にデュマの専売特許じゃないよ。僕は『モンテクリスト伯爵』の方が好きだし、ああ、いやいや、あの言葉自体、起源がいつかよくわからないんだ。ただ、ヨーロッパ全体でかなり古くから使われていて、船乗り連中やイギリスのラグビー校なんかでの使用例はあの小説より明らかに古い」

しばらく夫の言葉は途絶えた。深く自分の思念に入り込んでいく。

それを覗き込むのは夫婦であるからこそ、逆に憚られる。

「やはりそうだ。そうに違いない」

「何がですか？」

「一郎さんの魂だ。僕らの子供の行く末が、そうでなければ……」

「そうでなければ？」

「消えてしまった開祖皇帝の魂を探し出すことと、何かからんでいるに違いない」

「なぜ、そう思われるのですか？」

「君が墓で見たのと同じヴィジョンを、僕も確かに見た。一郎さんの転生の場面だ。見るのが君一人であつても、本来ならおかしくないので。いや、普通ならそれが自然なのに。言わば一郎さんにとつて完全な部外者で、赤の他人でしかない筈の僕にまで見えた。あるいは見せたのはなぜか？ それは……僕の長年の疑問あるいは課題と密接にかかわっているから、見せられた。あるいは見るべきものだから見たのだ……そうは考えられないか、フェリシア？」

夫の言葉は疑問形ではあつたが、すでに確信しているのだ。フェリシアは夫の言葉の意味を理解しながらも、思いもかけない話に、やはり戸惑うのであつた。

「開祖皇帝とはどのような方だったのですか？」

フェリシアも夫と同じコーヒーを自分用にカップに注いだ。コーヒーの香りは確かに考えをまとめ上げるのにふさわしいかもしれない。夫がコーヒーを好む理由が、何となくフェリシアには分かった様な気がする。

「僕だつてオルトの皆が承知している程度の事しか知らないよ。双龍をその身に納める事の出来た皇帝であつたと言う事、少なくとも帝国の建国までは、それまで存在が知られていたすべての聖剣の主を纏めていた事、使っていた剣は僕の所にある『ジルニトラ』である事、不老不死であつたはずなのに、いつの間にもやら消え失せてしまつて、女神様も双龍もその理由も行先も全く分からない事、そのぐらいだ」

「ダーリンは一時的にですが、双龍を身に納めた事が有りですよ  
ね」

「うん。フェリシアが生まれるまでの、ほんのしばらくだが……どうも心身ともに不調だつた。特に銀の龍がまだ穢れっぱなしに穢れていたせいなんだろうが、陰気くさい後ろ向きな考えばかり頭に浮かぶので閉口した」

そのイヤな感覚はフェリシア自身も身に覚えが有る。オルトに転生してすぐ、持てる力を振り絞つて銀の龍の穢れを封印したが、穢れを帯びたままならフェリシア自身も自我をともに保つておれなかつただろう。

「でも、開祖皇帝がいたころは、まだ銀の龍は穢れていなかったでしょうね」

「どうだろう？ オルトにたどり着く以前の穢れや、来て早々大暴れして多くの人の命を奪ったようだから、かなり穢れていたかもしれないよ？」

双龍はオルト以外の場所の生命体であつたらしいのだが、宇宙を漂った後にオルトにたどり着くと血迷つて大暴れしたらしい。その際多くの命が失われたらしいが、人間の命がどの程度含まれていたのかは不明だ。そもそもオルト固有の神であるらしい女神とどうやって今のように平和に連携できるようになったのか、そのいきさつもわからない。特に銀の龍の魔法の力が暴走すると、人々の記憶が変容し場合によっては消滅してしまうが、女神の記憶すら奪つてしまつらしい。

「わからぬのじゃ、何も。開祖が何をなしたか、開祖がなぜ消えたか」

マークとフェリシアの力が増大し、いくつかの神域の力を開放し、謎の多い二本の聖剣『サミア』・『バスイール』を聖なる泉に沈めた後も、女神の記憶は戻らず、こうした答が返ってきただけだ。

「後の剣とされる『ヴィーヴル』が存在するのに、なぜ開祖皇帝の皇后の話は全く伝わっていないのでしょうか？」

「うん、それも奇妙な話だ。ただ、もとは皇帝につかえていた女戦士エミーネが、何事か宮中での内紛に巻き込まれ嫌気がさして、野に下つたと言う話はキタイのゾルル山の麓一帯には伝わっている。帝国の正式な記録には無い話なんだがな」

「開祖皇帝の血脈は受け継がれているのですよね。二代目の皇帝が

「どういう人だったのか全然話を聞いたことが無いのですけれど」

「幾度か有った銀の龍の魔法の暴発の所為で、幾度も記録が吹き飛んでいる。大体僕自身が第何代目の皇帝なのかわからないという信じられない状況なんだ。龍たちは今までの皇帝の数は百人は超えている、とは言うんだけどね。二代目なんてマイナーな存在は綺麗さっぱり歴史の闇の中って感じみたいだな」

「日本の天皇が百二十五代続いて居る事になってますが、最初の二十五人ぐらいは実在が怪しい場合も有ります。オルトの皇帝の場合、初代の開祖皇帝はフィクションではないんですよ。龍たちもはっきり記憶しているんですから」

「そのくせ、地球の何という場所の出身で、どんないきさつでオルトに来たのかわかんないんだ。あきれるよ」

「開祖皇帝は地球人ですか？」

「どうやら間違いないと思う。女神様はおぼろげながら、そのような記憶がお有りの様だ。龍たちは『気が付いたら居た』とか、『心地良い波動なので、双龍共に自分の器とした』とか、勝手な事は言うんだが、開祖皇帝のプロフィールは謎だらけだ」

「私も開祖皇帝がどこに行ってしまったのか、銀の龍に聞きました。が『金色の自分も知らない』と言う返事でした。」

「どちらの龍も知らないのだから、行き先は開祖の生まれ故郷の地球だろう」

「地球人らしいと言う話が正しいとして、地球のどのあたりの人なのでしょうね？」

「僕たちよりもずいぶん古い時代の人であるのは確かなようだから、元アメリカ合衆国国民と言う事は有り得ないな」

「でも、歴史の古い国にも色々有るではないですか」

「そうだなあ、オルトの地名は地球上のある特定の国の地名と同じものが多いような気がするんだ。だから、その人かもな。だが、その国の古い地名では無く現在のものも多い。故国を懐かしんで、実は幾度も地球にワープしていたのかもしれない。あるいは、今の

僕たちみたいに、何事か目的をもって地球に通っていたのかもしれない。現在はユーラシアからアフリカの古い国家は大方無くなってしまつて、国境線も住む民族も二十一世紀の国家と古代の国家は噛みあわない。まあ世界的に見て日本みたいな国は稀だからね」

「大体何年前の人を思い浮かべたらよいのでしょうか？」

「さあ、百人以上という数が本当だとして、日本の古墳時代かその前の弥生時代辺りを思い浮かべれば良いのかもしれないな。まあ、在位して二、三年で退位と言う事は稀だ、と仮定しての事だけだ。そのころの一番の先進国と言えば、ローマ帝国だろうが、東西に分かれて以降割合とすぐの時代辺りを僕は想定している」

夫は以前から不老長寿とされるにも関わらず、行方不明の開祖皇帝の業績を知りたがっていた。単なる知的好奇心などではなく、オルトの行く末にも大きく関わると考えているのだろう。

「ダーリンは私たちの将来の子供と、開祖皇帝が関係が有るとお考えなのですね？」

「まだ魂が存在すると仮定しての話だが、オルトに呼び込める強い魂の代表だろうからねえ」

「と言う事は、ダーリンは我々の子供に開祖の魂が宿る可能性について、考えておられますの？」

「どう思う？ フェリシアは」

「私たちの子供の番つがいという可能性は、ありませんか？」

「ああ、そうだな！ その可能性については今後考える必要が有るか……だが、何となくだが……」

「予感がお有りになる？ そうなのですね」

「うん。ただ、まだ確定ではない。そんな気もする」

「私たちをオルトに呼び込んだのは、誰だとお考えになってます？」

「こつ言う場合は、消去法で行くべきだろう。女神様じゃない。は

つきり否定されたからな」

「ええ、私も伺っています。地球のことはとんと不案内じゃから有り得ぬ」と

「そうなんだ。龍たちではないのも確かだ」

「では、開祖皇帝でしょうか？」

「地球人が言うところの死神とか、神とか、そうした存在の可能性もあるが、精神生命体だけになった開祖皇帝と言う可能性が高いと思う」

「精神生命体だけに、ですか？」

「フェリシアも接した事が有るだろう？ 生きている人間の気配はしなかったと思うんだ。幾度も思い返してみたんだが、あれは生身の人間の声ではないと僕は思っている」

「人間である事を止めた、つまり死んだ、と言う事なのでは？」

「どうなのかな。生死を自分で選びとれる、あるいは場合によっては転生も自分の意志で出来る、そうした状態かもしれない」

「私も思い返すことが有りましたが、あの声は霊格が高いというか、霊的な力が強い、そんな存在の声のように感じました」

「敬虔なキリスト教徒なら、神の御使いとでも考えるんだろうけどな。僕はもう、そうは考えられないよ」

自分と違い、敬虔なキリスト教徒であった祖母に育てられた夫にとって、そう考える事そのものがある種のストレスなのかもしれないな

「データ不足の状態で色々考えてもこれ以上のことは出ないな…」

夫はそう呟くと、コーヒーを飲み干した。

## 87 (前書き)

クシャダスの掃除が出来たようです。

「お前からこう言う形で相談を受けるとは思わなかったよ、モーハ  
ン」

キタイ王国の首都ブルサの最も古い神殿の告解室で、黒づくめの服を着た眉目秀麗な若者が、皇帝に悩みを打ち明けていた。

「陛下にあの冬の夜に拾っていただいたから、自分なりに世のため人のためになりたいと力をつくして参りましたが、見る人によっては、私が何をしようとも何を学ぼうとも、所詮は『クシャダスの種』で片づけられてしまうのだと、思い知りました」

「ふうむ。リキュニア伯爵か。大した功績もなく家柄だけで貴族社会にしがみついているだけの男だな。その男の娘にしては、ずいぶんとまた、まともな娘が育ったものだ」

モーハンはリキュニア伯爵の娘サハルとはキタイ王国の首都ブルサの大学で共に学んだ仲間で、恋仲であった。

サハルはなかなかの才媛で、官吏登用試験もモーハンと同じ年に受ける予定であったのだが「家の事情」で受けるのを止めた。最近ブルサの邸をリキュニア伯爵が引き払い、家族全員を引き連れて領地にこもってしまったために、なかなか連絡が取れないらしい。先日、意を決してモーハンがサハルとの結婚を認めて欲しいとリキュニア伯爵を尋ねると、『クシャダスの種』に娘はやれないとさんざんな言われようであつたらしい。

確かに、サハルは評判の器量良しであったから、かつてなら王の後宮に送られていただろう。だが今のキタイは女王が治めている形ではあるし、女王の父でキタイの実質的支配者である皇帝のマーク

は後宮を解散してしまった。リキュニア伯爵の様に本人に大した能力の無い貴族の場合、かつてなら器量良しの娘の力を借りて、勢力を盛り返そうとしたものだが、今の状況では叶わない。

「借財を重ねて、伯爵家とは名ばかりの状態らしいのです。しかもリキュニア領内は米の仲買人たちの組合に良いように仕切られて、領民に高利のツケが回され、帝国とキタイの租税に関して陛下がお定めになった『貧農は一割を超す年貢を負担するに及ばず』という規定はおるか、すべての法規を無視して、一昔前の様に農民から大地主に至るまで五割の年貢を取り立てているようなのです」

「リキュニアからの直訴がこの所二年ばかり無かったからな、気が付かずにいた。だがなぜ、直訴も告発も無かったのだ？」

「仲買人どもがゴロツキを雇い、農民たちが神殿に赴く事を妨害しているのです。小さな礼拝所に至っては、陛下が瞬間移動にお使いになる鏡を井戸の底などに投げ捨てられたりしたようです」

「更には他領や女王領、皇帝直轄地へ向かう主な道をふさいでいるらしい。」

「今ではワープする力も強まったから、僕を信じて強く念じてくれれば、そこが畑だろうが牧場だろうが、即座に移動できるのだ。そうか、百姓衆がなあ……直訴できないと思込まされているのだな」

「そのようです」

マークが急に表情を曇らせた。モーハンは何事だろうかと緊張する。

「ん？ いかん、モーハン、急げ。サハルが、クシャダスの女術せげんの所に運び込まれたぞ」

「お、おのれ……いったいどこでしょうか？」

「チビのアシユガルの仕業だ。あいつめ、近頃は大人しくしていたのにな」

アシユガルは女術の元締めだとされている老人だが、最近は業務の大半を帝国の勢力圏外で行うようになり、クシャダスの『開かずの塔』脇の迷路のような構造の家は、この二年ばかり空き家同然であつたはずだ。

「僕が騎士団の連中を指揮して突入させよう。いや、クラウド団長に指揮させるか。僕はアシユガルを捕まえるから、モーハンは『開かずの塔』脇の階段から上に上る通路を取れ。この金色の使い魔を飛ばして、サハルの居場所を知らせよう。サハルは着衣の上から手足を縄で縛りあげられ、猿轡をされているが、それ以上の危害は加えられていない。すべてはチビのアシユガルの命令待ちの様だ」

マークは席を立つと、モーハンの背中を軽く叩き、こう励ました。

「姫君を救い出すのは、姫君に愛をささげた騎士の役どころだ。頑張れよ」

マークがワープした後には金色に光る小鳥のような形の使い魔が残っていたが、すぐに羽をパタパタ動かし始めると、窓から飛び出した。モーハンはあわててその後を追いかけた。

マークは「迷路のよう」とされたアシユガルの屋敷の奥深くの、アシユガル自身の寝室にワープしていた。マークの記憶が正しければアシユガルは既に六十を過ぎた筈だが、年甲斐もなく美しい二人の全裸の女とデカイベッドで楽しみにふけている最中だった。

「アシユガル、人身売買の現行犯で貴様を逮捕する。服ぐらい着たまえ」

裸の女二人は悲鳴を上げて逃げ出した。アシユガルの顔つきはなかなか堂々としていて容貌魁偉という言葉も当てはまる感じだが、異様に背が低い。十歳かそこらの少女ほどの背丈しかないのだ。貴族的な高い鼻と、爛々と光る大きな二重瞼の目が何とも威圧的な印象を与えるが、さすがに龍の器であるマークの眼力には負けて、目を伏せた。

「皇帝陛下……でいらっしやいますな。わざわざのお越し、痛み入ります」

「これまで外国で怪しからぬ事どもを、あれこれ画策してきたのだな。まあ良い。お前の悪だぐみの一切を打ち砕いてやるから、そのつもりでいろ」

「フフフフ……陛下は私があなたの何に当たるか、御存知ですかな？」

「これはこれは兄上ご機嫌いかが、とでも言えば気が済むのか？ 貴様のような穢れきった魂の持ち主は、兄でもなければ弟でもないわ。金の龍は不機嫌だ。噛みつかれたくなかったら、素早く着替えよ」

金の龍の憤怒した形相を見せてやると、先ほどの勢いはどこへやら、女衞の元締めはガタガタ震え上がり服を着たのだった。

「とまあ、こんな具合にクシャダスの大掃除で、今日は大忙しだった。ハニー御褒美をおくれよ」

マークはベッドの中でフェリシアに珍しく、甘えたような声を出した。こうするとフェリシアの自分に対する接し方が、いつもより更に細やかになり、懸命に励んでくれるからだ。

「モーハンさんはどうされました？」

「去年建てた小ぶりだがなかなか良い家で、サハルとシツポリ、と言う所さ。すぐにあの二人の結婚を正式に認め、リキュニア伯爵領は当分の間皇帝が預かる事にしたよ。伯爵にも承知させて証文を仕上げた。我ながら女術の並みの手際の良さだな」

「サハルさんにお子さんが生まれたら継がせるのですか？」

「うん。そのつもりだ。サハルは良い娘なのに、どうして親父があいいう頭の固い差別主義者で無能な奴なんだろうな。まあ、どのみちあの爺さんには伯爵領を治める能力が無いのだ。食うに困らなければ、楽な方が良いだろうさ」

「まあ、肩のあたりが凝っていらっしやる。マツサージ致しますか？」

「肩よりも、こつちが先だよ。モーハンはさぞかし満足だろうな。」

長い春だったから」

「ダーリンも長い間お待たせしましたものね」

「さすが、良くわかってきているね、奥様。今夜はいつもより、しっかりたっぷりお願いします。もうさあ、何と云うかギンギンだる？ ね、ほら」

「ダーリン……」

この頃ますます艶やかになって来た妻の体を愛撫しながら、マクはあの、まぎれもない庶兄である女術と自分の本質は、実は大差無いのかもしれない。などとチラツと思うのだった。

88 (前書き)

妻を美少女キャラ風に装わせるのが、夫の密かな楽しみらしい？

「ごめん、フェリシア、君の体がまだ十二歳なのをつい忘れてしまつたみたいだ」

「いいんですの。でも、体がついて行けないのも本当です」

夫に「御褒美をおくれよ」などと言われると、ついまだ週末まで一日残っている事も忘れて励んでしまったのは自分自身のミスでもあるのだ。体は幼いが連れ添って十二年たつのだし、互いの癖と言うか傾向もわかつているのに、どうもまだ学習出来ないでいる。

「いつもお利口で無駄なくスケジュールをこなすしっかり物の奥様では、僕だつて窒息しそうだ。たまには良いじゃないか」

「年末に続いて二度目です」

「年が明けたんだから、別勘定で良いじゃないか。ね？」

「それでも良いのですけれど、今日の昼は久しぶりにダーリンの息子さんたちと、お茶でも御一緒しようと言う事になってましたのに……」

「じゃあさ、僕から君の母上に謝っておこう」

「そんなの、恥ずかしすぎます」

「そうか？ 僕が原因だから、僕が謝った方が良いと思つたんだが」

「母に聞いてみます」

「ついでに、夕食を僕も入れて皆でつて言うのは駄目だろうか？

君の実家の飯は美味いからさ、僕も混ぜて欲しくなつた」

「はい。ではそれも含めて、聞いてみます」

言葉にすると決まり悪い事でも、波長を合わせれば必要な情報は全てフェリシアと母親の口ザリアの間でやり取りできるのだ。ちょうどネット上でファイルを送付するような具合だと言えば良いだろ

か。読みたくなければ読まなくてもよいし、必要に応じて必要な部分の情報だけを即座に取り出す事も出来る。ただ、客観的な事実は伝えられるが、場面ごとの細やかな感情まではさすがに伝わらないが。

たとえばフェリシアとマークが同衾していかなる行動をいつ取ったかはわかるが、その間の感情のやり取りは不明で推測してみるしかないのだ。まあ、あの母がそのような情報までつぶさに調べるとも思えない。

「もう、すんだのかい？」

「ええ。今日は昼伺えない事、夜ダーリンも伺うので息子さんたちにもお伝え願いたい事、できればダーリンの大好きなキャセロールを頂きたい事、地球で買ったコーヒーをお持ちする事を伝えました。母は了解したそうです」

「メールのやり取り並みに早いね」

「元が同じ魂だからでしょうか、すごく簡単に出来てしまうのです」「ふーん。で、昼行けない理由は、説明しないの？」

「説明したくないからしないけれど、母が真相を知りたければ知る事は出来ます」

「僕らのプライバシーの細かな点まで？」

「母が必要を感じれば。今回はすぐに理由は見当がつくので、そんな事はしません。だからご心配なく」

「ふううん、相手がああ清らかな波動のロザリアちゃんじゃ無ければ、僕も落ち着かないけれど、まあ、大丈夫なんだろうな」

「母はダーリンを兄とも大恩人とも思ってますから、それに私たちが気を交わらせるのは当然だと思ってますから、ダーリンに決まり悪い思いをさせるような無礼は働きません」

「ああ、よしよし、わかった」

「ですから、ダーリンは美味しいキャセロールを楽しみに執務に励んで下されば宜しいのです」

「分かった。フェリシアは寝ててね。皆で夕食の時にいかにもゲツソリだと、僕も決まり悪いからさ」

「はいはい」

「ごめん、勝手な言い草で」

「良いんですの。ダーリンのお気持ちは分かってますから」

汗を拭って清潔な寝巻きに着替えさせ、すっかりもつれた髪を丁寧にブラッシングして、眠るのに具合良いように緩やかにリボンでまとめるのまで全部夫がやる。と言うか、やりたがるのだ。朝食も寝室に運ばせて、いちいちスプーンで口に運ぶ事までする。もう慣れっこなのでフェリシアも身をゆだねて任せきりだ。

「僕にお任せって、思ってくれているんだね。すごく幸せだよ」

こんな事でストレスの多い多忙な夫が幸せなら、お安い御用だとフェリシアは思う。世の常の夫婦のあり方からするとかなり奇妙なのは、十分承知している。

これで終われば、模範的な優しい夫と言えそうなのだが、やっぱりそれでは終わらない。必ずディーブなキスをしながら胸を思い切り揉みあげる。曰く「毎日こうして育てなくちゃね」だそうだ。

「ああ、そんな風になさると、眠っている間も昨夜の続きを夢に見そうです」

「フフフ、なら夢に見てくれればいいよ。そんな夢を見て起きた後のフェリシアって、すごく色っぽくて素敵だ」

すると、本当に昼寝の間中、そんな恥ずかしい夢を延々と見続ける羽目になる。夫の念力の所為かもしれない。

「たとえ夢でも僕を呼んでくれたら、すぐに戻るよ。可愛いフェリ

シア」

確かに、十二歳の今の自分の肉体は「可愛いフェリシア」と言われておかしくは無い状況だが、色々な意味で十二歳と言う年齢の枠など超えてしまっている。ただ肉体の持久力だけが子供と言うわけだ。

朝食を済ませて、夫と別れた直後から「泥のよう」に眠ったのだが、やっぱり夫の夢を見た。ただ今までの夢より気配が濃いように感じたのはなぜなのだろう？ 若い清らかな魂の持ち主ならこのような状態は相当に負担だろうが、自分も龍の器である所為か、欲望のあり方・加減・量と言ったものが釣り合っている気がする。昼食も取らずぐっすり眠り、例によって夫が執務を終えて戻り、髪を撫でながら「起きて」と声をかけられると、色々な意味でもやもやしていたものが全部すっきりしたような気分で、眼が覚めた。

「お、スッキリしてる」

さすがに夫にはすぐに分かったようだ。

「今日の夢の中のダーリンの気配は、とても濃くて本当に身近に感じられたのです」

「ハハハ、そうなの？ いやさあ、今日は分かりきった詰まんない会計報告と各部門の連中の今年最初の全体会議みたいなもんでさ。僕がそこにいるって事が大事みたいな具合、もっとはつきり言っちゃうと、居さえすりゃあ構わないみたいなの会議だったから、意識だけ半分以上フェリシアの所に飛ばしていた」

「まあ、そんな事がお出来になりますの？」

「うん。皆それなりに真面目にやっていて、嘘ついてる奴も金を着服してる奴も居なかったから、脱力した。多少の集計ミスの範囲だ

と思われるものは有ったけど。まあ。これは調査した方がいいかもしれないが。トップが知らないうちに中間や末端の役人が、ちょっとばかり手繰りこんでいる可能性は有るけど。それでも深刻なケースじゃ無さそうで、多分詰まんないネタだ」

「では、悪者や不正を行うものが無ければ……」

「フェリシアとずーっとベッドでイチャイチャしている馬鹿皇帝になるな」

夫は気遣わしげにフェリシアの顔色をチェックしていたが「気分スッキリ、体も回復だね」と言った。確かにそのようだ。

「さてさて、この前詠えたばかりの冬のドレスを着て行こう。髪も今日は僕が結ってあげる」

夫の着せ替え人形に徹するのも、妻の務めだとフェリシは割り切っているが、実際夫のセンスは良いのだ。任せておけば夫婦円満なのだからお安い御用だと思う。

「小間使いを呼びませんととか、近頃は言わないねえ。フッフ、良い傾向だよ。任せてくれれば素敵にしてあげるからさ」

夫は恐らくつまらない会議の最中に新しい妻の髪型について考えていたのだとしか思えなかった。

「おや、ばれたか。その通り」

「まあ、本当にそうだったのですか」

「おかげで、素敵な髪形になったろう？ フェリシアの魅力を一番深く理解しているのは僕なんだからさ」

アニメで見るツインテールの美少女キャラみたいな髪型だな、とフェリシアは思った。

「うん、うん、まさにそんな感じ。東京のオタクの祭典に顔を出したらカメラ小僧が周りを取り囲むこと請け合いの可愛さだよ」

夫が満足げに言うので、フェリシアはもう何も言わない事にした。

88 (後書き)

脱字、修正しました。すみません

89 (前書き)

子供らの処遇をどうするか、まだ、悩んでいるらしいマークです

夫も四人の息子達と顔を合わせるのは、本当に久しぶりなのだった。

ユクセル・サイト・オルハンの三子爵は揃って十四歳になった。長男のエスコバル公爵ポールは十七歳だ。皆仲良く、健康に暮らしているようなのが、父親としては何より嬉しいようだ。特にキタイで気まずい事があってからのポールがどうなるかフェリシアも心配であったが、伸び伸びした環境で武芸と学問に励んでいるようだ。

「大学に進んで、領地をより良く治めるのに役立つ知識を得たいと思います」

既にポールは広大な公爵領を相続している。今は父親である夫が摂政であった時代からの人材を受け継いでいるが、やがて彼らも年老いて行く訳で、自由の効く間に学問でも何でも、思い切りやっておくのは良い事だと父親としては考えているのだろう。夫は彼らの年頃には既に男女の色恋ごとに首を突っ込んでいたらしいが、四人は品行方正そのものだ。夫の場合は良い母親役の人間が居なかったがための、代償行為のような部分が有ったのだろう。

この四人はそれぞれ母親が違うが、皆ロザリアを実の母か姉のように感じているようだ。

「ほんと、クラウド君とロザリアちゃんには感謝しても仕切れないな。ありがとう」

「いえ、我々二人がキタイでして頂いた事に比べれば、まだまだのように思います。それに私もロザリアも御子息達との暮らしを心から楽しんでいます」

確かにそれだからこそ、四人の表情も穏やかで明るいのだろう。

「それにしても、さつきからものすごく食欲をそそる美味そうな匂いがしてるなあ。リクエストしたキャセロール、作ってくれたんだね。このオーブン、動線を配慮してここに置いたんだが、実際に使ってみるとどう？」

「火力の調節もшыやくて重宝しております。陛下に設計して頂いたこのダイニングキッチン、非常に使いやすいですし便利です」

ロザリアは熱々のキャセロールを目の前で皆に分けながら、満足気に言った。

聖域侯邸内部のこの場所はオルトで恐らく唯一のスタイリッシュなダイニングキッチンで、様々な工夫がなされている。

ダイニングキッチンと言う言葉そのものは和製英語で、英語では kitchen - dining room と言うそうだ。夫はチラッとそんな事を言ってから、台所と食堂がオープンにひとつながりと言う発想は、そもそも水周りと熱源が屋内に取り込まれてないと生まれてこないと言う話をした。

「水道がオルテスで完備したのは、陛下が即位なさって五、六年してからでしたわね。それまではどんな大邸宅でも井戸が普通だったもの」

ロザリアの言う通り、水道は首都のオルテスですら目新しい設備なのだ。

「オルテスの地下の水源は結構塩分が強く、気になっていたんだ。山の湧き水を確保するために水源地の村々に交渉して、交付金を支払う事からはじめて、幾つかの水道橋を建設し、水道管で配水したわけだが、地味だけど大工事だったよ」

管の素材の安全性については検討の結果、オルトにしか存在しな

い特殊な植物性の樹脂を使って防水した鋼管を採用した。その樹脂はオルトの南方のエリアでは、ちょうど地球の漆のような使い方をしている、口に入れる水を長時間触れさせても有害では無いと判断されたからだ。細工しやすい鉛を提案した者が有ったが、鉛は有害である事を夫は説明し、皆を納得させた。こうした資材を企画化する発想もオルトにはそれまで存在しなかった。

「水道橋は道路整備の役にも立って、山間の村々と外界を繋げる道路網が広がったのは大きな事でした。それまで、山越えして何日もかかっていた町への道が、うんと短縮されたんですから」

山間の町で育ったオルハンは、険しい谷を横切る堂々たる水道橋に対する思い入れが強いようだ。

「せっかくの大工事だしね、水道だけ通すのももつたいたいと思つて、水道橋には通水部のほかに標準的なサイズの乗合馬車が走れるような幅の通路を設けたのは、やはり正解だったな」

今、そうした山間の水道橋は、交通整理役兼番人が最低でも一人、多い所では四人いて、異常を発見したら狼煙のろしと手旗信号でオルテスまで伝えられるようになっていて。人命に関わる場合のみ皇帝に向かつて助けを強く念じても良い事になっている。もっともそうした事例でマーク本人がワープして行ったのはこの数年でわずかに三件だが。

「どう言うわけか水路に大きな熊が入り込んでしまって、暴れて、それをどうにかしようとした番人が大怪我をすと言つた事が有りましたね。熊を陛下が女神様のお力添えを頂いて水路から山へ移され、気の毒な番人の傷は私とロザリアが現場で治癒魔法をかけて治しましたっけ」

「うん、そうだった。あの時の彼は地元の村の娘さんと先日めでたく結婚したようだ。神殿の方に報告があった」

「そう伺うと本当にお役に立てて良かったと思います」

様々な人の尽力が有って帝国の水道と道路は維持されているわけだが、近頃は皆のための重要な設備であると帝国の隅々まで認識が行き渡り、地域の人々は無償で季節ごとの清掃活動にも応じている。

「陛下……」

話が途切れると、ユクセルが遠慮がちな声で呼びかけた。

「こう言う場所では父上と呼んで欲しいな」

「はい。では、父上……我々三人揃っての意見なのですが、あ、ポール兄上にも御相談の結果ですが……」

子爵位に伴って将来賜る予定の領地を辞退したい。自分達の領民となるかも知れない人々は自分達のような未熟な領主の治める小さな領地の民になるより、偉大な皇帝陛下の直轄領の住民のままの方が幸せに決まっていると思う。帝国全体の役に立つ仕事を担わせて貰う方が、小さな領地の領主より自分達も遣り甲斐も有ると思う。それにその方が自分の力や能力に見合った仕事も見つけやすい。自分達は庶民として幼年期を過ごし、貴族の体裁を気にした贅沢な生活には馴染めない気がする。三人とも父上が働きに相応だとお考えになった年金なり給与なり頂ければ十分だ。と、まあ、このような事をユクセルは述べ、サイトとオルハンも同じ思いであるようだった。

「そうか。お前達なりに真剣に色々と考えての事だな。確かにポールと違い新しい貴族の家を作るのだから、家に仕えてきた古い家臣

も何もおらんからなあ……」

「父上、僕達以外の同じ年頃の兄弟姉妹は庶民として生活をしているのですよね」

三子爵と同じ年に生まれた皇帝の庶子は、帝国全土にあと、十七人存在するはずなのだ。夫は全て所在と現状を承知しているらしいが、フェリシアは踏み込んで聞いた事は無い。

「うむ。皆、自分達の希望でそれぞれの将来を選べるように配慮してあるのだ。だが、お前達は聖剣の主だから……帝国、いや、オルトに対して何か特別な役割を果たさねばならない運命なのだよ」  
「ならば、世襲の貴族では無く、聖剣の主として一代限りで子爵相当の扱いをして頂ければ十分かと……」

「そうだな。帝国に功績有るものに対して、一代限りでそうした扱いをした先例は確かに有る」

重大な内容について考えながら食べる所為か、全てが美味しい食事のはずなのに皆の口は重くなった。その事に気がついたユクセルは「せつかくの食事に……重苦しい話をしまして」と恐縮した。

「いや、良いんだ。確かにこう言う時でもなければ、率直な話はしにくいからな」

いささが重苦しい雰囲気になってしまったが、それでも食事がどうにか終わり、ロザリアはデザートのカークを切り分け、フェリシアがコーヒーを給仕した。

「おや、クランベリーのジャムか。懐かしいな」

フワフワのスポンジケーキにたっぷりのクランベリージャムをは

さんで三段に重ね、真っ白い雪のようなクリームを飾ったロザリア手製のケーキは、マークを喜ばせた。

「陛下に伺ったように畑に栽培して、収穫時に水を張ってクランベリーが生っている底の地面を掻き、浮いてきた実を集める方法を試してみました。確かに非常に効率が良いですね」

クラウドは試してみるまで、うまくいくものかどうか半信半疑であつたようだ。

寒冷な土地のための作物として、もつと栽培を広げても良いかもしれないと言う話題になると、夫の口は滑らかになり、その話で皆が盛り上がった。

「冬の寒さが厳しい土地でもちゃんと実ってくれるクランベリーは、僕の生まれたアメリカでは特別な果物だ」

「今年こそ、サンクスギビングデーに七面鳥のクランベリーソース添えを食べましょう」

フェリシアが言うと、夫は嬉しそうな顔になった。それから、改まった顔つきになり、三子爵にこう言った。

「結論は急がなくても良いと思うよ。その内、色々な仕事もしてみれば良いさ。その中から結論を出そう。ね」

恐らく、まだ夫は結論を出したくないのだ。あるいは時と共に最もふさわしい方法が自ずと明らかになると考えているのだ、そうに違いないとフェリシアは感じていた。

## 90 (前書き)

貴族になりたくない娘や、自分を実父と知らない子供達をどうするか、悩むマークです。

「良かった、ダーリン、吹っ切られましたのね」

さすがにフェリシアには揺れ動く想いを隠せない。子供らの将来をどうすべきか、それは子供らがどのような未来を選び取るかにも関わる。今の時点であれこれ考えても、致し方ない。それぞれの子供の望むような未来をなるべく実現できるように力を貸す、それ以外はあまりいらぬ事を考えない方が良いでしょう。

「庶民として生きる決意を語ってくれた子もいるんだ。十四歳といえばそんな年ごろかな」

マークはすべての子供たちと半年に一度はコンタクトを取り、本人の希望なり悩みなり知るようになっている。中には生母の意向で、マークが実父だと知らせない形で接触している場合も有る。特に生母が再婚先にマークの娘を連れて嫁ぎ、庶民として円満な家庭で生活している場合などは、色々気を使う。

「ダーリンの娘さんって、十人ですよ。皆さん十四歳になられましたかしら」

二十人の庶子の半数は娘だ。金の龍が煩いので儲けた子供達だったが、龍なりに男女比率を考えたらしい。

「その通りだよ。結婚したい相手が、決まって居る子は僕が父親面して世話を焼く必要も今更無さそう。陰ながら娘達のそれぞれの継父の商売や、結婚したい相手の生活が平和であるように配慮するぐらいだ」

「ダーリンはお寂しいんですね」

「そうだな。予測していた事態だが、現実になると結構辛い」

相手が一言も発しなくても、子供達の内心は読み取れるのだが、言葉と思いの乖離が大きい場合、それだけ気持ちの隔てが大きいわけで、マークはやはり悩む。中にはマークを赤の他人だと信じている息子や娘も居るわけで、そういう場合、言葉は全く本音を語っていない。まさかマークが会話しながら自分の内面を読み取っているとは、思いもよらないのだ。

マークの力の大きさをよく知っている三人の子爵の場合は、思いと言葉の間にいささかの乖離も無い。心から思う事でなければ父親を動かせないと承知しているからだ。

「広い世間が見たいし、宮中にも興味が有るけれど貴族になるのはイヤだつていう娘が居るんだが、女官見習いとして迎え入れるかも知れない。本人の希望で僕との関係は伏せるけどね」

辺鄙な漁村で今は網元の孫として暮らしている娘のネシャートの希望を、なるべくなら叶えてやりたかった。

妻は拒絶しなかった。そして、こんな風に念を押された。

「三子爵と身分も待遇も違うと言うのは、公平公正とは言い難いですから、引つ掛かります。でも、確かにダーリンの娘さんだと知れ渡ると、自由には生きにくくなりますね。女官見習い、で良いのでしょうか？」

現在、まったく後宮が存在しないため、皇帝の愛人的な役割を担う女官は居ない。全員、宮殿内部にある政治なり司法や神殿の仕事を受け持つ女性の職員だ。まだまだ女性で高等教育を受けた者が少ないため、どうしても男が多い職場になっている。頭の固い古い貴族連中は「女に政がわかるか」とはつきり口に出して言う状態なの

で、色々皆も苦勞も多いようだ。少なくとも良縁を願って夫候補を探しに来る行儀見習的な、一昔前の状態とは大違いなのだ。あとはごく少数の皇帝と皇后の世話をを行う係が居るが、全員既婚者で、夫婦仲が良い者ばかりだ。

「僕とフェリシアと、君のご両親、四人の兄弟だけが僕の娘だと知っている状態で良いんじゃないだろうか。皆、心を読み取る力が有るから、本人の希望を取り入れつつ、社会勉強をする手助けをしてやれる」

「学問や、そのほかの教育は、どうなさいます？」

「大学に行きたいとは思ってないらしい。だが、料理には興味が有るようだ」

「ダンスや音楽、マナーなどの姫君としての一般教養は？」

「そうだなあ、貴族の息子と結婚でもしたいと言いついたら急いで仕込んでおけばいいだろう。オルトではヨーロッパの貴族社会みたいな男女カップルで踊るダンスは稀だしな」

「そうですね、集団で楽しむタイプのダンスが多いですから、ヨーロッパの貴族社会でのダンスほどの意味合いは無いですがね、それでも美しい立居振る舞いが出来た方がよろしいでしょうけれど」

妻は自分に抱きしめられている内に、知りたいことは知ってしまったようだ。

「ネシャートちゃん、かわいい子ですね。お祖父様・お祖母さまと海辺の村ですつと暮らすのは、好奇心が強く活発な若い人には辛いでしょう」

「フッフ、ネシャートは十四歳で、一応見かけ上はフェリシアの方が若いんだよ」

「生んだ方は……」

「ネシャートを産んで三年ほどして、隣の村の村長の息子と所帯を

持って息子を四人生んだ。村長の息子は引き取ることを認めだが、祖父母が手放したからなかったのだな」

「なるほど……」

活発な子供にとって、余り良い生育環境では無いと妻は考えているようだったが、批判がましい事は言わない。

「そつだなあ。母親ともあまり会わないようだ。僕の方がよほど話をしている」

「ネシャートちゃんが夢見ているような、素敵で男性との出会いがあるでしょうか？」

「そのように演出して、しかるべき貴族と結婚させようかなとも思うんだが、どうだろうか？」

「幾人か、お似合いの年頃の貴族の青年をピックアップしますか？それで、自然な出会いを演出して、うまく事が運んでほしい、そんな所でしょうか」

妻の脳裏には、あまり良い候補は浮かんでいなかった。貴族の青年で有望なものは、皆それぞれふさわしい結婚相手が決まっている。貴族ではない官僚や軍人の若者の中に幾人か優れた人材を見出したようだったが……

「そつか、貴族にこだわらない方が良いな。で、フェリシアの一番のおすすめは？」

「ちよつとお年は離れますけれど、ファーガスさん、ですね」

「ファーガスはつい先日、キタイからオルテスに呼び出して、重要な政策の作成メンバーに正式に加えたばかりだな。相棒のモーハンが貴族の跡取り娘であるサハルと結婚したので、できれば釣り合いを取ってやりたいと思っていた矢先だ。だが、あの年まで好きな女の一人もいなかったのかな……」

ファーガス本人も正確な自分の年齢はわからないようだが、公には三十歳と言う事になっているはずだ。

「では、探らせていただきましょう、ファーガスさんには悪いですが」

二人の力を合わせれば、遠方に居てもたちどころに一人の人間の意識を奥深くまで探ることが出来る。出来るが、そこはプライバシーの侵害という概念が存在した国で生まれた魂同士、めったな事ではこのようなことはしない。犯罪がらみか、そうでなければ特別な理由がある時だけだ。

「居ないなあ……」

「淡い憧れを抱いていた方が、結婚されて、それきりですね……お母様に捨てられた時の記憶が大きな傷となってますから、女性を信じられないのですね」

ファーガスも相棒のモーハン同様、クシャダスのストリートチルドレンだったのを拾い上げて育てた人間だから、生みの母親にも惨い仕打ちをされていたことは想像に難く無い。

「さし迫った時、幼馴染のやっている妓楼に行く、それだけだな」

「本当に……それだけです。オルトには梅毒もエイズも無いですから、その点は心配なさそうです」

ネシャートはファーガスの務める内政の重要事項を扱う部門で、しっかり仕事をさせる事にする。学力がさほど高くはないので専門的なサポートは出来ないが、雑用一切をさせて、ファーガスの忙しい仕事ぶりに対する理解を深め、上司と部下という関係で自然に感情が育つのを見守る方向でやって行くことになりそうだ。

「でも、いきなりファーガスさんのお手伝いは無理でしょう」

マークの意識に同調して、ネシャートの気配を探り、その能力の程度を考えて妻なりに出した結論らしい。

「どうするかねえ。何処か学校にでもやるか？」

「気働きは出来る人のようですから、学力ですね……後は、美味しいお茶やコーヒートの淹れ方の修行でしょうか」

「カフェ『金と銀』でアルバイトでもさせるかい？」

「安全対策が不安です。学問はテイボー先生の奥様に、コーヒート茶やマナーの件は私の母に、習う事にしたらいかがでしょうか？」

自分達夫婦が、周囲に内緒で気晴らしや市場調査もかねて商売しているカフェ『金と銀』は、自分や妻が店に通えない時は、開店以来店の事をやっているキタイから移り住んだ夫婦とその子供達、アルバイト二人と言う状態で、もしもネシャートが皇帝の娘と知られてしまった場合は、確かに安全とは言いかねる。

「テイボー先生の奥さんか……ご高齢だが、老人と暮らしてきたネシャートには馴染みやすいだろうか」

「幾人かの姫君達の教師役をお若い頃は務められたのですし、昔のお弟子さんの中には、人柄も教養も優れた御婦人方がおいでて、そうした方達が度々御見舞いにおいでになるようです。良い刺激を受けそうですけどね」

確かにテイボー夫人は昔、何人もの貴族の姫君たちの教師の役を果たした経験が有るし、ここ数年は病気療養中の夫と共にクラウス・ロザリア夫妻の邸に厄介になっている。どちらかと言えば暇をもてあまし気味で、病人の夫の傍でずっと刺繍や編み物に励んでいる。長年大学の総長であったテイボーを見舞う客は、概ね人柄教養とも優れた人物ぞろいなのも確かだ。悪くない所に目を付けたとは思わ

「結局また、君の両親を当てにするのは心苦しいな」

「四人も五人も大差ないですよ。それに母は女の子の世話をしたがつてますし、私では年下の継母と言った立場ですから、ネシャートちゃんも素直になりにくいでしょうから」

肉体的な年齢はフェリシアより二歳上だが精神的にははるかに若い娘をどう処遇するか、考え出すとこれまた厄介な問題なのであった。

91 (前書き)

ベッドでの話です。食い違うものをすり合わせる事は可能かどうか？

フェリシアが生まれてくる数年前、金の龍は何を思ったのか、やけに子供を作れ作れとうるさかった。

「（龍の血脈をオルトに残せ）」とうるさいのだが、自分は龍を寄生させているだけの存在で、龍と言う訳でもない。自分の子供が増えたって「龍の血脈」でもなかるうとしばらくは無視していたが、どうやらそういつつもりではなかったらしい。自分が見込んだ、あるいは代々の金の龍の器の中で、開祖並みに居心地の良い器だから、子供も優秀なはずだ。優れた人間の種を残しておかないと、オルトのために良くない。とまあ、金の龍なりに自分を見込んでの要請と言った意味合いしかつたのだ。

「龍たちの言葉はボキャブラリーが貧しすぎて、独善的だから、時々訳がわからん」

以前妻にそう語った時、妻も身に覚えがあるのだろう。深く同情してくれた。

「龍には、人間の情の細やかさ、特に親子の絆の特別な意味合いなんてわからないですよ、きつと。だから一年で二十人子供を作らせるなんて、無茶もやらせるんですわ」

「確かにねえ。二十人なんて、いかにも片手間に感じるか。子供らの何人かがそう感じていて、密かに傷ついているのを知って、僕はショックだったが」

「少なくとも……両親が深く愛し合って自分が生まれたとは、思えないですね」

「ああ、そうだよなあ。確かに龍がうるさいから、数合わせした感じなんだよ。その一種の援助交際みたいな互いに利益があつて合理的な契約関係ではあるけれど、愛情関係、とは言い難い。客観的に

は人柄が良くて健康で賢い相手ばかり選んだから、僕の子供を生んだ後、全員数年以内に相手が見つかって結婚してるものなあ。子供さえきちんと生んで育ててくれれば、一生食いはぐれないようにするって約束したただけだから」

「まあ、私は、その方が安心ですが」

「でも、それぞれの子供が幸せになって欲しいと思っているのだがねえ」

「ダーリンが責任を持って、計画を実行しようとされたのはわかりますが、一般的な父親の愛情とは、やはり違うような気がします。お父さんと言うより、やはり為政の責任者って言う視点で二十人のお子さんを御覧になる事が多いでしょう？」

「そうかなあ……そうなんだろうか。まあ、フェリシアに色ボケの馬鹿親父って思われるよりマシだけど」

「私に対してなら、色ボケでいらしても構いませんのよ」

そう言うフェリシアの体は、この頃は後光がさすかと思うほど艶めかしい。実際、明かり一つ無い真の闇の中では、フェリシアの体は淡く光る訳だが……確かに十二歳の体なのだ。だが成熟した精神の所為か、自分をゆつたりと抱きとめてくれる。そのくせ互いに深く口づけて、唾液のやり取りをはじめると、まるで初めてあるかのようにいつも新鮮な反応を示す。

「キスは上手になったのに、そうやって赤くなる顔が可愛い」

ぐっと細い腰を抱き寄せて、近頃豊かになってきた胸の膨らみを押しつぶすように再び強く抱きしめる。背後から脇腹、腰の括れ、臀部へとゆつくり撫で回してやる。ベッドの上にそつと横たえ唇をあごから喉、みぞおちへとずり下げてゆく。愛らしい声を上げながら、女のおいは更に濃くなってきた。

「フェリシアは自分で慰める必要なんて、感じて無いよね？」

「わ、わかっていらっしやるのに……っあっ」

「それでも、直接聞きたいもんなんだよ。ねえ、僕が欲しい？」

すっかり力の緩んだ股の間に指先を滑り込ませる。秘められた場所の合わせ目にそって指を軽く幾度か動かしてやると、うわずった泣き声を上げ、熱いものが吐き出される。指にくわえる力を少し強めて畳み込まれたつつましやかな襞を探り、頂点の突起に触れると、胸震いする。

「ねえ、良い子だから言っておくれよ。僕としたいの？」

思ったような返事が妻の口から出るまで、いくらでも責め立てないと気が済まない。これは一体どうしたものだが自分自身でも良くわからない。幾度も悲鳴をあげ、汗みずくになってもなかなか思うような言葉を妻は口にはしない。そのくせ幾度も「好きっ！」とか「あ、愛してます」と言うのに……。

ひとときわ高く細い悲鳴を上げ、ガクンとのけぞった。

「もう言えるだろ？ ん？ まだまだ物足りないか？」

「……したい……」

唾液をしたたらせながら、小さな声で全身を真っ赤にさせて返事をした。腰が抜けるほどしてあげると、つい言ってしまつと瞬間妻は苦笑したような気がした。それから積極的に妻は足を絡め、共に深く喜びを貪った。

事が果てると、二人はどちらともなく抱きしめあっていた。

「僕、実際色ボケなんだ。あの女衞のアシユガルと大差無いんだと

思つよ」

妻は否定も肯定もしない。否定できないと言う事なのだろう。そんな事を思い浮かべると、白い小さな手で、額のほつれ毛を掻き揚げ、羽毛のようなタッチでそつと頬を撫でた。否定できないが別に嫌いではないとか、そんなにいじけるなとか、そんな所か。

「アシユガルを、どう処分なさいます？」

「あんな奴でも実の兄だから、殺せない。司法の役人達に言われたように、皇帝の血筋である事は犯罪者の組織では広く知られていて、あのチビに一種のカリスマ性を与えている。そのせいであいつを脱獄させる機会を狙う組織を、なかなか退治できないと……ね。でも、僕の神経が持たないのさ。我が儘なのは承知だが、もう、自分の兄弟を殺したくない。だから死刑相当の犯罪者だけど、絶海の孤島の監獄に送る事で勘弁してもらおう」

「やはりユーグの事は、お辛かったんですね」

フェリシアは、死んだユーグの後を継ぐ形で『銀の龍の器』になった。自分達夫婦には因縁深い存在だ。謀をもって死に追いやり地球への転生を促して、それが一応実現したが、それだけでは済まない因縁を感じる。

「うん。まあ、ユーグは魔力も高かったし、腐っても帝国の先の皇太子だからね。魔力の無いチビとは色々事情も違うんだが……血を分けた兄弟と言う点では、同じさ」

「銀の龍は私に『ユーグは弱く脆い器では有ったが美しかった』と言うのです」

「その美しい、ってどういう意味なんだろうなあ」

「さあ、私も幾度聞いても、良く分からないのですが……地球に生まれ変わったのですから、今度は伸びやかに暮らせますね」

「うん。そうだね。今度こそ彼の想いも実を結ぶか」  
「私達は、いつでしょう……」

妻は自分たちの子供を欲しがっているが、不老不死のきわめて魔力の強い両親を持つ子供が並みの存在では有り得ない。少なくとも不老不死であるだろうし、更になにかの特殊な力の持ち主である可能性が高いのだ。オルト全体に何か大きな影響を与えるのは確実だろう。おいそれと作る訳にも行かない。

「まだ胸も不十分ですし、体がまだ幼児体型ですものね」

そう言う時の妻は心なしか寂しそうだ。

「最近はかなりメリハリが出来てきたよ。でも、胸はもう少々育てる余地が有るかな。いやあ、今でも十分に魅惑的だよ。大人になりきってしまうと、今の可愛いフェリシアに会えなくなってしまふのかと思うと、少々複雑だ。時間はたっぷりあるんだから、もっと気を交わらせないときっと駄目なんだよ。もっとさらに深くね」

「良きにつけ悪しきにつけ、私達の子供はオルトに強烈な作用を与えるのでしょね。生まれてきたなら幸せになつて欲しいですし……そう考えると、色々条件が難しいんだらうとは、思うんですよ。でも、やっぱり、いつか生みたいです。ダーリンと私の子供……」

「そのためにも、もう一ラウンド、頑張っちゃおか」

「まあ……私、また明日一日、寝っぱなしになってしまいます」

「そうならないように、善処するって」

「善処する、だけですの？ 困りましたね」

「僕、そう言う困った人だから。薄々知ってるだろ？」

「……奉仕と博愛の精神だけで、乗り切れますかしら」

「な、何気に今の、傷ついた……」

「まあ、そうですねの？」

「そうだよ」

「でも、私。ダーリンを本当に愛していると思います」

「それは疑ったことは無いさ。でも、僕らがそれぞれ思い描く愛の形って、微妙に色々食い違っているだろう？」

「確かに、仰るとおりですわ。先ほども『愛してます』って、申し上げても、どうしても恥ずかしい答を私の口からお聞きになりたいようでしたもの」

「だから……まだまだすり合わせが必要なんだって。だから、もう一ラウンド。スタートは奉仕と博愛で良いさ」

いきなり苦笑されてしまったが、それなりに配慮した結果は妻にも受け入れられたようだ。

「このまま、眠ってしまいそう」

「 spoon position、気に入った？」

妻の幸せそうな寝息が聞こえる。

「気に入ってるよね、きつと」

小さな体を抱きこみなおすと、自然と安らかな眠りが訪れたのだ。  
った。

92 (前書き)

何かとお疲れの夫視点の話

「犬が主人にちぎれるほど尻尾を振る気持ちだが、ちょっとわかるなあ……」

そう言うと、妻に苦笑されてしまった。毎日一度は妻に「愛しています」と言ってもらわないと、不安でたまらない。最初は冗談かと思われたようだが、本気だと理解すると妻は毎朝必ず、じっと目を見つめて、それから軽いキスをして「愛しています。誰よりも私自身よりもダーリンを愛しています」と言ってくれるようになった。

眠る時は、抱きしめて眠らないとこれまた不安でならない。

「ダーリンを置いて、どこかに勝手に行ってしまったりしませんわ」「フェリシアがそのつもりでも、どこかの悪霊とか魔物が悪さをするかもしれない。だから用心しなきゃ」

執務の際も、使い魔をフェリシアにくっつけておかないと不安だ。

「金の龍にも銀の龍にも聞いてみましたが、ダーリンが御心配なさるような危険は無さそうですね……」

「おかしな男が色目を使わないか、気になる」

「ダーリン？ 大丈夫ですか？」

「フェリシアに嫌われたら、死んでしまいたい」

「そんな事、有るわけ無いですわ。でも、ダーリン御様子が変です」

「確かに変だつて自覚は有る」

「何なのでしょう？ 初恋に悩む若者と言うお年ではないですし、恋愛の経験は豊富でいらっしやるし」

「事実そうかもしれないが、フェリシアにそう言われるとジジイですれっからしと言われたようで微妙にイヤだ」

「……まあ……ダーリン」

妻は苦笑してから、表情を改めるとしばらくの沈黙の後、こう言った。

「龍の力が大きくなる前触れでは有りませんか？」

龍達にその場で問いただしてみると、金の龍も銀の龍も「わかん」と言う。わからんと言ったくせに、いつもの感じと何処かが違うと言う。

「まさか男性更年期障害って事は……」

あ、あんまりだ……

「ご、ごめんなさい。お年からひょっとして思っただけです。お仕事が辛い、ご気分が優れないと言う以外は、症状は全然出揃っていませんものね」

「そりゃあ、そつだよ、毎朝、僕元気だろう？え？」

思わず声を荒げてしまった。我ながら大人気ない。

「やっぱり、静養いたしましょう。メンタルなもののような気がしますもの」

「うつつむ。疲れているのかなあ」

「お子様方の事で、新年早々有りましたでしょう？ 後はアシユガルの件とか」

「うーん、だからって、なぜフェリシアにくつつきたがるのと関係してるんだらう？」

「今、一番ダーリンが本音をおっしゃりやすい相手でしょう、だからでは有りませんか？」

「それは、確かに有ると思う。仕事がらみじゃ、しゃべりたい事も

しゃべれない。差し支え無い事だけ話す訳だからさ……でも、会話より、フェリシアに体をくつつける方が安らぐ」

「ダーリンは、くつつきたい、んですの？ なら……そうなさって妻はものすごく真面目な顔で言った。」

「実は丸一日でもべったり張り付いていたい。でも、鬱陶しいよね」「普通なら鬱陶しいでしょうけれど、私も龍の所為か、通常の人間の感覚から外れているかもしれません」

そう言つと、妻は自分から手足を絡み付けてきた。すると……

「まあ、ダーリン……」

「うん。僕も見えたよ」

金銀の龍が互いに互いの体をぴったり絡みつかせて、地球で医学医療関連のシンボルマークによく使われる、ギリシャ神話の杖に絡み合う二匹の蛇そっくりの格好になっている。今までは互いの尾を口で噛み、輪を構成する形だったのだ。やはり、龍達に何事かがあったのだ。

「（なあ、メイト、これはなんだ。自分の事でもわからんのか）」

「（わからん。わかるのは、マークの気配が銀色のと良く似てきたと言つ事だ）」

金の龍がこう言つと、銀の龍はこう補足した。

「（逆にフェリシアの気配が金色のと良く似てきた）」

フェリシアも銀色の龍にそう言われたら気になるのは当然だ。

「（互いの龍が入れ替わったんですか？ 何か良くない事の前兆かしら？）」

どうやら龍たちが言つには、別に入れ替わった訳ではないが、互

いの気がかなり深く馴染んで力そのものも大きくなったのに、まだ中途半端で、互いの龍の気をまた本来の相手に増幅して戻す事が上手くできずに、滞っているのだと言っ。

「（どうすると治るんだ）」

すると金銀の龍はこう応える。

「（もっと馴染めばよい）」

「（もっと気を交わせばよい）」

妻は双龍の言葉を聴いて、その小さな体をいつそうきつく絡ませた。

「ならば、お休みを取って、龍たちの言うように致しましょう」

「でも、宮殿じゃのんびり出来ないな」

「では、明日一日お辛いでしょうけれど、仕事を皆に割り振って下さい。御自身でなさった方が早いものが多いでしょうけれど、それでも、なるべく皆に参加させて下さい。最低で三日、出来ましたら七日ほど休みが欲しいですね。その手はずが整いましたら、ピネ村にでも引っ込みます？ それとも地球の何処かに？」

「そうだなあ……」

「地球だと、別のストレスを背負い込みそうですか？」

「地球に居ると、つい、新聞やテレビのニュースが気になる。ネットも覗き込む。やめておくよ……僕が好き放題できるのは、元の僕の住処だな。うん、フェリシアは行った事が無いよね、エスコバル公爵邸」

「ええ、今はポールさんのお邸ですから」

「あそこの使用人は家令のユスフ以下全員、僕が育て上げた連中だ。ポールの為に働いてもらおうと思ってあの邸に残してある。今は留守を守ってもらっている状態だな。久しぶりに会いに行こう。そして、フェリシアを皆に紹介したいな」

「ポールさんは？」

「僕が使う分には、文句は無いはずだけどな。ポールは当分、キタイに足を踏み入れたく無さそうだし、僕の住んでいた区画はそのまま残っているし、秘密の通路は秘密のままだし……僕の子供の頃のもの、まだそのままとってあるらしい。そうだな、そうしよう」

「ファティマ様へは？」

「内緒にするよ。フェリシアはストレス感じるんだろう？ アンガス君にはバレるだろうから、内密にしてくれって頼んでおくさ」

「ご、ごめんなさい」

「何で謝るの。ファジル伯父の葬儀の時は実際大変だったもの」

先代のキタイ国王ファジルの葬儀にまつわる面倒ごとの半分は妻のフェリシアが片付けたのだったが、女王となった娘のファティマは自分では何もやらなかった、と言うより取り仕切る能力が無かった。喪主もファジルの甥である自分が務めた。その事でファティマの評判が下がり、相対的にフェリシアの評判が上がると、ファティマの感情はこじれ、厄介な事態になった。

悩んだフェリシアは、夫である自分の了解を取って銀の龍の魔法を使い、キタイの国民と新女王ファティマの記憶を変容させた。そんな訳で今、キタイの人々は喪主のマークを新女王が立派に補佐して、盛大な葬儀を成功させたと思っ込んでいる。ただ、ファティマの夫でフェリシアの同じ年の叔父のアンガスだけが、聖剣の主であるが為に正確な記憶を保持しているのだった。そうしたわけで、フェリシアとファティマの気持ちの隔てが、大きくなってしまった。それと同時に、自分のファティマに向ける父親としての愛情が薄れたのも事実だった。妻はファティマの父を完全に奪った格好になるのも、心苦しく感じているようだ。

「子供は大人になれば親離れするべきなんだから、良いんだよ、気にしないでくれ」

そんな風に自分が言っても、やはり妻は気にしている。

「今回は、エスコバル公爵邸の中で過ごすし、キタイ王室には無関係だ」

「ええ、つい気にしてしまうだけの事ですから」

「かつての僕の私室や寝室だけど、女性を招き入れた事なんて一切無いからね」

「十分承知してます」

承知していたにしても、妻は、自分があの部屋に滞在する初めての女性である事を、喜んでいるようだった。

93 (前書き)

イチヤイチャでR指定な話になりました。

「暖かくて、柔らかい感じの空気ですけれど、これは？」

「スチーム暖房だよ。第二次世界大戦の頃までは各国の大都會でも良く使われていた方法だね。柔らかい感じのぬくもりで、悪くないだろう？ この邸全体にスチームを通してあるんだ。僕はね何処か懐かしいような気分になれるんで、むしろ電気を使った空調システムより好きならいいだ。ここで働いてくれている連中が、恐らくオルト初のボイラーマンだな。今は父親と二人の息子が交代で二十四時間頑張ってくれている。おかげで部屋が暖かくて、風呂もシャワーも快調と言うわけだ」

「オルテスの宮殿のボイラー担当者は、こちらで研修したようですね」

「うん、そうだ。おかげでオルテスでも良い感じに湯が使い放題だろう？ただ、オルテスの宮殿は大きいから出力の問題で、暖房用のスチームを通すまでは出来なかった。僕らの普段使う部屋も暖炉なわけだが、やっぱり良いよな、スチーム暖房。オルテスの設備も増設してみようか……」

確かに、給湯設備が完備しているといかないとでは、毎日の生活の快適度は大いに違ってくる。

「暖炉の火は、見ているだけで暖かい幸せな感じになれる良さが有りますけどね」

「まあ、あの宮殿は全体がヨーロッパの王宮にムードが似通っているから、暖炉の方が似合うかな……僕はここみたいなインテリアも好きなんだけどさ」

「ここはスタイリッシュな豪華マンションの一室か、シティーホテルのスウィートルームと言う感じがします」

「ニューヨークでも東京でも、二十一世紀の大都会ならどこにあってもおかしくない隠れ家みたいで良いだろう」

自分のスペースとして好きなように設計したこの場所は、床は淡い色合いの寄木細工で、ところどころに華やかなラグを敷いてある。ソファはテレンス・コンランの作品を参考にした。大小二つの立方体で構成されたシンプルな形で、目に優しい淡いベージュだ。乗せられている幾つもの小さなクッションは、フェリシアの瞳の色と自分の瞳の色である赤と緑の光沢のある無地の生地で、座る時に好きなようにあてがえばよいのだ。

「でね、自慢はベッドルーム」

「まあ、ロフト形式なんですわね」

緩やかな螺旋階段も、オルトでは珍しいはずだ。

「このロフトの床面の三分の二がベッドだからさ、ものすごく寝相が悪い人間が寝ても大丈夫だ。それでもって、この窓の眺めをご覧」  
「まあ、遠くの山まで見えますわね。レオンハート峰ですか？ まあ

……」

そこにはフェリシアがまっ白いドレスを着て、白い花を抱えた写真の巨大なパネルをかけてある。

「これって、いつお撮りになったんですの？」

「去年の夏だよ。モノクロームな仕上げが、何ともまた良いだろう？ このまま二人で心行くまでいちゃいちゃしたいが、先にユスフや皆にフェリシアを紹介しないとね。午後三時に正面ホールで待ち合わせだ」

二人は手をつないで、待ち合わせ場所にワープした。

ワープして、ホールに出た途端、割れるような拍手が巻き起こった。そしてそれが止むと、その場にいる全員で一斉に「おかえりなさいませ」と挨拶した。総勢で五十人のはずだ。

女性たちはビクトリア期風のメイド服に真っ白いエプロン、男性も折り目正しいお仕着を着ている。中から家令のユスフが威儀を正して進み出て、深々と礼をした。歳を取って、頭に白いものが目立つ。

「皇帝陛下、再びお目にかかれまして感激しております」

「久しいな、ユスフ。しばらく厄介になるよ。ポールには一応断っておいたからね」

「しばしの間でも、昔のようにお仕えさせて頂きますこと、邸の者一同の喜びでございます」

「なあ、お前は相変わらず固いなあ、フッフ、まあ、そこがお前の良い所だけどさ。こちらが僕の妻、銀の籠の器で帝国の皇后であるフェリシアだ。皆もよく知っているクラウス君とロザリアちゃんの一粒種だ。皆、よろしく頼むよ」

「初めて御目文字致します、皇后陛下。当家の家令をあい務めますユスフでございます」

深々と礼をするユスフに向かって、フェリシアは最大限ににこやかな笑みを見せた。

「ユスフ、可愛いだろう、僕の奥様は」

「はい。まことに愛らしくていらっしやいます」

「でもね、賢くてしっかりしていて、僕を甘やかしてくれるぐらい大人なんだよ中身は。じゃあ、僕らは部屋にすっこむよ。勝手に好きないようにやらせてもらうから、また夕食の時に会おう」

「せめて、午後のお茶でもお持ちいたしましょう。冷蔵庫には以前のように飲み物を納めては御座いますか」

「いや、今日はあっちでお茶は済ませて、すぐ来たから良いよ。明日からまた頼む」

メイドの案内も何も抜きで、二人でいきなりもとの部屋に戻ると、妻をバーコーナーに連れて行く。

「まあ、初めて見ました。氷を入れて冷やす冷蔵庫」

「電気冷蔵庫が普及する以前に流行った商品のコピーだよ」

「上の段に氷を入れるんですね」

「冷凍を諦めれば、この冷蔵庫と言うか、まあ保冷库だが、悪くないんだよ。食材に最適の湿度を保つ、食材に温度変化が少ないから良いコンディションを保ちやすい、庫内に冷気を送る風が吹かないから食材が乾燥しない、そして、解けた氷が匂いを外に運び出す、とまあ、こんな具合で結構優れたものだ。中にブルサでは一番美味しい井戸の水と、ワインと果物のジュースと、コンポート類とオリーブの実の瓶詰め、チーズなんかを入れさせておいた」

「まあ、どれも美味しそう。で、ここがバーコーナーですね。美味しくお酒がいただけますね」

自分もだが、フェリシアも龍を宿らせている者の常として、酒が好きで強い。

「何か飲む？」

「ワインでも少し、頂こうかな」

「Champagne ? I・orangeはいかが？」

「しゃんぱん・あ・ろらんじえ？」

「フランスの貴族なんか結構好んで飲んでた、シャンパンとオレンジジュースのカクテル。厳密に言えばベースがスパークリングワ

インじゃあるけど、こいつはシャンパンじゃない。だからこの名前はちょっとインチキかもしれないが、味の方は本場より上かもしれないよ」

「では、そのダーリンのお勧めを一杯頂きます」

「ミモザなんて呼ぶ場合も多いんだよ。このカクテル」

「確かに炭酸の細かい泡がオレンジ色の中で弾ける感じが、ミモザの花みたいですね」

妻は気に入ってくれたらしく、飲み終わる頃には体の微妙な緊張は良い感じにほぐれていた。

「じゃあ、ロフトに上がろう、おいで」

「シャワーでも少し浴びた方が……」

「僕は午前の執務が済んで昼を食べてからすぐ、風呂に入って服を替えた」

「私は、なんだか汗っばいんですの」

「フェリシアは必要ないよ。昨夜、僕が隅々まで丁寧に洗ってあげたし、良い匂いだ」

スカートの下からちよつと強引に手を突っ込み、キスをしながら刺激を与えてやると、妻は「ダーリン！」と甘く恨むような声を上げながらも、完全に体重を預けて来る。呼吸が早まり、体温が上昇する。

実際、軽く興奮してきた時に妻の髪や肌から立ち上る香りは、俄然やる気を起こさせるのだ。

「もう、面倒だからいきなりベッドにワープするよ」

「まあ、せっかちでいらっしやる」

ベッドの上には柔らかな冬の日差しが差し込んでいる。妻の体を

ベッドの上に置くと、その上に覆いかぶさるようにしてキスを落とし愛撫を施しながら服を脱がせてゆく。一枚ごとに女の匂いが濃くなってきた、気分が高まる。

「だって、夕食まで二時間かそこらしかない」

「それだけあれば……駄目ですよ?」

「風呂や着替えも考えると、時間が足りない。最初の日の夕食ぐらいはユスフの居る所で食ってやるべきだろうし。まあ、明日からはここにこもってしまう気だけだね」

口を動かしながら、手も動かして、さっさと妻を裸にしてしまい、自分もどうにか裸になる。妻の肌に良く映るだろうと思って選んだワインレッドのベッドファブリックのおかげで、いっそう妻は魅力的に見える。いや、見えるだけでは無論無い。本当に魅力的なのだが……

「まあ、見える、で構いませんのに」

妻に笑われた。脳内で急いで言葉を置き換えたのが、おかしかったらしい。そう言う妻は自分の肉体を「遅しいのに繊細な感じが有って、綺麗」と思ってくれているようだ。この辺りは、互いの思念が読める夫婦だからこそその妙味だろう。

「僕さあ、フェリシアの匂いが物凄く好きだ」

「私はダーリンの事が全部好きです」

妻は気を使ってくれているのだ。でも、社交辞令でもなく、本気で言ってくれている。

「フフフ、ありがとう」

「本当ですよ」

いきなり鼻を脇の下に突っ込んで舌で舐めると、妻は身を振った。どうやら恥ずかしらしい。

「恥ずかしいの？」

「汗臭いでしよう？」

「それが良いんだよ。本当に良い匂いだ」

ピンと立ち上がった愛らしい胸の一对の突起を口含み、指で捻る。可愛い喘ぎ声が高くなって、呼吸が早まる。背中を摩り上げながら、深い口づけをして互いの唾液をやり取りすると、秘められた部分は蠱惑的な香りを放ち始める。組み敷いたまま、唇を首筋から胸、臍の周辺と彷徨わせて、最も敏感な小さな核を舌で舐りまわしてやると、はばかりの無い声を上げた。

「もつと、声を聞かせてよ。窓もドアもしっかり防音してあるから、ここなら僕以外誰にも聞かれない」

「でも……でもっ……」

まだ恥ずかしいのだ。毎日のように抱いているのに。フェリシアの羞恥心はなかなか手ごわい。確かに恥らう姿は魅力的では有るが、ここは全てを忘れて夢中になって貰いたい。フェリシアの膝の裏に両手をかけると、下肢を大きく開いた。すると「イヤイヤ、恥ずかしい」と言いながらまっかになった顔をシーツに擦り付ける。昂ぶりは激しくなり、熱い物を吐き出す。

「僕に見られたら、恥ずかしくて感じちゃった？ そろそろ行くよ」

その後は例によって妻に「立てなくなりました」と恨み言を言われながら、風呂で体を清めてやりキスマークの見えないような襟の高いドレスを着付けてやって、食堂までワープした。そして、椅子

に腰掛けさせてやる。

「まあ、とても美味しそうですねえ」

ユスフと厨房の者が頑張ってくれたおかげで、妻の機嫌はすっかり直ったのだった。

## 94 (前書き)

後半、まだいちゃついています。R15のつもりですが

「暖かいものはあくまで暖かく、冷やしたものはあくまで冷たく」以前ユスフに徹底して欲しいと言って置いた方針は、きっちり守られていた。調理の担当者が、調理師学校を首席で卒業した若くて優秀な人材になったので、かつてより格段に料理がよくなった。

「実に美味しいねえ。今、帝国で大膳職を仕切っている老人が退職したら、そのあとに入って貰いたいな」

「では、調理いたしました者をお呼びしましょう」

ユスフは密かにその若者を応援しているようだった。

「ほお、そうか、ボルの出身なのだな」

若者はかつて自分がフェリシアの両親と共に滞在した事のある、ゾルル山の麓の村の出身だった。公爵邸の仕事が暇な時は、母校で後輩の指導をしているらしい。

591

「僕の奥様はロザリア先生の娘で、なかなかの腕前なんだよ。ただ、皇后って言う立場だから、あんまり表立って料理は出来にくいんだけどね。でも、実家に通って時々ロザリア先生とお茶菓子を研究したりしてるのさ。時々僕も食べさせてもらうけど、何でも美味しい。そうかあ、君はあの調理師学校での教え子なんだな」

「母の得意なポタージュと同じ、優しいお味でした。他のお料理も、皆食べる人の為に手を抜かず丁寧に作ってくださいって、とても美味しかったです。またお会いできる日を、楽しみにしています」

若者は大いに喜んだようだった。

「母はロザリア『先生』だったのですね」

「うん。オルトで初めての調理師専門学校は、僕がこの邸の敷地内の独立した一角に建てたからね。初代の校長はロザリアちゃんなんだよ。だから帝国で作った学校の仕事もお願いしたと言うわけだ」

今日の献立は地球で言うならフランス料理に近いだろうか。少なくともコースの構成は同じだ。前菜・ポタージュスープから始まって、途中に自分の好きな貝類のグラタンが有った。冬には嬉しいメニューだ。メインの子羊はハーブで風味良く表面はカリッ、中はしっとりジューシーに焼きあがっていた。妻のご満悦の顔を見て、腕の良い調理人に代わっていて本当によかったと心から思う。

「デザートチーズケーキも美味しいですね！」

珍しく妻の声弾んでいる。確かに美味しい。こんなに美味いと、三食部屋に引きこもってと言う計画が変更になるかもしれない。

「変更でも、よろしくありません？」

「ええ……それについては、二人でじっくり話そう。ね」

ユスフが事情を察して、苦笑している。

「まあ、お前の察したとおりだよ、ユスフ。じゃあ僕らは引っ込むからね。おやすみ」

深々と礼をするユスフは、ちょっと面白がりながらも真剣に自分の大恩人と今も思ってくれているらしい元の主人が、妻と身も心も満たされるような時間を過ごせるように、大真面目に願って貰ったのだった。

「ねえ、そんなに変更したいの？ 僕と愛し合うより、食い気に釣られたなんてショックだ」

「ああいう美味しいお食事がおやすみ期間中、殆ど食べられないのも、なんだかもったいなく思っただけです。変更がそんなにお嫌なら、お約束ですもの、ちゃんとお付き合い致します」

妻は本当はやはり食事が気になるのだ。

「夕食ぐらい、食べるか……」

「せめてそのぐらいは食べた方が、お互いのためにも宜しいかと。本気でお相手すると、おなかですきますもの」

「確かに、栄養不足はいけない。肌の艶が悪くなったりしたら、僕も悲しいし。風邪なんかも引きやすくなるし」

「やっぱり……」

「やっぱり、フェリシアは龍の力が大きくなるのではないかと、そのために必要だと考えて僕と籠ってくれるつもりになったんだね」

「だって、ダーリンと私の幸せは、好むと好まざるとに関わらず、龍の有り様と不可分なものですもの」

「僕とフェリシアは不可分の関係だしね」

服越しには有るが、思い切り抱きしめると、愛らしい顔に赤みが差す。

「龍と言う生き物は寝ているとき以外は交尾ばかりしているんですわ、きつと」

「大酒のみだし、人間ならろくなもんじゃないな」

また二人の脳裏にヘルメスの杖・ケーリュケイオンの二匹の蛇の姿そのままに、激しく絡み合う金銀の龍の姿がまた浮かんだ。実はつい最近、自分の使っている聖剣・『ジルニトラ』の鞘全体にごく薄く同じような姿が浮かび上がっているのを見つけた。以前は確かに無かった。有ったのかもしれないが、少なくとも気が付かなかった。

「私の使っております『ヴィーヴル』も確かめてみましょう」

何と、予想通り同じように鞘に絡み合う形の金銀の龍の姿がごく浅い線で浮かび上がっていた。

「(メイト、何だこれは。開祖の頃もこんな具合だったのか?)」

「(知らん。だが剣の力と龍の力が馴染んだのは確かだ)」

金の龍は古い記憶を大半失っているのだ。

「(ほかの聖なる剣には、このような変化は無いのかしら?)」

確かに、妻の疑問ももつともだ。

「(龍の器たるお前たち二人の剣にしか現れない印だろう)」

銀の龍はこう答え、重ねて尋ねられても開祖の事は何も記憶していないようだ。そして、双龍は揃ってこう言ったのだった。

「(お前たちがもつと馴染み、もつと強くなれば、その鞘の我らの印は濃くなり、開祖のこともあるいは自らの力で探り出せるかもしれん)」

「(お前たちがもつと馴染み、絆が強くなれば、開祖の行方も分かるかもしれん)」

「なぜ、そうなるんだ?」

いつも龍たちの言葉は唐突だ。

「(開祖はもとは人だったからだ)」

「(開祖は地球生まれだからだ)」

妻も考え込んでいる。自分たちの未来に、どうやら開祖の行方が深く関わっているのは確かなようだと感じたのだろう。

「(そう言う訳だから、もつと馴染め)」

「(そう言う訳だから、もつと気を交わせ)」

それだけ言い置くと、金銀二匹の龍は消えた。

「古文書にこのような龍の浮き彫りに関する記述は有りませんよね」

妻はよちよち歩きのころから、宮殿内の大量の蔵書に目を通して  
いる。

「そうか。なら、僕らは歴代の皇帝が遭遇したことのない事態に直  
面しているんだな」

「その解決法が……」

「馴染んで、気を交わす事だっさ」

思わず笑ってしまうが、「冗談抜きで本当らしい。

「では、やっぱりちゃんと御食事を頂きませんか、無理です」

「クククッ」

「まあ、大真面目ですのに」

軽くふくれっ面になった妻の顔は、愛らしい十二歳の少女そのも  
のだ。

「分かった分かった。ちゃんと夕食は食べようね。朝食も昼食も運  
んでもらうよ。あ、僕が取りに行っても良いけどな。その方がフェ  
リシアは恥ずかしくないだろう?」

「え、ええ」

すでに朝は立って歩けないことが前提の質問で、きまり悪いのだ  
ろう。顔が赤らんだ。

「怒っても脹れても照れても可愛い。本当に可愛いなあ」

さつき着つけてやったドレスを脱がせて、下着を取って行く。脱  
がせる時も楽しめるような下着にした訳だが、裾に豪華なレースを  
タツプり使い赤いリボンで裾を軽く絞った純白のドロワーズに白い  
絹のストッキングという格好にしまうと、その愛らしくも艶め  
いた様子を大いに楽しんだ。髪に飾っていた幾つものダイヤでバラ  
の花の形を作った髪留めを外すと、漆黒に銀が混じる不思議な色の  
髪がはらりと広がる。自分は面倒なので、さっさと全裸になってし

まった。臨戦態勢のそれをちらりと目にすると、フェリシアの顔は赤らむ。

「寒いかい？」

「いいえ……」

スチームを調節して、フェリシアが寒くはないようにしたつもりだが、あとはベッドの中の方が良さそうだ。

「ロフトの方が暖かいよ。行こうか」

暖かい空気は上に上るから、当然と言えば当然だ。やはり今度も階段を使わないでワープしてしまう。

均整のとれた小柄な肉体は抱き詰められた腕の中で、身もだえしている。なめらかで暖かで、良い匂いがある。赤い瞳は時折恥ずかしげに伏せられはするが、しっかりと視線を受け止めようとはしているようだ。ベッドの上に横たえた体は幼い姿なりに艶めいて、全身で誘っているように見える。その顔の前に立ちはだかつて見せると、フェリシアの顔は真っ赤になった。

「ねえ、僕のこいつも見てやってくれ。そして君の可愛い手で良い子良い子してやってくれない？」

「まあ……」

「いつも僕はフェリシアを可愛がっているだろう？ たまにはお返しが欲しいな。それともこいつは嫌いか？」

フェリシアは無言で首を横に振り、小さな手でそっと握りしめた。キスして、口で可愛がってやってくれよ」

思わず声が上がった。そのような事を要求した事は片手で数えるほどしかなかったからだろう。幼女にそのようなものを啜えさせる

のは、やはり犯罪行為めいているという気持ちからだっただが、その自己規制が緩んだのかもしれない。

技巧も何もなく、ただひたすらに思いだけが伝わってきて、思わず昂ぶり予想外に達してしまっただが、フェリシアはすべてを飲み込んだようで、あわてた。

「全部、飲んだのか」

コクリとうなずいたその顔は、あわてているこちらの顔をむしる面白がっているようにも見えた。完全に嚥下してしまっただから、妻はこんな風に言う。

「その方がきつと早く気もなじみます」

「そりゃあ、そうかもしれないが……」

「それに、ペドフィルがどうのこうのと言うこだわりを捨てて下さったのかな、って思いました」

「でも、どう見たってローティーンの君にこんな事をさせちゃうのは、やっぱり犯罪者っぽい気がする」

「御自分でおっしゃいましたのに、いざやってみますと、お嫌でした？ 頑張ってみたのですけど」

「気持ちは良かったけれど、やめておくよ、当分。やっぱり視覚的なインパクトが強いから」

自分のソレが吐いたものがフェリシアの口に有るなどというのは、やはりどこかが間違っているような気がする。

「でも、ダーリンは私の体中『汚い所なんて一つもない』とおっしゃって、キスしてくださいますのに」

そう、確かにそうだ。後ろの穴まで舐め回して、ペソをかかれた事も有る。

「それはそれ、これはこれだよ」

フェリシアは要領を得ない顔をしたが、自分の気持ちというか感

情は伝わったようで、何も言わなかった。

結局うがいを見せて、それから体を温めるリキュールを口移しに飲ませた。

「クククツ、やっぱりこの方がキスもしやすいな」

どうも自分の味がするキスというのは、やはりダメな気がする。すると、それを察した妻は苦笑した。

「僕って結構勝手だよな」

「でもいいんですよ。私はダーリンを愛してますから」

この妻は見た目は幼いのに、やっぱり大人なのだ。その表情を見ていて大いに納得させられた。

94 (後書き)

「金銀二匹の龍は消えた」が正しいです。すみません。

95 (前書き)

何を隠そう、濡れ場なのに大真面目な話をしています。

「フェリシア以前には龍が女性に宿った事が無いとされているけれど、本当にそうなんだろうか？」

「記録で明らかな例では……金の龍も銀の龍も男性にしか宿っていませんね」

「大抵は、皇帝とその廷臣となった異母兄弟だなあ」

「皇帝に金の龍が宿ると、摂政とか宰相に銀の龍が宿る……というのが一番多いでしょうか？皇帝が銀の龍で宰相が金の龍というケースも有るようですが……」

「たまに父子も有るよな」

自分の肉体は、実父で金の龍の『脆き器』であつた先帝フアーン・ド・オルテスが壊れ始めた頃に、生母ギュルバルハル皇后の胎内に生じた。出来の悪い器より、新しい良い器が出来れば、そちらに龍は自然に移ろうとする。

こつした場合、力の喪失を恐れた『脆き器』自身の意思で新しき器の出現を妨げようとする事が往々にして起り得る。

自分の場合は力の喪失を恐れた父である皇帝が次代の力の継承者である息子を闇に葬ろうとした……のだった。ギュルバルハル皇后は、流産をひき起こす毒を皇帝の手の者達によつて飲まされた。そして、子が胎内から流れ出ようとした時に、聖剣『ジルニトラ』が力を発動させてギュルバルハルを兄であるキタイ王のもとに導いた。

つまり、暗愚な皇帝は『ジルニトラ』にも見捨てられたわけだ。

『ジルニトラ』の魔力と、『良き器』の孫であるギュルバルハル皇后とキタイ王の魂の波動は、金の龍にとって心地良く、暗愚で非道な『脆き器』からの完全離脱を金の龍自体も望んだ。どうやら、元来存在していた胎児自身の未熟な魂はギュルバルハルの死と共に完全に

去つたらしい。そのため、空き家状態の赤子の肉体に地球人マーク・ゴルドの魂が入って『強く優れた器』を作り上げた……とまあ、こう言う経緯になる。

自分を殺そうとし、生母を殺した暗愚な廃人を『父』と思ったことなど、一度も無い。

「父が金の龍の器なら、息子は銀の龍の器、あるいはその逆というのが普通なのだが……僕の場合、生母のギョルバルが金の龍の『良き器』であつた人物の孫であつた事が大きいのだらうな」

「お母様が懐妊された時から、『良き器』以上の優れた器となる方だと金の龍は察知したのでしょね」

「見放される立場のファーンの感情など、お構い無しだらうからな」  
「その時点で、銀の龍はどうなつていたのでしょね？」

「十年ぐらいなら、器無しでどうにかなるようだから、帝国内部で宿るべき人物を探していた……あるいは」

「あるいは、ユーグの出生を予知して待ち受けていた、のかもしれないな」  
「銀の龍は私が生まれる以前は、帝国を離れる事は稀だつたと聞いてますが」

「うん。ユーグの命が尽きてすぐ、僕の所に銀の龍がやって来たのは、非常に例外的な現象らしいな」

「でも、金の龍はキタイに行くのも平気だつたわけですよ。確かに金の龍がキタイの王族を器に選んだ時は、皇帝に銀の龍が宿つていて……」

「その時の皇帝は暗愚だつたとされている。もつともキタイの王族に金の龍が宿つたのは、僕以外にたった一回だけらしい。その金の龍の器は皇帝の庶子で、キタイ女王の夫となつた人物だ」

その人物は自分の生母ギュルバルと、先代のキタイ国王フアジルの祖父にあたる。

「気を補ってはいないですよ、たぶん」

「うーん、男同士の愛情関係というのもないとは言いきれないが、そう言う面白い噂の記録は無いよなあ」

「龍達は行方不明の開祖皇帝の中に宿ったときの、心地良かった記憶だけは有るようですね」

「金の龍は開祖の血族の男にしか宿れないと思っていた、って話だったけど……」

「銀の龍も『女の体には宿れないと思い込んでいた』と私に伝えて来た事が有ります」

開祖皇帝の血族が存在するのだから、妻なり后なり居た筈だ。あるいは愛人や恋人かも知れないが。ともかく、皇帝の子供を生んだ女性が居たのは間違いないのだ。

「でも、気を互いに補って増幅できたのは僕らが初めてらしいなあ」「夫婦で龍の器、いや、女の龍の器は私が初めてみたいですから」

確かに……フェリシア以外の女の龍の器は知られていない……だが……

「本当に初めてなのかな？ 開祖がずば抜けて強い優れた器であったのは、なぜなのか時々不思議に思うんだ」

「するとダーリンは、開祖にも気を補い増幅する相手がいたとお考えですか？」

「うん……だが、その相手に銀の龍は宿らなかったのかもしれない……」

「宿ったけれど、暴走した、って事は無いでしょうか？」

「ああ、それなら有り得るな」

「私はクシャダスの凄まじい銀の龍の穢れと、後の剣『ヴィーヴル』とクシャダスの沖の海との関係、何か特別な事情が有ると感じるので」

妻は開祖にも皇后が居たのではないかと考えているようだ。そしてその皇后に銀の龍が元来は宿っていたが魔法を暴走させて、大量の人間を犠牲にしたとしたら……確かに歴史から抹殺されるかもしれない。

「だとすれば、開祖もそのことが引き金となつて、精神的に皇帝を続けて行けなくなつたのかも知れないな」

「銀の龍が謎の貧民街クシャダス誕生のきっかけとなるような大暴走をした後ならば、その穢れは……」

「酷いものであつただろう。開祖が仮に、僕らより相当に力の有る人物であつたとしても、配偶者が死亡するか廃人になるかして、穢れきつた銀の龍を応急措置的にせよ受け入れたとしたら……」

「心身ともに疲労困憊するでしょうね。配偶者が居なければ孤独でしょうし」

「不老不死で、孤独で、妻もいない、そんな僕だつて投げ出したくなる」

「まあ、本当に投げ出せもしないでしょうが……」

「少なくとも自分が皇帝を続けていくのは、勘弁して欲しいだろう。そして地球と自在にワープして行き来できる能力が有るなら、地球で何事かしたかもしれない。自分の後釜を探すとか、穢れを浄化するとか……」

「後釜は、たぶん、見つからなかつたのでしょうね」

「僕らが……そのやつと見つけた後釜なんじゃないか？」

「それまでの『脆い器』たちは、不老不死ではないですし、地球とのワープは出来なかつたようですし……」

「全員オルトの生まれで『開祖の血脈』なのだよなあ」

「地球には居ないのでしょうか？ 開祖の子孫って……」

「そうだなあ、僕は考えた事が無かったが、有り得る話だ」

そうなるとボルの村の伝承が気になる。先ほどの美味しい食事を作ってくれた青年がボルの出身で有るのも、何かの啓示のような気がしてくる。

「女戦士エミーネが皇帝の臣下である事を辞めたのは、何が原因なんでしょうね」

「そうだよなあ……皇帝に仕えて来た功臣で、聖剣『チチエック』の主であつたのに、野に下り、一人で息子イエテルを産み育て、ボルのあたりを開拓して庶民として死んだ……」

「母に聞いたことが有りますが、イエテルと言う方の父親はレオンハート公爵家の創始者でもあるバラムらしいですね」

「うん。イエテルの父に関して記録は全く残っていない。だが、君の母上が聖剣『チチエック』の主になって以降の事だが、僕も一緒にボル村に滞在していたとき、色々あつてね。君の両親は二人同時にバラムとエミーネらしき男女が激しく愛し合う場面を鮮明に夢に見たらしい。二人の聖剣が大いに響き合っていたようだ」

「ならば、私の両親の聖剣がエミーネが使った『チチエック』とバラムの愛剣とされる『パンテラ・レオ』であるのも、それなりの事情が有るのですね」

聖剣には、番と言うか相性の良い剣が有る。『チチエック』と『パンテラ・レオ』は互いの力を増幅し補完する関係らしい。

「僕の『ジルニトラ』とフェリシアの『ヴィーヴル』はもともと番つがいだったのだらうね。恐らく長い間、『ヴィーヴル』のふさわしい主が現れなかつただけで……」

「開祖が最初の『ジルニトラ』の主なら、後の剣『ヴィーヴル』の

主が開祖の皇后だったのでは？」

なるほど……それならば、『ヴィーヴル』と『チエック』の独特な関係もわかる様な気がする。フェリシアの魂を迎えに行く時も最初に反応したのは『チエック』で、クシャダスの沖まで『ヴィーヴル』を誘いに行ったのだ。

「まだまだ、謎は多いな。最初の皇后が存在したとして、どこの誰やらさっぱりわからない」

「そもそも開祖がわからないのですから、無理も無いです」

「そうだな、名前すらわからないのだからなあ」

「最初の皇后が、凄まじい魔力の暴走を起こしたので、それ以降銀の龍は女に宿るのを避けるようになったのではないでしょうか？」

「そうだな。それは確かに考えうる」

「皇后になっても魔力が暴走する事情とは、何なのでしょう？」

「大切なもの、失う事が耐え難いものを失ったのかもしれない。前皇太子ユীগの場合は母と弟・妹だった」

「私なら……ダーリンを失えば、きつと壊れます」

「僕も、フェリシアを失ったら壊れるな」

「本当ですか？」

この瞬間、珍しい事に、夫である自分の意識を深く探ろうとした。一瞬ブロックしかけたが、妻の探りやすいように意識を開放した。

「本当だろうか？ フェリシア……君が勝手に思っていたよりも、僕はずっと深く君を愛しているよ」

「……ええ、疑って、申し訳ありませんでした」

「本当に、そう思うの？」

「ええ」

妻も意識を完全にオープンにしている。自分が強く愛されていた

事を喜び、疑念をかすかでも持った事を恥じていた。

「本当に愛していれば、多少なりとも臆病になるのも当然だ。別に恥じることは無いよ」

僕は羞恥心が強いタイプの方が好みだよ……などと全然次元の違う事を囁きながら、クローゼットの扉にはめ込んだ大きな鏡にフェリシアと自分の裸を映しこんだ。胡坐をかいた中に一糸まとわぬ小さな体をすっぽり納めて後ろから、翺るようにいささか執拗に愛撫を繰り返す。

「でもさ、こんな恰好のまま、大真面目な話も延々出来てしまう僕らって、ちよつと変か？」

「どのみち龍の器なんて、普通じゃありませんもの。ダーリンさえ宜しかったら、私は何だって構いません」

それが掛け値なしの本音なのが自分にもまつすぐ伝わってきて、胸が熱くなる。

「こつ言つ気持ちは時は、どうしてキスをしたくなるのだろうね」「わかりません。でも、私もとてもキスしたいのです」

いささか不自然に首を擦じるようにして、幼い妻は自分の唇を求めた。

「気が合うね、フェリシア」

思いを込めて深く口づけると、愛らしい唇はいつにも増して甘くかぐわしく感じられる。

淫猥と言ってもおかしくない状態でありながら、互いを思う気持ちはいささかの曇りもなく純粹で美しいと言って良いのだった。

96 (前書き)

金の龍の器である夫が、銀の龍の魔法まで使えるようになり、そして……

「ほら、お食べよ」

夫は昨夜言ったように二人分の朝食を自分で運んできた。リゾットと言うか具入りの粥と言うか、そんなもののほか小振りなサンドイッチ、フンワリしたオムレツと新鮮な果物、芋類のグラタン、熱い紅茶と言う感じだった。昨夜酒を飲んだバーコーナーの傍の小さなテーブルに差し向かいの席に座って、窓から見える外の景色を眺めながらぼんやりと食べ物をお口に運ぶ。

「頭は痛くないよね？」

喉は渴いているし、空腹でもあるから思いのほか朝食は美味しく感じたが、なんだか口を利くのが億劫なのだ。無言で頷くと、夫は少し安心したらしい。

「ゆつくりお食べよ」とだけ言い置いて、幾度かワイプしていたなと思う間に、どうやらさっさとベッドメイキングを終え、脱ぎ散らかしたものを片付けたようだ。使ったシーツや下着を洗い場まで持って行く皇帝と言うのも、多分歴代初だろう。だが、それほどに夫はここに人を入れたくないようだった。

「うん。入り口はダイヤル式のロックを使っている。開け方は僕以外はユスフしか知らない。工事関係で人を入れた以外は、原則立ち入り禁止だ」

その内、何処から掃除機を持ち出してきたのは驚いた。

「ダーリン、その掃除機は？」

「地球の僕の部屋に置いてある充電式の掃除機。充電だけすれば、こっちでも使える」

「お部屋って、どう管理なさってるんですか？」

「部屋代さえ払っていればその他は案外チェックされずに、借りたりも出来るもんだよ」

どうやら生まれ育った東海岸から離れて、西海岸の町で部屋を借りて、そこに色々と有ると便利なものを置いているらしい。どうやら偽名を使ったりしなくても、マーク・ゴールドと言う人物が飛行機事故で亡くなったとは知られておらず、伸び伸び出来るようだった。

「掃除機の為に、ワープですか？」

「うん。結構凝り始めると楽しい」

最新型の掃除機も動員して、ロフト部分を納得行くように綺麗にできたらしい。再び掃除機を置きに地球の部屋にワープし、何事も無かったようにここに帰った。そして食べ終えた食器と盆を厨房の方に返してきた。その様子を見てみると、ここがオルトである事を思わず忘れてしまいそうだ。

「ダーリンは、楽々ワープなさるんですね」

「今じゃフェリシアも出来るだろう？」

「地球との間を息も乱さず楽々と、とは行かないようです」

ほんやりと地球を懐かしんでいたら、こう聞かれた。

「何か地球で買ってこようか？」

「みたらし団子がものすごく食べたい……あと、地球の日本語の雑誌や漫画が読みたい気分ですが……日本に行くのは負担が大きいのでは？」

「いや、行った事の有る場所なら全然変わらないよ。でもさ、荷物  
のこともあるから、みたらし団子は東京のもので良い？」

「ええ、もう、十分嬉しいです」

「じゃあ、全部神田のあたりで調達してくる」

ものの三十分も待ったかどうか、神田の大きな本屋の袋と、古本  
の漫画、そしてみたらしに……

「たい焼き！」

「フフツ、みたらしより、どつちかと言うとたい焼きの方が名物  
なんだよ。みたらしもモチモチして悪くない筈んだけどね」

夫はバーコーナアの傍で、湯を沸かしてほうじ茶まで入れてくれ  
た。

「至れりつくせりですね！」

古本の漫画は夫が大好きだと言う、まだ連載が続いている少年向  
けの人気作品で、第一巻から最新刊まで揃っていた。フェリシアに  
は有名な漫画の賞を取った少女漫画の傑作の一揃いだった。こちら  
は愛蔵版仕様だ。

なんとまあ、夫は自分が好きだと言うせんべいにあられまで買っ  
てきていた。

「カフェを開いたばかりのころは、これを手に入れるのも一苦労だ  
ったけどね」

確かにこの一、二年で、夫の力は大きくなったのだろう。

「フェリシアの力も凄く大きくなっていてよ、さ、今は好きなもの  
食べて、漫画でも読んでのんびりしなさいよ」

夫のせんべいを齧る音がする。そう、食べ物を食べる時、大抵夫  
は音を立てなくせに、日本のせんべいを齧る時と、蕎麦をすすする

時だけは例外なのだ。

「お団子もたい焼きも、香ばしい焼き加減で、美味しいですね」

「ちよつとインチキして行列に割り込んで買って来た。どっちもすぐ売り切れちゃうんだよ」

「どうやら、長い行列の頭の方に人にはれないように入り込めたらしい。」

「そんな力の使い方が出来るんですか？」

「銀の龍の記憶変容の力をちよつとだけ借りた」

「ええ？ 銀の龍の魔法を、ダーリンが？」

「うん。去年の後半ぐらいから、ちよつと使えるみたいだ」

「私は、何か使えるようになったでしょうか？」

「フェリシアのワープは金の龍の系統じゃないのかな。君の両親のは別系統だけど。あと、交渉事とか商売がうまくなったんじゃないか？」

「ああ、確かに、オルトでは金の龍は商売繁盛の神様ですものね」

夫の買ってきた漫画を読み終わる頃に、実に良いタイミングでホットドッグとフレッシュジュースが出てきた。ごく軽い昼食といったところだろう。

「この位なら食べられるだろ？」

確かに、ちよつと良い。

「食べたなら、昼寝、ね？」

「昼寝、だけですか？」

「そりゃあ、魚心あれば水心」

「魚心あれば水心」だけを夫はわざわざ日本語で言う。かなり熱烈

なラブシーンの多い長編漫画を読んだ所為か、感情がかなり煽られたようだ。この作品を買ってきたのも夫のちよつとした計略だろうか。

「計略って程じゃないけれど、ちよつとした効果は期待したかな。

絵もストーリーも出来が良いから。でさ、効果のほどはいかが？」

「……効果てきめん……みたいです」

「よしよし、素直な子は好きだよ」

ひとしきり昼寝ついでに愛し合った後、ふと思い浮かんだ。

「地球で開祖皇帝の気配を探ってみる事は出来ないでしょうか？」

「僕は楽に地球との行き来もできるようになったし、フェリシアがそうなるのも時間の問題だと思っよ」

「探るなら、どこから始めます？」

「やたらとオルトの言葉と似た言葉が話されている国……あるいは、日本だな」

「その某国はわかるのですが、なぜ日本が？」

「女神様に関するまじないの言葉のいくつかがなぜか日本語なんだ。オルトの女神様がなぜ、黒目黒髪とされるのか気になると言えば気になる所なんだが……」

「私、お姿をはつきり目にしたことが有りません」

「声と、光と、気配だけだよな」

「龍の力と女神さまの力の平和的な共存に、何か日本が関係しているのでしょうか？」

「京子さんは日本人だったから、女神様のために選ばれた……のかもしれない。そして、墜落する飛行機で京子さんに呼びかけた存在は、日本についてよく知っている可能性が高い。京子さんの孫である存在が日本になじむのは当たり前だが、その番となるユーグの転生が上手くいったのも、転生先が日本である事が大きいのかもしいない」

「某国は開祖の生まれ故郷であるとしても、龍とオルトの女神様との関係をつまぐ取り持ったのが開祖だったかもしれないと言うダールの以前伺った仮説が正しいとするとですね……」  
「女神様に関わるまじないの言葉の幾つかが日本語なのが、やはり気になる」

そのような話を続けながら、仲良く風呂に入って和気あいあいと身支度をして、ユスフ以下皆が待つ食堂で、しっかり夕食を食べた。そして再びワープして、部屋に戻ったのだったが……

「ダールン？」

「見えたか？」

「ええ、見えました。あれは、かつて住んでいた街に残っている古墳だと思います」

「ああ、そうか。ならば、その場所を探るか」

二人とも同じ関西の街に存在する古墳の姿が鮮明に見えたのだった。

「ええ、ついでに転生した人たちが、うまくやっているかどうか、見てきませんか？」

「前世の記憶は無いかもしれないね」

「そうですね」

「でも、僕たちの子供の番（つがい）は地球に生じるらしいから、注意深く見定めないと」

「確かにそれはそれで大事な課題ですが、急ぐ話ではないですよね」

「急ぐ話って……ああ、そうか」

「ネシャートちゃん、近いうちにオルテスに到着するのではないですか？」

夫は実の娘の事なのに、忘れていたらしい。

「義理の親父殿と父親違いの弟と一緒にだな」

「私の実家を訪ねるように伝えて有るのですよね。まずは、ティボ  
ー先生の奥様に学問を仕込んでいただく予定ですが、上手く行くと  
良いですね」

「フェリシア、ネシャートの母親の話、気にはならないの？」

「全然ならない訳じゃないですが、ダーリンにとって、完全に過去  
の方なんです」

「まあね。今の夫と円満な家庭を築いているし、あちらサイドから  
見ても、僕は完全に過去の男だ、通過点だよ」

夫は最初からそうなる事を見越して、オルトの各地で子供を作っ  
たのだろう。

「僕の真の番（つがい）が生まれ出たら、後宮は維持できないと思っていたか  
らね。さすがに子供が二十人いれば、側室を勧めるなんて事も無く  
なると思っただ」

口にはしなかったが、夫が一番危惧したのは「嫉妬」を引き金に  
巻き起こる銀の龍の魔法の暴走だった。

「ダーリンのおかげで、私は『嫉妬』に突き動かされて我を忘れる  
などと言う事は一度も有りませんでした」

「フェリシア自身が生まれてすぐに、銀の龍の穢れを封じたのが非  
常に良かったんだよ」

今考えてもゾツとするほど、銀の龍は穢れていた。あの清め方を  
思いつかないまま、ずっと背負い込んでいたならば、大なり小なり  
魔法を暴発させただろう。

「さつき僕が銀の龍の魔法を使ったと聞いて、驚いていたみたいだけど、性格も影響を受けているような気がするよ」

「たとえばどんな？」

「秘密主義で、焼もち焼きな所だな。ここに僕が誰も入れたがらないのを変に感じていただろう？」

確かに、ここまで誰も入れないのは不思議だった。

「僕が、僕だけがフェリシアを完全に独り占めできないと、すごく嫌だったんだ。昨日と今日で、その病的な部分は大分改善されたよ。うだが、ここに籠ろうと考えた時は、かなり病気っぽかったよ」

「触れ合うことで、その病的な感情は無くなったようですか？」

「薄れたけれど、まだまだよ。まだ存在している。だから……」

夫が完全に癒されるまで、妻としては協力を惜しまない。いや、そんな気持ちだけではない……

「純粋にダーリンと深く触れあいたいです」

「それは、実にうれしい」

夫だけでなく自分も嬉しいのだと、夫にわかってほしい。フェリシアはそんな思いを込めて夫を見つめた。

97 (前書き)

もうすぐ休みは終わりです

二人で関西のとある街を色々探検してきた帰り、フェリシアが一番食べたがっていた店の、変わった形の見たらし団子を手に入れた。

「面白い形だなあ」

「俵型なんですよ」

「炙った加減が、なかなか美味しいねえ」

「何年ぶりでしょう」

「二十四年ぶり？ 違うか？」

確かに、フェリシア自身の年齢ではなく、フェリシアの母ロザリアの年齢で考えるべきだから、そうなる。

「そうやって、団子食っていると、フェリシアって十二歳に見える」

「だって、体の方はそうですもの」

「小学六年生……相当か」

気にするなと言われても、やはり気になってしまっ。

「もう、また、ダーリン、気になさってる。発展途上国なら子供を産む人だって、居ない訳じゃないですよ」

「なんだか砂漠のあたりの貧しい国で強制結婚で十二歳で出産して母子ともに死亡した、なんて悲惨なニュースが有ったなあ」

「またあ……子供はずっと先なのでしょう？ 私たちは普通の人間とは違って、完全に意思でコントロール出来るんですもの」

自分でも思ってみなかつたことなのだが、自分は結構ウジウジした駄目な男なのだった。これまでなら考えても正解の出ない事など考えても無駄だ、自分の選んでしまった選択肢の中で最良の結果を導き出せればそれで十分だ……とまあ、良くも悪くもアッサリ見

切りを付ける事が出来たのだが、この妻の事となると、ずーっとウジウジと尾を引いて考え込んでしまう。それだけ妻が自分にとって重大な存在だからこそだろうが……

「ダーリンが私を大事に思っ、細やかにお考えになって下さるのがイヤだなんて思いませんけれど、持つ必要の無い罪悪感で、ご自分を傷つけないで頂きたいのです。それとも……これも私に宿った銀の龍の気とダーリンが馴染まれた所為なのでしょうが？」

「確かに、その言葉は金の龍っぽいね。フェリシアは逆に僕に宿った金色のから影響されてるんだな」

「まだ馴染みかたが龍たちの言うように不十分なのだと思います」「相手を受け止める事は出来ているけれど、増幅して返す、循環させる、その辺りが不十分なんだろうか？」

今いるソファアの上で、座っている自分の膝の上に妻は自分からにじり寄り、抱きついて跨った。地球から戻りたてで、スウェットシャツとジーンズと言う至って気軽な身なりだが、鮮やかなピンクで細身の仕立ての一枚は自分の好きなブランド・チャンピオンのもので、良く似合う。いつものフリルやレースが沢山のお姫様スタイルとは違い、自らの意思で、自分の将来を決める意志の強い少女と言う雰囲気だ。どっちにしたって、フェリシアが魅力的な少女であるのは間違いないのだが……

「私、こういう格好も好きです。とても」

首の後ろに、細い両腕を回すようにして体をびったりくっつけて、耳元でこんな事を言った。内容は大した事ではなくても、自ら進んで身を委ねる感じと、ややハスキーになった声がそそのる。

「なんだかフェリシアの新しい魅力を発見したって感じで、選んだ

僕としても嬉しいよ」

「ダーリンは良く忘れてしまわれるようですけれど、私の最初の月の物が済んでから、クサントスまで行って、私自身が望んだので、ダーリンは抱いて下さったんですのよ。幾度も御自分をペドファイルみたいだなんて、お考えにならないで。確かに私の見た目は小学生でも、魂はダーリンと同じ年ですのに……早く大きくなりたいです……そうすれば、きっとダーリンもお悩みにならずに、私を可愛がって下さいますよね？」

妻の声はもう既に濡れている。体温も上がって来たようだ。

「実は、悩むのも、背徳感も、強烈な喜びを引き出すって知ってた？」

「そ、そうなのですか？ 知識として、そう言う事があるとは知って……ます……が」

潜り込ませた手で乳首を捻ってやったら、声が裏返る。

「十二歳相手にいけない事している感じが、最近は気に入っている。変態、入ったな」

「良いんですの。ダーリンは素敵な変態さんだから」

「ソファアの上で窮屈にギシギシやるのも何ともイケナイ感じで悪くないけれど、やっぱりベッドにしよう」

ベッドの上に放り出した妻は捲くれ上がったスウェットシャツに膝までズリ下げたジーンズ、その下に地球に出かける時のためのちっちゃなショーツと言うのかパンティーと言うのか、イチゴ柄だ。

何とも可愛い。

「僕のも脱がせて」と言うと、ちゃん脱がせてくれる。小さな可愛い手で大事そうに自分の体に触れられるのは何とも心地よいも

のだ。グレーのボクサーパンツ一丁になったところを、じっと見ている。

「Abercrombie & Fitch、ロゴ入りだけど派手すぎず地味すぎず、気に入ってるよ」

「やっぱり、アメリカのブランドがお好きですか？」

「悪くないと思う。何と言うかその、中身が機能的だっていう風に見えない？」

「高機能なのは、良く存じ上げてます」

揺れる赤い瞳が誘っている。

「フェリシアのはキュートだよ……カワイイ……」

イチゴ柄なんて、脱がせるのを躊躇ってしまう。そのくせ自分の下着は脱いでしまった。フェリシアのショーツとおそろいのイチゴ柄のブラは妙に色っぽい。将来はフランスの高級ブランドのストリングショーツのようなぎりぎりでセクシーでゴージャスな奴が似合うような大人になるだろうが、今は今の可愛らしさを存分に楽しませて貰おう。

「ダーリン……」

小さな白い手で、顔にかかった髪の毛を耳にかきあげてくれる。

「実行するまでにものすごく躊躇うのに、脱がせる時はドキドキワクワクしちゃうんだ。その前後の気持ちの落差の大きさが自分でも良くわからない」

「微妙なんですね」

「フェリシアは、そういうことって無い？」

「ダーリンの腕の中にいると自分が赤ん坊に戻った様な安心感が湧く時と、ひどく興奮する時があります。どちらもダーリンを大好きっていう気持ちには違いないのですが。そして、いつもは頼りがいのある大人のダーリンなのに、ふと、何かの拍子に可愛い男の子に

見えます。そんな時は抱きしめてあげたくなくなるんです」

「どんな風に？」

「こんな風に」

妻は思い切り自分の頭を抱きかかえた。それから、優しい手つきで髪をなでる。思えば早く死に別れた母親にはこんなことをしてもらった事は無いし、育ててくれた祖母は絵本は読んでくれたが、こんな事はしてくれなかった。オルトに転生してから戯れにそんな事をした女官や娼婦に出くわした事は有ったが、こんな強い気持ちの込められたものではなかった。

「ダーリン、可愛い」

「どう見ても、おっさんじゃないか」

「ダーリンはdandyでstylishでcoolです……」

coolには、かつこ良いという意味も有るが、「冷淡」「落ち着き払っている」「ずうずうしい」という意味合いもある。全部含めて自分にふさわしい形容なのかもしれないが、他はいざ知らず、フェリシアのことにに関してだけは、冷淡だったり落ち着き払っていたりするのは難しい。

「……魅力的な大人の男性なのに……それでも、可愛いとしか言いようのない瞬間が有りますよ」

「こいつはフェリシア専用だけど、可愛い？」

どうも、悪趣味だと自分でも思うのだが聞かずにおれない。フェリシアはそれこそ慈悲深い聖母のような表情になって「大切な可愛いダーリンの大切なものですから、もちろん大切に可愛いですわ」と言う。

「本気で僕のことを可愛いなんて言うてくれるのは、フェリシアだ

「けだよ」

「宮中でもダーリンのことを見る機会が有る人間は、ダーリンが可愛い方だって、結構気が付いているように思いますわ」

「うつつ、頼む、今は宮中の事なんて思い出させ無いで欲しい」

「まあ、それほどにお嫌なんですか？」

「だって、せつかく良い所なのに気分が台無しだよ」

フェリシアは顔を曇らせた。

「ダーリン、もう少し休暇を延ばしますか？」

「いや、良い。明日から政務に戻るよ。ネシャートも今日中に着いちやうからねえ。君のご両親に厄介かけっぱなしで、父親の僕が放置って訳に行かないだろう」

「それは、確かにそうですね」

ブランケットにくるまって、体をぴったり寄せると、フェリシアは気分や思いを察してルーチンワークの積み重ねの様になってしまっている政務のつまらなさを十二分に理解してくれたようだ。

「御名・御璽は決済書類に必要でしょうけれど、何かもうちょっと良い方法が無いでしょうか？ 印肉を変えるとか御名の型式を変更するとか……煩い老人は今ほとんど居なくなりましたし簡略化致しませんか？」

「それとも、時間魔法でもかけるか。h a s t e……」

「最大、三倍速ぐらいいは行けそうですね、ダーリン」

「フェリシアと仲良くしたら、四倍速行けそうだ」

「ええ？ そうですか？」

「君の時間魔法の潜在能力まで、伝染するみたいなんだ」

フェリシアは女神の申し子である母親から、その特殊体質を受け継いでいるようで、龍の魔法と別系統の魔法が使える。時間魔法は

その代表的なものだ。h a s t eでスピードを何倍速かに早めてしまつこともできる。逆にS l o wで誰かの動作なり、暴走する馬なり馬車なり、落ちる物体なり、動きをうんと遅くできる。自分はこの二つしか使えないが、妻は恐らくもつと使えるようになるだろう。

「ならば、明日、お手伝いいたしましょうか」

「そうだなあ。恐らく決済書類が一千件程もたまっているはずだから、まずは分類、だな」

「h a s t eで飛ばせるものと、飛ばせないものに分類するのですね」

フェリシアは自分よりさらに、微量の悪意・邪悪な意図の気配に敏感だ。そうした気配を感じた書類は残しておいて、問題が無いものだけをまずスピード決裁する。

「飛ばせないものは、件数は多くないだろうが、厄介なものが多そうだな」

「ではそのためにも？」

「そうだ、そのためにフェリシアと、気を深くなじませなくちゃね」

なんだかんだ言いながら、フェリシアをすっかり裸にした。我ながら手際は良い。

「頼りにしてるよ、奥様」

「最善を尽くしますわ、ダーリン」

凄まじいほどの薄桃色の雲が立ち込めているようだが、この邸が有るブルサでは、その現象と皇帝夫妻との関連は知られていない。

これが帝国の首都オルテスの住民たちなら「皇帝陛下と皇后陛下が

聞におられる」「双龍の気を交わらせておられる」と口々に指さし、良縁成就を願う年頃の男女が、その雲を拜んだりするのが当たり前になっている。それがフェリシアは何とも恥ずかしいらしいのだ。

「ブルサの空が日暮れ前に桃色に染まるまで、頑張っちゃおうよ」

「まあ……」

妻は頬を染めたが、嫌がってはいなかった。

98 (前書き)

皇帝の娘の一人・ネシャートが都にやって来ました。

「都は賑やかだなあ。来るたびに新しい建物が増えている。さすが皇帝陛下の御膝元だ」

「父様、それで姉様をお送りする聖域侯の御邸って」

「ほれ、あそこだ」

向かいの大きなレオンハート公爵の御邸よりは敷地が小ぶりなようだが実に不思議な形の建物だ、とネシャートは思った。とても窓が大きくて、真四角と言っても良い様な、すつきりしたと言っか、ちよつとそっけない外観だ。

「外壁に彫刻も、壁画も、飾りタイルも無い御邸なんて、珍しいね」  
「全くだ。こういう形が、これからの建物の流行になるらしいぞ。」

幾つもの窓の大きなガラスが見事だな」

確かに、庶民の家ならあの窓一つのガラスだけでも、相当な贅沢だ。そう思ってみると、最初そっけないと思つた建物が大変な豪邸に感じられてきた。

義父と異父弟は自分を聖域侯邸に送つたら、一度宿屋に戻り、商売のための仕入れの下見をするらしい。義父は自分が皇帝の娘だと知っているので、決してぞんざいな扱いをしたことは無いが、常に他人行儀だった。母は……皇帝陛下の御子を産んだおかげで運が開けたと感じているようだが、夫である義父と作りあげた家庭が大切で、ネシャートはお客様扱いなのだ。家族の一員ではない。ネシャート一人を祖父母の家に預けたのは、祖父母が望んだからだと母は言うが、母は皇帝陛下との御約束を果たし、加護を頂ければそれで十分だと考えているのではないかと思う。

祖父母は本気で自分を孫だと思ってくれているが、母は自分の腹を痛めて生んだくせに『ネシャートは預かりもの』とっているよ  
うだった。

「いじめられたことは一度も無いけれど」どこか冷たく、他人行儀な親子関係……かもしれない。

だからと言って、年に二度ほど会いに来ていた実父だという皇帝陛下にとって、自分がどんな存在かと言えば、単なる数合わせで苦し紛れに作った子供の一人で、そんなに大切な娘と言う訳でもなさそうだ。

「数合わせなんて……そんなことは無いよ、ネシャート」

半年ほど前にお会いした陛下は、恐らく自分の考えを瞬時に読み取ってしまったのだろう。苦しそうな悲しそうな顔をなさったが、自分の考えは真実を突いていたのだとネシャートは確信している。

陛下の御年は既に四十をとつ昔に超えておいでだと言う事だが、美しい光り輝くようなお顔に皺一つ無く、伝え聞くエスコバル公爵やキタイの女王陛下のような大きなお子達がおいでの方のようには見えない。

「しかるべき貴族の家の養女になるかい？」と尋ねられた時、すぐ断った。皇帝の娘としてどこかの貴族の養女になるのなら、きつと位が高く古くて面倒な家柄だろう。貴族の家の跡目争いや、権力争いは噂話として聞く分には面白いが、自分が当事者になるのは堪らない。

皇帝陛下はため息をつきながら、こうおっしゃった。希望をかなえて下さるおつもりらしい。

「聖域侯夫妻は立派な方々だ。色々と教えていただくことはネシャートにとつてもきつと良い結果をもたらすだろう。女官としてやって行けそうなめどが立ったら、すぐに採用しよう」

「どうやら、自分は宮中に上がってやって行くための教育をこちらで施して頂く、そう言う事らしい。すでに陛下はエスコバル公爵と三子爵の教育を聖域侯に任せておられる。よほど御信賴が厚いのだろう。そのように信賴なさっている方の一粒種の姫君が銀の籠の器でもあられる皇后陛下なわけで……御年が十二歳とはいえ、万巻の書を読みこなされ、聖剣を従えておられる……確かに、そのような方と張り合おうなどと考えるのはよほどの愚か者だろう。」

さて、自分はどうすれば良いのか？ 身の程に合った、でも退屈しないで済む生き方なり仕事なりを求めているのだが、どうなるのだろうか？

「ネシャートちゃん、どうか、あまり難しく考えないでちょうだい。こちらにいるあなたのお兄様達も助けて下さるでしょうし」

義父や弟と別れてすぐ、聖域侯夫人は自分をエスコバル公爵や三子爵と一緒に『午後のお茶』に呼んで下さった。聖域侯夫人と皇后陛下は御顔立ちがソックリと言う噂は聞くが、本当におきれいな方だ。

「聖域侯夫人なんて固い呼び方は勘弁してね」とおっしゃるが、さすがに呼び捨ては難しい。母親達の四人の『兄上』達はロザリア夫人を『お袋様』、皇后陛下を『フェリシアさま』と呼んでおられるが、自分のような身分も無いポツと出の田舎娘がそのように馴れ馴れしい呼び方をして許されようか？

「ネシャートちゃん、この邸に居る間ぐらいは『お袋様』『フェリ

シアちゃん』でいいんじゃないか？」

「僕だって、もとをただせば田舎者。皆全員、生んで下さった母上の身分は庶民だ」

「女官になるつもりだって聞いたけれど、学問、頑張ってるね」

自分と同じ年の三子爵は、こんな調子だから、まあ、うまくやれそうだが……

「（父上に自分が『数合わせだ』などと以前申しあげたようだが、父上のお気持ちをそのように軽々しく考えてはならん）」

「（まあ、ポール、それぞれ状況は違うのです。それに陛下とネシヤートちゃんの間だけで交わされたお話の中身にまで、あなたが立ち入ってはいけません）」

「（申し訳ありません、お袋様）」

「（聖剣を預かる者は、人の思いに立ち入る事に、もっと慎重で細やかでなくてはなりません）」

どうやら、これが噂に聞く『心話』らしいが、エスコバル公爵は自分の陛下に対する発言が無礼だと感じたようだ。そしてロザリア夫人は陛下と自分との間の会話の内容にまで踏み込むのは『立ち入りすぎ』だと言っのたろう。まあ、夫人にしたって田舎娘の自分が不憫とか言う話ではなく、皇帝陛下が第三者に発言内容をあれこれ言われるのをお嫌だろつという心づかいによるのたろう。

「ネシヤートちゃん、陛下は、いや、兄様はちゃんとあなたの事も心配なさっておいでよ。どうか自分自身も陛下のお気持ちも傷つけるような言葉は、あまり使わないでほしいの」

「奥方様、お言葉ですが……私には聖剣も、人の思いを読む力も、瞬間移動する能力も有りません。こんな不出来な者は、田舎でひっそりしていた方が良くとお考えになったとしても、不思議は有りません」

「でも、都に出てきたいと願ったのは自分自身なのだろう？ 違うのか？」

エスコバル公爵に睨まれてしまった。そうだ。確かに自分は田舎で朽ちて行くのも嫌で、華やかで多くの人が住むと言う都会にあらがれていたのだが、それだけではない。……田舎も田舎で、自分を客扱いする母や、なさぬ仲の父の思惑を気にして生きるのもいやなのです……とでも言おうかどうか迷っていた所、夫人が怒りになった。

「ポール！ およしなさい」

自分はここでも迷惑な存在らしい。でも、もうここしか居場所は恐らく無いのだから、粘るだけの事だ。

「もう……困ったわね」

すると急に部屋の空気が歪んだような気がした。すると、そこに夫人にそっくりの少女が立っていた。

「如何なさいました？ お母様」

「フェリシア……」

ああ、この方が皇后陛下なのだ。瞬間移動でお姿を現されるとき  
の感じが、皇帝陛下と同じだ。

「まあ……そうですね。こう申しては何ですが、人にはそれぞれの立場、考えが御座います。初めまして、ネシャートちゃん。フェリシアです。私の肉体は十二歳ですが、魂の年はあなたの父上である陛下と同じなのでネシャートちゃんと呼ばせて頂きますね。今回、

あなたのお暮し、これからのお仕事については、陛下と色々お話をさせて頂いて決めたのです。公務さえ終われば、陛下もおいでになりましょうから、また、ぜひ、お話しなさってね」

それから皇后陛下はエスコバル公爵をお呼びになって、庭に出てゆかれた。

一方で自分は夫人、いや、『お袋様』に自分が使う部屋に案内していただいた。

「まあ、明るくて、眺めも素敵ですね」

小さな書齋に部屋専用の浴室まである。いつでも好きな時にお風呂に入れるなんて、とても贅沢で驚く。年かさの侍女らしき人を呼び寄せ、すぐに風呂に入り髪を結び、衣類を改めるように言われた。今着ている服だって、田舎の両親にしてみたらそれなりに頑張って用意してくれた服なのだが……

「このクローゼットには陛下の御心遣いで、季節の衣類と装身具・お化粧品などが入っています」

自分の持ってきた田舎くさい着替えの出る幕は無さそうだった。

「御家族の御心づくしも、そのうちしかるべき使い道があります」

そうおっしゃって、取り出した服もきちんとクローゼットに納めて下さった。本当に使い道なんて有るのだろうか？

「有りますよ」

また思いをすぐに読み取られてしまった。

「重ねて言いますけれど、本当に自分を『数あわせ』などと思わないで欲しいの。そして自分で自分らしい幸せをつかもって考えは、素晴らしいと思うわ。協力は惜しみませんから、あなたも明日から勉強に励んでくださいね」

「学問を教えて下さるのですか？」

「ええ。女官には今はかなりの学問が必要ですからね」

そのうち風呂に入れられ、髪を『ドライヤー』という道具で乾かされ、結び上げられた。それから、オレンジ色の華やかで品の良いドレスを着せられた。

「本当に良くお似合いですよ」

「さすがに皇帝陛下の姫君でいらっしやいますねえ」

着せてくれた二人の侍女らしき中年の婦人は、口々に感想を述べた。

「後は、この髪飾りとペンダントね」

お袋様は金に真珠をたくさん飾った贅沢な一揃いをつけてくれた。そしてお化粧をちょっぴりして、身支度が完了した。

「さあ、行きましょう。父上がお待ちよ」

お袋様は優しく手を引いてくださった。

「ネシャートちゃんは、お客様ではなく、私の家族になってほしいわ」

自分のどこかいじけた気分が、その優しい言葉でほぐれたようだった。

とても立派な、だけどそれほど大きくは無い部屋で、皇帝陛下は待っていてくれた。

「皇帝陛下は、こんな時はやめておくれ、ね？」

「どうお呼びしましょう？」

「お父さんでも、親父様でも父上でも、何でもいいや。ともかく僕は君の父親なんだから、それらしく呼んでほしいな」

「では……父上」  
「よく来てくれたね」

陛下、いや、父上はギュッと抱きしめてくれた。数合わせ、などと言ってはやはりいけないのだと、思う。父上は父上なりにいろいろ考えて下さったのだ。そう信じて頑張ろう。

「そうだ。ネシャツならきつと自分の納得できるような幸せを、見つけられると信じているよ」

「見つかるでしょうか？」

「頑張るのだろうか？　なら、大丈夫」

やさしい緑色の瞳は、ネシャツ自身よりずっと先の先まで見渡して、励ましてくれている。それがおそらく真実なのだ。ネシャツは感じていた。

## 99 (前書き)

たとえ夫婦仲は円満でも、忙しい疲れ気味の夫、厄介な事件、子供達の問題、色々と課題は多いのです。

「数合わせだったんだ……最初はね」

「でも、今はまるで違うお気持ちなのでしょう？」

「真剣にそれぞれの命の重みを受け止めているよ。そして、どの子も僕が父だと知らない子も含めてすべて、幸せになっただけほしい」

それが掛け値なしの、夫の正直な気持ちなのだろう。

前世の自分の事を考え併せても、人は子が生まれたから親になれるのでは無い。育てるうちにあれやこれや悩み、それでも手を尽くして自分なりに努める事で親になって行くのだと思う。

夫は二十人の同じ年の子供達を生み出した事を、後悔してはいけなないと、それでは余りに子供らに失礼で、許せない事だと思いつながら、やはり後悔していた。子供を作るのは簡単でも、育て上げ全員を幸せにするのは並大抵の事ではない。その重さと厳しさに直面して苦しんでいる。でも、逃げ出さずに受け止めなければいけないと自らに言い聞かせている。投げ出したら……ネグレクトする馬鹿親と同じだとも……

「ネシャートちゃんの考えていた事が、結構ショックですか？」

「そうだねえ。だからって、ポールが変に僕の代わりに代弁してくれちゃうつもりなのも、困るね」

「私、ポールさんに『ネシャートちゃんがそう思うには、それなりの背景が有るのです。どうかそつとしてやって下さい』と言ってしまいました」

それ以上を口にする気にはなれなかったが、夫に自分の考えや気持ち持ちは、あるいは夫の息子とのやり取りのニュアンスは伝えておき

たかった。

夫の背中に手を回し体をいつそう密着させると、夫は更に強い力で抱きしめてくれた。これで全ては夫に伝わるはずだ。

昨日自分がポールを庭に誘い出し、口を開こうかどうしようかと迷っていると、ポールは先手を打ったつもりか「どうか、皇后陛下、僕の未熟さをお許し下さい」と言った。

「謝るおつもりなら、私ではなく、ネシャートちゃんになさって下さい」

そう言い切ると、ポールはぎょっとしたような顔つきになり、次には理由がわからないと言う顔つきになった。

「ポールさんは、人の心の奥底の固く閉じた塊の存在を全く認識なさっておられない。たとえそれがおできになっても、中身を読み解くには至らないでしょうし」

「塊ですか……はい、確かに認識しておりません」

愕然とした表情になったので、それ以上何かを言うのはやめておいたが、自らの未熟さと人の思いを読み取りそれを人に伝える時には、細心の注意が必要である事は認識できたようだ。ポールは人の気持ちの浅い部分は読み取れるのだが、夫や自分、あるいは自分の両親ほどの深さで思いに入り込む力もないし、それを読み解くだけの経験も不足している。

「フェリシアさまは……」

「良いんですよ。ポールさんの思ったとおりの存在かもしれません」

ポールは自らの未熟さをある程度は認識すると同時に、『フェリシアちゃま』の底知れなさを恐ろしくも思ったのだ。

「それで良いんじゃないか？ フェリシアは僕の妻で皇后で、ポールの心からの敬意と畏怖を受けるべきだ」

「敬意はともかく、畏怖ですか」

「そうだよ。フェリシアを怒らせたらオルトが壊れる。きっと。でも、その力を制御して僕の可愛い奥様になり切ろうと務めてくれる」

「まあ……私が人外の化け物だって気がしてきました」

「それが、龍の器であると言う事なのではないかな。だから僕の唯一の番なんだ。僕の奥様は見た目は可愛いけれど、一番の魅力は可愛らしさや美しさではないんだ。想いの深さ、魂の強さ、僕の欠点も捻くれた気持ちも全て知っているくせに受け止めてくれる懐の深さ、そう言う所が本当の魅力なんだ」

「じゃあ、胸のサイズはどうだって宜しいですわね」

まぜつかえているようだが、結構本気で気にはなる事なのだ。

「クククツ、それはそれ、これはこれ。育て上げるのは僕の楽しみなんだから」

夫の大きな手は、乳房を根元から押し上げるように掴むと、じんわりと揉み上げ始めた。

「……楽しみでいらっしやるのは、わかりましたわ」

体温が上がり、呼吸が荒くなったのが自分でもはっきりわかる。

夫はクスクス笑いながら、顔から首筋にかけて、幾度も触れるような軽いキスを落とす。

「ポールはポールでわかってないんだ。ネシャートの感じてきた疎外感や孤独感も……僕が後ろめたく感じる気持ちも」

「ポールさんは……ダーリンが大事なんですよ。ダーリンのお気持ちを傷つける存在全てが許せないでしょう。ネシャートちゃん、自分が望まれて存在しているのだと言う実感を持てずにいるよ。うで……それでも、昨日ちよつとは感じたようですが。金品や名譽には興味が無くて、ダーリンに気にかけて頂いていると言う実感が欲しいですね、きつと」

ネシャートの「自分は数合わせで、勝手な御都合で生まれただけ」と言う気持ちの奥に存在する凝り固まった暗い感情は、なかなか手強い。夫はその塊の頑固さにたじろいでいるようだ。

「……うん」

「ダーリン……ハグですわよ、ハグ」

「ああhugか。『剥ぐ』のかと思って、一瞬ドキッとしたじゃないか。僕が剥ぐとしたら、フェリシアの服やら下着やら、そんなものだけだろうが」

「発音、変です?」

「良いよ、日本訛りの英語、フェリシアらしくて『可愛い』よ」

「なぜ『可愛い』だけ日本語ですか?」

「僕の完璧な発音をひけらかしたい気分だったから」

「まあ……」

「僕は時々自分でも嫌になるくらい子供っぽかったりするんだが、そんな自分をすっかり見せる事ができるのは、君だけだ、フェリシア」

「私の英語は下手糞なままだが宜しいみたいです」

「どうも、ちよつとした事で自分が優位にいるって思えないと、こいつが機能不全起こしそうだよ。時々フェリシアをMommyと間違えちゃいそうになるからさ」

「ダーリンがお疲れなら、無理なさらないで下さい」

「疲れているのに、したいって時もあるんだ。その辺り微妙だね」

「私はハグしてキスしていただけたら、それで十分です」

「十分って言い切られると寂しい」

夫はとても正直な話をしてきている。そして、自分はその気持ちを理解したい。理解は本当には出来ないかもしれないが、寄り添いたい。ともかく自分は夫を愛している。誰よりも愛しているのだと、それだけはわかって欲しかった。でも、どんな言葉をかけたら良いのかわからない。そんな事を思いながら、額にかかっていた夫の金色の髪をそっとかき上げた。

「cuddlingしたいのは、フェリシアだけだよ。子供達はhugごまり」

互いに心地よい体勢で長時間ハグしあう事をカドリングと言うらしい。

「そうそう。で、向きを変えたのがspooning……時々、やるだろう？ 一晩中でも継続可能なのが良いよな」

細やかにあれこれ語らいながら、最後は後ろから抱きしめられて、眠った。

そうして朝を迎えても、夫が心理的にまだかなり疲れているのが、気がかりだ。

共に朝食を取り、午前中は夫のルーチンワークを手助けした。一千件ほど溜め込んでいた決済を必要とする書類が、五分の四以上はよつやく片付きそうだったが、残りは色々問題が有る事が読み取れた。

「この五通の書類は、大いに問題が有るようです」

「最初読みとれ無かったよ」

「特にこの書類のこの文章ですが、強い邪悪な念を感じます。町の発展のためと言いながら、自分達で利益を独占し、取り込めるものは全て取り込んでやるうと考えている人間が書いたものですね」

「どこの誰か、はつきりわかるか？」

「少し、私を後ろから抱いて下さいませんか？ そうすればきっと……」

執務の場で抱き合うのもどうかと思っただが、人払いされているので、この際気にしない事にした。こうしないと互いの力の増幅が難しいのだから、仕方が無い。夫は子供らの事で、少し疲労気味でもあるのだし。

「……書いたのは男で、一見学者風……年は四十歳らしいです。オリーブの油の利権ですから……ああ、ダルヤンの町でオリーブオイルの製造を行っているのですね。その共同組内を立ち上げようというのは一見まともな話ですが……要は学者風の男、ケスキンを中心にオリーブを扱う商人と地主の仲間で国の金を取り込もうという感じですね。貧しい人に与えられるべき給付金が、取り込まれていて特に字の読めない貧しい家の人たちが騙されっぱなしに騙されています」

「中心人物はダルヤンの町のケスキンだな。役人達はどうなっている？」

「新任の県知事は、ダルヤンの町の不正に気づいてません。町の顔役は一人を除き、みな悪事に手を染めています。積極的に染めていないまでも、金を貰って見て見ぬふりですね」

「農民達はなぜ、直訴しないのだ？」

直訴も許しているし、その件については触書も度々出している。いかなる庶民であっても強く念じれば夫も気がつくかも知れないの

だが、どうもその事自体、有り得ないと思いついて入っている農民はまだまだ多いようだ。特に識字率の低い地域ほど、そう言う傾向が強い。

「畏れ多いと。自分達のようなものの為に陛下自らおいでになるという噂は信じられない。神殿までわざわざ出かけて行っても、神官たちに散々叩かれ、追い返される……らしいです。ダルヤンの大神官は不正に深く関わっていますね。ケスキンから、かなり貰っているようです。値段を吊り上げる不正な価格調整の為に、オリブオイルを神殿の大きな地下室に溜め込んでいます」

「オリブオイルの長期保存は無理だろうか？」

「でも……上手くやると二年はいけるようですね。二年前の油を絞りたてだと嘘をついて売るようです」

「ひよつとして、この前カフェ『金と銀』の商売用に買ったのも、この宮殿に納入された分も、二年前のオイルなのか？」

「どうやら、その可能性が高いですね……大膳職の大甕の中身と……ダルヤンの神殿の地下のものは……同じ気配を纏っています」

さすがにここまで探ると、疲労する。力の集中が続かないのだ。後は出来る事をするしか無い。夫とあれこれ話を詰めながら、執務室で軽い昼食を取り、一緒に書類を纏め、各方面に命令を出す。なかなか規模の大きな事案で、すぐには片付かない。

「新任の県知事が……ああ、あいつか。頭が固いんだよな。秘密は守れるだろうか」

夫は恐らく、午後一杯、下手をすると夜までオリブオイルの件にかかりきりだろう。どうやら、中心人物であるケスキンとダルヤン大神官だけは身柄を先に確保してしまう手筈を整えるらしい。

「その二人の直接の調べだけ、僕が明日にでもやらなくちゃならん

な」

「何だか、お仕事が増えてしまいましたね」

「でも、これだけ事が大きいし、放置できないよな」

「ええ……」

溜息をつきながら、夫は「午後のお茶はフェリシアだけで行ってくれ。ネシャートの様子も後で聞くよ」と言って、別れ際に手を振った。

ネシャートの学問初めとなったようなので、様子を見に実家に『午後のお茶』に出かける。

「ネシャートちゃん、頑張るつもりみたいよ。あとね、ポールが……」

母・ロザリアによるとポールはネシャートに対して、真摯な態度で先ほど謝ったようだ。まだ多少ぎこちないが「兄として」頑張るらしい。忙しい夫に一つは良い知らせを持って行けそうで、フェリシアはほっとした。

100 (前書き)

『ただの皇帝の息子』とマークとの違いは？

「ネシャートはまずまずの調子って感じか」

「ご飯を美味しく食べて、気持ちよく眠る事が出来ているようです」  
「まあ、君の実家の飯は何でもうまいけどさ。ポールが考えを変えてくれたみたいで、よかった」

夫にとっての大きな懸案の一つは山を越えたといったところか…、もう一つの懸案は明日が山場だろう。

「フェリシア、やっぱり手伝ってくれ」

「はい。取調べですか？」

「うん。ダルヤンの大神官はもう、尋問もあらかた済んだ。奴の怪しからん悪事の証拠を幾つか突きつけて締め上げたら、すぐ自分の知る限りのことは吐いたと思うよ。免職・入牢は免れんな」

夫の尋問は一切肉体的な暴力に頼らない。相手と自分だけで対峙して調べを進めるのだが、かなり疲れるようだ。

「相手が自分以外誰も知るはずがないと信じている事、秘めてきた感情や思いを暴き立てて突きつけるんだが、犯罪者相手とは言え、結構気が咎める時もあったね。疲れる」

「犯罪者でも、幼い無垢な時代が有りますものね」

「うん。その神聖な思い出なり、決意なりはなかなか殊勝であったり美しかったりするものだ。だが、それを生きてゆく過程で歪めてしまったり、封じてしまったり、してるんだよな」

相手の内面を深く掘り下げて読み取るのだから、疲れない筈がないのだ。幾ら権力を握ろうとも、人間離れた特殊能力を持つと

も、かつて健全な先進国の一市民であった頃の間を忘れていない。それが夫のすごい所であり、自分も見習いたいと思う所だ。

「そういう手法は心理カウンセラーめいてますね」

「随分と強権的で高圧的なカウンセラーだな」

夫は……相当な金額の公金の使い込みと不正蓄財・社会的弱者救済のための給付金の取り込みなど、あくどい手口で罪を重ねてきた元・大神官に、病で幼いうちに死に別れた母親の最期の言葉が「正しい事を貫く強い心の人になってほしい。それが母の願いです」というものだった事を鮮明に思い出させた。

「お前の母上は立派な方だったのだな」

夫のその一言で、五十過ぎた肥満体の男が号泣したらしい。

「デブの禿親父が泣いても可愛くないからな」

夫は苦笑するが、その言葉にはほろ苦い感情が籠っている。号泣した五十男は、後は口述筆記の係官が居る前でも、すらすらと自分の悪事の手口について語り初めたらしい。

「それにしても……悪の手口を人に教えそそのかす方が罪深い」

今回の犯罪を計画立案したのはケスキンだが、決して強引には誘っていない。「ちよつと手助けしてくれれば」とか「ほんの少し知らんふりをしてくれれば」といった具合で、幾人も人間を仲間に誘い込んでいる。

「ちよつとしたこと」でたんまり儲かる、と持ちかけられて、断固として断る事のできる人間は少なかったのだ。それだけ、ケスキンの言葉が自然に響くよう緻密に練り上げられたものだったのだろうが……

翌日のケスキンの吟味はダルヤンの牢獄で行われた。

牢の役人達は皇帝と皇后が「御自ら取調べに当たられる」と言うのでピリピリしていた。

「食事・寝具についてはキッチンと規定通りのものを与えるように」と言う通達は律儀に実行されたようだ。

「キッチンとした裁判制度も無ければ、弁護士などと言う職業も無い世界」なので、せめてそのぐらいはまともにも囚人を扱いたいと言う夫の考えでもあった。

オルトでは、従来は神殿の神官が神意に基づき裁くと言う事になってはいたが、甚だ恣意的でいい加減なものだった。全国の神官のトップが首都・オルテスの大神官であったが、今は廃止された。皇帝は従来も『全神官を束ねる神の代理人』と言う位置づけだったのだが、長らく有名無実化していたのだ。夫の開祖以降最高とされる『金の籠の器』としての能力の高さは、その有名無実化していた称号に現実味と権威を与えた。

引き出されてきたケスキンは腰縄を打たれ手枷をされていたが、手枷は外して机をはさんで夫と自分が並ぶ向かい側に、座らせた。三人とも同じ素材の同じタイプの椅子だ。この辺りがオルトの間人にはわからないらしい。

「皇帝陛下なら高貴な方がお掛けになるにふさわしい物をお使いになり、取調べを受けるものは床に這い蹲らせるか、立たせるかなされば宜しいかと思えます」

役人達は口々にそう言ったが、夫は自分の考えを通した。

「質問があるなら、受けるよ。答えられる範囲でだが」

余りに穏やかな夫の声にケスキンは驚いていた。

「恐れながら……陛下はどのようにして私の企みをお知りになりましたのでしょうか？」

ケスキンは落ち着き払っている。計画が失敗して残念と言う気持ち以外、殆ど罪悪感も何も無いようだ。夫や自分のように心の中を見透かす事のできない通常の間人相手なら、この男、シラを突き通せそうだ。手強い。

「それは手の内をさらす事になるから、教えられない。別の質問にしておうか」

「では……なぜ皇后陛下も御同席なさっているのですか」  
「僕の力を増幅するためだよ」

なぜ、増幅する必要があるのかと重ねて問いたかったようだが、言葉は何も出てこなかった。

しばらく、沈黙が続く。

ケスキンは夫に対して屈折した感情を向けている。「権力に胡坐をかいているわけでは無いようだが、特別な力を持って生まれ無ければ、自分とどれほどの違いがあるものか」などと感じているようだ。

「（ダーリン、この男……心の奥底に秘密を隠していますね）」

「（重大な秘密……だな）」

「（出生の秘密……ですね）」

「（ふむ。屈折しても当然か）」

夫の手に手を重ねる。すると一つの光景が見えてきた。病床の女性と、賢そうな少年……ケスキン本人だ。

「私はあの方が憎い。何もかもを台無しにした、あの方が憎い。お前の父上ではあるけれど……お前には何の罪も無い……だが、お前のその顔はあの方に何処か似ているの……だからお前を私は……」

ケスキンの母は廃人に近付きつつあった先帝のファーンに、無理やり怪しげな薬を飲まされて嬲り者にされ、ケスキンを身籠ったのだった。壊れつつ有る器は、病的に性欲が強まる事も珍しくは無いらしいが、やり方が実にえげつない。更に身籠った途端に今度は子を墮ろす為の毒を盛られかけたので、宮中を逃げ出したようだ。その逃亡には、皇帝の後継者問題に關与して勢力を拡大したいと言う野望を持っていた先代のダルヤン公爵の手助けが有ったようだ。

「（先代のダルヤン公爵は相続人である息子に、ケスキンの出自について何も伝えていないな）」

「（ダーリンが即位なさって、ケスキンの『出番』が無くなったと見たのでしよう）」

「（……母親は毒性の強い媚薬を飲まされ、更には、少し飲み込んでしまった墮胎薬とその後の出産で、起き上がれない程に健康を害した、そう言うわけか）」

「（ケスキン自身、左半身に生まれつき軽いマヒがあるのは、墮胎薬の所為でしょうか）」

「（僕の所為で『皇帝の息子』と名乗る機会も永遠に失われたわけだ。多少憎まれても当然か）」

「（でも、権力闘争の渦から逃れる事が出来て、ホツとしてる部分もあるんですね）」

「（権力争いの道具にされる危険性は減ったが、ダルヤンで一生埋もれるのもイヤだと思っている）」

「（その辺りは微妙ですね）」

ケスキンは黙り込んで、眼をつぶり何事か考えているらしい皇帝の顔を注視したが、急に眼を開けた皇帝と視線が合い、慌てて目をふせた。

「先帝フアーンは晩年は完全な廃人だった。酷い壊れ方だったよ」  
「……はあ……」

いきなり先帝の話をされて、やはり衝撃を受けたようだ。

「君の個人的な動機は、分かったような気がする。だがね、不正な手段で金を手に入れては、やはりいかんだ。特に僕が許せなかったのは、貧しい人々のための給付金の取り込みだよ。さあ、手をお出し」

何をされるのだろうかと手を机の上に出しながら、ケスキンはおびえ始めていた。

「君の犯した罪で引き起こされた結果について、多少は伝えられると思うからね」

差し出された手を夫はがっちり掴んだ。そして数多くの人々の嘆きの声、給付金が最後の望みの綱である貧しい家庭の様子を幾つも見せた。給付金が届かないために学校を休まされ働かされている子供や治療が受けられない病人、飢える幼い子供などなど。すべてケスキン一味の資金取り込みが原因で、苦しんだ人ばかりだ。フラッシュする鮮明な映像の数々と、強烈な負の感情の波動……初めての人間には強烈な衝撃だろう。

「こ、これは？」

「君の犯罪行為により、苦しんだ多くの人々の意識の一部だ」

夫は更に畳み掛ける。

「今のところ探り当てた人たちは一応救済できているが、中には間

に合わず、命を落とした者もいた。直接的には無いにせよ、君が殺したも同然だな。賢い君のことだ。自分のしでかしている事がどのような結果に結びつくか知らないわけではなかったらう？」

「知らなかったのです。本当には知らなかったのです。本当に給付金が貧しい人に届くものだと信じていませんでした」

有名無実の給付金の先例は有った。確かに。そうしたものはすべて地元の領主や顔役の間で宜しく分配されてしまってきたのだ。ケスキンがそうだった類のものと、夫が始めた制度を同一視したのは、ある程度は理解できなくも無かった。

「だが、君は『誰が死のうと、知ったことか』とも思っていたな」

冷え冷えとした利己的な感情と、強烈な自負心……：：： 皮肉にも皇帝の実子であると言う事實は、ケスキンにとって不幸の元であると同時に、皇帝なぞ何するものぞと自負する根拠でもあったのだ。

「それに、君が使い道について適切であると信じていなかったからと言って、国庫の金を勝手に君が取り込んで良い事にはならない。かつては善良な少年であったようなのにな。何ともまあ、ひねくれたまんだ」

ケスキンは自分の内部を深く覗き込まれているという実感に、恐怖を覚えていた。

「君と僕の違い？ そうだな。志の違いかな。多少僕の方が条件としては恵まれていたが、確かに本質的な人間としての能力は大差無いのだ」

「大差無い方が、龍の加護をお受けになりましょうか？」

「僕だってなぜ龍の器などと言う奇妙な存在になってしまったか、

本当の理由は知らない。ただ生まれてこの方、龍と馴染んできて分かったのは、龍は馬鹿正直で、物欲が少なく、自らの欠点を認識している人間を好むようなのだ。いずれの項目も、君には不足している」

次の瞬間、ケスキンの目に金銀の龍が絡み合いながら射る様な厳しいまなざしを向ける様子が見え、一瞬意識が飛んだようだった。

「神気を受けて、眩暈がしたか」

「そのようです……はあ……わかりました。よくわかりました。私の考え違いでした」

ケスキンは恐怖の汗で体中がすっかり濡れていた。そして、居住まいを正すと今回の犯罪に対する供述を始めたのだった。

「これで、おそらく穢れは清められるね」

「さほどひどいものではないと思いますよ」

ひよんな事から手に入れた血の色のようなまだら模様の入った褐色の握りこぶしほどの大きさの玉は、かつて神として祀られていた存在が引きこもり、動きを止めた姿だ。

「もともと祟り神であった存在を従えて、その土地の神とするなんて、なかなか面白い発想ですよね」

「そんなことをしたのは、やはり開祖皇帝だろうな」

地球へのワープを繰り返す内に遭遇できた開祖皇帝らしき存在の名残……あくまで名残だが、開祖がどのような存在であったのかわり深く知る手掛かりは確実に手に入れた……そんな風に妻も自分も感じていた。

「この泉に以前沈めた『サミーア』と『バスイール』は、まだ出てきませんね」

「僕らが手で運んで沈めてやったわけだが、出てくるときは自分で姿を現すんだろうか」

「そうですね。確かにあの二本の聖剣は、風変わりですね。実戦用じや無いようですし。どんなあらわれ方をするのでしょうかね」

「結果が現れるまで、僕らはどのぐらい待つことになるんだろう」

「そんなに長くは無さそうですね。数年でしょうか？」

「フェリシアにはそんな予感が有る？」

「ええ。私たち自身が……何か大きな一つの段階を超える、そんな気がします」

「今日は、どうする？」

「皆をあわてさせるのも気の毒です。予定通り帰りましょう。しな

「ければいけない仕事も山積みですし」

妻に生真面目な調子でそういわれてしまつと、ピネ村に寄り道しようかとも言いかねた。

「寄り道しますと、明日の予定が有りますから……」

そうだった。春の農作業の開始時期に先立って、色々定めておくべき事が多いのだ。

「あの二本の聖剣を沈めた日は、秋の半ばだったかな。 pink - head knotweedの花がたくさん咲いていて、日本語じゃ姫蔓蕎麦（ひめつるそば）って言うらしいが……キャンデーが散らかったみたいだった」

そうだ、あの日妻は「ピンク色の金平糖を散らかしたみたい」といったのだった。今は葉が赤くなっているが、それでも花は残っていた。教会の結婚式で撒いたのは、もとは米ではなくて金平糖だという話をした……そう言えば、結婚式の話をしたのに……妻は全然乗り気では無かった……思考を閉じてこの原っぱで眠ってしまい、自分が背負ってピネ村の宿まで行ったのだった。

「花、まだ結構残ってますね」

「小さいけれど、強いのだな」

「あのころは、二本の聖剣を運んで沈めただけで私も力尽きるほどでしたが、今なら違うでしょう」

「今なら、そのまま二人でオルテスにワープ出来てしまつ」

地球への往復の後、神域の霊泉で玉を沈めても、まだまだ余力が有る。だが、そのおかげで、以前の様に泊まり込む口実が無くなつてしまった。

「残念ですか？」

「フェリシアは残念じゃないの？」

「私はダーリンと一緒になら、どこだって構いません」

「フフフツ、それは僕だつて基本はそうなんだけどさ、ピネ村でのんびりしたいなつて思つてさ」

「私も本当はそうしたいのですけれど……」

「でも無理か。わかつた、わかつた」

予定通り、オルテスの宮殿に帰り、夕食を済ませ、フェリシアと共に入浴する。考えてみればほぼ日課になつてきているのだが、月の物でも無い限り拒否された事は無い。幼い頃からずっと続いた習慣であつたからだろつけれど……正直な話、近頃は本来の目的を少々逸脱した状態が日常化している。

「どうもまずいわけじゃないんだが、美味しいとも思わないなあ、大膳職の料理は」

「先日の古いオリブオイルが響いているのかもしれないね」

「ああ、それはあるかもな。他にも原因があるかもしれんが……」

「……つああ……」

湯に浸かつて普通に会話しながらも後ろ向きに膝に乗せ抱きしめているその手を、胸や足の付け根の周辺でつい彷徨わせて刺激を与えてしまう。耳朵を軽く舐め、胸の上に置いた手で成長中の乳房を強めに握り、もう一つの手で一番敏感な核を探る。顔が見えないのが、少々残念だ。瞬間漏らす溜息が、何とも悩ましげだ。いつの頃からか、甘さの中に切迫した欲望が見え隠れするようになった。それでも、話題が真面目に検討すべきであつたものの場合、必死になつて話題の方に集中しようとする。そこで更に悪戯を続けると……困つたと言つ顔になる時と、夫である自分に軽い怒りを向ける時と、

更には萌した欲望に身を任せようと言う時、それぞれにニュアンスは異なるが、最終的にはいつも受け入れてくれる。そうした場合の情の深さに、情念の重みが増した。

「怒ってないよね？ ん？」

「……い、いきなり……すぎます」

「だって、可愛くて良い匂いがして、とつても敏感で、反応が魅力的なんだから突発的にこんな風にしちゃうのも無理ないだろ」

我ながら強引な言い訳だとは思うが、何、構うものかと思う。自分はいささかも嘘をついてはいないし、妻には嘘が無い事はすぐに分かるのだ。普通の男女ならこれほど正確に自分の感情を伝える事は難しいだろうが……

「お、お風呂だと……」

湯あたりしそつだとか、疲労度が激しいとか、妻は気になるようだ。別に愛し合うのが嫌なのではない。

「じゃあ、もう上がるう。体を拭いて髪を乾かすからね」

互いに体を拭き合い髪を乾かすが、地球のような風量たつぷりのドライヤーは無いのでやはり具合が悪い。それでも地球から持ち込んだ幾つかの電池式や充電式のヘアアイロンで、どうにか工夫して早く乾かす。

「髪を乾かす魔法が有ると良いんだけどな」

妻の髪ををいじること自体は好きなのだが、気がせくとふとそんな事も思う。

「火の系統の魔法だと、どうしても攻撃系のようなものですものね」

「風系統ならどうか」

実際に魔力を行使できるのは、聖剣の主になったものだけで、オルトの一般の人間は全く魔力を使えない。魔力が有っても無駄に溜めこむだけで、上手く外に放出できないのだ。

「うまく放出できると、何か有効利用できるでしょうか？　あるいは溜め込みすぎて体を壊すのを防げるでしょうか？」

確かに。長男ポールの母ハリカは、溜め込んだ魔力で体を損ない、亡くなった。

「……あ……その、ダーリン」

夫が亡くなった初恋の相手を思い返したりしたら、やはり妻としては気分は穏やかではないだろう。ましてや妻は嫉妬深く独占欲が強くなる銀の龍を宿らせているのだ……だが、妻は……

「フェリシアは銀の龍の器としては、やはり変わり者だね」

妻の中には嫉妬らしい嫉妬の感情は感じられなかった。その代わりに、夫である自分を気遣うようなやさしい波動が感じられた。だから、よけいにこの妻が唯一無二の特別な存在だと強く感じる。

「そ、そうですね？」

髪もすっかり乾かし終わったので、バスローブにくるみこみ、ベッドに運ぶ。

オルテスのこの宮殿は古いつくりなのでどうも暖房は不十分だ。美しい大理石造りの暖炉の火が燃えてはいるが……十分暖かいとは言えない。すぐに二人一緒に寝具に潜り込むが、そうすると妻の裸をゆったり楽しむのに、少し不便だ。これがピネ村の小さな邸なら赤々と火が燃える暖炉の前に大きな毛皮を敷いてその上で戯れる事もしやすい。だが、この宮殿は無駄に部屋が大きくて寒く、女官の手前、敷物の上で夫婦二人が転がり戯れ交わるのは……出来なくは無いが、妻が恥ずかしがって嫌がるだろう。

「ダーリンは……暖炉の前が、宜しいですか？」

「いや、ベッドの周りをしっかりと覆って、籠ろう」

天蓋から厚手の覆いを垂らすと真っ暗だが、それならそれ、仄かに光るフェリシアの体を観察できるのだ。

「ダーリンのお体も光りますね」

魔力が強くなってから、互いの体の光り方が以前より明るくなつた。

「久しぶりだからちょっと新鮮だね」

「深海の底の魚にでもなつたような気分です」

「本当だね。戯れる深海魚の番ごっこも悪くないな。僕は寄つてくる他のオスに体当たりしたり噛み付いたりして、君と言う綺麗なメスを手に入れたラッキーなオスの役だね」

「まあ、ダーリンに戦いを挑むものなんて、このオルトに居ません」  
「でも、フェリシアにぶしつけな視線を向ける馬鹿は一杯居るじゃないか」

「確かに、無礼で不愉快な妄想をする愚か者は、かなり居ますね。ああいう連中に出くわして、怒らずにいるのは正直難しい事があります」

酷い妄想をするのは……好色で無能な貴族の男のだが、例外なく勝手にフェリシアの裸を想像している。そう言う男に出くわすと冗談抜きに激しい怒りが湧き、ポーカーフェイスを通すのが難しい。

「今度一度、ああいう馬鹿には軽く神気でも当ててやろうか」

「でも、それをなされると賢帝と言うダーリンの評判に傷が付きませう」  
「評判なんて糞食らえだがね。でも、まあ、悪夢でも見せるだけで勘弁しておくか」

確かに評判と言うものはなおざりには出来ないものだ。無論理屈はわかっている。

「わかっていらっしゃるのに……でも、本当に嫌ですね、ああいう連中」

フェリシアと自分が許せないような酷い妄想をする馬鹿貴族は五人居る。全員無能で、贅沢に慣れた老人だ。

「気が合うね、メンバーもぴったり一緒じゃないか。ねえ、悪夢を連中にプレセントしよう」

「ええ？ 本当に」

「うん。そうしたら、宮中に出てくるのも怖くなって、親父よりずっとましな息子達に代替わりするじゃないか」

「フフフ、どんな夢を見せますの？ 余り怖がらせると、心臓が止まりませんか？」

「それでも良いんじゃないのか？」

「本当にそうお考えですか？」

本当に命を取る事までしたら、フェリシアに軽蔑されてしまいうだ。

「ちょっと、そうしたい気分にもなるが、実行するとフェリシアの僕に対する評価が大いに下がるからやめる」

「ええ、確かに。それに、下手をすると穢れを帯びる可能性も有りますし」

「フェリシアは……僕に……善良な市民としての良識を失って欲しくないのだろうか？」

「はい。そうです。そして、それが有るからこそ、私達は歴代の龍の器より力を得たのだと思っています」

「なら、慎重を期して、実行は明日以降の連中の動きを見てからにしようか」

その後はとりあえず、互いの気をよりいっそう馴染ませる事に専念した。

随分と控えめな内容の悪夢を五人に見せたのは、それから丸一月

連中を観察してからの事になった。おかげで、新しい政策をやる上で、随分と風通しも良くなったのだった。

102 (前書き)

ネシャートを吹っ切らせたものは？

「ネシャート、頑張るねえ」

「大学に入りたいけれど、今まであまりにも勉強が足りなかったから、必死なの」

帝国の大学は年齢も学歴も身分も性別も関係無く、ただ入試に合格する事だけが唯一の入学条件だ。

昨年から男女を問わず、採用試験に合格する事が官吏登用の条件になった。特別に、近く自分は女官見習いに採用して貰えるらしいが「正式採用は試験に合格しないと無理だ」と父である皇帝陛下からも申し渡されている。大学卒業は採用の条件ではないが、大学卒業程度の学力が無いと到底採用試験は合格できないと言われている。

「そうかあ。僕も大学に入る事になっていくようなんだけど、入学してついて行けるかな」

ネシャートが図書室で自習していると、ギルネ子爵オルハンが話しかけてきた。

同じ年生まれで、ほんの三日ばかり自分より先に生まれたと言う異母兄にあたるオルハンは、あまり堅苦しいことも言わず、子爵ではあっても庶民的な感覚のままのようで、ネシャートとは一番よく話をする。

「ユクセルもサイトも、その……もっと人の上に立つべき立場を意識しろと言っただけだねえ」

「でも、オルハンは聖剣の主様なのですもの、どうしたってそうならざるを得ないでしょう？」

「そうなんだよねえ。でもさ、父上に何うとあまり上だの下だの考

えず、自分がどうすると皆のために役立つ人間になれるか考える事が大切だって仰るし」

「確かに皇帝陛下はあまり身分の上下については、あれこれおっしゃらないわね」

「ネシャートにとっても父上だろ？ 皇帝陛下ってお呼びすると悲しまれるよ」

「そうね、そうみたいね。だから、お会いする時は父上とお呼びするけど、自分があの方の子供だなんて実感持て無い。あんまりにも何でもお出来になるし、何でも御存知だし、私の考えて居る事なんてすっかりお分かりだから、それこそ神様みたいで……」

「そうだよな。僕やユクセルやオルハン程度の力じゃ、君の考えている事はボンヤリとしか分からないし、ポール兄上だって、僕らよりは多少強いつて程度みたい。父上やフェリシアさま・親父様・お袋様みたいにすっかり全部とはいかないんだよね」

「自分の考えていることが全部わかってしまうなんて、嫌。第一恥ずかしいし」

「僕はわからないんだから、そんなに嫌がらないですよ」

「でも、ぼんやりとはわかるんでしょ？」

「普通の人だって相手の様子を注意深く観察していたら、色々分かるだろう？ それと大差無いって」

オルハンは責任を感じているようだった。四人の兄たちも親父様・お袋様も『力』の持ち主で、普通の人間の考えぐらい簡単に見通せると言うような事をネシャートに話してしまったのは、オルハンだったのだ。

「ネシャートはやっぱり父上の子供だから、普通の人間よりずっと読み取りにくいし、あんまり気にしないでよ」

「でも、子供っぽいとか、知恵が足りないとか、物を知らないとか、皆様色々呆れておられるのじゃないかしら……皇后陛下は……親切

にはして下さるけれど……夫がよその女との間に作った子供なんて、本当は御不快でしょうし」

「そんな風に言っちゃったら、僕ら兄弟姉妹全員がそうじゃないか」「あなた達は聖剣の主様なんだから、皇后陛下だってお認めにならざるを得ないでしょう。でも、私はそうじゃないもの。田舎に引っ込んでいればよいのに、ノコノコやってきて鬱陶しいとお感じなのじゃないかしら」

聖剣の主である四人は、自分とは立場が違う……そう、ネシャートは思っている。

自分以外の皇帝陛下の娘たちは誰も都に来ていない。それぞれ母親と一緒に一般庶民として生活しているのだ。それなのに、自分だけがこうしてノコノコとやって来て、皇后陛下御自身の御実家の厄介になっているのだ。皇帝陛下の手前、自分を受け入れざるを得なかっただけで、本当は……御迷惑で御不快だろう……

「違う！ それは違うよ、ネシャート」

「皇帝陛下、ええつと、父上にもそう言われたけれど、そんな事有る？ だって、夫がよそで作った娘よ……ああ、そうか。皇后陛下も龍の器でいらっしやって、神様に近い方だから、こんな並の人間の下卑た考えとは全然次元が違うておられるのかな？」

「僕に言えるのは、皇后陛下と言うかフェリシアちゃまは、そんなケチ臭い下卑た考えとは無縁でいらっしやると言う事だ。父上があればほど深く信頼なさる方なのだから、そりゃあ特別な方でいらっしやるのは間違いない」

オルハンとはそこで別れた。

その後はテイボー御夫妻の所で質問をしたり、昼食を頂いてからお袋様と午後のお茶を頂いたりした。

お袋様は「頑張ってるね」とおっしゃって下さったが、自分の「ケ

「臭い下卑た考え」をどう感じなのだろう？ オルハン達は相手の体に触れないと、相手の考えはちゃんとは読み取れないらしいけれど、お袋様はきつと違う。どこにいる誰の心も隅々まで読み取ってしまわれるという皇帝陛下ほどでは無いにせよ、すぐそばにいる自分のような小娘の頭の中身など、簡単に読み取ってしまわれるだろう。

「もうすぐ……フェリシア、いや、皇后陛下もおいでになるわ。無理には言わないけれど、少しお話をしても良いのでは無いかしら……」

お袋さまは、小さなため息をつかれた。おそらく……自分の考えには、色々「下卑た」所が有るのだろう。それにしだって、皇后陛下とお話？ そりゃあ、皇帝陛下の唯一の妻でいらっしやるのだから、血のつながらない夫の娘でも監督なさる必要が有るのかもしれない。あちら様はお嫌だろうが、自分だって気は重い。

どこでいつお会いするのか、そんなお話は出なかったが、どうなるのだろうか？ ネシャートは落ち着かない。気晴らしのために少し裏庭を歩く事にした。

「ネシャートちゃん、ここに登ってこない？　すごく良い眺めなのよ」

大きな木の上から声をかけられたので、ネシャートは驚いた。皇后陛下だ。

「あ、はい」

木のこぶがうまい具合に幹についていて、大枝を伝って皇后陛下がおいでの場合には思いの外簡単に辿り着いた。

「うわあ、すごいですねえ」

思わず声を上げた。

「良いでしょう？ オルテスのたくさん建物の向こうにレオンハート峰が見える。小さな事でクヨクヨしていた時でも、こんな眺めを見るとどうでもよい事を気にするのが馬鹿馬鹿しくなる」

ああ、そうか、自分と違って皇后陛下は色々な人の思惑や本音やあれやこれやが全部見渡せてしまうのだ。きっと、細かい、と言うか、細かすぎる事を気になさったらキリが無いのだろう。

「そうね。キリが無いって言うのは、その通りよ」

「オルハンさんに、私の考えはケチ臭い、下卑ているって思われたみたいですよ」

「確かに、ねえ……まあ、いいじゃない。誰だってつまらない事は考えるものだし、ネシャートちゃんが思ったような事が全く無いとも、私も言い切れないし。何しろ銀の龍は焼き餅焼きだから……でもね、ネシャートちゃんが、自分で思うような人生を送って欲しいって思うのも本当なの」

「そういうものなのですか？」

「夫の大切な娘は、私にとっても大切な人だから。最初はそれだけだったけれど、ネシャートちゃんを知ると、ちよつとひねくれてるけど面白い子だなんて思ったの」

「ひねくれてます？ 私、やっぱり」

「でも、それが悪い事だとも思わないの。色々納得行くまで物事を表から裏からひっくり返して考える事は、物事の本質を見出すのに向いていると思うもの。右と言われたら、何の疑いも無く右を向く人間ばかりなら、世の中進歩しないわ」

「じゃあ……」

「ネシャートちゃんは、ネシャートちゃんのままでもいいんじゃない？ ただ……」

「ただ？」

「自分と境遇が違う、立場が違う、そう言う相手の事を考える時は、

もうちょっと色々空想した方が良くもね」

「空想ですか」

「ええ。他人の想念、雑念、妄想、そんなものがすぐに感じられてしまう人間の場合、どうなのかって事とか」

「はあ。じゃあ、この景色は」

「見ようと思えば、見えるものも普段はあんまり細かく穿り返さないで、全体のバランスを見ている、そんな私の心の状態に似てなくもないわね」

「フェリシアちゃんも普段接しておられる方の数だけでも、相当なんでしょうね」

「宮廷で仕えている人間だけでも、相当な人数のはずだ。百人や二百人では済まない。」

「そうよ。だから、見て見ぬふりもするわ。悪事の片棒でも担いでいない限り。一人一人の心の中に分け入るのは、疲れるものでもの」

「はあ、そういうものですか」

「そうよ。陰気くさい、ウジウジした人の心の中に入るとそれだけで、どっと疲れるの」

「私は、どうですか？」

「そうねえ、ネシャートちゃんは、可愛いわ。ちょっとひねくれてるけど、可愛いひねくれ方。私の魂は見た目と違って、かなり年を取っているから、余計にそう思うのかもね。ネシャートちゃんのお祖父様やお祖母様が、どれだけあなたを大切に思っていたらっしやるか、お母様がどれだけ心配なさっているか、わかってしまうだけに狭い料簡に囚われようが無いのよ、私の場合」

「母が……心配してるでしょうか？」

「してるわよ。ああ、確かに預かり物って感覚もお有りなんですよけれど、いつもネシャートちゃんの行く末を心配しているのも、本当なのよ」

「本当に？」

「本当よ。じゃあ、見てみる？ 私の手を握ってごらんさい」

ネシャートは言われるままに、フェリシアの手を握った。すると……。「あの子、うまくやっているかしら……気難しい所が有るからあちらの御邸で何か気まずい事にならないと良いのだけど」という母の言葉が聞こえて来たように感じた。

「フフフツ、お母様から見てもネシャートちゃんて気難しいのね。赤ちゃんの時からしかめっ面してたみたいよ」

「はあ……」

愛想の悪い、気難しい女の子なんて、やっぱりあまりほめた事ではないような気がする。

「目先の利益でふわふわ動く人、呼吸するようにウソをつく人、そんな人が私は嫌いな。ネシャートちゃんは全然違うわ。自分なりの幸せをちゃんと見つけ出したいって、なかなか思っても言えないと思うもの。自分らしい人生を歩むために、オルテスに出て来たのでしょう？」

「はい」

「なら、頑張つてね。決して楽ではないだろうけれど」

その日以降、ネシャートの中で何かわだかまっていたものが確実に消え失せ、明るい気分です毎日過ごせるようになったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9227m/>

---

双龍の絆

2011年1月17日00時28分発行